2016

日本連句協会

連句年鑑

平成二十八年版

連句年鑑（平成二十八年版）目次

「日本連句協会平成二十八年総会・全国連句大会の記」……7

「第三十回国民文化祭・かごしま2015
暮らしと共生・生活文化のフェスティバル　文芸祭「連句」大会」……9

評論エッセイ

恒丸（つねまろ）と双樹（そうじゅ）の両吟歌仙……二村　博……13

大岡信八十五の賀の巻、あるいは主題と変奏……長谷川　櫂……24

地上一寸での遊び……上田真而子……32

回顧

平成二十七年の連句界……和田忠勝……41

〈表紙題字・横田思案人〉

（カット・秋葉初枝）

作品

会津の会
「後継ぎ」……47
阿吽の会
「三日月の降り」……48
赤のままの会
「秋高し」……49
秋田連句協会
「寒稽古」……50
あした連句会
「もの思うとき」……51
「三の酉」……52
「添水鳴り」……53
「紅木槿」……54
あした芭蕉記念館連句会
「かるた取る」……55
あした本庄連句会
「早稲の飯」……57
あしべ俳諧塾
「天井に」……58
伊賀連句会　いがまちの座
「草紅葉」……59
伊賀連句会　小菊の座
「元兵士」……60
石手寺連句会
「ほどけゆく」……61
伊豆芭蕉堂連句会
「初詣」……62
「歳末セール」……63
伊勢原連句会
「茶掛け軸」……64
「耳澄ます秋」……65
「桃の花」……66
市川俳諧教室
「緑摘む」……67
「紋付」……68
鰡背座
「大あくび」……69
茨城県連句協会
「梅咲くや」……70
彩座
「はつ夏や」……71
いわき文音連句の会
「赤蜻蛉」……72
WEBめぎつね座
「たのしい三句たち」……73
NHK文化センター青山
「梅雨の街」……76
おたくさの会
「半旗」……77
「冬のフルート」……78
海市の会
「かごめかごめ」……79
解纜
「白牡丹」……80
「歳末セール」……81
鹿児島県連句協会
「年惜しむ」……82
月蔵連句会
「木枯しの」……83
桂の会
「縄文のヴィーナス」……84
「白菖蒲」……85
「甚平に」……86
「異人館」……87
カルテット
「江ノ電や」……88
菊名連句会
「赤富士」……89
くさくき
「桜咲けよ」……90
「走馬灯」……91
「幾度も」……92
「忙中の」……93
くさくき川口支部
「筍梅雨」……94
くさくき北九州支部
「新天地」……95
「百日紅」……96
「渡り鳥」……96
草笛連句会
「風呂吹を」……97
興聖寺連句会
「今朝の春」……98
庚申庵連句会
「八朔の」……99
「独り居」……100
古都連句会
「疎水の響き」……101
「巣作りか」……102
ころも連句会
「柿若葉」……103
「年逝く」……104
「一陽来復」……105
堺連句同好会
「枯木立」……106
さくら草連句会
「一日を」……107
「水澄めり」……108
「去年今年」……109
「駒子」……110
サザン
「寒雀」……111
清の會スノードロップ
「楽しさや」……112

三金会
「新豆腐」……114
「洛艮の雲」……115
慈眼舎
「飲み屋とは」……116
「零〆の」……117
獅子門
「遺吟脇起支考忌追善俳諧」118
「遺吟脇起翁忌追善俳諧」…119
獅子門友楽社
「遺吟脇起翁忌追善俳諧」…120
獅子門蓑杖社
「翁忌追善俳諧」……121
「爽やかや」……122
獅子門麗水社
「初しぐれ」……123
下町連句会
「花ある城」……124
「梅ふふむ」……125
夙水会
「木犀に」……126
樹氷連句会
「夕闇の」……127
湘南吟社
「書き初め」……128
「黄落を」……131
「秋惜しむ」……132
泗楽連句会
「赤い羽根」……133
裾野連句会
「詩仙法師」……134
「夏富士や」……135
成城連句会
「木曽路の宿」……136
「滝凍つるべきもの」……137
せんだい座
「へほ胡瓜」……138
宗祇白河連句会
「都々古の杜」……139
草門会
「風の森」……140
「無弦の琴」……141
啐啄会
「秋祭り」……142
「菊の香や」……143
外濠連句会
「山羊の角」……144
遅刻坂連句会
「田は青し」……145
「鶏頭の赤」……146
「熊を眠らす」……147
「田舎暮らし」……148
「男の子なり」……149
中央連句会
「わき道へ」……150
「捨つるべきもの」……151
「名残雪」……152
「おどけし羅漢」……153
「ショートカット」……154
「新橋に」……155
千代の会
「霧ごむ雨」……156
「空掴み」……157
筑波連句会
「原爆忌」……158
「仁王の眼」……159
つばさ連句会
「四畳半」……160
でこん座
「えごの花」……161
大神連句会
「角に立つ」……164
桃雅会
「年の瀬や」……165
「のびやかに」……166
「煮大根」……167
東京かびれ
「武家屋敷」……168
「卒寿の母」……169
刀水の宴連句会
「マフラー」……170
稲門連句会「西北の風」
「人気なき」……171
「百万の」……172
「秋日影」……174
桃夭樹
「打ち水」……175
「鶴園の里」……176
都心連句会
「夏木立」……177
「街育ち」……178
「元朝や」……180
徳島県連句協会
「猫の髭」……182
なかよし連句
「一年」……183
ねずみの会
「また同じ蜥蜴」……184
野田連句会
「あめんぼう」……185
「長梅雨や」……186
俳諧コミューン
「バスティーユ」……187
俳諧無心
「雪の人」……188
「六日」……189

白水台連句会
「水引草」……190
白塔歌仙会
「菊人形」……191
巴世里連句会
「雁渡し」……192
羽曳野連句会
「星涼し」……193
浜風
「地球儀を」……194
「初日に染まる」……195
日立かびれ
「昭和の匂ひ」……196
人妻連句会
「私小説」……197
美々っと連句会
「野馬追や」……198
「秋蛍」……199
ひよどり連句会KCC
「ミニクーペ」……200
ひよどり連句会毎日
「ポンポンと」……201
ひょんの会
「真顔」……202
風狂連句会
「鮎の宿」……203
ふたば会
「鼻歌」……204
「昨夜の官能」……205
北杜連句塾
「火の色で」……206
「みちのくの」……207
ほれぼれ座
「九条を」……208
「窓」連句会
「沈丁花」……209
水無月連句会
「良寛忌」……210
宮城県連句協会
「初茜」……211
芽柳連句会
「牧の風」……212
夢々連句
「古都暮るる」……213
「昭和の森」……214
横浜ベイサイド連句会
「駅正面」……215
「鉄路の錆」……216
「清浄光寺」……217
読売文化センター川口
「古城址は」……218
夜の連句会「花李」
「厳冬は」……219
ラピロス連句会
「名月や」……220
竜神連句会
「哀しい嘘」……222
連句会ひらめき
「闇流れ」……223
連句会未恋座
「祭笛」……224
連句会遊子座
「芋煮会」……225
「無言劇」……226
「江戸っ子も」……227
「流れ星」……228
若笹連句会
「仏頭の眉」……229

地方連句組織

一般社団法人 日本連句協会 定款

年鑑担当

〈編集後記〉……大久保風子

一般社団法人日本連句協会
平成二十八年総会・全国連句大会の記

平成28年日本連句協会総会　臼杵游児会長

第二回一般社団法人日本連句協会総会・全国連句大会が平成二十八年三月二十七日（日）震災復興途上の仙台市青葉区にある東京エレクトロンホール宮城で開催された。東京以外では二度目。

臼杵会長が挨拶に立ち、まず地元の関係者への謝意、震災で亡くなられた方々への弔意、被災された方々への見舞を述べ、ついで高齢化等による会員減少を憂慮し活性化のために小委員会を設けたと報告した。

続いて審議に入り前年度の事業報告、決算報告及び次年度の事業計画、予算案が承認された。

今総会の重要議題は第三号議案の年会費の改訂。現状の三千円から五千円への改訂の必要性を和田理事長、会計担当高尾理事が事業計画を踏まえ、臼杵会長より丁寧かつ切々たる思いを込めた提案説明がなされた。会員減による財源の不足によりここ数年収支が赤字であること、それにより繰越金が年々かなりの額で目減りしてきていること、篤志会員の協力金で何とか耐えてこられたこと、国民文化祭等協会の催事の準備・支援に派遣する協会員の交通費、宿泊費他がほとんど自己

負担でなされていること、協会活動の更なる活性化のための費用を何とか確保したい、といった実情が挙げられた。案件に対し異論は出ず、満場一致で議決。委任状も含め大多数の賛同を得、年会費五千円とする案は採択された。

パネルを使って講演

仙台文学館　赤間亜生氏

各地連句大会案内の後は講演会となり講師は地元仙台文学館学芸室長赤間亜生氏。テーマは「井上ひさしの生涯と作品」。劇作家、小説家、放送作家として名を馳せた井上ひさしの生い立ちが紹介された。十五歳で母親から離れ、仙台市光ヶ丘天使園に入園して中学・高校時代を過ごし、これを題材にした自伝的作品の抜粋と年譜が配布された。パネルを含め短時間での講演であったが井上ひさしと仙台を身近に感じられるものであった。

次いで実作会となり、全国各地から集まった会員が十五の座に分かれ久方ぶりの和やかな挨拶を交わし熱心に作品を巻き上げた。

第二部は会場を移して花と月を意味する菓子が配られ粋な計らいの中、全国各地から集まった会員が十五の座に分かれ久方ぶりの和やかな挨拶を交わし熱心に作品を巻き上げた。

第二部は会場を移して鹿児島を皮切りに南から北へと現況、特技が披露され和気藹藹のうちに閉会となった。

（吉田酔山記）

第三十回国民文化祭・かごしま2015
「暮らしと共生・生活文化のフェスティバル」
文芸祭「連句」大会

国民文化祭・かごしま2015での連句大会の開催が決まった時、鹿児島県の実質連句人口は零、連句は鹿児島においても未知の物で、まさしく零からのスタートでした。平成二十六年三月二十九日、日本連句協会から和田忠勝理事長等のご参加を頂き、第一回「鹿児島連句を楽しむ会」が開かれ、鹿児島での連句が産声を上げました。その後、月一回の連句の勉強会が続きましたが参加者は伸び悩み、大きな課題となりました。

平成二十六年十一月十七日、国文祭プレ連句大会が「よかセンター」で行われました。四十七名の参加者による座は九席。席名は西郷隆盛をはじめとする鹿児島出身の維新の英傑の名前を使い、半歌仙を巻き、本大会への地ならしとなりました。しかし、地元からの参加者が少なく本大会への準備に不安を残しました。また、鹿児島県出身の佛渕雀羅氏主宰の「たもんせ塾」による「連句の集い」が地元で三回開催され、力強いご支援となりました。

平成二十七年に入り、国文祭を開催するにはまず組織づくりが急務であることから、新たに連句大会実行委員会を立ち上げ、会長以下事務局長、実行委員を置き、日本連句協会の協力の下、準備を進めました。さらに、国民文化祭への鹿児島県の対応も具体化し、私達も募集要項を発送し応募作品を待つ事になりました。作品は半歌仙形式です。私達の運営資金は募吟収入だけなので、何巻集まるか気をもむ毎日でしたが、締切りの五月末には応募数は上向き、締切りを六月十日に延ばす事で、最終的に六百七十巻のご応募を頂きました。私達も二十七巻を応募することができ、遠路を当地まで出向いてご指導いただいた協会の方々に、恩返しができたかと思います。

実は、当初より運営資金についての懸念がありました。鹿児島県の補助は会場提供のみです。加えて郵送料、宅配便、消費税の値上げの悪条件が重なり、支出が例年よりかなり増えると予想されたのです。支出を抑えるには印刷代と送料をいかに抑えるかにかかっていました。幸い実行委員会の前田豊会長の尽力により、原稿のデジタル化及び割

り付けや表紙デザインを実行委員会で、破格の値段で引き受けて頂ける印刷所が見つかりました。さらに鹿児島県観光コンベンション協会の補助金交付を受ける事になり資金の見通しがたちました。また、連句大会の募集要項、参加案内も会員の方には日本連句協会会報に同封して頂き、他の送付物は宅配業者二社と交渉して、最も安いメール便を契約することで経費の節減につなげました。

応募作品は八月二十二日に行われた選者会議で、臼杵游児氏、梅村光明氏、小池正博氏、式田恭子氏、和田忠勝氏による厳正なる審査の結果、文部科学大臣賞他、入賞、入選作品合計百七十九巻が選ばれました。選者のお一人の式田恭子氏は、すでに選考期間中、病と闘っておられましたが、暑い最中の大変な審査を全うして下さいました。選者会議にもにこやかな笑顔で出席されており、大会終了後にご逝去されるとは思いもしないことでした。心よりご冥福をお祈りいたします。

大会に向けての大きな作業の一つが、入選作品集の発行です。編集作業の中で、メール添付の原稿やワープロ仕上げの原稿のデジタル化は電子辞書を使いながら、数人の実行委員がパソコンで打ち上げました。

原稿の校正は梅村光明理事にお願いしましたが、誤植が多く予想外に大きなご負担をおかけする事となりました。今までの入選作品集を参考に編集を行いましたが、大島紬の写真を使った表紙も好評で、労苦が報われた思いです。

平成二十七年十一月十四日、朝五時前に震度四の地震に遭遇、大きな揺れに桜島の噴火かと驚いた方もおられたようですが、その後は何事もなく、予定通り吟行会へと出発しました。桜島コースには十九名、知覧コースには八十名の、合計九十九名が参加しました。桜島は夏には巨大噴火が目前との警報が出されましたが、その後は支障はなくなりました。小雨が降る生憎の天候のため桜島の姿は見えませんでしたが、西南戦争の戦没者を祀る南洲墓地を見学した後フェリーで桜島へ渡り、林芙美子文学碑、有村溶岩展望所、溶岩で埋没した黒神神社の鳥居を見学しました。世界最大の桜島大根を見ましたが、この大根は煮物、漬物にすれば極めて美味であることは地元の人々

の認めるところです。一方、知覧コースは雨に濡れて風情を増した武家屋敷沿いに歩き、各家で工夫を凝らした庭作りに見とれました。鹿児島は日本第二位のお茶の生産地で、中でも知覧茶が有名であり、参加者も一服の接待を受けました。次に訪れた特攻平和会館では何度訪れても涙を誘われる少年兵の遺書に戦争の空しさ、残酷さを実感させられました。帰途、無双蔵を訪れ、鹿児島名物芋焼酎の種々の銘柄を試飲し、冷凍庫でも凍らない四十度の焼酎ののど越しに驚いたり、参加の方々も楽しまれたご様子でした。

また、同日午後一時からは、大会場で日本連句協会の支援、指導によるワークショップが開かれました。一般来場者と共に高校生、初心者の実行委員も参加し、半歌仙及び笠着連句による歌仙を実作して貰うことで、地元の方々に連句に対する興味を持って頂くことができたと思います。

同日午後七時からは、鹿児島サンロイヤルホテル二階太陽の間で交流会が開かれました。前田豊会長による開催県挨拶、日本連句協会臼杵游児会長の来賓挨拶と続き、和田忠勝理事長の乾杯で、参加者百四十四名による祝宴が始まりました。アトラクションでは鹿児島を代表する薩摩琵琶と奄美の島唄を皆様にご披露しました。最初に薩摩武士の嗜みであった薩摩琵琶と小型の尺八に似た天吹の演奏が行われ、天吹の温かくも澄んだ高音の響きに一同聞き惚れました。次に奄美民謡の島唄が蛇皮線と太鼓の伴奏で唄われ、お祝いの歌である六調では参加者も巻き込んでの踊りの輪が大きく広がり、一同大いに盛り上がった交流会となりました。最後に、次回開催地である愛知県連句協会の方々、さらに次々回の開催地である奈良県連句協会の方々のご紹介とご挨拶を頂き、お開きとなりました。

翌十五日は快晴で、南国らしい日差しの中、午前十時から鹿児島アリーナ二階武道場において、連句大会が挙行されました。当初、連句大会参加者数は百二十名程度と見積もられ、会場が割り当てられましたが、応募数から百八十名になる可能性もあり、県の担当者と交渉して利用面積を広げて頂きました。実際には百六十一名の参加があり、大会の実施には何とか間に合いました。また会場内での飲食を認めないとの方針も、連句大会の特殊性を説明して、昼食をとることが許可されるという経緯がありました。

日高南海雄実行委員の開会宣言の後、前田会長の挨拶に

続き、文化庁の田村寿浩氏、日本連句協会の臼杵游児会長による来賓挨拶を経て、文部科学大臣賞等の表彰式が行われました。アトラクションのおはら節とおはら踊りを挟み、引き続き選者紹介、和田忠勝理事長の総評、鹿児島市長賞葵氏の謝辞をもって十一時すぎにセレモニーは終了しました。

実作会では三十席を設け、席名には特産である焼酎の銘柄を用いました。各席順調に巻き上げる中、五巻の代表披講の後、閉会式に移り、鹿児島連句協会五郎丸照子副会長の挨拶に続き、前田会長から次期開催地の愛知県連句協会杉山壽子会長へ、日本連句協会旗が引き継がれました。杉山会長から、来年の名古屋での大会への多数の参加をお待ちするとの挨拶があり、これを以って大会を終了しました。

当初は問題山積でどうなるかと思われた鹿児島での連句大会は、関係各位のご助力とご協力によることができました。特に梅村光明理事には毎月の連句の指導のみならず、大会準備にも助言や多大なご協力を頂きました。ここに厚くお礼を申し上げます。

（鹿児島県連句協会副会長　五郎丸照子）

平成27年11月15日　実作会（鹿児島アリーナ）

恒丸（つねまろ）と双樹（そうじゅ）の両吟歌仙

二村　博

恒丸と双樹は一茶の知友である。文化文政期は俳諧の爛熟期といわれる時代だが、一茶以外の俳人は現在あまり注目されていない。しかし、当時一茶以上に指導者として歓待され、下総から常陸にかけて絶大な支持を得ていたのが秋元双樹で今泉恒丸であり、恒丸、一茶らを庇護したのが秋元双樹で あった。

平成二十七年十一月、私は双樹が旧蔵していた『俳諧草稿』（文化元年　恒丸、双樹、一茶筆）の原本を初めて拝見した。本稿では、恒丸と双樹の交流について若干言及し、『俳諧草稿』に所収される恒丸、双樹の両吟歌仙二巻をご紹介したい。

一、恒丸と双樹の交流

今泉恒丸（与右衛門）は宝暦元年（一七五一）生まれ。三春藩領常葉（ときわ）村（福島県田村市常葉町）の給人（知行を与えられた家臣）であった。俳諧は地元の一滴斎蕉雨に学び、のちに玄圃斎（げんぽさい）社中を結成した。寛政九年（一七九七）、会津柳津円蔵寺で唐詩選の講義をしたあと、江戸、甲斐、尾張、大坂、安芸、長崎などの各地を巡る旅をした。享和二年（一八〇二）頃、常葉村の婦人白岩もと女（のちの素月（そげつ））と駆け落ちして江戸に出る。二人は互いに家庭を持ちながらも三春駒の駿馬にまたがり、闇に紛れて出奔したという。一茶、双樹との交流が確認されるのは、その翌年くらいからである。晩年は下総佐原（さわら）（千葉県香取市佐原）に住み、下総、常陸の門人たちから絶大な支持を得た。文化七年（一八一〇）九月十四日、佐原にて没する。享年六十歳。

秋元双樹（三左衛門）は宝暦七年（一七五七）生まれ。下総流山（千葉県流山市）の人で、家は味醂、酒、醤油、味噌の醸造元。俳諧はじめ江戸の多少庵秋瓜に学んだという。一茶の庇護者として知られ、享和三年（一八〇三）

以降、一茶は流山に百三十六泊したそうだが、そのほとんどが双樹宅であったろう。双樹は文化元年（一八〇四）十月、一茶の引越祝いに家財道具を贈り、江戸の一茶宅に宿泊したこともある。文化年間における恒丸と双樹は師弟関係にあり、双樹は恒丸主催の月並に複数回投句している。また、恒丸の追善集（『玉笹集』）にも双樹の句がみえる。双樹は文化九年（一八一二）十月二十七日没、五十六歳。

『俳諧草稿』の歌仙が巻かれた文化元年（一八〇四）、恒丸は五十四歳、双樹は四十八歳、一茶は四十二歳で、ちょうど六歳ずつ離れていた。双樹の句は、今日確認できる文化期以降の恒丸関係俳書に全て入集している。

『葛斎月並抜萃』（文化三年　恒丸編）は、恒丸が毎月丁摺で発行した月並を冊子にまとめたものである。本書は「七印」、「六印」の作品のみ掲載するが、抜萃であるから月並の一枚摺に載っていたはずの「五印」の句が省かれている。恒丸没後、恒丸の月並を継承して青野太笋（下総小南の人）が出版した『しきなみ』（文化八年刊）には「七印」五句、「六印」四十句、「五印」七十一句が収録されている。評価は点印が多い方が高く、現代風に言い換えれば、「七印」は秀逸、「六印」は入選、「五印」は予選といったところである。

『葛斎月並抜萃』は、文化三年七月から十二月までの六ヶ月分を収録しているが、双樹は八月の「七印」として次の句が選ばれている（八月の七印は三句、六印は二十句）。

かゞしをもかたりてたもれ梓巫女　　流山　双樹

「かがし」は「誰々」の意の人称代名詞。「梓巫女」は梓弓の弦をはじいて死霊、生霊を呼び出して口寄せをする民間巫女のことである。

また、十二月の「六印」として次の句がある（十二月の七印は一句、六印は十九句）。

我やどはくち葉に年の行衛哉　　双樹

双樹は六ヶ月の恒丸発行月並のうち、八月と十二月にのみ採録され、他の月には掲載がない。だが、これは決して少なくはない。なぜなら先述した通り、『葛斎月並抜萃』には「五印」の句（七十句前後）が省略されているからである。

恒丸が主催した月並には、毎月どれだけの句が寄せられていたのであろうか。文化期に恒丸が双樹に宛てた書簡に

は、「こたびは遅来も多く句負七百斗御坐候。」とある。これにより、月並に掲載されなかった句が七百句もあったことがわかる。つまり、掲載句、「五印」の句を含めると恒丸のもとには毎月八百句前後の句が集まっていたのである。

建部巣兆は成美、道彦とともに江戸三大家と称される俳人だが、彼が文化四年（一八〇八）に発行した月並への総投句数は、六月が百二十余句、九月が百十八句、十一月が百余句である。恒丸の葛斎月並は、何とその約八倍もあったのである。因みに双樹は巣兆の月並には一回も投句を確認できない。巣兆の編著『玉の春』（文化六年）、『仙都紀行』（文化八年）には双樹の句が入集するので、双樹は門人としてではなく一俳家としての扱いを巣兆から受けている。

一茶も文化一、二年頃、房総地方をテリトリーにした「一茶園月並」（一枚摺）を発行している。現在確認できる六種類の月並（四、五、六、七、九、十月分）の九月にのみ、双樹の次の句が入集する。

かつしかや夜寒の門の芋大根　　下フサ流山　双樹

富津の織本花嬌が六種類全てに入集しているのと比較すると、一茶、双樹の関係はやはり俳友である。「一茶園月並」の掲載句は四月が二十七句、五月が二十二句、六月が八句、七月が二十一句、九月が四十八句、十月が二十二句で、最も掲載句の多かった九月に双樹の句がある。総投句数は不明だが、恒丸、巣兆よりも少なかったであろう。なぜなら、「一茶園月並」は軌道に乗らず、一、二年で断念しているからである。同時代の著名な職業俳人である巣兆や一茶と比較しても、指導者としての恒丸の人気は際立っている。

のちに恒丸の月並を一時継承した実力者に、下総小南の青野太笋がいる。その太笋でも『葛斎月並抜萃』（六ヶ月分）に掲載されたのは半分の三回だけである（八月の六印、九月の七印、十月の六印）。同書への双樹作品掲載は二回だが、これは八百句という投句数を考慮すれば優秀な方で、丁摺の月並では、「五印」に掲載されていたことも何回かあったはずである。『葛斎月並抜粋』には一茶の句もあるが、一茶は月並投句者としてではなく、宗匠格の俳友として登場する。恒丸が十二歳年下の一茶を高く評価していたことがわかる。もちろん、恒丸や一茶が宗匠として活動できたのは、双樹や成美ら風流を解する庇護者があればこそ

である。双樹が没した時に一茶が詠んだ追悼歌はよく知られている。

折々のなむあみだ仏き、知りて
米をねだりしむら雀かな　一茶

「米をねだりしむら雀」は、一茶や恒丸ら、双樹の世話になった人々のことを暗示している。

『春興』（文化六年　恒丸編）は恒丸門人の句を収めた一冊だが、次の双樹作品がみえる。

妹がりは千鳥と申せ啼かハづ　流山　双樹

『しきなみ』（文化八年　太節編）は先述した通り、恒丸没後に太節が月並を引き継いで出版したものである。恒丸の来翰から拾い出した一句に、

梅がかや鳶にもならぬ古羽織　流山　雙樹

がある。双樹と太節は恒丸の兄弟弟子であり、本書で双樹は太節に批点を乞うてはいない。

『玉笹（たまざさ）集』（文化九年　太節編）は恒丸の三回忌追善集で、当然双樹の句も入集する。

陽炎に旅寝くさしや干菜汁　双樹

陽炎は春季で干菜汁は冬季だが、中七の「旅寝くさしや」は恒丸の面影を偲んだものであろう。

恒丸、双樹、一茶の結びつきの強さを示す歌仙がある。文化三年（一八〇六）四月、一茶と双樹が巻いた連句を途中から恒丸と双樹で次韻する歌仙である（『一茶全集』所収）。

発句　夏　閑古鳥信濃の桜咲にけり　一茶
脇句　夏　きの卯月にかゝる薄靄　双樹
（中略）
折立（ナオ）　春　鶯のうらやましさに髪きりて　一茶
二句目　雑　浪がたちても騒ぐ商人　恒丸
三句目　夏　火ともして関屋は夏に押移る　樹

一茶はなぜか双樹と恒丸の付け合いを中途半端にやめている。発句で「閑古鳥」を詠みながら、名残表折立に「鶯」を詠むのも、現代連句ではあり得ないことであろう。だが、その続きを恒丸と双樹の二人で引き継いでいる。この歌仙は三者が互いに気心が知れた仲だからこそ満尾したといえる。

文化六年（一八〇九）二月八日、恒丸宅で巻いた一茶、恒丸、兄直三吟でも、「一茶古郷へ急ぐことありてやみぬ」と添書されて途中で打ち切られた付合がある。しかし、そ

の後一茶は、信州に急いだ様子もなく、田川、布川を巡って江戸に戻っている。恒丸と双樹は一茶の神出鬼没なところをよく理解しつつ、親しく交流したようである。

二、『俳諧草稿』について

『俳諧草稿』は、現在流山市立博物館が所蔵している。合計六巻の歌仙を収録する稿本で、双樹、恒丸の両吟歌仙二巻、一茶、双樹の両吟歌仙二巻、双樹の独吟歌仙一巻、双樹、湘君の両吟歌仙一巻を収める。昭和五十四年、双樹忌実行委員会によって発行された小冊子『双樹忌①』にこの歌仙六巻は翻刻されている。『鴛鴦俳人恒丸と素月』（矢羽勝幸、二村博共編著　平成二十四年　歴史春秋社）には、恒丸の歌仙二十九巻を収録したが、当時は原本の所在がわからず、『双樹忌①』の翻刻を引用した。今回『俳諧草稿』の原本を拝見して判明したことは、次の三点である。

A『俳諧草稿』巻頭の恒丸、双樹両吟歌仙二巻は双樹ではなく恒丸の自筆であること。

B一茶、双樹歌仙以外の『双樹忌①』の翻刻には誤読が多くあったこと。

C一茶、双樹による「利根川は」両吟歌仙の名残りの裏

月の座「宵の月秋ハ毎ばん鐘なりて　茶」は一茶の自筆であること。

Cに関しては一茶双樹記念館、流山市立博物館が既に把握している事実であるが、『一茶全集』第五巻には「『俳諧草稿』双樹自筆」とあるだけで、恒丸と一茶の筆跡が含まれている事実に言及していない。Aの新発見は、化政期俳壇における恒丸の存在感を再確認する上で看過できない。Bは一茶以外の化政期俳人たちの作品が軽視されている現状を物語るが、次章において恒丸、双樹の歌仙を読み味わっていただくことで一石を投じたい。

三、恒丸、双樹の両吟歌仙鑑賞

『俳諧草稿』（恒丸、双樹、一茶筆）の歌仙六巻のうち、恒丸、双樹による巻頭の両吟歌仙二巻を翻刻、鑑賞する。表記は基本的に原文の通りとしたが、便宜的に以下の凡例のもと整理をした。

・歌仙には（1）、（2）の番号を付した。

・各句の上部には名称（発句、脇句等）、季（春、夏、雑

等）を付した。

・カタカナのふりがなは原本に記されているもので、ひらがなのふりがなは適宜付したものである。

・鑑賞は、表六句、裏十二句（ウ）、名残の表（ナオ）、名残の裏（ナウ）に四分割して述べることにした。

（1）享和甲子（文化元年）春二月望歌仙

発句　春　雙樹　折立（ウ）　秋　ほとけ彫る屑をさらへば虫の飛　丸
脇句　春　恒丸　二句目　雑　炮燵（ほうろく）も新しものぞ春の雨　樹
第三　春　々　三句目　雑　馬の骭（いびき）に椿こぼるゝ　刀捨しも果はくやしき　丸
四句目　雑　樹　四句目　雑　蝶鳥のいくらも遊ぶ畠すぎて　身をうツせの貝に響ひこし　樹
五句目　夏　丸　五句目　夏　豆腐ぎらひも年は闌（ふ）け行　窓くり明て摩耶をミたがる　丸
月の座　秋　仝　月の座　夏　舟宿は膝のもとから月に成り　薬きひたりさミだれの月　樹
折端　秋　丸　七句目　雑　小草にかゝる傘（からかさ）の露　気（ケ）出す小鍋をかけし鍛冶が家　、
八句目　雑　海が鳴とて割レ鐘をつく　丸
九句目　雑　碁に負て十日斗もさしを索（と）ひ　樹
十句目　春　わらび肥たる日野、三月　丸
花の座　春　や〳〵と華に仰向く小宰相　樹
折端　春　扇に開くうぐひすの舌　丸
裏十二句の三句目から五句目は恋句の渡りである。「うつせの貝」は空になった貝殻のこと。恋に縁のなかった蜑

宿」は屋形舟などを貸す施設のことだが、ここでは屋形舟そのものを詠んでいる。屋根が低いから膝元から月に照らされるのである。月の座、折端もそれぞれ趣があり、折り目正しい表六句である。

三はのどかに場面を転じ、四句目には人物を配した。「舟

の女性を配して恋呼びの句とした。四句目の「摩耶」は釈迦の生母のことだが、ここでは摩耶山のことであろう。神戸市灘区にある摩耶山は標高七〇二メートル。弘法大師が摩耶夫人蔵を祀ったという伝承がある。窓から摩耶山を眺める男女が想像される。五句目は後朝の二人を目撃したほととぎすが気恥ずかしく隠れる様子を詠んだもの。巧みな恋離れの句である。

月の定座は七句目だが、五句目の時鳥を受け、六句目に夏の月を引き上げている。五月五日の正午頃に降る雨を「薬降る」といった。

花の定座で双樹が詠んだ「小宰相」は、平通盛の美人妻。法勝寺（室町時代まで平安京の東にあった寺）に花見に行った際、通盛が小宰相に一目惚れし、三年にわたり求婚する。夫婦仲は良く、屋島の合戦で戦死した通盛の後を追い小宰相は入水した（『平家物語』巻九）。この句からは双樹の教養の高さが窺える。

五句目に格を示す「時鳥」を出しながら、同じ折の折端に「うぐひす」を配するのは疑問だが、当時は気にしなかったのであろうか。

ナヲ折立　雑　我臼に宿らせ給へ福の神
二句目　冬　のさすたび冬に成りゆく
三句目　雑　セぬかゞみを人に押隠し
四句目　雑　きちぎりを蝦夷にくらべむ
五句目　雑　のひつかゝりたるねぶの木に
六句目　雑　ものかぶせて狸生捕る
七句目　雑　さへあれば世界は杖の先
八句目　雑　すまもよし野も命也けり
九句目　春　首出してミては又寝るたびら雪
十句目　冬　つり〳〵と蕪烹つぶす
月の座　秋　の金を分たる袖の月
折端　秋　牛賣しばらくは人の粟苅ル

名残の表四句目からである。四句目は、二人の恋呼びの短句である。五句目は、「合歓の花」であれば夏季だが、「ねぶの木」であるから雑の句。合歓の花は長いまつげを連想させ、翌朝の物憂げな面持ちの美女を彷彿とさせる。駆け落ち経験のある恒丸の恋句には必要以上に注目してしまうが、この句などは恒丸の面目躍如と

もいえよう。六句目の「狸」は冬季だがここでは狸寝入りしている人に着物をかぶせて生け捕るというユニークな場面設定であるから、雑の句と判断したである。

九句目の春季「たびら雪（春の淡雪）」の次に、冬季の「燕」が付くという点は式目に反するが、句を煮つぶしたということであろうか。月の座は、牛商人たちの生活を写実的に映し出している。

ナウ折立　秋　　此宿は尾花（ナヽき）がもとの下
二句目　雑　　粕漬なんどおくる無縁寺　丸
三句目　雑　　すり鉢になる土までは見□たり　樹
花の座　春　　骨牌（かるた）もうたず華にくれゆく　丸
五句目　春　　春の夜は障子（シヤウ）の穴も嬉しがり　丶
挙句　春　　あさりの殻のたまる川べた　樹

名残裏三句目の□は解読不能部分である。文字の体を成していないので誤記であろう。クライマックスともいえる花の座を、ここでは一句引き上げている。「骨牌（かるた）」は当時博打性のあるものが流行していた。一ひねり加わった花の短句である。

巻頭一巻は、概ね式目に則した正統的な付合である。二花三月（花の座と月の座）や恋句の渡りなど、作品としての質もなかなかなもので、味わいのある一巻である。恒丸と双樹の熟達した力量が発揮されている。

（2）如月十七日歌仙

発句　春　　留守にして置（おけ）ば鶯鳴にけり　恒丸
脇句　春　　蒲公英わける菅簀のはし　双樹
第三　春　　はり合のなき兀山（はげやま）も東風吹て　丸
四句目　雑　　燈心賣（う）らぬ里とてもなし　樹
月の座　秋　　牛飼が月の影汲むあさら井や　丸
折端　秋　　露も實の入る桧原松ばら　樹

二巻目は恒丸が発句を担当しており、「客発句、亭主脇」に則っている。恒丸が双樹をたびたび訪問していたことを匂わせる発句である。この時期（文化元年の恒丸は、もと女を伴って駆け落ちをした一、二年後で、江戸辺りを転々としていた）の双樹の庇護は、恒丸にとって物心ともに心強かったことであろう。脇句は、客人を歓迎する思いを慎

ましい蒲公英に仮託している。軽妙な第三、里人の生活を踏まえて詠んだ四句目を受け、月の座は、「牛飼（牛車の牛を引く者）」が、月影の映る「あさら井（浅い井戸）」の水を掬う様子を詠んだ。折端の「桧原松ばら」は桧原湖畔（福島県耶麻郡北塩原村）の松林のことであろうか。表六句の長句は全て恒丸が詠んでいるが、月の座が出色である。

ウ折立	秋	秋のくれ手児に着せたる赤裳裾	樹
二句目	雑	塩の鰭をほどく菜刀	丸
三句目	雑	屋根ふかぬ日とてあしたを戻る也	樹
四句目	雑	砂に書る、恋もあるかに	丸
五句目	夏	なま中のばさら團扇も物思ひ	樹
六句目	夏	蚤のあとかく母家の片隅	丸
七句目	秋	嵯峨の戸はどこを明ても花芒	樹
月の座	秋	鋳かける鍋を月にすかして	丸
九句目	雑	石佛人にかわりし噂なり	丸
十句目	雑	芥けぶりのむせるほど来る	樹
花の座	春	大和路や華の木の間に蔵建て	丸
折端	春	親子の中にはねる若鮎	樹

裏十二句の折立は双樹の長句である。「手児（少女）に着せた赤い「裳裾（衣服のすそ）」が夕日に映える。真間（千葉県市川市）の手児奈（美しい里娘）の存在を匂わせているか。二句目の「鰭」は夏季だが、「塩の鰭」とあるので夏季にとらわれず、雑の句と考えておきたい。

四句目から六句目は、報われない思いを描写した恋句の渡りである。「砂に書る、恋」というフレーズが象徴的で、「なま中（生半可）のばさら團扇（派手な団扇）」という表現が野暮ったい女を想起させる。

七句目は本来月の定座だが、前句が夏季（蚤）なので、秋季（花芒）をはさみ、月を一句引き下げて対応している。

九句目は石仏が人になったという噂。『おらが春』には次のような話がある。十日間食事を与えず苦しめた子を継母が「このご飯をあの石地蔵が食べたならお前にもやろう。」と見せびらかした。ところが不思議なことに、飢えすがる子どもを救うため、立田村（奈良県）の石地蔵はお椀の飯をむしゃむしゃと食べた。それ以来継母は反省して自分が産んだ子と分け隔てなく育てるようになったという。「人格者＝石仏」という共通認識が当時広く浸透していた

ようである。

花の座は、旅情豊かな大和路（奈良、京都を結ぶ）に新築の蔵が立つという新鮮な景色を取り合わせた。

ナオ折立　春　水低き種もミひたす頃となり　樹
二句目　雑　箸など拝む鎌足の宮　丸
三句目　雑　塩賣（うり）をあら湯に入れて手をたゝき　樹
四句目　冬　桶の氷りをのぞく面影　丸
五句目　雑　いツ結ぶ茶木（ちゃのき）がもとの常陸帯　樹
六句目　雑　弥勒ぼさつの棟が吹けばげツぱげ　丸
七句目　雑　泥亀の眠りこけたる岩のはな　、
八句目　雑　塵（ごみ）を帆にしてむかふ嶋山　樹
月の座　冬　蕎麦掻の椀の中迄月夜さし　丸
十句目　冬　敵（かたき）もうたず糸瓜くされる　樹
十一句目　夏　せミ殻の落て声なき草の雨　丸
　折端　雑　臼の目立が旅で眼を病ム　樹

名残表二句目の「鎌足の宮」は藤原比古神社（石川県七尾市）の別名だが、箸を祀っていたという伝承は聞かない。

四句目から六句目は恋句である。五句目の「茶木」は季語にはならないが、「常陸帯」は新年の季語で、正月十四日に常陸鹿島神宮の祭礼で行われた結婚を占う神事。意中の人の名を帯に書いて神前に供え、神主がそれを結び合わせて占った。帯占、鹿島の帯ともいう。ここでは、新年のそのものではなく、「いつ恋が成就するのだろうか」という思いを詠んでいるので雑の恋句と判断した。六句目は衆唄の一節「五間三尺のござ帆を上げて下す酒田の大港」を踏まえたものであろう。

月の座では「蕎麦掻の椀に映る月を詠んだ。蕎麦掻は冬季。十句目の「糸瓜くされる」は秋季だが、「糸瓜くされる」で冬季と考えられる。

ナウ折立　雑　手拭を折懸垣に引はさミ　樹
二句目　冬　箒の先にとまるしら雪　丸
三句目　雑　神領の安跡に味噌も焚セつゝ　樹
四句目　雑　むすんで見ては捨る縄切レ　丸
花の座　春　敷物もなき宿申せ花盛り　樹

挙句　春　　あさつき洗ふ戸根の川なミ　丸

名残の裏折立の「折懸垣」は竹、柴などを曲げて地面に挿して作った垣である。そこに手拭いを引はさむところに俳味がある。挙句の「浅葱（あさつき）」は春季、薬味に使われる青葱である。利根川の波が新鮮な浅葱を洗い流すという爽やかな締めくくりとなっている。

以上、歌仙二巻の鑑賞は少々式目にこだわったものになってしまったが、それは指導者としての恒丸が形式に厳格な人であった点を考慮したためでもある。恒丸は常葉村（現福島県田村市常葉町）の弟子松神社縁起碑建立を企て、漢文ではなくひらがなで碑文を刻もうとした際、書簡で「後世に笑の種を残すやうなるもの也。」「常盤（ママ）一村の恥は田村一郡のはぢなり。一郡の恥は奥一国の恥のやうなるものに候まま」と形式から外れた手法を厳しく批判している。恒丸は奇をてらうことよりも、形式を踏まえた上で内容を充実させるべきだと考えていた。正統派の道を貫く恒丸の指導に、当時多くの人々が心酔していた。双樹はその中でも太筋（化政期の一大アンソロジー『俳諧発句題叢』編者）と肩を並べるほどの有力な恒丸門人だったのである。

（常磐大学助教）

大岡信八十五の賀の巻、あるいは主題と変奏

長谷川　櫂

去年の春、歌仙集『一滴の宇宙』（思潮社）を出した。連衆は歌人の岡野弘彦（乙三）さん、評論家の三浦雅士さんと私である。どんな歌仙なのか？　さっそく見ていただくのが早い。全七歌仙の最後の「楼蘭」をどうぞ。

おとめ

楼蘭

1

楼蘭の　　櫂
　青極まれり
草原の夏　　雅
　歌うたひ
　　いづこの国の　　乙
　　俘虜（ふりょ）の列

　　ふるさとさして　　櫂
　鳥わたるなり
亡き友を偲ぶか　　雅士
　月も
　　影さして

戻り鰹の漬（づけ）が　　乙三
好物

2

世をすねて
山また山に
たづね入り
信ずるところは
一点突破全面展開

初陣の
箙（えびら）にむすぶ
恋のうた
熊野路かけて
あはれ
落ちゆく

縄文の
神々は死なず
修験道
欠けて冷（すさ）まじ

朱漆（しゅうるし）の櫛（くし）
齋宮（さいぐう）のうなじを照らす
月さやか
乙

桃・梨・葡萄の
腐爛の時間
雅

厳かに
大春画展
にぎはへる
蛇穴（へびあな）を出て
しのび鳴く宵
乙

億万の
命吸ひたる
花吹雪
雅

京の土また
草萌（も）えはじむ
櫂

焼け跡に
嫁と姑が肥はこぶ

今は昔の
活動写真

木漏れ日の
光うつくし
その影も
おもひ新し
初めてのキス

愛も美も
距離あらばこそ
小夜時雨

アシジの丘に
眠る聖人
法王の密使
荒野に
のがれいで
割られし髑髏に
秋風ぞ吹く

まほろしの
娑婆に
真如の月を見て
露の命とさとる
身のほど

熱心に眠る児
あはれ
いま何時？
猿のお面を
見ては欲しがる

乙
雅
乙
雅
乙
雅
乙
雅
乙
雅
乙
雅

闇匂ふ
ジャカルタ空港
深夜便
おはるの文に
しみじみと泣く

かすてらを
ふはりふはりと
切り分けて
雛に香らす
濃きブランディ

谷深く
散りゆく花の
うつつなき
怒濤をなして

春は行くらし

雅　驚かれるかもしれないが、歌仙のふつうの組み方をやめて、一行あけ、分かち書き、字下げを施した。その意図については三浦さんの跋に詳しい。私が付け加えるべきことは一行あけの有無は前句との間の大小、分かち書きと字下げは声の大小と高低、一言でいえば人間の呼吸を写しとろうとしたことくらいだろうか。たとえば発句の「楼蘭の」が二字下げてあるのは、能の役者が低く謡いだし、文楽の太夫が低く唸りだす、あの気配を出したかった。

乙　四十年前、安東次男が丸谷才一、大岡信と三人で歌仙を巻きはじめた。この「歌仙の会」はその後、安東さんが他界して岡野さんが入り、大岡さんが療養の身となって私が加わり、丸谷さんが亡くなって三浦さんが代わった。その成果は『歌仙』（青土社）、『浅酌歌仙』（集英社）、『とく歌仙』（文藝春秋）、『すばる歌仙』（集英社）、『歌仙の愉しみ』（岩波新書）の五冊になっている。どの歌仙にも連衆の座談がついていて、これがなかなか読ませるのだが、見方を変えれば、座談がなければ歌仙はわからないと

雅　

乙　

いうことでもあるだろう。

ここが惜しいと今の三人は考えたその結果、お見せしたような組み方が生まれたのだが、これを一つ一つ掘り起こし、それに則って歌仙を巻いておられる方々には心から敬意を抱くのだが、私は(そして岡野さんと三浦さんも)約束事は最小限、あとは自由な興に任せるのが歌仙の本来の姿ではないかと考えている。芭蕉の歌仙もそうではなかったか。

「歌仙の会」は月一度、赤坂の三平という丸谷、大岡ゆかりの蕎麦屋に集まって半歌仙を巻く。『一滴の宇宙』の出版後、歌仙ごとに主題(テーマ)を立てるという新しい試みをはじめた。まず手はじめに「清き憂ひの巻　釈迢空を憶ふ」、次に「クリムトの女の巻」、そしてつい先ごろ「大岡信八十五の賀の巻」が巻き上がったばかりだ。こちらはまだ「楼蘭」のような組み方ができていないので原形のまま紹介しておきたい。

大岡信八十五の賀の巻

【初表】

言の葉の海やましろの春の富士　　耀
空に棹さす夢の如月　　雅士
少年のうた草萌えの野にとよむ　　三乙
雑音ばかり戦後のラヂオ　　耀
月面に水の惑星をどり出て　　雅
鳴きわたりゆく色鳥の声　　乙

【初裏】

鰻丼も二段重ねの秋祭　　耀
先祖を問へば越前守り　　雅
肌ぬぎの恋のさばきもつやめきて　　乙
起請文をば泣いてとりだす　　耀
水底で笛吹けば魚つどひ　　雅
たましひ冴ゆる忍野八海　　乙
柿田川大寒の月きらきらと　　耀
孤り宴で白鷹を酌む　　雅
築地塀くづれて残る祢宜屋敷　　乙

パリの日永に妻子忘るる
花冷えのニューヨークで観るプッチーニ
帰国の少女大学に入る

【名表】

東風受けて千本松に上がる凧
白子（しらす）の漁に浜はにぎはふ
輝く果実古き写真に君がゐて
永遠に向いて微笑む一瞬
大空の九曜の星に祈るなり
王妃なりしが敵の婢（はしため）
ぬばたまの天の掃除器迫りくる
めぐりめぐれる淡島願人
身ごもりてぬかみそ壺も悩ましき
秋色ふかき深大寺裏
りやうりやうと貝吹きならす月の庭
夜寒の膝に青き目の猫

【名裏】

見る触る舐めて味はふ古歌の味
くしなだ姫を大蛇（おろち）窺ふ

いつの世も暴れん坊は生一本
潜水泳法首出せば春
宮滝の渕に渦巻く花筏
墨麗らかに詩書きなぐる

詩人大岡信は昭和六年（一九三一）、富士山の麓、静岡県三島の生まれ。終戦の年、十四歳の少年だった。三十二歳で新聞記者をやめて詩作と批評の生活に入るが、退職後しばらく二人の子どもをかね子夫人に任せてパリで暮らした。夫妻とも愛猫家であり、現在、富士山の山荘でロシアンブルーという貴種の猫と暮らしている。

「大岡信八十五の賀の巻」には大岡さんのこうした人生の断片やゆかりの土地や著書が変奏曲のように現れては消えてゆく。ときには主題から大いに脱線してしまうことも ある。たとえば初裏の二、三、四句目。

先祖を問へば越前守
肌ぬぎの恋のさばきもつやめきて
起請文をば泣いてとりだす

ここは大岡家の先祖の大岡越前守からさんの「肌ぬぎ」となり、さらに私が悪ノリしている。また名表の八、九、十句目。

めぐりめぐれる淡島願人
身ごもりてぬかみそ壺も悩ましき
秋色ふかき深大寺裏

乙　耀　雅

こちらは次々と脱線する列車を三浦さん路へ戻している。かつて調布の深大寺の近くに大岡さんの家があった。

主題を立てた歌仙三巻を巻いて思うのは、主題にがんじがらめにされたのでは窮屈、逆に脱線ばかりでは散漫、ほどよく脱線するのがちょうどよいということである。ただ「ほどよく脱線」などとは巻き終えてから脱線している最中は誰がどうやってもとは「自由な興」に任せるより打つ手がなく上がったとき、無茶なことをと思った。いうまでもなく歌仙は句と句の間が命である。「句を付ける」とはペタリと「貼り付ける」のではなく、むしろ「離す」つまり間をあけることである。大きすぎて付けすじがみえないのが「離れすぎ」である。はっとする新鮮で創造的な間が求められるが、それは「付きすぎ」と「離れすぎ」の間のどこかにきっと潜んでいる。

創造的な間によって歌仙は付句ごとに新しい天地が開けるのであるから、たとえ発句で主題を立て、脇でその主題を受けたとしても、第三では主題は忘れられてしまう。いや忘れなければならない。とすれば、次々に句を付けてゆくうち脱線に脱線を重ねて挙句の果てには見も知らぬ場所に出てしまうのが歌仙である。

しかし、最初の「清き憂ひの巻　釈迢空を憶ふ」を巻いてみて、かならずしもそうではないのではないかと思いはじめた。音楽の主題と変奏のように主題を忘れたころに主題の面影を秘めた変奏が現れる。歌仙とは連衆で織りなす音楽のようなものではないか。だからこそ「ほどよく脱線」することが大事なのだろう。

その目で芭蕉の歌仙を振り返れば、明らかに主題を立て

た歌仙がみえてくる。たとえば『猿蓑』の第一歌仙「鳶の羽の巻」。これは芭蕉が古池の句を詠んで蕉風に開眼し、『おくのほそ道』の旅を終えて新風を打ち立てた祝儀の歌仙だったろう。だからこそ『猿蓑』巻之五（歌仙の部）の巻頭に据えたのだ。この巻には新風誕生を祝うという主題があり、その変奏が次々に挙句にまでみられる。

同じく『猿蓑』最後の第五歌仙「梅若菜の巻」。こちらは江戸へ向かう乙州へのはなむけが主題だった。ただこの巻は芭蕉が中座したために主題と変奏という緊張が保たれるのは初裏の半ばあたりまで。初裏の三句目、

ほつしんの初（はじめ）にこゆる鈴鹿山　　芭蕉

この句は芭蕉の発句、

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　　芭蕉

この句の変奏であることは誰の目にも明らかだろう。しかし、この歌仙、芭蕉の中座後は脱線したまま二度ともとには戻らなかった。

（俳人）

地上一寸での遊び

上田 真而子

医者で歌人の上田三四二は、その著書『この世この生』で、西行の生き方を地上一寸と捉えている。即ち、西行は、あの乱世のなかで死を見据えた上で花月に憧れ、地上から一寸浮き上がったところで現世を生きていたというのである。それは、不治の病をかかえた著者自身の深い読みから出たものであって、やたらに流用できる表現、考え方でないことは承知しながらも、この地上一寸の生き方ということが、以後、私なりの様々な理解を誘い出すきっかけとなった。

ふとしたことからドイツ語の子どもの本を日本語に翻訳するという事にたずさわって過してきた私は、子どもの本大好きという人の様々なグループに接する機会が屢々あった。私自身はとりたてて本をよく読んだ子どもでもなく、自身に子どもがないので、もし翻訳ということに携わらなかったなら、素通りして過してきたに違いない。翻訳を始めたのも、偶然の機会に或る一冊の児童書に出会い、読むうちにおもしろくてたまらず、気が付いたら日本語にしてみていたというのが始まりであった。それがきっかけで翻訳ということのおもしろさに目覚め、その後おもしろいと私が思う本、心を惹かれる本を捜しては、一冊一冊仕事を重ねてきた。

そうするうちに、子どもの本の読書グループとか図書館の司書の方とか、程度の差はあれ、いわゆる児童書専門の方たちに接する機会がふえていったのだが、そこで、おや？と戸惑うことが起きたのである。というのは、私が訳してきた本を、リアリズムとか、ファンタジーとか、分類して捉えている方が多かったことだ。そして、「上田さんはリアリズムがお好きだと思っていたのに、ファンタジーの本も訳されるのですね」と驚かれる。私は戸惑った。事実、

障害児を扱ったものとか、ナチスのユダヤ人迫害とか、現実の問題を捉えた作品を訳す一方、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』など想像力で三次元の現実を超えた物語も訳している。

こんなこともあった。障害児を扱った本のなかに、その子が「ぼく、遠くへ行きたい。遠くの、お日さまが作られる国へ行きたいんだ」というところがあった。すると、「これ、ファンタジーですね。リアリズムの本のなかに、ファンタジーがありますね。おかしくないかな?」と言われたのだ。私は唖然とした。むろんこれはかなり極端な例ではあるけれども、分類ということにこだわると、起り得る疑問かもしれない。

エンデさんは会うたびに、また講演などで自分の考えを述べるたびに、「いま最も問題なのは、人間の生活から遊びということがなくなってきていることだ」と云っておられた。一九八六年、子どもの本の国際会議であるＩＢＢＹ【国際児童図書評議会】の大会が東京で開かれた折、基調講演者として来日したエンデの講演のテーマは、「遊びの大切さ」であった。

遊び、ドイツ語で言えばシュピール。エンデの言う遊びとは、大人が、時間が余ったから遊ぶとか、これは遊びだから真剣にしなくてもいい、などというときの「遊び」ではなく、幼い子どもが遊ぶ遊び、つまり、それがすべてという行為としての遊びである。大げさに言えば、全身全霊で遊ぶ遊びである。結果とか成果に向って行う行為ではなく、行為そのものがすべてという行為である。

だからエンデは、今の量という考え方だ、ともよく言っていた。すべてが結果に向って突き進む。成果だけが問題で、その過程は問われない、と。人間として最も大切なのは、その過程なのに、と。

連句の世界に、これも私はふとしたきっかけで入った。何もわからないまま、入ってたまらなかった。座に入れていただいて、教わりつつ句を付けていった。難しくて困る一方、たのしくて遊んだ。この辺りで恋の句をと言われると、無粋な自分を忘れて真剣にあれこれ想い浮かべてみる。優男になったり、遊女になったり、拗ねてみた

り、肘鉄砲を食らわせてみたり。虚構のおもしろさ、楽しさ。そして、恋離れには時事句を出すとうまくいくことが多いと教わると、政治や社会情勢に疎い自分を鼓舞して頭の中でニュースを探す。前句がうろ覚えながら古典を踏まえているらしいと気がつくと、それをきっかけに、もうすっかり遠ざかっていた伊勢物語だの源氏物語を本棚から探し出して拾い読みしてみる。

連句は付けと転じを楽しむもので、その転じ方は様々であるから、何が出てくるかわからない。また、連句一巻にはあらゆること、森羅万象を詠むのがよいといわれているから、日頃の自分の狭い世界だけではなく、それを越えて様々なことに関心をもち、情報をキャッチするアンテナを張っていなければならない。つまり、自分の世界に閉じこもっていては良い付け句ができないのだ。自分の好みや生き方にこだわることなく、心を柔軟にしていなければならない。

そうこうするうちに、電車に乗ると、それまでは気にもとめなかった車内の中吊りなどを読んでいる自分に気がついた。自分の生きてきた限られた世界を超えて、別の、広い世界に関心を持ち始めているのだ。そして、ときにはその別の世界の人間に成りきって句を案じている。なんとも愉快なおもしろいことである。つまりは、日頃の自分の現実の世界からいつのまにか解き放たれて、少し浮き上がって、自由に遊んでいるのだ。

エンデは遊びの大切さをいうとき、ドイツ語のシュピールという言葉が持っている、「演じる」「演技をする」という意味も強調していた。子どもはままごと遊びをするとき、遊びに没頭しつつ、砂のお団子を実際に食べるということはしない。そこに演技という心の余裕が生まれているからだ、と。

ところが現在は子どもの遊びから、ままごとのような遊び、いわゆる「ごっこ遊び」がなくなってきているらしい。そういえば、この頃の子どもが、私たちが昔そうして遊んだように、ままごと遊びをしているのを見聞きしたことがない。私が子どもの頃は、昼間は近所の子ども達と、夜は家でままごとをして遊んだ。畳一枚を一軒の家に見立てて、「ごめんください」と戸を開ける仕種をしてお辞儀をする。

中にいる妹が畳に手をついて、「いらっしゃいませ」とお辞儀をする。今もよく覚えているのは、あるとき近所の男の子とお医者さんごっこをしたときのことだ。私が病人で横になっていると、その子が聴診器を持ったつもりで私のおなかをトントンとたたいた。私はくすぐったいような嬉しいような恥ずかしいような、奇妙な気持ちがした。あの感覚を今に覚えているのは我ながらおかしいなと思うことがよくある。

いずれにせよ、遊ぶこと、演じるということは、つまりは現実の自分の枠から解き放たれ、いわゆる事実だけの三次元の世界から少し浮き上がっていることと言えるだろう。

上田三四二が言うのは、西行は出家することによって当時のあの修羅の世界から逃れて行い澄ましたのではなく、ただ少し、ほんの一寸ほど距離をおいてみたということである。だから花や月のものとして愛でる一方、現世の現実を肌で感じ嘆くことができた。というか、嘆くことができたからこそ花月の美しさを人間の実感として謳いあげることができた、というのだが、この少し、上田三四二の表現で言えば、ほんの一寸というのが実はむずかしいことではないだろうか。子どもの本大好きという人で、とりわけファンタジー大好きと云う人がよくいる。リアリズムは嫌い、ファンタジーが大好きという人。むろん人間のタイプ、好みで、それぞれなのは当然だが、このファンタジー大好きという人のなかに、糸の切れた風船のように、うっとりと夢を見つづけている人に出会うことがときあった。これも困ったことで、それでは現実の世界にしっかり足を据えて生きるのがむずかしくなり、結果として現実からの逃避ということになるのではないだろうか。

そもそもリアリズムとかファンタジーとか、便宜上一応の分類が必要な場合もあるだろうけれども、人間のこの世のことはそのどちらかに分類してしまえるものではない。人の心の中にまで通用するものではない。事実だけの三次元のことでも、見ようによって、感じ方によって、それぞれである。三次元の現実は、見ようによって、接し方によって、どこまでも深い奥行きを持ってくる。そしてその奥行きが元はどこであったかわからないほどになると、ファ

ンタジーと呼ばれるものになるのではないか。私はかねてから、ファンタジーとは現実の奥行きであると言えるのではないかと思っている。どんな現実もその奥行きが見え、その奥行きは人様々して、その様々ということが、人間の世界をおもしろくしているのではないだろうか。おもしろくと言えば語弊があるかもしれない。悲喜交々の興趣。

上田三四二は『この世この生』のあとがきで、こう書いている。「西行の花月によせる悲しいばかりに美しい歌声は、殺と争を事とする人間世界を一寸下ることによって、しんじつ悲しいのである。彼の歌はこう言っている。「一寸浮きたまえ。そのためにこの世に花があり、月がある。そして人間がみな一寸浮きさえすれば、殺なく争なき現世浄土が出現するのだ」と。

少し距離をおくと、心が広やかになり眺めれば、事実だけの平面と思われた世界が、おもしろく膨らんでいる。立体になってくる。ちょっと浮き上がることでそれが楽しめる。大らかさ、自由。

そこで、連句。連句というファンタジーもひっくるめて、そして、真剣に付け句を案じる連句。

エンデはこうも言っていた。遊びは、ときに真剣な、命がけのことにもなる、と。作家としての第一作『ジム・ボタンの機関車大旅行』を書いたとき、もともと俳優になろうとして勉強し、ブレヒトの舞台に立ったこともあったエンデだが、その道に飽き足らず、かと言って何をしていいかわからないままぶらしていた。そして母親と二人の日頃の生活にも事欠くような状態でいたとき、ある画家の

が、連句を心の癒しとして推奨しているグループもあると聞いている。

芭蕉は禅の修業をしたそうだが、このことはそういう方向からも説明がつくと思われる。つまり、自己の枠を越えて自由になるという、大げさに言えば、自我からの脱却ということが、連句という遊びによってできていることになるだろう。

友だちから誘われて、二人で絵本を作ることになった。さてどんなおはなしにしようかなと思案するうち、子どものときに遊んだ電気機関車が浮かび、「機関士ルーカスの住んでいたのは、フクラム国という名前の、とても小さな国でした。」と、一行書いた。書いてから次を考えた。そして、また、その次を。そうして絵本のおはなしであることも忘れ、それに没頭したのだ。どんなおはなしにしようかということは全く考えないで、とにかく最初の一行を書き、そして次の一行を、また次を。また、次を。

そうして楽しみながら書き進むうちに何ヶ月もの月日が経っていった。そうこうするうちに、その機関車がある場所で止まってしまった。切り立った崖のてっぺんで、両側は奈落の谷間。ところがどうおはなしを続ければそこを切り抜けられるか、どうしてもわからない。おはなしの先が浮かんでこない。エンデは崖から落っこちそうな機関車をかかえたまま、おはなしの続きに行き詰まってしまった。その日の暮らしにも困るような状態で、でである。滞った家賃の催促がくる。それでもエンデはそのおはなしの世界に没頭して、考えに考え続けた。そして、やっと、話の続きが浮かび、めでたく一巻の物語ができあがった。

ところが無名のエンデである。絵本の予定が大長編の物語になってしまった原稿をかかえて出版社をまわりつづけ、十番目に訪れたシュトゥットガルトのある出版社が、やっと二分冊にするという条件で出版してくれた。ちなみにこの物語に惚れ込んで出版をひきうけたのは女性社長であった。

そうして出たエンデの第一作は子供たちに大歓声をもって受け入れられ、ドイツ児童図書賞を獲得した。おもしろいのはその受賞の報せが届いたときのエピソードである。滞った家賃の催促をどうきりぬけようかとベッドに寝転がって思案していたとき、電話が鳴った。受賞の報せだった。それを聞いたエンデは、開口一番尋ねた。「賞金はいくらですか？」

このエピソードは何かで読み、また直接エンデさんから聞きもした話で、まさに命がけの遊びをした実話である。これは『はてしない物語』のときも同じで、物語がどうしても先へ進まなくなった。その間に二作目であの『モモ』を書き有名な児童文学作家になっていたエンデである。次

作を予告していた出版社は大いに困って
刊書のカタログで続けて四度、お詫びを
らなかった。つまり、出版が予告より二
ある。私も待っていたのだが、やっと出
の宣伝文がおもしろかった。「Endlich
Geschichte" von Michael Ende!」。敢え
「やっと、ミヒャエル・エンデ（終り）
語』が終りになった！」

そういう遊び。余暇の遊びではなく、
う真剣な遊び、それこそが現代に最も欠
ないだろうか。効率を高め、質よりも数
きる成果を求めて突っ走っている世の中

上田三四二は、西行は地上一寸で生き
家して一応は娑婆の世界と縁を切っても
てしまうのではなく、ほんのちょっと浮
で花月を愛で人を想って詩歌を詠む。こ
に結びつけるのは恐れ多いことかもしれ
何か、どこかで接点があるように思えて

春と秋に出す新
掲載しなければな
年間も遅れたので
たときのカタログ
"Die Unendliche
て日本語にすれば、
の『終りのない物
それがすべてとい
けていることでは
量で計ることので
。

その接点の大きな一
こと。思いを、想いを
芭蕉が「文台おろせば
った歌仙に再三手を入
れ、死の間際まで一句の表現を推敲
していたという事実。

この言葉ということ
の要素だと思う。子ど
戦前の教育で育った私
から異議が出た。例え
る」「看る」「視る」な
のだが、そういうこと
は理解できないという
況によってそれぞれ別
ていない、そもそもそ
教わっていない、と。
制限。いわゆる当用漢
る漢字を極端に少なく
弊害が言われ始め、当
かなりの字が復活して

つは、連句が言葉による遊びである
、言葉にするということであろう。
すなはち反古」と言いつつ巻き上が
これも心を豊かにする大きな一つ
の本を訳しはじめた一九七〇年頃、
が無意識に書き分ける漢字に編集者
ば、「見る」。これを私は「観る」「診
どその場の文脈によって書き分けた
のだが、そういうことは現在この本の読者となる小学生に
のである。「みる」という言葉に状
の漢字があるということなど教わっ
れだけの漢字があるということすら
戦後の教育改革の一つであった漢字
字なるものを制定し、子どもに教え
した結果である。その後それによる
用漢字も次第に増えてきて、現在は
いるようだけれども、これも考えさ

せられる問題ではないだろうか。

誰から聞いた話なのかは忘れてしまったが、ある国の言葉では、赤という色の表現が実にたくさんある、それは即ち赤という色の微妙な違いを言い分けていて、その違いを識別することはその言葉を使わない国の人間にはできないというのだ。つまり、言葉があることで、色の識別の能力が勝れているということ。すなわち、言葉がいかに大切かということである。微妙なこと、微妙な感情の違いを言い分ける、書き分けることができなくなれば、それだけ思いが、大げさに云えば、思想が痩せることになる。豊かな感情がなくなるということになる。

つまり連句をすることで言葉に対する感性が磨かれ、そしてそれは、とりもなおさず想いの拡がりとなり、深さとなる。心の襞の深さとなる。しかも、これは連句だけでなく日本の短詩型の文芸すべてに言えることだが、言いたいこと、詠みたいことを五七五の長句か七七の短句に、つまりごく短くまとめなければならない。ということは、想いの何が核心であるか、そしてそれをどう表現すればいいかが問題となる。したがって、想いが凝縮されなければならない。

こう述べてくると少し理屈っぽく聞こえるかもしれないが、実際には、思いついたことを五七五、あるいは七七にまとめようとするとき、頭の中は、メロディを追うような、あるいはリズムをたのしむような具合になって、あれこれ考えている。それがまた実にたのしい。

たのしいといえば、連句でのたのしみの大きなものは、人との交わりである。付けを案じるというのは、つまり、前句を読んでその世界を自分の中で拡げてみることである。意識して拡げなくても、なんの前提もなしに前句を自分なりに素直に読むと何かが自然に浮かんでくることもある。そこから付け句を詠む。すると、その前句の詠み手には思いもつかなかったようなことに発展している。いわゆる見立て替えで、結果的に転じた付けができる。こうして一句一句が転がっていくと、連衆の一人ひとりが思いもよらなかった一巻が巻き上がる。人との交わりのお蔭である。うまく転じた場合、付けた方も愉快だし、付けられた方、つまり前句を詠んだ者も、自分の世界の思いがけない拡がり

を知ってうれしい。

このことを視覚的にしてみると、前句輪と、それに付けた次の句の意味することどオリンピックの輪の重なりのようになそれぞれの輪は独自の色を持ちながら、その重なった部分に新しい色が、内容がういう言葉の持つ要素をポジティヴに生が連句であるということもできるであろう。

ともあれ、その連句を始めたお蔭で、老年のマイナス面も忘れていつまでも遊とができて、こんなありがたいことはな連句のお蔭で人との繋がりが絶えることになり、目まぐるしく変化する現代といちながら付いてゆける、少なくとも付いていこうという気力が保たれるのは、実にありがたいことである。真剣に付け句を考えているとき、期せずして、地界に導かれているような気がして、ありならない。

つい先日、或る座で歌仙を巻いていて、匂いの花がすみ、いよいよ挙句となったとき、或る連衆から「ほんやり坐せば吾もてふてふ」という句が出た。私は、あっと思った。その場の雰囲気から、居合わせた連衆すべてがそう思ったのが感じられた。お捌は迷わずその句を治定した。自分も蝶々になっている。おそらくこの句を詠んだ連衆はそれを意識しないまま、ほろりとこの句ができたのだと思う。そういうことが、さらりと言える。すらりとこの句ができたのだと思う。そそ連句の醍醐味と言えるだろうか。

ほんやり坐せば吾もてふてふ

了

（翻訳家・日本連句協会会員）

平成二十七年の連句界

和田忠勝

平成二十七年という年は、特筆すべき事件や事情がない年であった。国も世間も平和といえば平和であり、それでは何も無かったかと云えば、政治的にもはたまた社会的にも沢山の事件やストーリーはあるものの、連句を楽しむのに不都合なことは無く、連句の材料に事欠くことも無かった。

そういったなかで、連句界は、前年連句協会の法人化が実現して、法人化後の実際の活動が始まったのである。協会としては、まずその内部組織の明確化・活性化を第一目標として取り組みを開始したが、多岐にわたる問題点の有機的分析と解決策を図らねば成らず、なかなか短時間での抜本的解決策には到達出来なかった。それでも多種の問題の根源的基礎的条件である財政問題を取り上げ、二十年も据置きであった会費値上げという非常に難しい命題に取り組み、初回の年次総会への計上に迄こぎ着ける事に成功した。その成果を使って、諸活動の積極的展開が始まっていることを祈るものである。連句協会が、長年の停滞から抜け出し、すべての面で負の面から前向きの活動に転じられるようになれば、ほんの数年で、活力ある集団に転身できるであろう。したがって、次年度からは抽象的議論に終始することも無く、実行可能な具体的政策を推進していける訳である。

色々な角度からのアプローチが考えられるが、若年層・連句無知派・連句無関心地域への取り組み、協会員の捌者養成、ウェブ人口への呼びかけ等々、先行き明るい展望が見えてくるに違いない。二十七年度も各連句会への参加、国民文化祭への支援等に本来の姿勢を打ち出し、新規の連句の場の開発等様々な努力の積み重ねを実施してきたが、その延長線上に連句人口の増加という楽しみを期待したいものである。

結局、個別の活動状況は、協会を中心ながら、連句の普及や連句文芸への興隆に寄与している訳である。そしてその内容は別表の行事一覧表の通りであり、それらの記録と出版関係の資料は以下の通りである。但し完全なプライベートなものと、行事の方で紹介した分の報告は割愛した。

○「都心連句会・湘南吟社二〇一四年連句作品集」百韻、七十二候、長歌行を含む全一三九巻。
○国民文化祭あきた二〇一四「連句の祭典・大会作品集」国民文化祭の記録と当日作品二八巻の作品。
○「第一二回全国高校生付け句コンクール入賞作品」一万七千九百三十句。豊田市文化振興財団刊。
○「平成二七年乙未年歳旦帳」愛知県桃雅会刊。会員一七名と会友四七名の歳旦三つ物を収録。
○「城沼」第一四号　館林連句会刊。
○「花音」第七号　徳島県花音連句会刊。
○「さくら草連句会作品集第九号」さくら草連句会刊。
○「連句集・星の林」第八集　福井県武生連句会刊。
○「草門帖　六」東京草門会刊。
○「ロータス　第一三号」徳島県連句協会刊。
○「早稲の香　第二二号」富山県連句協会刊。
○朝日新聞伊勢版「つけ句にＴＲＹ俳諧入門」一周年経過並びに「同秀句撰集」掲出。伊賀連句会指導。
○連句通信「俳諧薩摩」第一五号　東京たもんせ塾刊。
○「四宮連句会作品集十二」東京四宮連句会刊。
○「甲州連句を楽しむ会実作集」甲州連句を楽しむ会刊。（山梨県民文化祭協賛事業）
○「第九回宮城県連句大会実作集」宮城県連句協会刊。
○「二〇一五夏休み子ども連句教室作品集」徳島県連句協会刊。
○野田連句会会報「あぜりあ」第一一号刊。

なお、いちいち掲載しなかったものに、猫蓑会「猫蓑通信」、くさくき「くさくき」、桃雅会「桃雅懐紙」、稲門連句会「西北の風」、解纜「解纜」、おたくさの会「おたくさ」、俵口連句会「俵口」、等々月刊、隔月刊、季刊、年刊等の機関誌がある。

個人の出版物は大小多々あり、紹介は例年控えているが、江戸時代の市井の女性の俳諧を紹介した会員別所真紀子さんの著作「江戸おんな歳時記」は、第六七回読売文学賞を受賞されている。

最後に、長い間連句界に貢献された重鎮の訃報に触れざるを得ない。十月に大阪の岡本星女さん、十一月に東京の式田恭子さんが相次いで逝去された。岡本さんは夫君春人さんの死後も長く関西の連句普及並びに昂揚に尽力下された方であり、式田さんは母堂和子さんの後を受け継いで連句界の発展に多大の貢献中であった。いずれも真に惜しい存在を失ったものである。ご冥福をお祈りする。

平成二十七年　主要連句行事一覧表

協会行事	諸行事
1／24　常任理事会（日本青年館）	
2／1　会報連句発行（通算202号） 2／14　理事会（日本青年館）	2／11　連句を楽しむ会（浦和）
3／22　日本連句協会第一回総会・全国大会（日本青年館）	
4／1　会報連句発行（通算203号）	4／22　藤祭奉納正式俳諧及び連句会（亀戸） 29　えひめ俵口連句大会（松山）
5／16　常任理事会（港区生涯学習センター）	5／4　心敬忌連句大会（伊勢原） 24　大山阿夫利神社正式俳諧及び連句会（伊勢原）
6／1　会報連句発行（通算204号） 30　平成27年版「連句年鑑」発行	6／14～15　兼載忌記念連句大会（会津若松） 21　花袋連句大会（館林） 28　青時雨忌追善正式俳諧及び連句会（浅草）
7／4　理事会（ABS）	7／19　連句フェスタ宗祇水（郡上）
8／1　会報連句発行（通算205号）	8／23　岐阜県連句協会20周年記念連句碑序幕（岐阜） 30　協会千葉県支部連句会（市川）
9／5　常任理事会（港区生涯学習センター） 27　愛知プレ国民文化祭（名古屋）	9／6　白雨祭笠置俳諧興行（墨田） 9　愛媛県連句連盟第19回連句の日連句大会（松山）
10／1　会報連句発行（通算206号）	10／11　浪速の芭蕉祭（大阪） 12　伊賀ふるさと連句会（伊賀） 17　茨城県連句協会10周年記念連句大会（水戸） 17　平和記念連句大会（松山） 29　さきたま連句大会（川口） 31　東明雅先生追善正式俳諧興行（江東区）
11／7　理事会（港区生涯学習センター） 14～15　鹿児島国民文化祭（鹿児島）	11／29　俳諧時雨忌連句大会（王子）
12／1　会報連句発行（通算207号）	

作品

—連句グループ五十音順

歌仙『後継ぎ』

後継ぎが会津に戻り子守柿　　渡部春水
母と仰ぎし冬の月蝕　　山崎捷子
石窯で焼いたピッザは香ばしく　　田中雅子
長期ローンでやっと手に入れ　　田村昌江
朝まだき能の謡が朗々と　　大内善一
卓のグラスにさくらんぼ盛り　　鈴木光枝
ウ涼風に快気祝いのにぎやかさ　　磯直道

付廻し

名スピーチは三分で良き　　春水
透き通る肌の白さの際立ちて　　捷子
「行ってきます」のキスを毎朝　　雅子
禁煙のはずがたばこのにおいする　　昌江
勅使の門に対の嵯峨菊　　善一
月今宵雲運びくる風ありて　　光枝
虫時雨する濡縁の下　　直道
仏閣の耐震工事始まりし　　春水
頬にやさしく春のスカーフ　　捷子
日本酒で乾杯条例花の宴　　雅子
過ぎゆく刻は陽炎の中　　昌江
ナオSLの汽笛高鳴り近づきて　　善一
苦い歴史を秘む遺産あり　　光枝
公海に今なお眠る駆逐艦　　春水
国会論議ながながとせる　　直道
帰省子は新聞一日かけて読む　　捷子
キュウリとナスの馬を並べて　　雅子
手作りで不況乗り切る若き妻　　昌江
パート職場で不倫せまられ　　善一
気がつけば八十路となりし背の丸み　　光枝
楽しくすごす趣味の毎日　　直道
菊月夜文化センター改装し　　春水
目黒の秋刀魚おろしたっぷり　　捷子
ナウ椋鳥の森を追われて街に群れ　　雅子
駅前広場二十四時間　　昌江
タクシーを待つ人波の中にいて　　善一
土産の餃子匂ううらら　　光枝
花の雨浴びつつ神馬境内へ　　直道
彼方にかかる淡き初虹　　春水

平成二十八年三月三日満尾（文音）

六条院　『三日月の降りて』

衆議判

夏邸 三日月の降りて涼しきたなごころ　赤坂恒子
行水の身に届く色文　梅村光明
夏帯の儀式のごとく解かれゐて　岡本信子
衝立に透く声のかそけく　恒子
噂では尼宮なれど草の庵　光明
蒔絵の椀に沈む白粥　恒子
秋邸 しつとりと雨の金沢楽しめる　光明
空路の客を奪ふ鉄道　恒子
酔へば泣く男ハグしてあげませう　信子
人恋しさを誘ふ虫の音　光明
宰相の皮惑ひする月今宵　恒子
曖昧模糊の味のいちじく　信子
冬邸 楽園にアダムとイヴは居なくなり　光明
ホントは仲の悪い鴛鴦　恒子
猟銃を月下に磨く徒情け　信子
いまは独りで据ゑる初灸　光明
ここといふ笑ひの壺を心得て　恒子
俄成金狙ふ税務署　信子
春邸 ジャズ喫茶妻が目利きのコレクション　光明
ベッドインして記者会見を　恒子
花吹雪たましひたちも紛れ込み　信子
猫の子ゆゑの美しき肉球　光明
つかの間を南にかかる朧月　恒子
春睡といふ甘やかなもの　信子

平成二十七年九月二十九日満尾（文音）

〔新形式「六条院」について〕

この形式は、源氏物語に出てくる光源氏の邸宅・六条院に因みます。光源氏が造営した邸宅・六条院は、ゆかりの女性たちをひとところに集めて住まわせるため、邸内を四季の町に分け、それぞれに季節に合った御殿と庭を造り、春の町（春邸）は紫の上、夏の町（夏邸）は花散里、秋の町（秋邸）は秋好中宮、冬の町（冬邸）は明石の御方の住まいとしており、それを各連の名称としました。特徴としては、源氏物語は恋の物語なので各連に恋句を鏤め、雅と俗を織り込んだ恋模様に彩られた連句を導き出す形式です。また、月の座を各連に設けて、四季それぞれの月の姿を詠み、存分に愛でることができるようにしました。

＊句数は二十四句・（六句×四連）。
＊一花四月（花は春季のみ。月は各連に一つ。それぞれ定座は無し）
＊発句は当季とし、四季順行とする。当季が夏なら、つぎは秋・冬・春の順で進むが、季題は各連一季とする（但し、冬季に新年を付けることは可）。
＊各連の名称もそれに伴い、「春邸」、「夏邸」、「秋邸」、「冬邸」の連　と呼ぶ。
＊春秋は三句から五句まで　夏冬新年は二句から三句まで。恋句は各連二句から四句までとする。

創案者・梅村光明

歌仙『秋高し』

秋高し少年の日の志　　服部秋扇捌

白く透きたる中天の月　　服部秋　扇

ベランダの小さき餌場に小鳥来て　　本屋良　子

英語レッスン弾む教室　　青山牛　蟹

山登り歳は言はずに胸を張り　　山本秀　夫

手作弁当彩りもよし　　古川　直

洛外図屏風の貴人猫を抱き　　古田もえ

冬灯する御簾の透き影　　内藤秀　穂

結界を越えし抱擁いのち燃ゆ　　勝又丘　女

アフリカ救ふ薬発見　　高澤貴　々

大切に汲めば尽きない水の星　　西原　淑

闇に湧き出る蛍追ひかけ　　永禮未　鬼

曾我兄弟板踏み鳴らす袴能　　黒瀬琢　葉

きりきり縛る長い鉢巻　　赤坂南　天

鳩が豆鉄砲食うた顔をして　　扇

天守の屋根に堕ちるドローン　　良

子ら帰途に夕月出でて花の道　　蟹

春は暮れゆき重い寝不足　　夫

田螺掘る故郷の川浅くなり　　直

単線レール対向車待ち

ポシェットにマイナンバーを持ち運び

嘘また一つ呷る冷酒

新妻は料理も上手あのことも

こころ残して鶴は翔び去り

幾星霜古刹の廊に散る紅葉

過疎の村にもつづく左義長

版画彫るわだばゴッホと呟いて

気温高目に眼鏡くもらせ

月今宵特攻基地の資料館

べい独楽競ふ友の呼び声

療養の縁にぶらりと糸瓜揺れ

夢に味はふココア・カステラ

新聞と吾を積み込みフェリー航く

白マスを埋めパズル完成

花舞うて神話に続くけふの空

諸葛菜こそ地の主なれ

執筆　えい

平成二十七年　九月二十八日首
平成二十七年十一月　八日尾（文音）

半歌仙　『寒稽古』

高山紀子捌

児の声に威勢ありけり寒稽古　伊岡森礼子
　穏しき日々の続く末冬　山平富子
庭園の松の枝ぶり見事にて　高山紀子
　肘掛け椅子を揺らしコーヒー　瀬川喜美子
だんだんに月色づきて深みゆく　礼子
　えんま蟋蟀おかめ蟋蟀　富子
ウ不知火に出会いし旅に思い馳せ　喜美子
　ふる里納税届く名産　紀子
成就なき一葉の恋われも又　礼子
　心が燃えるロングシュートに　富子
新聞は斜め読みして立つ厨　紀子
　摩天楼めく夏の上海　礼子
懐かしの歌口ずさみ端居月　富子
　失言多き国会中継　喜美子
病院の窓から望む山の影　紀子
　欠かすことなき夫の晩酌　礼子
真青なる空を背負いて花万朶　富子
夢は果てなく揚がる連凧　紀子

平成二十七年六月　二十日首
平成二十八年二月二十四日尾
（於・秋田市にぎわい交流館研修室・文音）

歌仙　『もの思うとき』

白根順子捌

もの思うとき木犀の香の一縷　白根順子
　あしたの晴れを約す月光　後藤典雄
絵筆取り美術の秋を貪らん　岸田芳雄
　遊ぶ雀の声の賑やか　宮脇美智子
初孫に菖蒲刀を帯びさせて　古閑純子
　麦落雁に添えるお抹茶　川岸富貴
ウ上州に世界遺産の製糸場　栗原英甫
　受付嬢は古風たおやか　後藤典雄
別れ際そっと渡した結び文　岸田芳雄
　マシュマロの唇教えてあげる　古閑純子
絵馬堂の札からからとひびきあい　宮脇美智子
　畑に青菜の美しき整列　川岸富貴
月冴ゆる最終便の離陸して　栗原英甫
　暖炉の前のまどろみの夢　後藤典雄
いちにちを終えて甘える介助犬　岸田芳雄
　生きにくき世の隅に憩える　古閑純子
花今宵上野浅草飛鳥山　川岸富貴
　原節子亡き春をかなしむ　栗原英甫
ナオブランコの強気に湖をとび越せり　後藤典雄
　期待膨らむ明日の窯出し　岸田芳雄
役所からマイナンバーが届けられ　古閑純子
　自宅療養なれば穏やか　宮脇美智子
ほろほろと酔いて恋しさ増すばかり　川岸富貴
　人目を避けて旅の湯の宿　栗原英甫
やりつくしサッカー選手引退す　後藤典雄
　汗も涙も味はおんなじ　岸田芳雄
新聞にドームの写真原爆忌　古閑純子
　戦ぐともなく裏の竹林　宮脇美智子
観世音洩るる月かげ光背に　川岸富貴
　虫鳴く闇をいざ帰りなむ　栗原英甫
ナウ秋セルの座敷童を見たようだ　後藤典雄
　金塊埋めし古文書の地図　岸田芳雄
農暦五風十雨を願いつつ　古閑純子
　うららな縁に針を持つ婆　宮脇美智子
咲き満ちて花の醸せる小宇宙　川岸富貴
　沖に大きく生るる初虹　栗原英甫

執筆

平成二十七年　十月　十五日首
平成二十七年十二月三十一日尾（文音）

歌仙『三の酉』

高尾秀四郎捌

露店の灯眩し儚し三の酉　高尾秀四郎
襟立てて行く雑踏の中　江森京香
国道を横切る階段海ありて　越智みよ子
柱の俳画かけかえてみる　高橋たかえ
月天心身の丈の幸書くレター　森川敬三
友からの荷に籾のひと粒　矢倉澄子
ベンチャーの茸栽培当たりたる　山田他美子
倍々となるゲーム人口　秀
惚れ惚れと男盛りの仕事振り　京
料理自慢の押し掛け女房　み
断捨離の出来かねている奥座敷　た
鞍馬寺より走り根の径　秀
「はやぶさ」の影目裏に月涼し　京
マニア同士で話す山小屋　み
すれ違う歩きスマホの見えぬ先　た
善意と悪意貴方はどちら？　敬
花大樹満ちくる花の息遣い　澄
春をふわりと絹のスカーフ　他
馬(ナオ)の子の生まれ牧童吸う煙草　敬
銘酒の樽を貰い浮かれて　澄
リニアカー新設の駅いつ決まる　他
次世代テレビに来ませんか　秀
雪原をドラマのような逃避行　京
何処ともなく消ゆる冬蝶　み
濡れそぼつ供華るいるいとパリの街　た
難所まだある自転車の旅　敬
飛び入りの里のお焼きの旨きこと　澄
受け継がれたる仁清の壺　他
妖しげな物の怪月をよぎりゆく　京
ミステリーより秋はロマンス　秀
黄落(ナウ)の思いひとひらひとひらに　み
ひねもす響く川のせせらぎ　た
全員が挙手で応える多数決　敬
老舗の時計刻む永き日　澄
駅伝の襷を渡す花の路　他
初虹の丘校歌高らか　京

執筆

平成二十七年十一月二十二日首
平成二十七年十二月二十五日尾（文音）

歌仙『添水鳴り』

渡部春水捌

添水鳴り耳そば立てる六歌仙　渡部春水
月の光の遊ぶ草叢　松澤晴美
かりがねの列ゆるやかに流れ居て　川上綾子
もっこゆさゆさはずむ鼻唄　二村十専
涼しげな料理あれこれ客を待ち　宮本艶子
カットの美しきギヤマンの皿　野島一枝
欧州（ウ）の旅に出会いし旧市街　晴
石畳行く二頭挽き馬車　綾
小説を閉じて目の合うワンピース　十
夢かうつつか恋はうつつで　艶
尼さんも議事堂前に座り込み　春
無表情なる警官の盾　一
池の面鏡となりし月の冴え　綾
枯蘆折れてとがるささくれ　十
外来種駆除に精出すボランティア　艶
グランプリ取る記録映像　晴
盥舟漕げば舞い来し花吹雪　綾
鱒の大群先を争う　十
清明（ナオ）の朝日まぶしきパン工房　艶
広場に集いラジオ体操　晴
中年の井戸端会議姦しく　春
誰が責め負う偽装マンション　一
空蝉がすだれの陰にうずくまり　十
はらはらと桐の散る庭　晴
メランコリー白きうなじの乙女にて　春
王子のキスに溶ける鬱積　綾
監督のＮＧの出て撮り直し　一
倉庫に眠るボージョレ・ヌーボー　艶
友の死を悼めば月にかかる暈　春
交通遺児の赤い羽根受け　十
猪（ナウ）と一期一会のすれ違い　綾
猟師見限り目指す神主　一
木の沓で蹴上げし鞠はどこへやら　艶
歴史息づく明日香甘樫　晴
花万朶戦無き世を言祝ぎて　艶
天女の衣揺らす春風　晴

執筆

平成二十七年十月六日首
平成二十七年十一月九日尾（文音）

歌仙『紅木槿』

次山和子捌

紅木槿ひと日の絵巻捲き収む　次山和子
　そぞろ身に沁む尺八の音　石井季康
兎居るスーパームーン仰ぐらん　竹本いくこ
　至福の時を家族語らう　鈴木哲也
角張りて小さきうなりの冷蔵庫　田口晶子
　出水の跡を印す堤防　三澤律乃
ウニュートリノ宇宙の謎に迫りゆく　戸田徳子
　連山踏破歩を重ね成る　和
ステーションホテルのバーで独り酒　季
　再会するは神のいたずら　い
今ここに秘めし思いは炎と燃えて　律
　書棚軋みて蔵書崩れる　季
開拓の凍土に月の長き影　和
　着ぶくれの児を肩車して　徳
家の味母の味ですオムライス　哲
　狭庭の縁にうたた寝をする　晶
花夕べほのかに灯る船住居　子
　何処ともなく松蝉の声　い
黄砂降る廟（ナオ）の深くに孔子像　律
　病気快癒の便りうれしく　季
ひたむきな若さぶつかるオールスター　和
　腕を磨きにレジェンドは発つ　徳
故郷の磯の香かおる心太　哲
　史跡めぐりは草茂る中　晶
ためらいつそっとまさぐる彼の指　子
　共に死のうと言いしひとこと　い
饒舌が寡黙に変わる波の唄　律
　鎌倉彫の箪笥古びず　季
過疎の地に学舎然と十三夜　和
　なびく芒に笑める露座仏　徳
叉（ナウ）手網に丸々太る下り鮎　哲
　きのう見た夢旅続く夢　晶
大老の筆の運びのゆったりと　子
　久々飾る雛の匂やか　い
うつし世の坂いくつ越え花の雲　律
　上気しており陽炎の街　季

執筆　晶

平成二十七年　九月二十七日首
平成二十七年十一月二十三日尾（文音）

十八韻順候式雪月花　『かるた取る』

松澤晴美捌

起　かるた取るぢぢと孫らの気迫かな　松澤晴美
　　髭ぴんと張る床の伊勢海老　渡部春水
　　前向きに独り我が道歩くらん　石井季康
承　火の国にうっすら積る春の雪　次山和子
　　いつか着地のたんぽぽの絮　竹本いくこ
　　片肌脱ぎて丁か半かと　岸田芳雄
　　奈落まで心ゆさぶる男ぶり　川上綾子
　　寄せ返してはやがて引く波　矢倉澄子
転　五郎丸ポーズを真似る修業僧　春
　　声なき声に昏るる夏草　晴
　　はんざきも月の光も太古より　綾
　　砂漠さまよう難民の列　澄
　　そぞろ寒この世は通り過ぎるだけ　季
　　色なき風にすすする吟醸　い
　　当りたい当ると怖い宝くじ　春
　　お巡りさんの留守の交番　和
結　花の春十八韻に師を偲ぶ　澄
　　書斎の隅に杖と冬帽　春

平成二十七年十二月二十三日首尾

（於・江東区芭蕉記念館）

十八韻順候式雪月花　『蕗の芽』

江森京香捌

起　蕗の芽や摘めば地の声山の声　江森京香
　水陽炎へ水温む川　白根順子
　窓によりパッチワークに励むらん　宮本艶子
　チュクチュクピーと燕巣立ちて　川岸富貴子
承　雪解富士撮り独身の旅おさめ　高橋たかえ
　束縛という一筋の愛　三澤律乃
　ふくよかな胸の谷間で眠りつき　京
　マイナス金利進む政局　順
　接待の黒板塀に吸い込まれ　律
　救世観音に日参の秋　た
転　月さやか波にたわむる忘れ貝　富
　シフォンケーキの香るオーブン　艶
　訃報受け立ちすくむ目に初時雨　順
　寒造り積む蔵の鎮もり　京
　世界へとアニメ文化が進出し　富
　猫がじゃれつく文机のペン　律
結　花の昼ロープウェイのゆるやかに　艶
　蒼天に舞う小凧大凧　た

平成二十八年二月十一日首尾

（於・熊谷障害福祉会館）

『早稲の飯』

十八韻順候式雪月花

越智みよ子捌

起　久に子の所望は一に早稲の飯　越智みよ子
　　窓いっぱいに粧いし峰　田口晶子
　　海峡を大志抱きて渡るらん　竹本いくこ
　　航路悠々惜しむ短日　古閑純子
承　幽玄の絵画さながら雪明り　晶子
　　調教師へと託す愛犬　純子
　　チャイナ服彼の手作り夜着までも　み
　　サンローランを凌ぐ勢い　純子
　　わいわいと揃ううからの写真撮る　い
転　珍しきやな治聲酒どうぞ　晶子
　　見てごらん梁の巣燕月に映ゆ　晶子
　　盤の捌きに笑む恵比寿さま　純子
　　遥かより男滝女滝の滔滔と　み
　　モンゴルの人集う夏場所　純子
　　和太鼓と声と管との共演に　い
　　頂点極む羽生結弦よ　晶子
結　花野原くれないの風あまき風　い
　　蓑虫の揺れ不易流行　純子
執筆

平成二十七年十一月十一日首尾

（於・本庄市市民活動交流センター）

半歌仙　『天井に』

金城比呂子捌

天井に水のゆらめき春きざす　金城比呂子
　獺の祭の絵本開く児　竹山美代子
大志ありげんげ畑に寝転んで　松本奈里子
　葡萄酒添へるパンとチーズに　谷澤　節
名月を席題にする句の集ひ　もりともこ
　弱冠の身にものの音の澄む　竹山みどり
鹿火屋から洩れる姿の見え隠れ　美代子
　気付かぬふりの臆病は罪　奈里子
わがことでなければシラノ饒舌に　東條士郎
　心中沙汰も墓は別別　ともこ
滑走路外れて止まるエアーバス　節
　島影淡くそよぐトネリコ　美代子
桂浜竜馬と仰ぐ月涼し　みどり
　浴衣が似合ふうちの父さん　比呂子
貼り紙に「生徒募る」と書道塾　奈里子
　対策もはや神頼みなり　士郎
花吹雪催眠術めく幻に　ともこ
雀の雛のやかましき庭　節

平成二十七年三月十八日首
平成二十七年五月十四日尾
（於・たかつガーデン・文音）

《伊賀・伊賀連句会―その一　いがまちの座》

歌仙『草紅葉』

梅田とほる捌

草紅葉館に献句の額掲げ　　馬岡裕子
翁称えん虫集く頃　　梅田とほる
後の月うたた寝覚めて澱みなし　　森田みつえ
癒やし系なるペットロボット　　山村としお
縁涼し将棋の相手待ちかねて　　町野正子
簾越しなる岡目八目　　藤井克幸
斎王の盤華やかに行列し　　福田和幸
やんごとのなき君の妖艶　　とほる
覚えたてジュテームと書く震える字　　弘子
定刻に来ぬスマホメロディー　　藤岡典子
大人気ジムシルバーの社交場に　　克幸
マイナンバーの話題騒然　　正子
CTの結果はあした凍ての月　　としお
大根干して樽を洗いぬ　　満枝
くの一の忍具収めた隠し部屋　　とほる
スクラムを組む里の語り部　　克幸
特産の野菜ふんだん花の下　　正子
遠足の子等天守見上げる　　和幸
蜆船湖水をすべり棹浅く　　裕子
派遣会社の薄い日当　　としお
留学のホームステイを引き受ける　　典子
技術は速く通訳機まで　　とほる
宿守りの猫に遠慮の掘炬燵　　克幸
雪つりの松縄目麗し　　裕子
北国路さかな目当ての旅の客　　満枝
ヒッチコックは金髪びいき　　正子
板塀に相合傘が描かれて　　和幸
炎へ投ず手紙百通　　克幸
庵の月般若心経唱えつつ　　典子
色無き風の吹き渡る伊賀　　としお
新米の特A続く郷笑顔　　裕子
MRJの飛行夢乗せ　　和幸
乾杯の音頭はいつも長老に　　正子
熟年夫婦巡る回廊　　典子
花に幕浮かれ俳諧賑わいぬ　　克幸
歌よみ鳥の声も高らか　　とほる

平成二十七年　九月二十三日首
平成二十七年十一月　十七日尾
（於・絵手紙いろはアトリエ）

歌仙『元兵士』

峠　美晴捌

暑き夜やとつとつ語る元兵士　山村としお
　軒に並んで揺れる風鈴　峠　美晴
ＩＳＳ北空飛ぶを見んとして　福森豊子
　あっという間の特急電車　田中としこ
月今宵古都を彩るだらり帯　美晴
　澄める水音途切れ途切れに　豊子
松茸の香の豊かさを神棚へ　としお
　出湯の郷の噴火警報　美晴
ツーリングやめてライブへ誘う彼　豊子
　蓼食う虫も好き好きなんて　としお
子宝も一緒に森の教会へ　としお
　バカラグラスにボルドーワイン　美晴
主逝き寄り添う犬に冴ゆる月　豊子
　寒き通路に名画一幅　としお
意合わず虚虚実々の永田町　としお
　さいころ遊び上がりうやむや　美晴
昨日今日そよ風にまで花吹雪　豊子
入学生早や校歌覚えて　美晴
青麦（ナオ）の畑一面に背伸びする　としお
　宙に舞いたる妖怪の面　豊子
ハロウィンの今日も続ける日本版　としお
　子の夢奪う球界汚点　としお
寄り合いて蚊遣火将棋路地住まい　豊子
　手抜き料理を冷奴とし　としお
飼い猫は身に合う服を着せられて　豊子
　一人娘のお四国参り　美晴
渓越えの大声告白返事され　豊子
　揃いのリング贈られる破目　美晴
雲を出て山河整う望の月　としお
　銀に輝き芋の露浮く　豊子
ＩＳ（ナウ）は世界を敵にそぞろ寒　としお
　防犯カメラいたるところに　美晴
しづしづと五輪会場地均しぬ　としお
　サンバのリズム近づいて来る　豊子
史跡なる花の古木を守る里曲　美晴
　入学母子へ門で手を振る　としお

平成二十七年七月二十七日首
平成二十七年十月二十六日尾

（於・峠邸）

歌仙『ほどけゆく』

松井洋子捌

ねぢれたるものほどけゆく大花野　松井洋子
　ま白き雲の隠す繊月　大月西女
団栗の土間の隅へと転がりて　村上恵子
　洗濯物をびつしりと干し　天野洋二
青葉木菟親子で探す森の中　洋二
　ひと息に飲むレモンスカッシュ　恵〃
連なりてサイクリングで島巡り　二洋
　胸に秘めたる行き摩りの恋　洋二
ずるずると上司と部下の浮気沙汰　恵二
　菜根譚の古書を見つけて　洋二
アメリカは世界警察とは言えず　中居由美
　水増しされて酔えぬ安酒　二西
凍月に肌てらされしマリア像　井ノ口カ子
　山犬の持つ気品ある耳　山本あとり
園児らは津波訓練神妙に　西
　ボーカロイドの音に違和感　笹木梢
新幹線花また花を愉しみて　芝青む甲子園へ　梢
　草餅の餡つけてうたた寝　名勝の地で愛を叫ばう　あ
結婚の二文字にとんだ落し穴　西
　妻の元へと彼は身支度　由
南吹く砂に紛れてされかうべ　あ
　定斎売のまたも空咳　二
ピッケルがパカと岩割りアメジスト　あ
　臨時ニュースを申し上げます　カ
必要なものを隠すな小人たち　恵
　まだ一行も書けぬ自叙伝　西
里山は風に騒ぎて月高く　西
　採られぬままに太る瓢箪　恵
札所寺善男善女庭木刈り　梢
　噂話のかしましきこと　悦子
千円の呼び名は「夏目」から「野口」　あ
　よけて通れぬ塞翁が馬　悦
花嫁のヴェールに遊ぶ春の風　洋
　桜貝手に誓ふとこしへ　筆

平成二十七年十一月一日首
平成二十七年十二月十七日尾

（於・天野亭）

歌仙『初詣』

初詣仰ぐ神木十尋かな　　菅沼不立
　恵方の空に描く鳶の輪　　男
交付前マイナンバーに詐欺の手が　　稔
　ラジオのニュースマートフォンで　　て
ラグビーのファンの目当ては五郎丸　　男
　白磁の壺に映える芽柳　　稔
雛飾り納め海境月昇る　　て
　疲れすつきり癒す柚子風呂　　稔
欠伸とのびは猫の挨拶　　て
　「ちよつとあなた指輪を何処に忘れたの」　　て
次々(ウ)とノーベル賞に歓喜湧く　　男
　同性婚の流行るこのごろ　　稔
服んで貼つても効かぬ恋薬　　て
　老いらくのういた噂も気にならず　　稔
回覧板廻すついでに打ち明ける　　て
　干支「猿ダルマ」災難も去る　　て
理系女の水着不意にドッキリ　　稔
　月代の稜線写す凪の湖　　て
縁側に置かれし絵筆消える闇　　男
　はぐれはぐれて黄落の宿　　て
体内時計酒を欲しがる　　稔
　松茸(ナウ)は焼いて蒸されて炊き込まれ　　て
満月に天城連山浮び立つ　　美
　軽減税率ゆくへ心配　　て
ふるさとの川遡る鮭　　男
　MRJ国際ジェットいいマスク　　稔
鶏頭に赤んべえして退院す　　稔
　ボージョレヌーヴォー解禁となり　　て
きのふもけふも励むカルチャー　　稔
　懐しの唄もとびだす花筵　　て
万葉の小径漫ろに花衣　　稔
　頂に見る湯町のどらか　　て
耕人鍬に凭れいつぷく　　男

平成二十七年十一月十一日首
平成二十七年十一月二十二日尾
（於・伊東市中央会館）

歌仙『歳末セール』

宮澤次男捌

宮澤次男　街中は歳末セール熱を帯び
田中てつ　　配った蜜柑子等の歓声
谷川稔子男　読み掛けの本伏せたまま卓袱台に
稔子て　　座ったままでテレビ体操
男て　　稜線に月昇る頃貰い風呂
稔子　　右に左に揺れる穂芒
男て　　産土（ウブスナ）の宮に現わる鹿の群
稔子　　いきなりぐっと抱きしめられる
男て　　若きときあなたの香り懐かしく
稔子　　銀幕の処女ついに鬼籍に
男て　　久方の原油下落に有る賛否
稔子　　ＪＡＸＡあっぱれ軌道修正
男て　　眉月の許ナイターのホームラン
稔子　　伝統工芸繋ぐ風鈴
男て　　バス旅行集合時間ままならず
稔子　　人混みを分け宝くじ買う
男て　　返事書く封書に花の切手貼る
稔子　　まどを開ければ蝶の舞込む
男て　　草餅（ナオ）を搗いてふるまう農終い
稔子　　津波の郷に鎮魂の塚
男て　　縁側に猫寄り添いて深眠り
稔子　　賽銭泥棒忍び足して
男て　　どか雪でとなり近所も遠くなり
稔子　　寒九の水が喉を潤す
男て　　褒賞の晩さん会の美酒に酔う
稔子　　再婚ばなし待てぬ半年
男て　　老いらくの恋もめらめら燃え盛り
稔子　　ぎっくり腰で通院の羽目
男て　　月翳の歪む旅籠の吹きガラス
稔子　　最高級の福島の桃
男て　　芸術（ナウ）祭特選となる苦学生
稔子　　洗えるスマホ汚れ解消
男て　　階段を上がったものはてなぜに
稔子　　巣から離れて雲雀降る畑
男て　　花筵自慢の料理持ち寄りて
稔子　　見はるかす山霞棚引く
男て

平成二十七年十二月二十日首尾
（於・伊東市中央会館）

歌仙『茶掛け軸』

近藤蕉肝捌

初夢や心敬僧都茶掛け軸　近藤　蕉肝
雑煮で祝う親子三代　林　ジョウ
町おこし歴史ツアーも加わりて　前田　明水
スマホ操作でカメラシャッター　中尾　美琳
待つほどに心ほのめく望の月　成田　玲香
高きに登り篠笛を吹く　執筆　ジ
鵙（ウ）懸巣（もず かけす）白神山地（しらがみさんち）撫（ぶな）の森　蕉
水清らかに光るうろくず　美
だしぬけに婚約指輪差し出され　美
バツイチどうし傷をなめ合う　玲
ラクダから落ちる覚悟で砂漠へと　ジ
島の誕生噴煙の中　明
片肌を脱いで西郷月仰ぎ　明
平成維新都構想から　蕉
お早うと声かけて開くコンディション　玲
登山マラソン駅をスタート　ジ
南米のパリ染め上げるジャカランダ　美
霞を恨む花の宮殿（ナオ）カーニバルシシーは派手な仮面にて　美
浮名の多きパンドラの箱　明
浦々の文を探して鑑定に　蕉
ちんちんがある金太郎雛　玲
友が来てまた選び出す涼み台　明
アメリカ人がチェスのチャンプに　ジ
褒められて伸びる教育だけじゃない　ジ
寒猿渡る青の信号　玲
境界の見えぬ脅威が民阻む　美
宇宙の渚オーロラの舞　ジ
地球から玉兎は徐々に遠ざかり　蕉
車窓にもたれ温め酒汲む　明
流離（ナウ）の末老蝶と成り果てて　玲
今の生き甲斐ボランティアです　蕉
境内でラジオ体操掃き掃除　明
世界の街で平和訴え　ジ
サンフランシスコの花の結ぶ海　玲
堤防長く競漕の水尾　美

平成二十七年一月二十五日首尾
（於・伊勢原シティプラザ）

歌仙　『耳澄ます秋』

石穿つ村雨に耳澄ます秋　千場ひで子捌

泡立草の続く野の道　永田吉文

待合いの明りほのかに月愛でて　宇佐見湘山

蔵の高窓駆ける小ねずみ　大津博山

古文書のうるわしき筆読下し　千場ひで子

ドット柄なる浴衣きりりと　前田明水

若大将付け回してる青大将（ヴ）　海老原雅

フォーク全盛流行る長髪　湘

湯上りの君の腕にすがりつき　吉

今度逢う日をせがむ約束　ひ

色あせし前垂れ替えて辻地蔵　博

箱根の山をマグマ窺がう　雅

月蒼く音冴え冴えと救助ヘリ　明

サッカーゴール逆転に沸く　ひ

染五郎ＣＧ歌舞伎夢の舞　博

百寿六万長寿大国　湘

里人の世話行き届く花筵　吉

細く啼きたる笊の猫の仔　明

千羽鶴（ナオ）園児らの列去りゆけり遠蛙　雅

創意工夫を生かす折紙　湘

険しくも匠の心求めつつ　吉

ご隠居囲碁は待った連発　ひ

夕暮れの風ジグザグに海の家　博

おらが天下と練雲雀飛ぶ　雅

皇帝の寵を妃が独り占め　明

「かんにんどすえ」とまたもいなされ　水

一瞬で届くメールでさよならと　廣崎竜哉

甘く見ていた避難勧告　湘

月光る警備厳しき国境　ひ

末は教師か瞳さわやか　雅

肩組み合ってふるさとの歌　博

町おこし機織りの音軽やかに　ひ

掃き清めたる社淡雪　雅

自家製のワインも並べ花の笑み　増井ちえこ

埴生の宿をのぞく蝶々　博

平成二十七年九月十三日首
平成二十七年十月十一日尾
（於・伊勢原シティプラザ）

半歌仙　『桃の花』

廣﨑竜哉捌

田を渡る風やはらかし桃の花　林　ジョウ
　魚籠いつぱいに釣れし初鮒　廣﨑竜　哉
絵手紙を習ふ教室のどらかに　飯田せつ子
　駅まで十分探すアパート　大津博　山
芳ばしきカレーの匂ひ月今宵　竜
　秋場所の頃育つ新弟子　ジ
湖（ウ）に尾越の鴨の降りて来て　博
　無料のＬＩＮＥ使ひ放題　せ
好きだよと一言言へぬ意気地なし　竜
　幾年経ても忘れ得ぬ恋　ジ
夏帽子孫の数ほど日に干して　博
　異星人呼ぶナスカ地上絵　せ
雪女振り向きざまに月を浴び　竜
　寒念仏の遠ざかりゆく　ジ
吹替へのボガードの声ぴつたりと　博
　バイリンガルが上手い落語家　竜
評判の観光電車花便り　せ
大き榎に鳴ける春蝉　ジ

平成二十七年三月八日首尾

（於・伊勢原シティプラザ）

半歌仙　『緑　摘　む』

伊藤貴子捌

閑さや緑摘みをり民家館　伊藤貴子
群れて子雀跳ねる飛び石　鈴木すず
墓穴を出てマンドリン弾くならむ　佐藤万里
フェイスブックで評判がたち　木暮佳右
投函のポストを照らす月明り　阿曽宏男
金銀穂波すすき野の道　片山李紅
柿を買うカーキと言ってイタリア語　伊藤慶子
見知らぬ人が誘うウインク　紅すず
ろくでなしどうせ拾った恋じゃもの　紅慶
回り文世の中バカなのよ　佳佳
返そうか返すまいかの免許証　紅紅
孫のためにと貯金をおろし　宏宏
ＬＥＤ研究室の扇風機　紅佳
後架の窓に月と藪蚊と　貴貴
敦盛の謡独吟お稽古で　紅紅
祖母の古衣洗い張りする　佳佳
昼酒に酔いつぶれたる花筵　慶慶
蜂の羽音の遠く近くに　小野史温

平成二十七年五月十四日首尾

（於・千葉市若松公民館）

歌仙『紋付』

伊藤貴子捌

紋付のえへん顔せり漱石忌　伊藤貴子
　楽屋入りして炭をつぐ人　松岡世喜女
流木を集める鳶の輪の下に　木暮佳右
　午の時報に心落ちつく　喜
尖塔の真上に月の煌々と　伊藤慶子
　マロニエの実が落ちる歩道に　佳
葡萄（ウ）酒を仕込む陽気な女達　佐藤万里
　片目つぶってせまる鼻声　喜
マンションの一室貰うしたたかさ　鈴木すず
　着古しなどをゴミ袋へと　佳
鶏ガラのぶつぶつぶつと煮詰まって　喜
　使ってみたい無人掃除機　喜
バイオリンソナタの余韻月涼し　すず
　とうすみ蜻蛉葉先しなれり　佳
かつて父檜舟持つ材木屋　喜
　骨董市で値切る掛軸　貴
雪降って花隠しなる花に遭い　佳
　これ桜貝ひいふうみいよ　万
渋滞（ナオ）を退屈に見る種案山子　喜
　猫新聞に投稿をする　佳
オオクラのホテルチャリティ名画展　慶
　見初めしひとの作法しなやか　喜
強風の枯パンパース喜寿迎え　貴
　世帯上手が恵方まいりを　佳
道の駅できたて熱い焼き団子　喜
　引き抜かれたる竹串の数　す
リユースかリサイクルかとかしましく　佳
　昭和のはじめリヤカーを曳き　慶
献米の俵積まるる月祀る　佳
　直会覗くえんまこおろぎ　貴
そぞろ（ナウ）寒いつもと同じ処方箋　喜
　先ずは安心温泉めぐり　貴
鎮座してカルスト台地石大小　佳
　駆ける少年羊飼いめき　佳
花曇り水琴窟に耳寄せて　貴
　しばし留めん佐保姫の裾　慶

平成二十七年十二月　十三日首
平成二十七年十二月二十五日尾
（於・千葉市若松公民館）

歌仙『大あくび』

前座から名人作る大あくび　保
片ひじついた袖に焼け焦げ　世
ひきがえる三和土の隅に息ひそめ　龍
子どもの日には集う親族　保
キャンバスのまん中にある陽の翳り　呆
月に占う明日の面接　保
トリックを狗尾草にくすぐられ　保
門火に揺れる義姉の俤　世
読みかけのリルケを貸してあげようか　世
左が好きと見せる横顔　保
ベッドでもすぐに直らぬ女優癖　龍
整形の美がロボットのよう　呆
神の手の若き外科医に月冴えて　保
母を待たせる滑る雪道　世
白み行く静寂を破る牛乳屋　世
戦の世へは産まぬ卵を　龍
ラッパーのデモの先には花蕾　保
畑打ち終えてちょっと休息　呆

付け回し

志田則保
山本由宇呆
松澤龍一
日下部敦世

韓流（ナオ）のドラマにはまる春炬燵　保
望遠鏡に新しい星　世
老船長舳先に立ちて風を聴く　龍
利権を侵す政治改革　保
のそのそとはんざき砂を掻き分ける　呆
サイダーに浮く銀色の月　世
駄菓子屋の思い出語るクラス会　保
セフレ五人はちょっと多すぎ　龍
小説のネタに現実受け入れる　世
あえかな君に詩を捧げる　呆
鶏頭の四五本咲いた子規の庭　龍
運動会の帽子紅白　保
落（ナウ）し水書斎に帰る荒れ男子　呆
バーチャル求めマリオ呼び出す　世
夕食はコンビニ弁当一人食い　保
小窓を過ぎる山鳥の影　龍
天平の風が運んだ花吹雪　世
春のコートをハンガーに掛け　呆

平成二十七年六月二十七日首
平成二十七年十月二十四日尾
（於・柏市喫茶店「ライラック」及び文音）

歌仙『梅咲くや』

梅咲くやいつもの路地に雀いて　大山とし子捌

子の手を離れふわと風船　大山とし子

メーデーのシュプレヒコール遠ざかり　城　依子

パッチワークのやっと仕上がる　根本美茄子

窓開けて今宵の月を賞でるらん　とし子

潮の香りの爽やかにこそ　依子

駅(ウ)頭に少女らが呼ぶ赤い羽根　美茄子

ジョギングコースかえてみました　とし子

運命の出会いはいつも突然に　依子

手話で告白熱く静かに　美茄子

寄り添いて笑まう信濃の道祖神　とし子

宿場の軒に下がる菅笠　依子

ひとり酌む冷酒ことのほか旨し　美茄子

予後は良好涼し月光(ゲ)　とし子

文豪は皆夭逝と人は言う　美茄子

机にのこる薄い落書き　とし子

ロボットがゆっくり歩く花の昼　依子

万国の旗揺れてのどやか　美茄子

旅(ナオ)先で出会う不思議は蜃気楼　とし子

大型船が漂っている　依子

気がつけば増えつづけたる避難民　美茄子

即効という処方箋なく　とし子

湯たんぽを抱いて寝ている独り者　依子

胸にするりと雪の欠片が　美茄子

めくるめく恋のカクテル茜色　とし子

山陰にある古いコテージ　依子

焼き立てのパンに朝から行列が　美茄子

好きな童謡くちずさみつつ　とし子

液晶の画面の月に秋気澄む　依子

郷はそろそろ炉火欲しき頃　美茄子

芸(ナウ)術祭又吉作品読み解きぬ　とし子

太極拳で若さ保たん　依子

候補者の名前連呼の街宣車　美茄子

無念無想の般若心経　とし子

花咲いてひと日華やぐ一里塚　美茄子

残る鴨らは風に吹かれて　依子

平成二十七年　二月一日首
平成二十七年十二月一日尾（文音）

歌仙『はつ夏や』

はつ夏や沖へ汽笛は三度鳴る　龍一
　薫風ぬけるジョギングの道　越子
楽茶碗出して自分へお茶をたて　和
　畳の縁を踏んでゆくネコ　高沖
居待月宅急便の走り去る　龍
　闇をほどいて並ぶ酸漿　越
秋(ウ)の灯に開く荷風の「日和下駄」　和
　昼にもらったメール気になる　龍
紅の色変えて気分も華やいで　越
　逢ったとたんに熱いくちづけ　和
さっき見た「失楽園」のことでした　龍
　プラットホームに小雨降り出す　越
人混みがふくらんでゆく酉の市　龍
　桂男と蹴飛ばしで酌む　和
外国人増えて銀座の青い鳥　龍
　春のハーレイ大路行進　越
花衣まとって今日は誕生日　和
　夕蛙鳴き灯す門灯　龍
聖霊会舞台に生者死者が舞う(ナオ)　一
　森深くして眠る湖　越子
長老の陣取っている樹下の椅子　和
　毎朝通うラジオ体操　龍
店先にラムネ買うのは昭和の子　越
　扇子使いの妙に艶めく　和
おいらんの外八文字仲之町　龍
　会う約束が心ふるわす　越
お日さまのような顔来て囲む卓　和
　断公九平和リーチ一発　龍
べい独楽は誰にも負けぬ餓鬼大将　越
　戦を語る月を見ながら　和
肌寒にマネキン(ナウ)の服着せ替える　越
　鑑定団へ祖父の掛け軸　龍
くれよんの色を重ねて描く暮色　和
　夕陽ゆらゆら蝶はひらひら　龍
ぞうさんを湯船で歌う花疲れ　和
　伸び縮みする遠足の列　越

平成二十七年五月十五日首
平成二十七年七月十七日尾　（文音）

不破俊輔・福島宜慶共著『坊主持ちの旅』出版記念

歌仙『赤蜻蛉』

赤蜻蛉載せて運ぶや坊主持ち　林　宗海捌
　金木犀の香る畦道　不破俊　輔
宵の月鎖せる坑口照すらん　林　宗　海
　娘足長祖母は胴長　佐藤禿　山
五十肩ハウツー本をかき集め　野口笑　女
　寒稽古にも追掛けがゐる　荒井遊　糸
影冴ゆる八甲田山音もなく　海
　風化してなほ道祖双体　輔
くねくねと横座りする膝の上　女
　しごきほどけて闇は深まり　山
蓋開けて卵を落とす泥鰌鍋　海
　泡盛酌めば昇る夕月　輔
黍畑塩吹く頬を手で拭ひ　糸
　湿布貼るにも器用不器用　女
接着の技術は今やロケットに　女
　金の筋目の細き志野焼　山
三斎が利休見送る花明かり　海
出窓開けば胡蝶飛び立つ　輔

漸くに炬燵を塞ぐ模様替へ　山
　夫と眼鏡を探す半日　糸
タイマーに頼る薬の飲み忘れ　海
　湯気ほつこりとゆめぴりか盛る　輔
七五三集へる人の賑やかに　女
　鎮守の森に潜むふくろふ　山
恋の道魑魅魍魎も現れて　糸
　きぬぎぬを刷く紅の雨　輔
温泉の加減尋ぬる声のあてやかに　海
　空の銚子の並ぶ二の膳　山
遠山が背比べする望の月　女
　耳を澄ませば木の実降る音　糸
トランプの占ひ果てて秋思なる　海
　近衛門兵昏れ残る空　輔
歳月の轍に窪む石畳　女
　捨て猫集ふ春の熊野路　山
伽羅の香に迎へられたる花の宿　糸
　追分唄ふ声ののどけさ　筆

執筆　平成二十七年　九月十八日首
　　平成二十七年十二月十三日尾（文音）

KUSARI　『たのしい三句たち』

一月一日（木）

心を洗う元旦の雨　（No.118410）　ザリ

土の中生れいづる日の夢を見て　ふうろ

パンパラパンとラッパ水仙　藍

一月十一日（日）

噂話は数倍になり　（No.118528）　ハナ

ドップラー効果残してパトカーが　タヌ公

明日が見えない欲望の街　うきふね

一月十一日（日）

才能のないのはとっくにわかってる　（No.118523）　麦

ポテトチップス最後まで食べ　ザリ

部屋干しのタンクトップは畳まれず　合

一月十六日（金）

霧雨の午前零時の交差点　（No.118575）　カンちゃん

百鬼夜行もTwitterして　小町

税金がそちらの世界ありますか　ザリ

二月一日（日）

引き出しのチビの鉛筆HB　（No.118751）　ザリ

右から綴るアラビアの文字　海賊と呼ばれた男石油売る　天球　（No.118922）

二月十二日（木）

昭和レトロのアンクルトリス　のら

紙石鹸持って横丁の銭湯へ　兎

雪の結晶たどる玻璃窓　コロン

二月十三日（金）

遮光器で獲物見据えるイヌイット　（No.118935）　氷心

凍れる星によだかの涙　枕流

山間を走る夜汽車のなつかしく　小町

二月十四日（土）

ガーリーなメイクでちょっとおしゃれして　（No.118967）　ばらずし

素敵なことが起きそうな春　コロン

掌をさっと開けば桜貝　あずき

三月二十七日（金）

午後の日差しの山茱萸の花　（No.119434）　鵜

もやもやの一つ一つに訳があり　唯

黙りこくって毛玉とりする　コロン

四月八日（水）

日常に非日常のエッセンス　（No.119565）　カンちゃん

絵の中に咲く青いひまわり　タヌ公

網渡りしてるわたしの恋心　小町

四月十日（金）

繭倉庫フランス式の煉瓦積　（No.119593）　美句志

湯畑で唄う一度おいでよ　天球
コマクサの紅白ゆれて活火山　ふうろ
(No.119626)

四月十三日（月）

宇宙旅する夢の百年　彗
魂魄は輪廻転生繰り返し　あずき
ずっと感じる君のぬくもり　カンちゃん
(No.119978)

五月十日（日）

案山子の藁が少し足りない　タヌ公
ウィンドのマネキントルソー盗まれて　藍
夜ごと囁くスタンドバイミー　みのり
(No.120168)

五月十八日（月）

傷ある脛のうずく真夜中　合
網走は今頃きっと寒かろう　麦
原野の空をオジロワシ舞う　ザリ
(No.120450)

六月五日（金）

窓辺の猫が一つ延びをし　深風
軽はずみだったと我が身苛んで　ひわ
かんざし投げる東慶寺門　兎
(No.120456)

六月六日（土）

遠くにかすむキューポラの街　氷心
朗読を時の首相に聞かせたい　ばらずし
突如開戦やっと終戦　弦
(No.120493)

六月八日（月）

シャガールの馬翔んでゆく天の川　兎
蟋蟀バンド人気抜群　不用之助
コスモスの群いっせいにスイングし　唯
(No.120599)

六月十四日（日）

駅馬車のかなたに竜巻通り過ぎ　コロン
降ってきたきな粉の蛸・鯖・鯨　兎
旦つくは形而上的宿酔　氷心
(No.120835)

七月一日（水）

大根引く地球まるごと引っ張って　兎
ひょうたん島は進み続ける　のら
うるう秒雨は一日降りやまず　唯
(No.120937)

七月六日（月）

病弱のあなたを僕が守りたい　ザリ
ドラゴンなんかみじん切りだよ　タヌ公
寸胴の鍋からふついい匂い　不用之助
(No.121185)

七月二十四日（金）

ぞうさんもうわばみさんも仲良しで　タヌ公
インド寺院の壁のレリーフ　カンちゃん
街娼が聖なる光り帯ぶる瞬　枕流
(No.121202)

七月二十六日（日）

あの日の愛はどこへ消えたの　唯
宛先も知らずドローンで送る文　道草
第五触手が少し震えて　タヌ公

八月十四日（金）

チマをからげて逃げる鬼事　（No.121448）　氷心

カナカナカナもう出ておいで妹よ　兎

蔵の裏手に曼珠沙華ゆれ　コロン

九月十六日（水）

国会前子連れのママも駆けつけて　（No.121635）　蕗

9条の命甦れ今　ザリ

吹き付ける嵐の真正面に立つ　ひわ

十月二日（金）

疎まれてうるさがられて母の愛　（No.121823）　唯

落ち葉はやがて腐葉土となり　ザリ

ふかふかのお布団虫も春を待つ　ひわ

十月二十七日（火）

人恋しくて通うコンビニ　（No.122140）　カンちゃん

何もかもあるのに欲しい物は無い　ゆづ

マンハッタンの長すぎる冬　氷心

十一月十八日（水）

貧乏神が呼びかける声　（No.122350）　ゆづ

お引きとり下さいませと番頭さん　コロン

ちょうど夕凪ちょうど潮時　氷心

十一月二十四日（火）

抱きしめられて彼のなすまま　（No.122406）　鶫

花衣嘘もほんとも夢のなか　藍

老いて寵妃の啜る粟粥　あずき

十一月二十四日（火）　（No.122403）

瞑想の長老もいて猿の群　タヌ公

砂曼荼羅を崩す瞬間　深凪

月光がチベット寺院照らし出す　ひわ

十二月三日（木）　（No.122494）

どこに当てよか聴診器の手　ゆず

いっせいに声あげ芽吹く雑木山　兎

雪解け道の舗装始まる　麦

十二月三十一日（土）　（No.122753）

妖精のはしゃぎてかごめかごめの輪　ひわ

地を埋め尽くすすずらんの花　ザリ

ふるさとの山河閉じ込めラムネ玉　兎

平成二十七年一月一日～十二月三十一日
（No.118410～No.122761）より抜粋
（於・HP矢崎藍の連句わーるど総合BBS）

《東京・NHK文化センター青山》

歌仙『梅雨の街』

和田忠勝捌

鮮烈な赤き傘あり梅雨の街　柏　元章
ジャスミンの香の紅茶出す店　宮脇昌子
広報誌あの手この手と品変えて　村井昭三
郷土史講座とても気になり　松村妙子
新しき友と語らい月の道　昌
木の実しきりに落ちる気配す　臼杵游児
追伸（ウ）の行増やしおり鉦叩　吉川みつ子
メールじゃなくて今度会おうよ　妙
壁ドンをマニュアル通りやってみる　昌
仲人に知れお灸すえられ　和田忠勝
急所をばわざと外して長期戦　三
月冴え冴えと禅の問答　昌
寒柝の音に守られ家路まで　み
進学塾へ急ぐ幼等　児
「エンブレム」一つ覚えた外国語　昌
身ぶり手ぶりで旅は道連れ　〃
初対面おごりおごられ花見酒　黄木由里子
流れのどらか屋形舟ゆく　児

釈奠（ナオ）の聖堂の鴟尾輝ける　〃
修身斉家今も健在　三
七十年学びそこねた近代史　み
福沢諭吉はいつも友達　由
若き等の胸算用の店選び　み
小さき指輪をふるえ受けとる　昌
山小屋の前で記念の写真撮り　勝
眼下に望む白き雲海　妙
漕ぎ出でし知の新世界ニュートリノ　由
乾杯の泡飛び上る猫　〃
二回目の総理信任望月夜　昌
拉致被害者の祈り身に入む　〃
そぞろゆく嵯峨野色葉の散りかかる（ナウ）　児
釣瓶の綱の朽ちし古井戸　〃
若者は五輪を目指し故郷を発つ　由
東風の駅頭万歳の声　児
花戦勝つも負けるも雅にて　三
老いし教師の甘茶注ぎ足す　み

平成二十七年　七月　六日首
平成二十七年十一月十六日尾
（於・NHK文化センター青山）

ソネット平坦韻　『半旗』

―阪神・淡路大震災二〇周年

鈴木　漠捌

中野百合子　a
鈴木　漠　a
梅村光明　b
赤坂恒子　b
東條士郎　c
山本ゆき子　c
在間洋子　d
三神あすか　d
安田幸子　e
辻　久々　e
山名　才　f
百合子　f
土井幸夫　g
矢野千代子　g

黙深くこころに半旗一・一七
紙を漉きつつ呼ばふ幼名
思ひ出の料理レシピに書きおきて
同窓の友野馬の中来て

袖振らば里に広がる花の神
雁供養して悼むその昔
胸に秘す面影のひと母に似る
婿迎へして泥鰌鍋烹る

打水のたちまち乾く白き道
砂煙上げ迫るもの未知
パスポートまだ処分せず抽斗に
瓢の大悟言はず生き死に

裏側も覗かれ月の哀れさよ
ますほのすすき絶唱の小夜

平成二十七年二月首尾
（於・兵庫県私学会館おたくさ連句塾）

『冬のフルート』

蜻蛉　鈴木　漠捌

風に聴く冬のフルート終夜灯　中野百合子
寝つけぬままに褞袍(とてら)ひき寄せる　山名　才
壁も朽ち軋む柱の長屋にて　辻　久々
胡座(あぐら)もかけぬ伸び過ぎた脚　森本多衣
夕(ウ)月に日曜大工なほ続く　鈴木　漠
瓢箪とても個性とりどり　在間洋子
京の町露地を巡れば火が恋し　中林ちゑ子
手と手をとりて登る坂道　安田幸子
特許(ナカ)許可と杜鵑(ほととぎす)啼きくちづけ　三神あすか
滑舌訓練に汗しとど　土井幸夫
謙(へりくだ)るやう青空の熱気球　矢野千代子
下界はるか血圧の上がる　久々
囀りを浴び診療所開きます　才
ぜんまいの背比べののの・の　百合子
半眼の石仏(ほとけ)に舞ひ散る花　洋子
きみと結ばれる未来であれ　漠

霍乱(ナオ)を移しし人と差し向ひ　多衣
同伴したきモリエール劇　あすか
真ん丸の月見団子に笑まふ月　幸子
壺いつぱいに穂薄を活(い)けて　ちゑ子
蟷螂(ナウ)の目と鉢合せ倒(こ)け転(まろ)ぶ　久々
宝籤購(か)ひ運を試さん　洋子
確率論得意の友と花の宴　幸夫
畑打つ男女憩ふ遠景　執筆

平成二十七年一月満尾
（於・兵庫県私学会館おたくさ連句塾）

＊蜻蛉形式。林空花創案「胡蝶」のヴァリエーション。二花二月。
蜻蛉の4枚の羽と胴になぞらへる。ナカ8句は自由律。

『かごめかごめ』

非懐紙十六韻
尻取り押韻
―改組新第一回日展　石飛博光書作品「かごめかごめ」に

鈴木　漠捌

服部秋扇　默す鴨おのおの杭にとまりけり
鈴木　漠　蹴彫の線冴ゆる彫金
梅村光明　錦衣行夢か現か頬抓り
永田圭介　練り直すとも駄句は変らず
渡辺　柚　ラズベリー紅をほのかに月の径
三木英治　見違へるほど藍浴衣映え
別所真紀　栄えありし長髄彦を射止めたる
光明　漠　弛むあれこれ嘆く傾城
秋扇　聖域はかごめかごめの輪で囲み
英治　コミック爽やかローマ風呂よし
光明　葦笛の音色も絶えて残る月
圭介　築き込む塚に濁酒振り掛け
柚　賭事で身上潰すと囃されし
真紀　レシピ通りの母の蕗味噌
執筆　御園生に遊戯の極みの花の宴
　煙雨種蒔き進む外面田

平成二十六年十二月首尾（文音）

＊改組新第一回日展（国立新美術館）に出展された石飛博光書作品「かごめかごめ」は、『続続鈴木漠詩集』巻頭の詩「遊戯」の一節が揮毫されたもの。由縁を慮って一巻とする。
＊尻取り押韻は挙句へ循環回帰。

歌仙『白牡丹』

神の手のほの触れしより白牡丹　別所真紀
　薫風連れてくぐる躙り戸　渡辺　柚
麻暖簾はたらく人の影透きて　服部秋扇
　ひとつの決意爪を短く　佐々木志華
幼ナらのひとみきらきら朗読会　伊藤哲子
　古代遺跡は月の湖ウ　鈴木美奈子
渡り鳥交響曲に乗るやうに　林真理
　稲穂積み上げ牛を牽きゆく　江下緋紗
岩登り年季入れたる登山靴　小松知二
　アドレス聞いた恋の二合目　柚
口笛で情報通の猫を呼ぶ　奈
　盗むとすればあなた丸ごと　華
砕氷船月光千々に砕きつつ　哲
　スコットの碑は南極の地に　扇
少年の大志はタイムマシンです　理
　未来に行くか過去に戻るか　紗
飛花しきり何ものこさぬ死のありて　華
夢の浮橋渡る佐保姫ナオ　奈
夏隣睢鳩漁る荒磯に　二
　重きがうれし抱瓶の酒　奈
親を捨て南無阿弥陀豆腐売り歩き　扇
　ドローン飛ばして知らぬ存ぜぬ　柚
宿命か戦の火種バルカンは　奈
　懐手して嘆く落語家　紗
大嘘愛の行方を違へたり　華
　角曲りしは雪女らし　扇
近頃は老ストーカー増えたとか　二
　勅使菓子盛る七宝の皿　哲
月皓皓歯舞諸島遥かなり　柚
　さまよふばかり風の糸遊　哲
すさまじの武将寝返る下剋上　扇
　鬼哭啾々天空の城　二
クルーズで世界遺産の奇景撮る　哲
　ロードワークの背ナに強東風　紗
花びらを飲んで吐き出す錦鯉　二
　カフェテラスに蒲公英の絮　理

平成二十七年五月二十一日首尾

（於・セシオン杉並）

半歌仙　『年惜しむ』

和田忠勝捌

鹿児島に心預けし年惜しむ　和田　忠勝
灰を被りて漬ける大根　日高うんま
広縁に猫ゆったりと居眠りて　弓場　桐女
ごめんなさいと玄関が開き　前田　豊
お隣の主人の背ナに小望月　大山今日
風にそよぎし色変えぬ松　五郎丸照子
草相撲五輪を目指す子の多く　郡山節郎
十二支遊ぶ神前の庭　今日
飲むならば黒の麹の酒が良い　ま
相性を問う水晶の玉　照子
大凶の申歳生まれ二人とも　桐
愛にとけゆく氷白熊　豊
ほた山に夏月煙し三池坑　ま
水沼に遊ぶ若き鳥たち　節
病床を見舞う孫らに頬ゆるみ　豊
濃き桃色のランドセル買う　桐
挨拶の声軽やかに花の門　照
たらの芽採りて楽し夕飯　節

平成二十七年十二月十二日首尾

（於・鹿児島市よかセンター）

歌仙『木枯しの』

木枯しの海峡（うみ）を渡来の兵馬俑　伊藤草雨捌
　夕べを点す石蕗（つは）の花群（むれ）　青山晴峰
大学の祝典序曲鳴る裡に　瀧澤三休
　椀のあしらひ調ひにけり　瀧澤樵子
家族待つ家路を急ぐ月今宵　伊藤草雨
　友の便りに紅葉著しと　尾関龍
練（ウ）り合はす声揃ひたる里祭　晴峰
　かも子けり子の初恋談義　樵子
海老蔵や菊之助やときめきて　草雨
　ネオン輝く小雨の夜道　三休
フランスへ行きたし瞼にセーヌ川　龍
　罪囚（つみびと）なりし王妃偲ばゆ　晴峰
滑らかな湯舟に映る月涼し　樵子
　晴れわたるらむ夏越の明日は　草雨
自転車でソースカツ丼食べに行く　三休
　今発射する下町ロケット　龍
隣保会花見の余興の賑やかさ　晴峰
　おかめの面と風車買ふ　樵子
ナオ（ウ）ボンボンと昼を知らせる春時計　三休
　一天俄かにかき曇る中　晴峰
図書館に目当ての本を探し当て　龍
　地底の闇にシェールオイルが　三休
鍾乳洞出づれば周芳（すは）の山眠る　樵子
　ちらちら雪の舞ふ県境　草雨
脱藩の志士の思ひが蘇り　晴峰
　激しい恋にこの身を焦がし　龍
見慣れたる金釘流は君の文　樵子
　居酒屋「吉四六」「佐渡金山」　草雨
月の裏見て来たやうな大話　三休
　汽笛を遠く聞く暮の秋　晴峰
休（ナウ）日に猫と遊んで猫じやらし　龍
　せはしいそがしいつも口癖　三休
材料もないのに株の乱高下　晴峰
　庶民生活国策次第　龍
ふる里は御寺の多き花の町　三休
　青きを踏みて往還に出づ　樵子

平成二十七年十一月十日首
平成二十八年　三月三日尾（文音）

歌仙　『縄文のヴィーナス』

臼杵游児捌

縄文のヴィーナス仰ぐ秋の雲　　渡辺　柚

春月ほのかわたる稜線　　河田水尾

道の駅地産の茸売り出して　　臼杵游児

いつも元気な散歩友達　　橋本直樹

ホームパーティー自慢の酒の並べられ　　種川とみ子

スキーの準備選ぶワックス　　北川　稔

大雪に都会の足は混乱し　　矢倉澄子

席ゆずられて己が年知る　　稔

町あかりＬＥＤに変りつつ　　水尾

中小企業誇るハイテク　　游児

昇り降り息せき切つて宅配便　　とみ子

犬族よりも増えし猫族　　游児

遊ぶ波踝濡らし月涼し　　とみ子

陽やけの肌を見せたあの部屋　　柚

想定外テロの一味に彼走る　　柚

海外旅行やめて温泉　　水尾

見上ぐれば棚田のほとり花大樹　　稔

首を傾げて種案山子立つ　　とみ子

九条をどうする憲法記念の日　　游児

ＧＮＰは二位の中国　　水尾

雑踏の渦巻くままに流されて　　とみ子

右も左もスマホ人間　　稔

整形の眉のサンプルあれやこれ　　柚

売り手と買ひ手そもそもの縁　　稔

妻社長夫専務の大企業　　水尾

みそさざい鳴く名刹の杜　　游児

青磁器に千枚漬けの飾り盛り　　とみ子

古着市には紅毛の客　　直樹

みなとみらい動く歩道に月連れて　　水尾

文明開化の薫る椢　　柚

愛の羽根募金を叫ぶ女学生　　澄子

医療ツアーの流行るこの頃　　とみ子

人類の叡知をここにノーベル賞　　直樹

幼子までも守る手洗ひ　　水尾

村こぞり産土詣で花盛り　　稔

穀雨のけぶる故郷の山　　游児

平成二十七年　十月二十九日首
平成二十七年十二月二十四日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『白菖蒲』

北川　稔捌

揺るぎなき男手前や白菖蒲　　寺師　あやせ
遠くきこゆる草笛の音　　古川　柴子
城跡の大学完成間近にて　　鈴木　豊二
地図を頼りに探す銭湯　　北川　稔
小面のかすかに笑むか十三夜　　あやせ
サラリーマンは愛の羽根つけ　　豊二
都会にも群れをなしたる秋茜　　稔
天気予報の当る当らぬ　　柴子
旅支度内緒のままに続けをり　　あやせ
あの人の名を腿に入れ墨　　豊二
騙し絵とからくり仕掛け愛の巣に　　柴子
揃ひの頭巾六地蔵佇つ　　あやせ
木枯しをまとひしままに戻りくる　　松田　俊夫
喇叭を吹きて路地に豆腐屋　　豊二
正夢ぞ孫はプリマの晴れ舞台　　長濱　藤樹
いと面白き江戸の世話物　　あやせ
花の宿三笠山より月仰ぐ　　俊夫
千石船は魚島を過ぎエトランゼ街角に立つ弥生尽　　豊二
エスプレッソをぐつと飲み干し　　藤樹
長押には祖父の勲記の額並び　　稔
ひとり娘は自由奔放　　あやせ
唇の熱き思ひ出アマリリス　　藤樹
バーのテラスで眼と眼とが合ひ　　豊二
別々の映画に酔へる椅子ふたつ　　俊夫
モンローあれば八十八歳　　藤樹
この川は帰らざる河洋々と　　あやせ
擬態の魚どこに潜むか　　俊夫
月の窓漸く成れる大論文　　柴子
錦のもみじ影と散りゆく　　豊二
碁仇を待つ角樽の新走り　　あやせ
商標にある金ピカの文字　　稔
うれしきは義歯がぴつたり心地よく　　俊夫
初午詣母はかかさず　　あやせ
別れゆく友に名残りの花吹雪　　藤樹
春の帽子の並ぶ名苑　　稔
　　柴子

平成二十七年五月二十五日首
平成二十七年七月二十九日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

短歌行　『甚平に』

渡辺　柚捌

甚平に心の枠を取り外し　　柏　元章
蝉の蛻（もぬけ）のすがる枝折戸　　臼杵游児
チエンバロのミニコンサートはじまりて　　種川とみ子
彩もゆたかに飾るちぎり絵　　古川柴子
遠（ウ）つ嶺の岩肌確と映す月　　渡辺　柚
ひとりで洗ふ故郷の墓　　元章
角樽の新酒土産に握手する　　游児
密会の朝爪を染め上げ　　とみ子
もつれ合ふ糸はほどけぬままに果て　　柴子
嘆きの壁に祈る再建　　柚
Eメール開けば友の花便り　　元章
春眠破る鯉の水音　　游児
名刹古刹めぐる野遊び　　元章
谷地山田へのへのもへじ種案山子（ナオ）　　とみ子
座敷童は爺と戯れ　　柴子
ささやかな移動図書館公園に　　柚
勉強はじむ「ダンテ神曲」―　　原田安恵
気がつけば彼の横顔盗み見し　　元章
不倫のスリルそつと娯しむ　　游児
凍月に後から追ひ来るものは何　　とみ子
スキー場にはパソコンと猫　　柴子
記者席（ナウ）に世界の言葉飛び交ひて　　柚
グルメも唸る日本の食　　元章
花守の夢に応へて花万朶　　安恵
名刹古刹めぐる野遊び　　游児

平成二十七年六月　二十日首
平成二十七年七月二十九日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

二十韻　『異人館』

吉田酔山捌

蔦の葉や神戸山手の異人館　小松知二
　坂のくぼみにはまる蜂の子　渡部葉月
後の月迷ひためらひふつきれて　矢倉澄子
短編小説自費で出版　吉田酔山
外国（とつくに）の戦火の渦に巻き込まれ　葉月
　献身的な医師団の華　知二
年の差を越えて寄り添ふ仲となり　澄子
　フェイスブックでハート射止めて　酔山
十分で茄子のポタージュ出来上がる　葉月
　森の奥から郭公の声　知二

卓（ナオ）囲む脇に徳利のごろごろと　酔山
　黒髪抱けばほのかなる闇　澄子
裏木戸を恋しき人のそつと閉め　知二
　御岳の峰僅（はつ）かに凍て月　葉月
ひたすらな祈り静かに冬安居　澄子
　フリー切符でひとり旅する　酔山
デボン紀（ナウ）のアンモナイトの螺旋美し　知二
　本棚の隅沈黙の春　葉月
爛漫の花に届けと祝ひ唄　酔山
　鰊の群へやん衆の船　澄子

平成二十七年　九月二十九日首
平成二十七年十一月　三十日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

《東京・カルテット》

歌仙『江ノ電や』

永田吉文捌

江ノ電や二日の海は翡翠色　永田吉文
　初風に乗る大奴凧　佐々木有子
おもたせの切山椒を取り分けて　市橋章子
　あつぷうぷうに笑ふ乳飲児　寺嶋倫子
月高し建設中の美容院　〃　有子
　深呼吸する空気爽やか　〃　吉文
角(ウ)伐の勢子鉢巻をきりと締め　有子
　シャッターチャンス狙ひすまして　章子
ほめられてさらに奇麗になる私　吉文
　人妻だとは告げられぬまま　倫子
赤道を越えたと船のアナウンス　有子
　飛行機雲のなめ一文字　章子
蚊遣り火を焚きて愛でたる宵の月　吉文
　昔の味ねラムネしゆわしゆわ　倫子
祈る声ステンドグラス開きをらむ　有子
　鑑定頼むお宝の壺　吉文
秀吉の大望の如花咲きぬ　倫子
　猫あくびするのどらかな縁　有子
耕(ナオ)せばひと鍬ごとに遠ざかり　吉文
　ロボット相手に酒もダンスも　倫子
メモ書きは楷書でお願ひいたします　章子
　耀の符丁に新入りも慣れ　有子
蹴球の捻挫に貼つた温湿布　倫子
　着飾つてゆくオペラ鑑賞　章子
李香蘭に負けぬ数奇を祖母生きて　有子
　心うつさず貫きし恋　倫子
ちよつとした愛の仕草にときめきぬ　有子
　思ひ出の函固く鍵かけ　章子
連山の月に語れる琵琶法師　倫子
　もみぢ散り敷く東屋の庭　吉文
大(ナウ)好きなひしこ茶漬けに舌つづみ　章子
　健康管理定期検診　吉文
誘ひ合ひ出湯の町でクラス会　章子
　折畳傘軽いのがいい　有子
植林の夢が叶ひて花の山　吉文
　枝から枝に頬白の声　倫子

平成二十七年一月十六日満尾
（於・新宿区戸塚地域センター）

半歌仙　『赤富士』

吉田酔山捌

赤富士や金剛杖と一歩づつ　吉田酔山
　水無月尽に煙る湧水　高山鄭和
ママ友の珈琲談義にぎやかに　近藤礼子
　人気小説廻し読みする　杉浦芳子
弓張を見上げて終へる畑仕事　新井節子
　秋の蛙に風の優しく　芳
ウ登校の子ら列をなしそぞろ寒　節
　教生のシャツ胸のはちきれ　和
打ち上げのカラオケデュエット熱々で　礼
　妻の立場も忘れ果てたる　子
茫々と太平洋にうねる波　同
　異国の機影映すレーダー　節
除夜の鐘今年も撞くと喜寿の人　義
　寄席を出づれば月の冴え冴え　常
お土産の折詰少し持ち重り　義
　犬の鳴きたる春障子越し　子
擦傷と優勝旗あり花吹雪　芳
大の字に寝る若芝の庭　山

歌仙『桜咲けよ』

桜咲けよ退助の像凛凛と　　山澤カツ子
　朧の月の懸る小天守　　雨道
久方に雉笛そっと吹いてみて　　倉澤以世子
　川面きらきら頬なでる風　　渋滞
山間の分校の子等むつまじく　　遠藤久美
　鉄棒くるり回る夏空　　杉山明子
ゥこそ泥が賽銭狙う暑き夜　　佐藤治子
　酌み交わしつつ二人して酔い　　雨道
それぞれに華燭の典を夢に見て　　廃炉を決めた後がなかなか
　新幹線の通る北陸　　就活は少しリスクをともないて
能衣装ネットに出てるオークション　　アイスコーヒー甘さひかえめ
　癌告知され余命半年　　草刈りのすみし庭先広々と
満月を背に古郷の母訪ね　　洗濯物が風にゆらゆら
　パッチワークは秋の濃淡　　高きこと九輪の上の三日の月
藍染めの甕ぶくぶくとそぞろ寒　　あれは何かと聞きし虫の音
　旅の土産を選ぶ店先　　亡母(ナウはは)偲びめくるアルバム身にしみて
師を迎え句友集いて花の宴　　じゃれつく猫に心癒され
　両の手ひろげ享ける淡雪　　おだやかな海に広がる水平線
　　雲の彼方に飛機の消え行き
　　はらはらと肩に舞いくる花の屑
　　明るく語り暖かきかな

付廻り

大内善一　井上雨道　守口薫　渡邊常子　戒能多喜　村上孝枝　佐渡谷ふみ子　松永由紀　岡村和可　永見徳代　阿部裕子　佐藤ゑつ子　廣渡雪路　武智紀美　渡辺俊子　土師満智子　大江加代子　濱崎琴代

平成二十七年三月十九日首尾
（於・高知龍馬空港よりバス中）

歌仙『走馬灯』

走馬灯祖母の思い出淡く濃く　木村聖子捌

涼しき風の通る角部屋　遠藤久美

連衆の三々五々と集い来て　駒村多賀子

コーヒー紅茶抹茶お煎茶　倉澤以世子

露天の湯岩を枕に今日の月　中山英子

しじま破りて木の実降る音　多

伊勢参り式年の宮秋の色　英

受付嬢は美人ばかりで　成毛偕子

年がいもなく胸内の高鳴りて　桑原百合子

情事の果ては職を失い　久

厚着してまだ厚着して風邪をひき　偕

月をかかげて眠る山々　山澤カツ子

高齢者増え続けたる過疎の村　躰中ぬい子

犬猫ばかり元気はつらつつ　細田恵津子

防災の無線を聞きて頭たれ　恵

パパは休日朝寝するぞと　ぬ

久に訪う故郷の花も咲きそめて　以

水は温みて土手沿いの道　子

このところ注目あびるリケ女達　カ

晴れのち曇りそしてドシャ降り　恵

金持ちとわかり器量は眼をつむる　カ

想定外のこともいろいろ　久

旅終えてビール凍りし冷蔵庫　ぬ

すっかり伸びた庭の茄子苗　多

両親を次々送る友悲し　聖

ヒールの踵ぐきり曲りて　多

年寄りがサプリメントで若返り　偕

久方ぶりの童謡一節　明

月明り五重塔の影黒く　以

さわさわ揺れる穂芒の波　久

文化祭アンパンマンも競い合い　以

キッチンカーに並ぶ弁当　カ

人若く柱時計は古物にて　多

小学唱歌歌いあたたか　明

花大樹夢も大きく膨らみつ　ぬ

ふわりふわりと春愁の雲　多

平成二十七年七月二十五日首尾

（於・駒村宅）

歌仙『幾度も』

幾度も眼鏡拭いぬ卯月雨　磯　直道捌

しばしをカフェにアイスコーヒー　磯　直道

ものまねの上手な鸚鵡影となり　永見徳代

かすかに揺るる公園の樹々　小川廣男

玉兎ある故里の空なつかしき　渡辺ハツヱ

運動会で子等の歓声　小谷伸子

爽(ウ)やかに太平洋のきらめきて　新相節子

今も更地のままの被災地　ハ

適齢期過ぎた娘に焦る親　〃

おひとりさまの生き方もあり　節

コンビニで酒と髭剃り煙草買い　ハ

枯葉ころがる月の街道　廣

鍋囲み家族団欒笑顔寄せ　ハ

単身赴任任期満了　節

ランドセル背負いて共に一年生　ハ

ひねもすやまぬ高き嘶り　石川としじ

参詣の人で賑わう花の宮　ハ

雲も喜ぶ山の幸あり　〃

自然食(ナオ)ブームは去りて介護食　吉田武憲

嫁の話題の愚痴も出つくし　廣

若造りショウウインドに映しみて　と

謎を含みてモナリザの笑み　伸

こつこつと模写複製に汗をかき　服部早苗

蜘蛛の巣のある部屋の片隅　伸

高額なペットホテルの宿泊費　ハ

ぽっくり寺へ通うこのごろ　早

手を振って身をのりだして選挙カー　〃

蒸し返したる増税のこと　〃

山の湯にお猿浸かりし十三夜　伸

あたりに匂う松茸の籠　武

リフォーム(ナウ)の後の住まいの冬支度　早

シャッター通り行き来少なき　〃

ジョギングのコース一周息切らし　ハ

垣根越しなる会話あたたか　早

花のある大川端の船着場　伸

遺跡めぐれば春の虹たつ　と

舟木美代子

平成二十七年八月十六日首尾
（於・川口総合文化センター・リリア）

歌仙『忙中の』

忙中の虚しき閑や卯月雨　磯　直道捌
　捨てかねている徽臭き古書　永見徳代
出荷前駿馬全身磨かれし　大内善一
　きらきら光る海も岬も　馬場由紀子
父母の笑顔も交じる十六夜　安藤君子
　竜胆活けて一日安らぎ　君
御会式の団扇太鼓のよく響き　永雄瑞子
　おかず沢山仕出し弁当　瑞
閣僚の候補に女性議員の名　善
　お化粧直し丹念にして　君
空港で落ち合い二人見つめ合い　由
　残る靴跡京の初雪　〃
探梅の空に薄月かかりいし　佐藤澄江
　和気藹々と旅行うれしく　君
子供等は歌を唄ってスキップで　佐藤治子
　川風にのり迷う風船　君
舞う花は天女の裳裾織りなして　徳
　ほくほく匂う晩春の土　君
帰ろかな故里の農起こさんと　徳
　積極的な妻に驚き　瑞
友人の別れ話に大乗り気　澄
　我が家に来た愛犬のポチ　徳
リハビリに漸く慣れて初鰹　澄
　甘藷焼酎はうすめ湯割りで　善
流暢な英語海外売り込みに　徳
　傘寿なれども気力満々　善
お風呂屋に昔なじみの顔そろい　由
　喜怒哀楽をみんな知ってる　治
輝ける玉兎真上の裏通り　治
　晶子のような秋袷着し　瑞
ヴィオロンの溜息に似て降る木の実　徳
　異国で出会うおごそかなミサ　〃
山々の稜線はるか浮かび出て　瑞
　時を忘れて籠に摘草　治
ほつほつと花の便りの届き初め　瑞
　ことなき世にと亀の鳴くらん　徳
〃

平成二十七年八月十六日首尾
（於・川口総合文化センター・リリア）

歌仙『筍梅雨』

古都にあれば筍梅雨のゆゆしけれ　磯　直道捌
藁ぶき屋根に棚の藤房　磯　直道
飼猫とじゃれ合う刻の楽しくて　田村昌江
リズムにあわせ踊るユルキャラ　稲川久見子
まんまるの月が山の端昇るらん　新相節子
次々帰る鯊釣りの舟　石川としじ
ややウ寒に肩を寄せあう道祖神　直昌
悔のあれこれ酒でまぎらす　久節
妻の座を仕事で逃がす管理職　節と
女心は謎のまたなぞ　直と
すき焼きの味は近頃濃い目なる　昌直
ビルの谷間に細い寒月　久昌
白鵬は今日もりりしく連覇して　節と
朝一番にカレンダー見し　直と
工場の跡地の誘致ままならぬ　昌久
まだまだ足りぬ保育所の数　久節
童謡の流れを耳に花を浴び　節と
池のほとりに淡き陽炎　久昌
お隣のぶらんこよりも高く漕ぎ　節と
分けあいながら食べる弁当　直と
もうすでに彼の好みはみな承知　昌久
小さき墓に線香の煙(けむ)　久節
鳴神に木の葉ひら揺れやまず　節と
風鈴の音鳴り続けたる　と直
下町を地図見て歩く歴女達　直と
名刹の位置どうもわからで　と昌
このあたり武家屋敷跡団地群　昌久
夕日真赤に影は黒々　久節
終戦後何を語るや盆の月　節と
倒れた案山子空をにらみつ　と直
被災(ナウ)地の復興遅く秋逝かす　直昌
新大臣は深く挨拶　昌久
二代目の店は手作り客長蛇　久節
海はのどけく寄するさざ波　節と
たたずめば全身に浴ぶ花明り　と昌
春の日光る十字架の塔　昌久

平成二十七年十二月一日首尾

（於・川口西公民館）

歌仙『新天地』

新天地求め飛びけり小草の実　渡邉常子捌

川にくっきり浮きし名月　濱崎琴代

行く秋の詩をそれぞれ披露して　松田千佐代

揺られて帰るバスも満員　大江加代子

焙煎の高き香りの珈琲に　琴

一声落とす郭公の声　篠原正明

千ウ年の歴史を背負い鉾の列　渡邉常子

暴れ奴に魂を抜かれる　常

密会の刹那刹那に身をば灼き　琴

腰の痛みに通院の日々　千

楽しみの旅とりやめた口惜しさに　正

美空ひばりのＣＤを買い　加

雪女郎月をとろりと転ばせて　琴

いつか峠を越えし厳寒　常

剣道の礼の教えを叩き込み　琴

老猫じっとみじろぎもせず　加

振り返り枝垂れの花のグラデーション　千

列を乱して遠足の子等　正

沖ナオ合いを色濃く染めて潮干潟　加

故郷偲ぶ貝の味噌汁　正

韓国を巡り遺産の仏国寺　琴

あの日逢いたる女に魅せられ　千

犇と抱く二人の絆鴛鴦の羽根　正

義士の誠に舞いし風花　琴

納得のいかぬ安保が決議さる　常

父が戦死の土地を踏みつつ　千

山里にソーラ・パネルの農家増え　正

煙ただよう黄昏の苑　加

後の月久に訪いくる友と酌み　琴

垣根めざして跳びし蟋蟀　琴

爽ソウ籟にノーベル賞のニュートリノ　正

パッチワークの古布の彩り　常

悠然と貫禄見せる錦鯉　琴

長閑な午後に集うはらから　千

爛漫の花をそびらに除幕式　常

夢ふくらませ上がる風船　千

平成二十七年　九月二十四日首
平成二十七年十一月二十六日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

歌仙『百日紅』

百日紅咲き継ぐ日日の空蒼し　　安
　暑中見舞を書きし広縁　　孝
チャイム鳴り小包一つ届けられ　　俊
　紐にじゃれつく飼猫の玉　　安
小さき手で月見団子を作る孫　　ゑ
　川面を渡る風は爽やか　　〃
神(ヴ)宿る初雪の富士尋ね来て　　孝
　行き交う人もスマホ片手に　　安
吉と出る恋占に大はしゃぎ　　ゑ
　婚約指輪ダイヤ大粒　　孝
地固めの雨はいつしか止みており　　安
　亡き父偲ぶ寒の三ヶ月　　孝
熱燗をぐいと呷りて浪曲を　　俊
　お話相手知能ロボット　　孝
痛み出す交通事故の後遺症　　安
　久方ぶりに訪いし古里　　ゑ
なまこ壁咲き満つ花の影ゆらぎ　　安
　そぞろ歩きの会釈のどけし　　ゑ
詐偽次々と新手くり出し　　孝
どう見てもやっぱり似てるエンブレム　　俊
　雲の形は自由自在に　　安
譲られた仕立直しの麻上布　　ゑ
　共に白髪と誓う緑陰　　孝
貫抜きし夫婦別姓キャリア妻　　ゑ
　マイナンバーの送付急がれ　　〃
目に見えぬ不安いろいろ天と地に　　孝
　汐の香りのほのと漂い　　安
唐遥か阿倍仲麻呂月仰ぎ　　孝
　秋(ナウ)の名残を惜しむ雁金　　ゑ
美術展大賞となる誇らしさ　　安
　新感覚の若き後継　　孝
ホークスの勝利パレード盛り上り　　俊
　画面はみ出す笑顔いっぱい　　孝
太鼓橋静かにくぐる花筏　　安
　耳を澄ませば亀の鳴く声　　ゑ

（於・北九州市立貴船市民センター）
平成二十七年八月二十七日首
平成二十七年十二月二十四日尾

山口安子
佐藤ゑつ子
村上孝枝
渡辺俊夫

衆議判

歌仙『渡り鳥』

おのずから途定まりぬ渡り鳥　薫
　雲の間に間に中天の月　雪
夜学生いそいそ家へ帰り来て　〃
　詰めの一手を思いつきたる　薫
こだわりていれし珈琲良き香り　満
　千両の実の紅く灯ともし　薫
寒垢離（ウ）の行者読経の声ひびき　雪
　愛憎強く消せぬ情念　薫
あの人を寝ても覚めても目に浮かべ　雅
　妻には隠す胸のときめき　雪
へそくりで勝負かけたる株投資　薫
　ダム湖の水面立ちし細波　雪
蜘蛛の囲に月はかかりて風に揺れ　薫
　床にはやばや鬼の霍乱　雅
夢に見た幼きころを思い出し　雪
　ドリブルシュート未だ健在　薫
段々の丘に咲きつぐ花万朶　雅
嘶き高く跳ねし馬の仔　〃
廣渡雪路捌

廣渡雪路
土師満智子
守口薫
城戸雅康

天神忌学業なるを神頼み（ナオ）　薫
　異常気象か今日もまた雨　雪
デモ隊の声どよめきし永田町　〃
　何がでるやら振りし賽子　薫
この恋にかけて三十路の海水着　満
　新婚旅行南風のハワイへ　薫
突然に火山列島大噴火　雅
　手抜きばれたるビルの基礎杭　薫
なけなしの財布はたいて外れくじ　雪
　無法松の碑ひっそりとたち　雅
月今宵薩摩琵琶にて弾き語り　薫
　穂芒なびく朽ちし草庵　雪
定年（ナウ）をひかえ酌みたる新走　薫
　博物館へ友と連れ立ち　雅
片目越し変化楽しむ万華鏡　雪
　大ぶり小ぶり皿の草餅　薫
散る花を野点の席の碗にうけ　雅
　安らかなりし長閑なるとき　薫

平成二十七年十一月二十六日首
平成二十七年十二月二十四日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

執筆

歌仙『風呂吹を』

風呂吹をたべていつもの夫婦なり　千
　スケート靴におそろひの紐　敦
百貨店目当の階へまつすぐに　勇
　アンドロイドと交はす挨拶　千
横笛の音色やさしく月見船　敦
　ぶだう酒醸す村は静まり　千
初猟（ウ）の犬裏山に飛び出して　真
　都会育ちの嫁はもたつく　千
今もつて不倫相手は煮え切らず　敦
　片道切符パリへ誘ひ　勇
テロ多し生きるも死ぬも運次第　千
　礼拝堂に鍵は掛けない　真
夏月の雲を脱いでは隠れては　勇
　朝顔市は夜も賑ふ　敦
巡回の警察官に怪しまれ　千
　背中に負へるヴァイオリンケース　真
花の笑み囲みて市民撮影会　勇
　丘のホテルにそそぐ春陽　敦
白蝶（ナオ）はテニスコートを超えてゆき　千
　ペットボトルの水をひとくち　敦
代議士の選挙区廻り抜かりなく　勇
　祠のもとにおつる楪　千
近頃は老々介護増すばかり　敦
　目玉おやぢは腕組みをして　勇
告白にビーチの暑さ苦にならず　千
　影を一つにパラソルの中　敦
風圧を起して列車通り過ぎ　真
　仮設ベッドで受ける点滴　千
占い師月に翳したカード切り　勇
　焼米噛めば故郷近づく　敦
校庭（ウ）に運動会の万国旗　千
　タイムカプセル開けてつらつら　真
騒がしい夜間工事に眠られず　千
　車の下に潜む三毛猫　勇
ひたすらに散るを急ぎて飛花落花　真
　わたくし雨もどこかあたたか　千

立花千代満捌

立花千代満　千代
平木勇次　勇
名本敦子　敦
門田真由美　真

執筆

平成二十七年九月五日首
平成二十七年十二月二十六日尾
（於・松山市民会館）

歌仙『今朝の春』

ネガティブな性捨て去りぬ今朝の春　岡本　眸捌
　若水汲みて願ふ平穏　岡本　眸
読み聞かす童話に孫は頷きて　岡本健三
　チョコとクッキー形さまざま　眸
石庭を前景にして昇る月　健
　金木�犀の香り漂ふ　眸
新(ウ)走りブレーキ効かず酔つ払ひ　健
　若旦那らし粋な着流し　眸
縁談をいつも逃がせるはにかみ屋　健
　結果上々同期婚活　〃
しまなみのサイクリングは人気呼び　眸
　転んでも立つ達磨みやげに　健
民主党岡田代表腕如何　健
　とぐろを巻きて蛇は動かぬ　眸
テロップの流るる言葉簡略化　眸
　「おもてなし」てふ心絶ゆまじ　健
熱帯夜月は明々寝つかれず　健
　好きで揃へし美術全集　眸
杜に咲く花は満開夢誘ふ　眸
　そよ風に乗り舞へる白蝶(ナオ)メーデーに掲ぐプラカード　眸
　中東平和いつの事やら　健
幼子の罪なき笑顔うつくしく　眸
　抱きしめたいと思う柔肌　健
睦言に枕屏風は耳澄ます　眸
　そろりそろりと消えし雪鬼　健
高嶺を切りて伸びゆく飛行雲　眸
　故郷遠くしのぶ朋友　健
外出時ドナーカードはポケットに　眸
　付いて来るのは迷ひ犬かも　健
望月は阿吽の像を斜に照らし　眸
　芭蕉の影が池に蠢(ナウ)めく　〃
つれづれに古典ひもとく暮の秋　健
　香りほど良き紅茶ブランド　眸
テロップの流るる言葉簡略化　眸
　「おもてなし」てふ心絶ゆまじ　健
子規堂を訪へば舞ひ舞ふ花吹雪　健
　溌溂として巡る弥生野　執筆

平成二十七年一月二十五日首尾（於・岡本宅）

歌仙『八朔の』

八朔の水に浸して鍬と鎌　　堀元みえ
　月に供へし芋は丸々　　菅本達雄
さはやかに連弾の音つづきゐて　　名本敦子
　詩作に耽る別荘の庭　　中田くに子
愛用の眼鏡の曇り拭ひつつ　　菅本つね
　ストーブリーグかくし球あり　　寺岡美千穂
雪鬼はあちらこちらの窓覗き　　岡本眸
　あるじ顔して寝そべるは猫　　みえ
筒井筒けんか相手も妙齢に　　達雄
　レモンの味の初めてのキス　　敦子
講習会人工呼吸とAED　　美千穂
　空蝉あまた椎の大木　　つね
朝月夜博多山笠駆け行きて　　くに子
　「アー良か良か」は爺の口癖　　眸
ほろ酔で旅の景色は上の空　　達雄
　いつの間にやら癒えし腰痛　　みえ
花衣明日にも仕立てあがるとか　　敦子
　野点の席に添へる苧環（ナヲ）　　美千穂
山裾を耕しの影見え隠れ　　くに子
　風の随にちぎれ雲飛ぶ　　つね
人間も絶滅危惧種かも知れず　　みえ
　番外札所道は閑散　　達雄
自治体の支援に就活婚活も　　眸
　逢瀬一と時蚊遣火の消え　　くに子
汗滲むエロスの神の誘ひに　　つね
　鴉嘴研ぐ籬垣の上　　みえ
漱石の「こころ」静かなブームなる　　達雄
　民に優しき政策を待つ　　敦子
戦乱の国にも月はへだてなく　　美千穂
　甘くなれよと吊す干柿　　眸
赤（ナウ）い羽根孫の帽子に挿してやり　　つね
　訛懐かし再会の友　　達雄
金沢へ新幹線の伸びゆきて　　くに子
　雨が上がればビルは人吐く　　敦子
満開の花に見果てぬ夢描き　　眸
　若鮎釣りの準備万全　　執筆

平成二十六年十月二十一日首
平成二十七年一月　二十日尾

（於・庵中庵）

半歌仙　『独り居』

中田くに子捌

独り居は遠流のここち風知草　名本　敦子
昼の蛍のとまる水の辺　浜屋　敏幸
影踏みに興じる子らの嬉々として　中田くに子
佇むは人気役者の楽屋裏　寺岡　美千穂
待受け画面タルトタタンに　浜屋　真
寒月白く町は静まり
雪吊りは加賀の栄華のかけらとも　くに子
君のおもかげ今も忘れず　敏幸
うるう秒間髪入れず記念キス　敦子
どうなるのかな五輪会場　美千穂
枝豆を肴に先生つくねんと　真
秋の夜長は旅のビデオを　くに子
賢治忌の猫の姿の消えて月　敏幸
老いにも負けずミニスカートで　敦子
朝毎に計る体重・体脂肪　美千穂
春風に乗り届く歌声　真
久々に一族揃ふ花の宴　くに子
よもの山脈霞がくれに　敏幸
執筆

平成二十七年六月十六日首
平成二十七年七月三十一日尾（文音）

歌仙　『疎水の響き』

薫風や疎水の響き溶けてをり　出来千苑
　彩なす緑畳なはる山　もりともこ
園児らに朝の挨拶もらひゐて　齋藤桂
　駆け込んでゆく二重縄跳び　井尻荷葉
天心の満月池に映えばえと　及川つとむ
　えんま蟋蟀かたはらに鳴く　山本紫苑
ご馳走も新酒も揃ふ客の膳　石井順子
　私の妻を紹介します　〃
えせ胸につられつられてゴールイン　紫苑
　保険契約五千万ほど　荷葉
グラフィックアートに込めたあすの夢　〃
　郷の炬燵はなんとあたたか　桂
野兎の足跡続く月明り　荷葉
　お百度詣り近く結願　紫苑
ドローンが箱根湯本を旋回す　ともこ
　家族旅行はちよつとお預け　〃
花吹雪浴びて快癒の試歩の杖　荷葉
　巣立鳥にも心和みて　桂
春雨は谷に平野に町に降り　荷葉
　吸血鬼さへ目を覚ます頃　〃
リストラは四十五歳容赦なく　順子
　日中韓の歴史観とは　つとむ
大甕に金魚運んだ帰り道　荷葉
　旅の土産は麦藁帽子　紫苑
古女房憎し可愛いの寝言いふ　広瀬松石
　ワルツにのりて久のダンスを　桂
繰り返す青いタイルのアラベスク　荷葉
　誇り高きは王の末裔　千苑
十六夜のこころは曲げず吾行かむ　松石
　早や冬支度海に向く村　桂
山法師丸き実をつけ庭の方　紫苑
　ワッフル焼いてジャムに蜂蜜　荷葉
ハーモニカ雨情の詩を誰か吹く　桂
　多宝塔へは長い石段　〃
車窓から見渡すかぎり花万朶　紫苑
　あちらこちらに野遊びの人　桂

平成二十七年五月十六日首
平成二十七年六月二十日尾

歌仙『巣作りか』

巣作りか燕出入りの激しかり　井原弦捌
窓から匂う木の芽田楽　品部三酔
子等ふたり就職進学家離れ　木村禮子
満員電車時間正確　冬日庵訥平
舟のゆく大河に揺るる望の月　岡本利英
草むらに鳴くえんまこおろぎ　三原寿典
次々に並んで募金赤い羽根　井原弦
市議候補者は夫唱婦随で　米崎和美
手鍋提げ綴蓋探す裏通り　利英
借金取りに追われ追われて　訥平
ドローンがこんな所に着陸し　利英
葵祭の珍しく晴　寿典
月涼しほっとひと息旅装とく　禮子
ぐい呑みで飲む地酒まろやか　訥平
明日は雨自家菜園でものぞこうか　利英
たくましき腕たくましき脚　弦
お遍路の後ろ姿に花吹雪　三酔
遠く近くに茶摘唄聞く　寿典
ゆるやかに結び直して春ショール　利英
大きポン菓子かぶりついたる　訥平
天井の節穴八龍の眼にも似て　禮子
思い出し笑い警策を受く　訥平
先日のテレビドラマのワンシーン　寿典
知床連山初冠雪し　訥平
尾白鷲獲物めがけて急降下　弦
釣った魚に餌はやらない　利英
浮気して二号三号金掛かり　寿典
爪尖らせてマニキュアは赤　利英
墨東の荷風散人照らす月　訥平
畳の荒れも秋寂びている　利英
温泉の療養の身に木の実落つ　禮子
座敷童は隅にひっそり　〃
ガキ大将ビー玉遊び無我夢中　寿典
おたまじゃくしの泳ぐ田の水　利英
花の宴三味爪弾いて蘭蝶を　禮子
盆地を囲む山は霞みて　執筆

平成二十七年五月十六日首
平成二十七年六月二十日尾（文音）

歌仙『柿若葉』

長坂節子捌

エンジンを切りししじまや柿若葉　矢崎　藍
　むぎわら帽子脱いで一服　繁原敏女
鉛筆と消しゴムならぶキッチンに　間瀬芙美
　郵便受けはちらしばっかり　西田一枝
村はずれ川ゆるやかに月上る　板倉合
　木槿の枝に吊るす提灯　伊藤良重
東大門雑踏ぬける勝鳥　藍
　ラーメン好きの君は起業家　合
おしゃべりをやめてキスするハイヒール　芙
　クリックひとつ恋の消失　藍
ねこ道をくぐって通る風涼し　芙
　ジハード叫ぶ赤い夏月　枝
水晶を覗けば未来茫々と　枝
　やっとほどいた毛糸のセーター　節
キャラ弁当大中小と作る母　節
　パンチの利いた辛子めんたい　良
廃校に集い同期の花の宴　芙
　城下に幾年団扇張る店　枝
工具箱整理する手の暮れおそく　藍
　プラスマイナスゼロの家計簿　重
町村は紆余曲折で合併す　芙
　届かなかった父の小包み　重
山盛りに口を持ってくコップ酒　合
　箱根八里はきょうも雪暗れ　藍
咳ひとつ抱かれたいというサイン　芙
　乱れた髪をかきあげる指　藍
蔵のなか古地図の文字の薄れゆく　芙
　インクジェットの青が足りない　枝
ネパールの崩れし遺跡照らす月　重
　高黍豊かに実る集落　枝
俵編み小学生が引き継いで　重
　ナノの単位のカーボンファイバー　枝
ノーベル賞受ける予感の研究者　節
　三宝柑を飾る神棚　芙
ひらひらと岬の句碑に花の舞う　合
　啄木忌とて砂とたわむれ　重

平成二十七年五月二十六日首尾
（於・豊田市福祉センター）

歌仙『年逝く』

雲ひとつ年逝くことを知らすなり　間瀬芙美捌
　干潟に下りる鍋鶴の群　問瀬芙美
肩車揺るる子の手のしばれゐて　徳永あきこ
　床屋のイスでちよつとウトウト　由川慶子
月待てば隣の犬が遠吠えし　あ
　今日も明日も松茸ご飯　慶
紅葉（ウ）のもてなし受くる秋山郷　あ
　かつて落武者隠れ住む洞　板倉合
GPS彼の居場所を追跡す　慶
　叶はぬゆえになほ燃ゆる恋　あ
乱れうつカスタネットの音流れ　慶
　もくの火仄と真夜の片端　芙
この星の裏側照らす夏の月　芙
　鵜舟に乗する母の亡骸　慶
生まれつき泣き虫なりし次男坊　慶
　タクト一本いつも離さぬ　女
石段を押し上げて咲く花大樹　繁原敏女
　草の陰より子猫現はる　慶
春（ナオ）うらら大阪にまた維新あり　芙
　酒も呑まぬに酔ひて候　慶
観覧車ぐるり回りて七百円　芙
　再婚相手又同じひと　慶
ドタバタの牧場の朝に抱きあふ　合
　ラグビーボール胸にがつしり　芙
内科医に執行猶予受くる咳　芙
　いつも夢みるワイキキの浜　慶
海亀の産卵場所に印つけ　〃
　婆と爺とで村をおこしぬ　芙
震災の語りべ月を仰ぎをり　合
　ビニール紐で吊るす干し柿　〃
ハロウィン（ナウ）の菓子袋もつ吸血鬼　芙
　着信音はパパの督促　合
大辞典中に探せぬ文字のあり　芙
　薄墨で書く般若心経　慶
花霞終の栖を探す旅　合
　弥生の山に風のやさしき　慶

執筆

平成二十七年十二月十五日首尾
（於・豊田市福祉センター46会議室）

歌仙『一陽来復』

深津明子捌

一陽来復山の鬼らも笑いけり　深津　明子
　春遠からじ集う客人　石川　葵
抱き上げる嬰は未来の風を見て　長坂節子
　知育玩具の丸と三角　伊藤良重
同じ家連なる団地月昇る　稲垣渥子
　金木犀の香りどこから　〃
秋(ウ)袷母の縫目のこまやかに　節子
　男点前のしなかやな指　葵
年上が好みでやんちゃ甘えん坊　〃
　自撮りで写すキスの瞬間　重子
おそろしきネット社会の拡がって　渥子
　ドローン不時着首相官邸　葵
夏の月三毛猫の目は丸くなる　明子
　皿にでっかい鯰蒲焼　葵
古希過ぎて今も欠かさぬ「あるこう会」　渥子
　数独パズル上のレベルへ　節子
花と舞う羽生結弦は異次元に　重子
　杜の都に溶ける淡雪　葵
遠足の子の歌声の少しずれ(ナオ)　節子
　固茹で卵好きな先生　葵
コーランを諳んずる人慕われて　重子
　黒き瞳で誘う踊り娘　葵
くるくるとふたりで闇に落ちてゆく　明子
　海底深くごろり蛸壺　渥子
乾杯のビールのジョッキ呑み干して　節子
　増税隠す軽減税率　重子
図書館に終活本の在庫あり　渥子
　延命治療拒否をする月　葵
故郷は銀杏紅葉の美しく　節子
　老舗賑わう新蕎麦の頃　明子
離(ナウ)島への汽笛を鳴らす連絡船　渥子
　How are you?と交わす挨拶　重子
傍らの籠の鸚鵡はよく喋る　葵
　ほどほどの値の雛飾り買い　〃
天領の城包み込む花の雲　節子
　遍路の笠の見えつ隠れつ　渥子

平成二十七年十二月十五日首尾
（於・豊田市福祉センター46会議室）

歌仙『枯木立』

大夕日背負いて美しき枯れ木立　節子
　湯気たつおでん地酒取り取り　昌重
婆さまはいつも上座で笑顔して　美鶴
　螺鈿の筥に家宝納める　祥子
和栲の雲を纏いて月の舟　恵二
　学習園にそよぐコスモス　朝二
村芝居子役両手でVサイン　昌重
　氏神の杜いつも賑やか　節子
格好を決めて七半海の青　祥子
　擦れ違いざまハート射抜かれ　美鶴
ひと目惚れ熱きおもいも早や冷めて　信恵
　仏法僧啼く暁の刻　朝二
夏の月うすれてよりの旅支度　昌重
　珈琲の香に気分とぎ澄む　節子
足踏みのミシンたびたび糸の切れ　祥子
　震災支援届くまごころ　美鶴
押し寄せる波のごとくに花の雲　信恵
　馬の調教風光る中　朝二

衆議判

高須節子　中沢昌重　杉美鶴　北濱祥子　大谷信恵　岩本朝二

野遊びの親子どちらも癒されて　節子
　ギター爪弾く懐かしき唄　昌重
超高層あべのハルカス展望所　祥子
　遮光ガラスに映る山並み　美鶴
新着のボジョレーヌーボー飲み比べ　信恵
　趣味が同じで愛のふくらむ　節子
幾星霜辛抱強く偕老に　昌重
　吐息吹きつつ雪女行く　美鶴
冴えわたりマフラー深く顎沈め　信恵
　アニメで辿る銀河鉄道　祥子
真ん円の月どこからも誰からも　美鶴
　林檎見つめてニュートンの知恵　節子
白杖のそっと挿したる赤い羽根　祥子
　京の五条の托鉢に雨　昌重
試しつく鋳物の里の鐘の音　美鶴
　鶯餅のいともやわらか　信恵
散りしきる花毛氈を取り囲み　節子
　流れもゆるき曲水の宴　祥子

平成二十七年十月二十日首
平成二十七年十二月十日尾

二十韻　『一　日　を』

仁村玲流捌

一日をひと日となして白木槿　　田中安芸
　背伸びしてみる爽やかな朝　　松澤龍一
残月の屋根に猫ども会議して　　大久保風子
　散り散りになり遠ざかる影　　仁村玲流
宇宙船冥王星の果ての果　　龍一
　恋文さへもいつか系図に　　安芸
文豪の三角関係どろどろと　　玲流
　噴煙あがるをちこちの山　　風子
ひたすらに青葉若葉の子等の列　　安芸
　お化け屋敷を建てる校庭　　龍一
拝(ナオ)みやに言はれるがまま金を捨て　　風子
　別人になりトップモデルに　　玲流
首すじにアニキと熱き息吐かれ　　龍一
　大原雑魚寝夢に抱き合ふ　　安芸
冴ゆる月信号のなき交叉点　　玲流
　干物味噌漬引き売りの声　　風子
アッカン(ナウ)べすべってころんで膝の傷　　安芸
　出世稲荷に幟寄進を　　風子
八木節は市長の十八番花の宴　　龍一
　四方に漂ふ焼き栄螺の香　　玲流

平成二十七年九月十六日首尾
（於・カルタスホール北浦和）

半歌仙　『水澄めり』

松原　昭捌

鯉はみな細長に見え水澄めり　　松原　昭
　琴をならべて待つ月の客　　福島時子
ほのかなる金木犀の香るらん　　澁谷盛興
　幼稚園児の朝のお散歩　　山中土筆
空箱に貝殻ひとつ残りたる　　榊原十詩興
　夢追ひかける古蚊帳の中　　〃　土時
薄様の俳書の小口夜の秋　　土時興
　デンキブランに映る街の灯　　詩興
喝采を浴びてデュエット恋はじめ　　〃　土時
　昔小町は今や顔役　　土詩
お宝は家に伝はる阿弥陀様　　土時興
　息子十八選挙権持つ　　興時
ぬつと出て輝き増して時雨月　　興詩
　旅立ちの朝指の悴む　　時興
ふりむけば道失へる日が暮れて　　土
　もつれ遊ぶは双子のパンダ　　詩
学舎を埋め尽くして花の雲　　興
　囀り高き望郷の丘　　時

平成二十七年九月十六日　首尾
（於・カルタスホール北浦和）

二十韻　『去年今年』

萩谷準一捌

萩谷準一　安心も安全も無き去年今年
城山九天　凍てし舞台に高僧の筆
山中土筆　覗き込む中学生の声燃えて
鈴木美奈子　舶来カメラ肩にぶらさげ
榊原十詩　割木積む白壁伝い夕月夜
準一　炭火恋しや小町恋しや
九天　衣々の別れの袖に鹿威し
土筆　残り香満ちし方丈の部屋
美奈子　家猫も見放している大欠伸
十詩　中間試験記名忘れて

準一　桑（ナオ）の実のまだ成りきらぬ畑道
九天　月光浴びて冷や酒を酌む
土筆　「はやぶさ」の行方不明の長い旅
美奈子　一途な老いの恋の面白
十詩　経験の在りや無しやの原節子
準一　畳の上の座り癖出る
九天　夢（ナウ）に見るデートリッヒの美しき脚
土筆　太平洋を渡る蝶あり
美奈子　歌声は限りなく展び花の雲
十詩　シーソー乗れば風のうららか

平成二十七年十二月十六日首尾
（於・浦和コミュニティセンター）

歌仙『駒子』

山中　土筆捌

二丁目に駒子来てゐる牡丹雪　土筆
　湯けむりはらふ春の肩掛　十詩　松澤龍一
縁側の子猫の耳のうごめいて　風子　大久保風子
　戸の開けられし藪の廃屋　十詩　山中土筆
休暇果つ宿題未だ望の月　龍一　榊原十詩
　家苞に買う籠の鈴虫　風子
金(ウ)無垢の香炉のつまみすさまじき　土筆
　角をかくして寄り添ってみる　十詩
寝化粧は小指で引きし薄き紅　龍一
　失楽園の夢よ覚めるな　風子
山奥の木霊ポイント新名所　土筆
　倫敦塔を雲ちぎれゆく　十詩
荒神輿月に吠えたる背ナの龍　龍一
　浪速のうなぎ腹をさばいて　風子
誂への仕付けを解く母のそば　土筆
　両手拡げて三尺嬉し　十詩
花片を啄む鳩を追い走る　龍一
物議をかもす憲法記念日　風子
蛍(ナオ)烏賊手作り味噌によくなじみ　土筆
　暖簾外して早仕舞いする　十詩
他人様も自分の名前もど忘れし　風子
　ビルの看板デイ・サービスと　龍一
困の地を這い回る街路灯　敏子
　マント高下駄ニコライの鐘　十詩
お手付きで飛ばす歌留多の相聞歌　龍一
　接吻くらいなら誰だってする　風子
胸の内燃える炎もスマホ発信(うち)　土筆
　彼女を賭けて決闘の瞬(とき)　風子
鉈彫りの秘仏の衣秋の月　十詩
　初猟の宿地震(ない)続きおり　龍一
剥(ナウ)製の牡鹿の頭エアポート　十詩
　ＩＴ苺でワイン発明　土筆
魚市場仕切る投げ師の三代目　龍一
　パパさんソフトいつも補欠で　風子
登り窯鬱金桜の花を待つ　土筆
　尻声長く春昼の鶏　十詩

平成二十七年四月十五日首
平成二十七年五月二十日尾
（於・浦和コミュニティセンター）

歌仙『寒雀』

岡村糸子捌

群れて来てパン屑突く寒雀　岡村　耿
玄関前に葉牡丹の鉢　大村さち
朋友の文学賞の賀の席に　和田ひろ子
金杯に酌む香り良き酒　杉山俊子
愛犬と歩調揃えて月の径　小野里子
水澄む池に起きるさざ波　岡村糸子
秋寂ぶ(ウ)の境内を掃く奉仕団　中村恵風
意気投合の同郷の人　耿
アドレスを交換できて有頂天　ち
真面目な兄の狂い出す恋　ろ
薬物で過去の栄光地に堕ちて　俊
遠くに聞こゆ子等の歌声　里
月涼しおてだま作り古布使い　耿
住み込み番頭蒼朮を焼く　恵
低金利今がチャンスとマイホーム　耿
自由化されて選ぶ電力　糸
駅中の花見弁当飛ぶように　里
渦潮に沸く春の徳島　俊
藍植(ナオ)える姉さ被りで手際良く　ろ
女子力上げて守る伝統　ち
何にでもびっくりぽんと婆は言い　耿
桂文枝の不倫騒動　恵
繙けばひたむきな愛古日記　耿
あたりはせぬか生のオイスター　ち
被災地の跡地問題まとまらず　里
稜線を越えドローンの行く　俊
録画した日本百景団欒で　糸
リビング学習あがる成績　耿
シュトラウス曲の流れる望の月　恵
視線冷まじ社交界デビュー　耿
お凌(ナウ)ぎと新米握りふるまわれ　ち
仕事帰りにジムで筋トレ　里
山手線新型車両出直して　俊
列に並んで宝籤買う　ち
公開の御所庭園に花の舞　里
鐘の音霞む朝の街角　耿

平成二十七年二月一日首
平成二十七年三月十日尾（文音）

歌仙『楽しさや』

楽しさや青田に生るる水の音　スチュワート鞠
　雨を聴きつつ歌の七月　松島正一
街を抜ける千の電車を待ちながら　フィッツサイモンズ西門
　インフォメーション「i（アイ）」の目印　松島アンズ
振り向けば男の貌のある玉兎　眞野泰
　飾り付けにはススキシャンパン　田中愛音
いつか（ウ）あう折もあらばや魂祭　小林清衛
　踊り疲れて肩借りる妹　浅賀丁那
泣くときも作る女優の卵にて　佛渕雀羅
　当てられたのに知らん顔する　正一
期待込め付けたキラキラネームなり　アンズ
　ギリシャの緑身にまとう像　泰
遠来の客を迎えるかき氷　愛音
　アーチの屋根に響く歓声　清衛
産科医の甥弁護士の姪もゐて　丁那
　俄出家の北上に佇ち　雀羅
月影の杯染むる花霞　明子
散歩の犬が蛙怖がる（ナオ）のどらかにルバイヤードを朗誦し　正一
　素足で触れる魔女の絨毯　アンズ
ほらあれがあの光るのがパリの街　愛音
　橋の端よりたそがれてゆく　泰
篠笛と太鼓の節で子をあやす　丁那
　百日過ぎて文月となり　松島依子
風鐸の謎は王家の有明に　雀羅
　石舞台よりゆらり秋蝶　松島渉
ゲタを脱ぎブーツを履いて登る坂　アンズ
　彼は昔の彼ではなくて　渉
虹に濡れアトランタから来た男　泰
　愛と誠と天使と邪鬼と　清衛
海水（ナウ）に浮かぶタンクに夢たくし　雀羅
　ウイスキーにはDFMB（ディーエフエムビー）　愛音
この頃はバロックよりもシューベルト　依子
　午後の川面に糸を垂らして　丁那
落人の山里深く花吹雪　泰
　さへずりの音を聴き分ける耳　清衛
　　執筆

平成二十七年七月五日首尾

（於・松戸市　老虎亭）

KASEN "Happiness is"
Composed at William Blake's Inn, Matsudo, on July 5th, 2015.

Happiness is/ the sounds of water arising/ from the green rice fields	mari
Rain, rain/ ballads of July	shoichi
Across the city/ waiting for a thousand trains -/ a thousand platforms	saimon
The"i"sign/ for Information	ange
Finding in the moon/ the face of a gentleman/and not *le lapin*	yasushi
Pampas grass and/ a champagne bottle for decoration	aine
Though far apart/ we shall surely meet again/at the Bon Festival	seiei
Worn out by dancing/she asks him for his shoulder	teina
She cannot but coquette/even when she weeps ; / a would-be-movie-star	jakura
Feigning absence/ in lieu of response	shoichi
What a bizarre name!/ loaded with the hopes/ of parents	ange
Statue standing in the garb/ of the greeny hues of Greece	yasushi
Shaved ice to welcome/ a visitor/ from far away	aine
Cheers! resounding/ under the archway	seiei
Here they are : / nephew an obstetrician/niece an attorney	teina
Pseudo priest standing/ at Kitakami Highland	jakura
In the moonlight/ the wine glass is tinted/ with the haze of cherry blossoms	akiko
A frog frightened the puppy/ out strolling with his owner	shoichi
Peacefully he recites/The Ruba'iyat /on a spring day	ange
Touching the magic carpet/ with bare feet	aine
Look at the light ! / look at that brilliance /the City of Paris	yasushi
Twilight descends/ from the end of the bridge	teina
Lulling my baby/with the SHINOBUE pipe/ and the beat of a drum	yoriko
A hundred days/ to the month of letters	wataru
The Mysterious wind chimes / of Royalty / the moon still on the dawning sky	jakura
Through the ancient tomb of / ISHIBUTAI, an autumn butterfly	ange
GETA sandals off,/boots on/ to climb the hill	wataru
He's not what he used to be/ the one I knew years ago	yasushi
Wet under the rainbow/ a man/ from Atlanta	seiei
Love and sincerity,/ angel and imp	jakura
They put the last shred of hope / into a barrel / afloat on the sea	aine
Whisky goes with/ Deep Fried Mars Bars	yoriko
I like Schubert/ more than the Baroque/ these days	teina
Dropping an afternoon line / into the face of the stream	yasushi
Mountain hamlet of the defeated / a blizzard / of flower petals	seiei
Good ears/ that recognize the chirps of the birds	editor

歌仙『新豆腐』

品部三酔捌

嵯峨野へと杖曳きゆかん新豆腐　上田真而子
　露しめやかに名店の路地　植木陽子
月中天テレビを消して深酒を　品部三酔
　転ぶ空缶三日四日と　上丹三郎
悪童と呼ばれしことも今昔　秋本美智子
　炬燵の横でじろり黒猫　齋藤桂
行間に謎かけのある寒見舞　陽子
　挨拶以上恋文手前　三郎
お土産に夫婦茶碗を選びおり　桂
　天気予報のまたも外れて　真而子
ひと振りに柿渋匂う宿の傘　美智子
　打ち重なりて深き山並　陽子
青大将するり照らして昇る月　真而子
　汗を拭き拭き通す法案　陽子
大門に阿吽の像はふんばりて　桂
　得意顔して孫はよちよち　三郎
ふり返り心惹かるる花の門　美智子
諸子の影の揺れるせせらぎ　中井登志子
摘み草にあらもこんな時間なの　陽子
　赤字続きのうちの家計簿　真而子
異国人爆買いをして重たそう　久米川徂康
　高層ビルの競い建つ街　桂
世界一何でもいいから取りたいよ　三酔
　天上天下唯我独尊　真而子
円満の秘訣結局ほめ殺し　陽子
　言わせておけよ亭主関白　美智子
雑談にストレス全部発散す　徂康
　長鳴りのする笛吹きケトル　桂
難解書やっと読み了え月沈む　三酔
　夜寒に熱きココアこそ良き　陽子
友の来て冬近き京ぶらぶらと　美智子
　丸竹夷二押御池とて　桂
和服じゃにスマホ片手に足組むか　徂康
　家事はしてないデコネイルなり　藤川ひさ子
花の下いつしか踊る輪の出来て　〃
　句碑に日当たる春昼の寺　三酔

平成二十七年九月十八日首
平成二十七年十月十六日尾（文音）

歌仙『洛艮の雲』

さやけしや洛艮（らくこん）の雲白々と　　北原春屏捌
　鶺鴒の尾の揺るる加茂川　　広瀬松石
月の下今朝の仕事は早出にて　　平良孝子
　縄手を駆ける幼四・五人　　秀嶋登志子
試験まで九九の練習きりもなく　　小林順子
　夜食にうれし鍋焼うどん　　黒田啓子
雪（ウ）もよひ高崎山の猿団子　　登志子
　触れる手と肩離れてついて　　松石
目頭に涙ぽろりと男酒　　春屏
　明日への夢は今日が始まり　　啓子
国会も山川海も大荒れで　　孝子
　聖書に記すノアの方船　　順子
わが道は大和遍照金剛ぞ　　松石
　ポチとジョギング月冴ゆる岡　　孝子
その影に暮色深まる浮寝鴨　　春屏
　釣人の笠雨に動かず　　登志子
花疲れ南へ北へ追ひかけて　　順子
　先をあらそふ遠足の列　　啓子
春日和彩とりどりの熱気球（ナオ）　　登志子
　上がり下がりは株の宿命　　孝子
昼休み回転ドアも一ひと休み　　啓子
　ベーカー街を歩くホームズ　　順子
夏休みルーペ片手に採集す　　谷口久子
　泣き出しさうな入道雲よ　　竹内千代
この頃は男もすなる日焼止　　赤木和子
　性転換で嫁さんになる　　孝子
手料理はままならぬとも愛あらば　　千代
　足の大きさ共におんなじ　　順子
見比べて月見団子の数かぞふ（おとろかし）　　千代
　影黒々と立つ案山子（ウ）　　順子
今年酒吉祥紋の碗に盛り　　春屏
　是非にお願ひ天下泰平　　和子
日光は猫も眠るか東照宮　　啓子
　ゆつくり登る長い階段　　順子
咲きほこり塀乗り越えて花万朶　　登志子
　風やはらかに心ほぐるる　　久子

平成二十七年九月十八日首
平成二十七年十月十六日尾（文音）

半歌仙　『飲み屋とは』

近藤蕉肝捌

飲み屋とは知らずに入り梅雨模様　近藤　蕉　肝
裸の上手い画家が大賞　福嶋　鬼　火
微笑いつつアオザイさらり脱ぎ捨てて　木村　蘭　娜
素数の裏に隠れたる恋　鵜飼　佐知子
思い侘び月に帰らぬかぐや姫　狩野　びんや
砧打つ艶なさけ深くて　林　ジョウ
悪酔いは私のせいよあらばしり　鬼　火
幸せ祈る慈悲の眼差し　蕉　肝
産土の神に美丈夫授けられ　佐知子
さあ鬼退治きびだんご持ち　蘭　娜
こぶゆらし踊る老爺と鍋奉行　ジョウ
あの世とこの世見ゆる熱燗　びんや
永遠の愛凍らす月がビッグバン　蕉　肝
媚薬でわかる六本木の夜　鬼　火
寝もやらず文書き綴る牢名主　蘭　娜
指ピストルであおる春情　佐知子
花吹雪駆け込み寺に間に合わず　びんや
霞の朝の湯場の旨酒　ジョウ

平成二十八年五月十八日　首尾

（於・六本木居酒屋ＲＡＫＵ）

半歌仙『零Kの』

林　ジョウ捌

零*Kの宙(そら)の過客や冬ぬくし　近藤蕉肝
枯葉の下で蠢く虫ら　竹田竹梵
太筆に寒九(かんく)の水を含ませて　鵜飼佐知子
息を整え丹田に力　内田遊民
宵の月新内流し呼び止めん　福嶋鬼火
合間あひまに鳴りし風鈴　遊民
縁(ウ)日のアセチレンガス臭い満ち　山崎団栗
おみくじ選ぶ仕掛け駒鳥　林ジョウ
後朝の山高帽を斜(はす)にして　木村蘭娜
馬車をしたてゝ忍ぶ道行　鬼火
鰰(はたはた)の味はやっぱり湯上げこそ　遊民
国勢図会のグラフ確認　佐知子
ノーベル賞夜学の窓の月明り　ジョウ
世界の輪舞白き新絹　遊民
爽やかにデザイン決まる競技場　蕉肝
銀鱗の塵薄氷に映ゆ　竹梵
清姫の頬をぬらすか花の雨　蘭娜
春の夕の大門に待つ　聖成美智子

平成二十七年十二月二十七日　首尾
（於・中野北口ルノアール及び「えん屋」にて）

*零K…絶対零度のこと

『獅子門支考忌追善俳諧』

遺吟脇起　大野鵠士捌

短歌行

笠きればうれしき空のひばりかな　各務　支考
出立ち忘れず枸杞茶ふるまふ　渡邊　義弘
啓蟄の候は水音高まりて　瀬尾千草
展望台に列をなす人　井口ひろ
天（ウ）の原今宵の月は黄金色　田邊桂月
秋彼岸会の読経静かに　吉田百合子
ほかほかと厨に匂ふ零余子飯　早野千尋
幼馴染は疾うに人妻　各務恵紅
少年は学成り難しさりながら　藤井大和
ポルトガル語を犬が話すか　面手美保子
友好の記念樹の今花盛り　清水青瓢
小鮎肴に酌み交す酒　宮本光野
朧（ニオ）なる星に願ひを掛けもせむ　武仲登志春
一番列車切符売り出す　高橋せい子
パソコンを妻は上手に操れる　河合はつ江
夫に秘密自由自在に　山川れん
恋といふ魔物この身に飼ひ慣らし　奥山ゆい
山椒魚も大欠伸せよ　津田公仁枝
朗々と謡曲聞こえ夏の月　矢橋初美
仰ぎ見てゐる信長の城　小松八洲子
鉢（ニウ）巻のマラソン選手息白く　松原東川
岸辺に並ぶ露店いろいろ　河村春陽
みちのくの復興思ふ花の陰　大野鵠士
風の彼方へ赤い風船　執筆

平成二十七年三月二十九日首尾（於・獅子庵）

『獅子門翁忌追善俳諧』

遺吟脇起　大野鵠士捌
歌仙

折々に伊吹をみては冬ごもり　松尾芭蕉
　大綿虫の来たる沓脱　大野鵠士
蒔絵皿煉羊羹の艶愛でて　宮本光野
　小紋の衿をかき合せたり　武仲登志春
城山に掛かる名月あかあかと　矢橋初美
　かすかに届く秋の波音　藤塚旦子
屑鉄を集め並べる美術展　小栗知柚
　ＤＮＡは争へぬもの　村井枝葉
百メートル金メダルにはまだ遠く　松尾一歩
　心ときめく褐色の肌　赤尾千恵子
妻を持つならば三人までとされ　松原東川
　ペットの仔犬部屋をうろうろ　寺島惠利子
夏の月螺旋階段転げ落つ　名和よちゑ
　庭神さまにひとつお供へ　角田道子
ラジオより落語流るる昼下り　藤井大和野
　玉子焼には塩か砂糖か　瀬尾千草
花の宴送別会を兼ねてをり　早野千尋
　燕飛び交ふ空は水色　塚本睦
覗きたる双眼鏡に春の海　川
　かつて抱きし船乗りの夢　奥山ゆい
ハイボールバカラグラスになみなみと　柚
　ロココ調なる椅子とテーブル　葉
軽やかに羽根を持つかに恋をして　和
　夜の明くるまでチークダンスを　樋口かほる
聞こえくる大木葉苑声低く　松原洋子
　マグマを抱へ眠る霊山　小松八洲子
背負ひたるリュックサックに頭痛薬　津田公仁枝
　鬼怒鳴戸下町に住む　奥村中歩
風とらへ風船葛揺れ止まず　道子
　月の宿なる茅葺きの庵　佐橋霞い
爽やかに陶芸作家白寿過ぎ　睦士
　鈴ちろちろと小さき巾着　執筆
ペコちゃんは舌いつまでも引込めず
　遊歩道には日差しあふるる
はるかなる川の流れに花吹雪
　都をどりの今や酣

平成二十七年十二月六日首尾

（於・笠松町・杉山邸）

遺吟脇起
短歌行　矢橋初美捌

『翁忌追善俳諧』

作りなす庭をいさむるしぐれかな　翁
臘梅はやも蕾ほつほつ　矢橋初美
久々に正午の茶事に招かれて　宮本光野
化粧水には浮かぶ金箔　一柳国子
はるか(ウ)より涼しき月の見たるらむ　早野千尋
映画の如きヨットハーバー　寺井淑子
イケメンの蛸焼売りに長き列　初美
女装の男しやなりしやなりと　西田みさ
衿足にかすかに残る愛の跡　市橋みち
日時計一つ街の十字路　光野
花冷えのショーウィンドーきらきらと　杉野ちゑ子
春の祭りの法被鯔背に　千尋
吹く(ナオ)東風に樽酒を割る音響く　淑子
恋はいつでも唐突なもの　初美
僕の目に君の全てを閉ぢ込めむ　国子
スイートルームブルートレイン　千尋
白波に細々見ゆる島の影　みさ
色を零して眠る秋蝶　初美
三五夜の月中天に皓々と　みち
母は自慢の茸飯炊く　ちゑ子
人(ナウ)形の夢の世界に姉妹　淑子
野辺にあふるる日差しやはらか　みち
鳩の鳴く声包みたる花大樹　初美
初虹しかと掴みかかる山の端　執筆

平成二七年十一月三十日首尾
（於・中山道　赤坂港会館）

遺吟脇起歌仙『翁忌追善俳諧』

瀬尾千草捌

葱白く洗ひあげたるさむさ哉　翁　瀬尾千　草
　静寂をゆらす冬鵙の声　河合はつ江
息をつめ人形の目を描き入れて　竹内昭　子
　木綿の作務衣着心地のよし　武山慶　子
真正面生まれたてなる望の月　田中啓　子
　栗の強飯をほつこりと炊く　神山初　子
関ヶ原合戦の地に幟立つ　梅田えみ子　江
　ドローン飛ばす彼は金髪　草
うつとりとサインコサイン上の空　江
　甘き香りを運び来る風　江
産土の修復いよよ本決まり　慶
　軒に菖蒲をかざる長老　昭
月光の梢に空蟬みつけたと　草
　口遊みゐる例のスキャット　草
運転にキーの要らない車増え　啓
　案内板の絵文字新し　江
花浴びて団子を食ぶる異国人　江
　太極拳の動きのどかに　草
百体の地蔵に百の風車　初　岡本満智子
　卻を返す深き山々　船渡文子
無農薬有機栽培トレンディー　後藤朱乃
　巨大スーパー客を呑み込む　蒼井遙
たもとほる隣の主懐手　伊藤弥生
　日向ぼつこの猫の居眠り　渡辺靖子
ケータイに朝昼夕とメールくる　宇野久恵
　身の程知らぬ恋に身を焼き　満
世の中は時に修羅場と化すことも　文
　小さいながら結界の石　生
帰りゆくただ一筋の月の道　満
　ちちよちちよと蓑虫を聞く　文
褒賞を今年酒にて祝はむか　遙
　ホテルの椅子はアンティークなる　靖
なだらかなゴルフコースの続く丘　恵
　空を仰げば雲のひとひら　遙
少年の笛まつさらな花の下　本屋良子
　乗込鮒の尾鰭きらめく　執筆生

平成二十七年十一月二十日首尾

（於・岐阜鋳物会館）

短歌行　『爽やかや』

田中啓子捌

爽やかや少年の吹くハーモニカ　江
葡萄酒醸す蔵の並べる　乃
水平線まつさらな月昇りきて　遙
身を委ねたる樫の揺り椅子　靖
宅配で修司の詩集届られ　昭
君を思へば香るジャスミン　美
ゆるゆると朝焼けの色薄れゆく　恵
溶けてしまつたポケットのチョコ　啓
パソコンの検定試験迫り来る　昭
窓辺に遊ぶ雀見てゐる　乃
城山の裳裾を染むる花の雲　靖
とりどりの種浸し置く井戸　
帽子の中に眠る猫の子　

縁（ナオ）先に接待受くる遍路さん　江
爆音たててジェット機のとぶ　乃
命かけ国境超ゆる民の列　遙
焼きたてのパン脇にかかえる　靖
イニシャルのTATTOOに秘めた深き愛　昭
聖樹の下に熱きくちづけ　美
冬薔薇に月の雫の宿る頃　恵
コロポックルの囁きを聴く　江
三度（ナウ）飲む薬小箱に分け入れむ　美
婆様の杖折り畳み式　恵
ひとひらの花もこぼさず花満つる　啓
帽子の中に眠る猫の子　昭

平成二十七年九月十八日首尾

（於・岐阜鋳物会館）

遺吟脇起
歌仙　『初しぐれ』

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　翁
吐く息白く辿る山道　名和よちゑ捌
地の叫び何やら聞こゆ気配して　名和よちゑ
家苞にせむたまご煎餅　清水青瓢
コウノトリ役目果たして月皓と　田邊桂月
夜勤帰りのニュースでかでか　伊藤百雲
錦秋の加奈陀雄大なつかしく　松岡裕子
記念写真に君のほゝゑみ　五十川直靖
約束の木椅子に待ちて紅をひく　新町恵子
ダックスフント脚にからまる　早崎美弥子
新築の老健施設内覧に　五島洋子
買物に出て忘る買物　澤井国造
児童らと夜焚釣して仰ぐ月　松野孝子
壁にぶつかるかなぶんの音　青瓢
衝立は一筆描きの恵比寿神　よちゑ
外堀といふ流れゆるやか　戸田華笙
あの戦知りたる花も満開に　赤塚つねみ
巣箱の中は賑やかな声　桂月
しやぼん玉大きく吹きて仲直り　高木真美
割れめにのぞく草のたくまし　裕子
農業の再建論議力得て　高木雅人
ハツラツ市に掘出し物が　青瓢
先生の赤いマフラー赤い靴　柳瀬道子
風花の舞ふ駅に降り立つ　美弥子
近づけば真白き肌の匂ひたる　洋子
息止まるほど長きくちづけ　恵子
ひたすらに可愛い可愛いい名前呼び　北浦典子
名品といふ壺の飾られ　直靖
たなびける雲従へて月今宵　国造
菊人形の眼厳めし　裕子
地芝居の伝統今も引き継ぎて　衣斐佐和子
積み重ねたるうすき座布団　美弥子
托鉢の僧足早に振り向かず　孝子
鐘の音響く四方の村里　典子
復興へ急ぐ鉄路に花吹雪　つねみ
行列出来る鮑網焼　百雲
　　執筆恵子

平成二十七年十一月二十二日首尾
（於・大垣市・江月寺）

『花ある城』

半歌仙

伊藤哲子捌

名園に長き梯子や松手入れ　菅原通済
　玉兎を抱く白銀の雲　伊藤哲子
秋鯖の脂ののりを楽しみて　鈴木ちかひ
　ぷくぷくぷくと石鹸の泡　白石一有
母の挽く珈琲豆の香りよし　櫻田野老
　知らん顔してかじけ猫いる　高山英子
ウインディアンサマーの縁に爪を切る　松澤龍一
　訪う声のあの人に似て　ちかひ
仏蘭西で暮らした日々の甦る　哲子
　サロンの詩人恋と革命　野老
大砂漠駱駝と隊商眠りいる　哲子
　赤黒蠍ばりばりと月　一有
草萌に雀の鉄砲鋤き込んで　ちかひ
　コップに地酒屋敷神さま　一有
ふるさとへ納税先を移し替え　野老
　越の荒磯に唸る連凧　一有
仰ぎ見る花ある城の天守閣　哲子
ちんちん電車包む糸遊　一有

平成二十七年十月　十四日首
平成二十七年十月二十八日尾
（於・カメリアプラザ・亀戸梅屋敷）

半歌仙　『梅ふふむ』

伊藤哲子捌

梅ふふむ江戸の香りの初天神　　櫻田野老
　角切紋の女正月　　伊藤哲子
マラソンを犬と並んで眺め見て　　菅原通済
　名代饅頭八個購入　　鈴木すず
良夜なり水琴窟の鈴やかに　　通済
　新酒酌みつつ描く未来図　　野老
夕映えの鞍馬の山を雁渡る　　哲子
　一夜限りと心定める　　すず
手作りの赤いサラファン身に纏い　　すず
　吟遊詩人海に向かった　　通済
異文化は鯨の価値を否定する　　野老
「おもちゃのチャチャチャ」野坂昭如　　哲子
夏安居に月の面影雲の上　　すず
　たまに聴こえる竿竹売り屋　　野老
続編を二度寝して見る春の夢　　通済
　母の得意の芹の白和え　　すず
ファミリーと御近所そろう花宴　　通済
キューバンルンバ踊る蝶々　　哲子

平成二十八年一月十三日首尾

（於・亀戸・梅屋敷）

歌仙『木犀に』

木犀に誘はるるまま終の坂　妙島秋男捌

一睨みして鬼やんま発つ　松岡茨童

月の夜の道場声を響かせて　妙島秋男

いつものマスター豆挽く手許　中島布弓美

あれこれと辞書引いてみる暇つぶし　西岡礼子

干大根の細りゆくさま　塩出芙美絵

彼方まで丹頂の朱点々と　布

確証ありげな女房の笑み　礼

シャガールを観に行きませんか明日の朝　秋

ドアを開けてはひそやかに閉づ　茨

病棟の消灯時間早すぎて　芙

ルービスビェと読んでしまつた　布

釣忍揺れて気取つた小料理屋　秋

短夜の月白磁照り映え　秋

路地裏を野良猫よぎる音もなく　芙

往生願ふ補陀落渡海　礼

振り向けば花も仏も咲いている　秋

母の衣をたたむ春宵　茨

家々に小女子を煮る匂ひして　布

塩屋の五階ベランダの風　秋

本棚にセピアの写真フローベール　秋

はらりと散りし栞謎めき　布

酒蔵をひとめぐりする冬陽差し　茨

筋肉質の裸木となり　真

彼の人を因数分解して笑ふ　布

をんなごころに萬の抽斗　秋

迷ひつつリフォームすれどまた迷ひ　真

日々の落穂をいつくしみして　茨

波光る湖面の月に棹させば　秋

秋の遍路にたつ支度する　布

獺祭と名乗る主人と語りをり　茨

紳士はやはり即かず離れず　真

小走りに廊下が軋む午下がり　布

名代団子の幟にも雨　秋

夙川は松と万朶の花の道　真

子雀らしき声の聞こえり　布

平成二十七年　十月十九日首
平成二十七年十一月十八日尾
（於・西宮市市民交流センター）

石原真紀子

歌仙『夕闇の』

夕闇の包みかねたる菜花かな　笙
　畑打ち終えて洗ふ鋤鍬　愛
海女の市軒下に茣蓙敷きのべて　正
　飛行機雲の並ぶ蒼空　妙
百段のしらじら光る月の坂　修
　勝相撲とて荒息の笑み　笙
秋ウ祭法被姿の男前　愛
　あれから十年果たす再会　正
雨の夜の絹擦れの音艶めいて　妙
　サプリメントに頼る毎日　修
米作り無農薬をばモットーに　笙
　スペシャルコース五食限定　愛
凍る月警策ともに肩に落ち　正
　大海原に鯨潮吹く　妙
原発の汚染土を積む里に住み　修
　私淑の詩人すでに鬼籍に　笙
咲くを待ち散るを惜しみて花の日々　愛
　亀の鳴くのに子雀が和す　正
夕闇の監督の叱咤がくれた甲子園　妙
　風呂の椅子庭に持ち出し草むしる　修
ふるさとの幼なじみの訃に涙　笙
　一本箸で心太食べ　愛
気性激しき青年の恋　正
　断られ断られても尚燃えて　妙
天地俄に変はる土砂降り　修
　後の月だれにともなくそれ見たか　笙
わが家取り巻く虫のコーラス　愛
借ナウ景の正面に富士薄原　正
　海賊船に乗つて観光　妙
あの頃は全員集合合言葉　修
　辻の地蔵に鴉詣でる　笙
園児らの列は乱れず花の道　愛
　酒含みつつ藤棚の下　正

執筆　オーロラを見る北極の春寒く　笙
　水面いちめん星のきらめき　愛
監督の叱咤がくれた甲子園　正
　守り袋は母の手作り　妙
風呂の椅子庭に持ち出し草むしる　修
　一本箸で心太食べ　笙
ふるさとの幼なじみの訃に涙　愛
　気性激しき青年の恋　正
断られ断られても尚燃えて　妙
　天地俄に変はる土砂降り　修
後の月だれにともなくそれ見たか　笙
　わが家取り巻く虫のコーラス　愛
借ナウ景の正面に富士薄原　正
　海賊船に乗つて観光　妙
あの頃は全員集合合言葉　修
　辻の地蔵に鴉詣でる　笙
園児らの列は乱れず花の道　愛
　酒含みつつ藤棚の下　正
亀の鳴くのに子雀が和す　妙
　咲くを待ち散るを惜しみて花の日々　修
原発の汚染土を積む里に住み　笙
　私淑の詩人すでに鬼籍に　愛
凍る月警策ともに肩に落ち　正
　大海原に鯨潮吹く　妙
雨の夜の絹擦れの音艶めいて　修
　サプリメントに頼る毎日　笙
米作り無農薬をばモットーに　愛
　スペシャルコース五食限定　正
秋ウ祭法被姿の男前　妙
　あれから十年果たす再会　修
百段のしらじら光る月の坂　笙
　勝相撲とて荒息の笑み　愛
海女の市軒下に茣蓙敷きのべて　正
　飛行機雲の並ぶ蒼空　妙
夕闇の包みかねたる菜花かな　修
　畑打ち終えて洗ふ鋤鍬　笙

久我妙子（いぬじま正一）
是行修吉
紺野笙治
紺野愛

平成二十七年四月二十七日首
平成二十七年十一月三日尾（文音）

百韻『書き初め』

小林静司捌

暁の空に書き初めおおらかに　故土屋実郎
四方を鎮めて淑気鶏鳴く　小林静司
甕の水割いて慈姑の芽の伸びて　和田忠勝
春濤寄せる浜に凧揚げ　和田ひろ子
馬の仔の駈け出す気配見守らん　今村苗
勢い増して電車通過す　白井暎子
半島の先をかすめて昇る月　秋山よう子
靡く薄をさっとスケッチ　遠藤尹希子
継ぐ意思の無き子に送る今年米　高島幸子
森蘭丸に似たる面差し　猪飼たかし
毎日をブランド物に身をやつす　苗
散財なれど恋のためなら　尹
ピラニアが彼女のペット珍しく　暎
銀座すずめの喧しきこと　ろ
お土産は福をもたらす福太郎　尹
優雅に舞いし丹頂の群　た
湿原を隈なく照らす寒の月　幸
コモンセンスの師長ふくよか　苗
打ち明ける思いの丈もてれくさく　尹
愛の妙薬小匙一杯　勝
遠花火指輪でうまる夢の中　司
自慢気に言う少女夏痩せ　ろ
アルプス（ニオ）の氷河は蒼く透き通り　ろ
荷を持ちかえて立話する　幸
ふたたびのテニスブームにスコートで　う
負けず嫌いの姉を追い越す　ろ
ハミングの流れる園に咲く菫　尹
紙風船はふわりとふわり　暎
近頃はメーデー廃れピクニック　暎
心許せばいつも騙され　た
マザコンの僕ちゃん「俺」と粋がって　尹
御神酒供えて願う神棚　ろ
ほととぎす声はすれども何処へ消え　暎
水着の紐がほどけそうです　苗
月の浜何故かあなたはサングラス　雲
世襲議員のほほんとして　た
裏帳（ニウ）簿勧める著書が百万部　司
ウイスキー造り選ぶ水質　雲
手を合わす目鼻うすれし石仏　尹
火山活動盛んなる岳　亜
日本の温泉巡る異国人　亜

藤沼亜緋子

憂きことさえも前向きに聞く　幸
円安はじわりじわりと進みいて　映
主婦を誘惑バーゲンの札　う
高速のバスから眺む月高く　映
とんとんとろり秋の波音　尹
新走り買って帰ろか飲んでこか　た
養生訓の凍むる懐　勝
帰り花心の奥の寂しかり　苗
母なつかしむ子守半纏　尹
三ォ遠野にはおしら様やら山の神　う
主婦の日遥か針仕事する　幸
エグザイルガール跳ねたり踊ったり　勝
妖怪ウオッチどこで狂った　尹
三蔵が天竺途次の夏衣　う
広き熱砂に骨の白じら　雲
親象と子象の列のシルエット　亜
待ちかねていたサーカスの芸　苗
ユネスコが身近になった和食処　尹
漫画家めざすイベントに出る　幸
大喧嘩していているようなうかれ猫　司
二月礼者が島に居つづけ　苗
朧夜に名句吟声し尽しぬ　亜
薄紅梅の香りほのかに　春
三ゥ青年を育て帆船接岸す　ろ

鈴木善春

ノーベル賞の余韻いまだに　映
占い師出番が無くて大弱り　た
心字の池に鯉跳ねる音　ろ
アフリカはエボラ戦場いつ果てん　う
餅ほとびれば心ほとぼる　雲
プレゼントされた機器さえもて余し　亜
風そよぐすら情報の元　苗
旅枕月の欠片も千々みだれ　尹
虫すだく中君をハグする　映
拾得の歌碑の蘇州に秋愁う　亜
免税店で買った濁酒　春
大入りを祝いて終わる花相撲　ろ
強者共は汗を拭いて　苗
夕ナオ茜二重の虹を染め上げる　尹
土用鰻が飛ぶように売れ　ろ
着慣れない大振袖を引きずって　う
こがれこがれてお夏狂乱　幸
昂りを鎮める程の小夜時雨　司
咳をして古書を読み了え　苗
就活の前に敬語のお勉強　春
豆腐頭に釘打ってみる　た
明日山場対策練りし審議会　勝

国債ランク一つ下げられ
東棟の病窓寺と向かい合い
長屋の隅で賭場の開帳
老松の枝巧なる月の道
うそ寒に婆杖を曳きゆく
諍(ナウ)いを仲直りしてキリタンポ
検事総長同郷の友
頑なに諸行無常の世なりせば
いろはにほへとやっと暗誦
センターが選挙の度に何故変わる
家族揃って都踊りに
花咲う深山の奥の奥までも
うららかなりし満水のダム

亜雲暎春う尹勝たろ幸苗司春

平成二十七年二月四日首尾
於・鎌倉生涯学習センター玉縄分室）

短歌行　『黄落を』

秋山よう子捌

黄落を踏み鎌倉に集いけり　秋山よう子
古道を照らす大いなる月　永田吉文
りんごむく妹の手は幼くて　白井映子
ラジオかければ歌のおばさん　松田ぼくる
アイライン(ウ)くっきり描く達磨の図　寺嶋倫子
半幅帯で浴衣小粋に　うる
恋多き留学生は夏痩せで　映る
パソコンで来るラブレター待つ　倫
モーテルを渡り歩きの一人旅　う
酒瓶提げてみやこ見物　吉
簪に触れんばかりに花枝垂れ　映
琴の音ゆかし曲水の宴　る

シャボン玉(ナオ)追いかける子の靴が脱げ　映る
鳩寄せうまき公園の爺　倫
南仏の本屋で買った「三銃士」　う
色仕掛けにて盗む情報　吉
雷蔵の熱き抱擁熱きキス　映
難民救済担うＵＮＩＣＥＦ　る
冬の月仰ぐ沙漠の荒涼と　倫
サッカー少年シュートお見事　う
予報士(ナウ)の予報はずれて土砂降りに　吉
眠れよねむれタイムカプセル　映
花アーチ妖精達も浮かれ出て　る
蝶の乱舞にしばし陶然　

平成二十七年十月二十五日首尾
（於・鎌倉山高島幸子邸）

歌仙『秋惜しむ』

連句会鎌倉山に秋惜しむ　　坂田酔彦捌

狭庭にゆるる野菊紫　　坂田酔彦
十三夜店から眺む角打ちて　　高島幸子
ギター尺八共演を待つ　　蛭海停雲子
久し振り夜の電話でひとはしゃぎ　　小林静司
脱皮の蟹の肌は柔らか　　幸彦
九条を守れの汗に夫異論　　幸彦
人口増やせ先ずは恋愛　　雲司
若者でスマホ中毒いちゃついて　　彦雲
年金貰う歳になったわ　　幸彦
樹木葬嫌がるものは風葬に　　幸彦
コンドルが舞う雪のアンデス　　雲彦
混濁の現世万古の月冴ゆる　　彦雲
南無阿弥陀仏唱う十度　　雲司
激戦のパラオ慰霊の両陛下　　司雲
にらいかないの凪ぎ渡る海　　雲彦
年毎に花に尋ねん寿（いのちながさ）　　彦幸
名を読み込みし一句暖か　　幸雲
豪（ナオ）邸は昔蚕飼の跡地にて　　雲司
外貨稼ぎし明治期の雄　　司幸
沈下橋四万十守る大自然　　幸彦
土佐のはちきん今のあげまん　　彦司
坊さんが簪買ってすぐ噂　　司雲
混浴はいや誘う菖蒲湯　　雲彦
纏うもん香水のみで待っている　　彦司
箱根のレベル一に下がりて　　司雲
年齢はお幾つですかこの地球　　雲彦
見ること出来る月の裏側　　彦司
夢さやかアインシュタイン舌出して　　司雲
放屁虫を叩き損なう　　雲彦
手（ナウ）を合わせゴールへ向けて天高く　　彦雲
屈するなかれテロの脅威に　　司雲
人の世の幻自由平等の　　雲彦
白子干にてご飯一杯　　彦司
鯛のみが賑わう瀬戸の花霞　　司雲
里を目指して急ぐ鶯　　雲司

平成二十七年　十月二十五日首
平成二十七年十一月二十二日尾
（於・鎌倉山高島邸及び鎌倉生涯学習センター）

歌仙『赤い羽根』

西田青沙捌

壇上の手話通訳や赤い羽根　西尾泰一
　駅前広場うららかな秋　岡本耕史
月を待つ友と一献かたむけて　西田青沙
　義太夫うなる裏のご亭主　〃
鶸色の風も相伴夏座敷　一
　ダム湖にひらり雨燕飛ぶ　史
水尾長く外輪船のゆるゆると　沙
　小説もどき結ばれし縁　〃
胎教に韓流映画見て歩き　一
　ＴＰＰはさあてどうする　史
筵旗たてて行進出来もせず　沙
　お手お坐りを仕込む愛犬　一
雪原を辿るあしあと月明に　史
　お助け小屋の紅い寒灯　一
うつかりと伊賀と名張を取り違へ　沙
　忍者の裔と大威張りする　史
花万朶忠霊碑建つ師団跡　史
　草萌えいづる国の真秀ろば　沙
村人の捩り鉢巻き上り梁　沙
　築百年を民宿にする　〃
苔むして文字読み取れぬ庭の古碑　史
　また始まつた爺のざれ言　一
蝦夷菊をひと鉢買ひぬ蓮如市　史
　青葉時雨の切り通し行く　沙
川曳きの采高々と木遣り唄　一
　ぞっこん惚れる悪いあにさん　〃
道ならぬ逢瀬重ねる罪深さ　沙
　相談相手にまたも騙され　史
弥次喜多にゆかりの旅籠月今宵　一
　おけら鳴きゐる伊勢の古市　沙
影法師彼方に浮かぶ霧しぐれ　一
　窓に並べる招福の猫　史
知らぬ間にこんなところに池ができ　一
　才槌頭振り立つる僧　沙
花散るや阿弥陀堂より午の鐘　史
　糸切れし凧蔓越えゆく　沙

平成二十七年十月十三日首
平成二十七年十一月十日尾

（於・四日市文化会館）

歌仙『詩仙法師』

小林静司捌

待宵の詩仙法師に富士静か　　小林静司
　百畳の間にひびく虫の音　　前田吉法
美術展子らの大作並びたて　　竹原孝太郎
　記録はすべてスマホお任せ　　竹井英夫
二十分ほどして蟹の脱皮終え　　水野森雄
　キャンプ楽しむボーイスカウト　　長田友子
伴奏は習いたてなるハーモニカ　　佐藤まさ子
　妻に似合いの贈るブローチ　　井上輝夫
忘れ得ぬ二人の旅路軽井沢　　小林春野
　街道沿いに本陣の跡　　望月やゑ子
鷗外は武鑑を脇に構想し　　金窪明美
　マイナンバーを不安視で受け　　賀茂博美
冴える月風邪ぎみの身にホカロンを　　大庭初江
　氷見寒鰤のうまさ上々　　勝又美代子
ジーンズの破れを覗く膝小僧　　高木千代子
　ギネスブックを目指す大凧　　田口明子
遠き山薄紫に花の土手　　宮原うた子
仔馬並足（なみあし）牧の並走　　溝口喜代子
暖（ナオ）かに国勢調査表配る　　吉法
　夢を語ろう婆ちゃんと孫　　孝太郎
マラソンのゼッケンしかと縫いつけて　　友子
　世界の火種南沙群島　　森雄
ダンディな男一匹祭笛　　英夫
　家内の酌で吟醸の冷　　まさ子
噂（うわさ）いま現実となる名誉職　　輝夫
　ゆるキャラきめる今日の投票　　明美
JR東海人気リニアカー　　やゑ子
　戦時をしのぶものの配給　　春野
月光を砕きて波の寄せ返す　　博美
　羽衣の松ゆらす青北風　　千代子
手（ナウ）づくりの走り蕎麦持ち父の許　　美代子
　土産に添えるぼけ除けの飴　　初江
チンダルの雨戸にすっと夕日入る　　喜代子
　公家の系図を皆で拝観　　うた子
延喜式儀式おごそか花の宮　　宗匠
　俳諧連歌麗らうららに　　明子

平成二十七年十月二十四日首尾
（於・裾野市東西公民館）

歌仙『夏富士や』

小林静司捌

夏富士や地方創生志　小林静司
子供観光大使涼しげ　竹井英夫
三人の舞に袴も身についで　水野森雄
民謡しばし透きとおる声　井上輝夫
釣舟は月に浮かるる潮懸　近藤焦肝
思案顔して傾ぐ蟷螂　横手陵山
蔓もどき赤あざやかに実をつける　賀茂博美
愛の小鈴を帯にはさみて　金窪明美
熱き夢語られ従いてゆきますわ　佐藤まさ子
太鼓次代につなぐ芸能　長田友子
選挙権十八歳でみとめます　小林春野
おなか減ったよちょうど夕飯　溝口喜代子
月を浴び凍て鶴の群れ音もなく　勝又美代子
炭で炭わるひびき鋭角　宮原うた子
美事なる匠の鏝絵のこりいて　高木千代子
予算ちょっぴり風化防げぬ　望月やゑ子
水神を守り羅漢は花の下　大庭初江
堰越えなんと上り鮎とぶ　田口明子
春障子童の頬に光さし　内藤法子
眸にうかぶ亡き母の影　焦肝
これがそのしがねえ姿の土俵入り　陵山
裏街道をかっぱからげて　博美
油蝉諸国の咄の草枕　明美
軽トラ荷台西瓜山盛　森雄
今日も又妻に内緒の梯子酒　英夫
君を想えば夜も眠れず　春野
ふれられて髪のほつれが襟足に　喜代子
懐メロばかり選ぶカラオケ　美代子
豊作は深良用水ありてこそ　輝夫
朝採り茸いろいろの皿　まさ子
冬支度する民宿に月細し　友子
平凡という幸せにおり　初江
ごめんねと言われ一層仲よしに　明子
心やすまる海のたりと　千代子
花の主連歌に命かけて旅　宗匠
宗祇遠忌はかくもうららか　うた子

平成二十七年六月二十七日首尾
（於・裾野市東西公民館）

《東京・成城連句会―その二》

歌仙

『木曽路の宿』

初秋や木曽路の宿の通し土間　原田安恵
　むらさきの濃く咲ける桔梗（きちこう）　荒井慈
月今宵寮歌の声のきりもなし　片山茂樹
　老人ひとり古きベンチに　大森道生
嘘つけぬ性そのままに年重ね　佐島和人
　こんな処に棲める貛（あなぐま）　臼杵游児
冬（ウ）枯れて在所の山に低き雲　和人
　豆菓子を食べ渋茶一服　游児
歯の抜けて婆の毒舌弱くなり　茂樹
　想ひ想はれ相聞の文　安恵
フラメンコ恋の終りを苦しげに　慈
　今出航の豪華客船　道生
白絣ゆるやかに着て月を待ち　游児
　慣れた手つきで土用灸据ゑ　安恵
絶壁のそのまた奥に鍾乳洞　茂樹
　熊野詣でに急ぐ上皇　道生
正史外史どれも痛まし飛花落花　安恵
　黄金週間皆でお出掛け　和人

臼杵游児捌

ハイウエイ逃水を追い何処迄も（ナオ）　游児
　髭の男に似合ふバンダナ　和人
自画像に黒子三つを描き入れて　道生
　酔ひの廻りの早い昼酒　安恵
ゐろり端武士と町人相部屋に　和人
　漢方薬に頼るあかぎれ　茂樹
マイナンバー知らぬがままに結ばれて　和人
　足入婚の昔しのばる　道生
万緑をぬきんで眞白天守閣　游児
　離合集散呉越同舟　茂樹
不揃ひの月見団子を供へたり　慈
　自在に列を描く雁金　茂樹
道（ナウ）の駅地産の茸あれこれと　游児
　買物重しママの自転車　慈
のど飴のほろほろ苦き舌觸り　安恵
　雛の客を賑やかに待つ　和人
花の雨会釈して過ぐ修行僧　〃
　水面光りて双蝶の舞　慈

平成二十七年八月二十四日首
平成二十七年十月　九日尾

（於・成城クラブ）

歌仙『滝凍つる』

佐島和人捌

蒼の色深めつ滝の凍てにけり　茂樹
　身を切る風に正す居住まひ　片山茂樹
駒下駄の音の大小路地抜けて　原田安恵
　サイクリングに集ふ若者　坂口典子
会釈して勤務交代月残る　佐島和人
　家苞にする柿をどつさり　白杵游児
結界に入るべき穴探す蛇　安恵
　象形文字に秘めし財宝　游児
横顔のクレオパトラの鼻高く　典子
　お世継欲しと厚化粧する　安恵
隣国の大気汚染は桁外れ　茂樹
　土蔵の壁に咲くは憂曇華　和人
月耿々林間学校寝まる頃　游児
　ボランティアに励む壮年　典子
薦被りおらが地酒をどんと積み　和人
　触れ太鼓行く古き町並み　安恵
花一枝白磁の壺に清々し　茂樹
　羊の毛刈る牧童の業　〃
みやびなる殿上人の春衣　茂樹
　文机に置く和紙のいろいろ　荒井慈
皺の無き札ビラを切る裏のボス　割田容子
　己が行末占ひて見む　典子
不気味なる古井戸のあり庭の隅　和人
　鬼の捨子は風と戯れ　典子
喧嘩して泣いて笑つて木の実独楽　慈
　嫦娥仰ぎつよき漢待つ　和人
思ひ出のワルツに共に涙して　慈
　クルージングの迅き船脚　容子
パウリスタ昔のままの薫りあり　茂樹
　窓辺に咲ける蝦蛄葉仙人掌　游児
山里は遠くかすかに神楽笛　典子
　理工学部の庭に鳥来る　慈
LED先づ信号に重用し　和人
　牙抜かれたる春季闘争　茂樹
ブロンズのライオン像の花の昼　慈
　逃水追ひてどこ迄も行く　容子

平成二十七年十一月十九日首
平成二十七年十二月十七日尾

（於・成城クラブ）

歌仙『へぼ胡瓜』

萱場双魚尾捌

へぼ胡瓜こよなく別嬪朝餉かな　佐藤無風
　孫も加はる夏のお座敷　萱場双魚尾
のっと日のいでし山路は遥かにて　若生芥子
　あの物体はＵＦＯかしら　三上秋桜
中秋の月もあれから七十年　伊藤南三
　老若男女薄も揺れる　佐藤阿房
振袖（ウ）の袂の模様雁の列　鈍
　家系たがはず息子もてもて　無風
待ちわびて寝るともなしにまどろみし　双魚尾
　ドライブインの売店混雑　芥子
行く先は気の向くままの一人旅　秋桜
　秋篠寺の伎芸天恋ふ　南三
冬の月冷え冷えとして引き締まる　阿房
　吹雪も止んでスキーの手入れ　鈍
警視庁何をつめたかダンボール　無風
　とほい空でピストルが鳴る　双魚尾
花の留守縁に寝転ぶ昼下がり　芥子
　春を惜しんで明日クラス会　秋桜
年齢（ナオ）のことお互ひ言はず青き踏む　南三
　ころんで顔に傷の貼り薬　阿房
目覚ましをとめて寝なほすモデル嬢　鈍
　子午線通る明石入道　無風
浦凪いで風鈴はただぶら下がり　双魚尾
　響くは祭り太鼓笛の音　芥子
故郷は遠くにありて沙汰も無し　秋桜
　恋を語りし友も今なく　南三
君の目は母の着付けに不満顔　阿房
　遮断機下りて電車が通る　鈍
片月見慌てて履いたかたちんば　無風
　色に出にけり利酒過ぎて　双魚尾
やや（ナウ）寒の今朝米作は「やや良」と　芥子
　築百年の農家レストラン　秋桜
売れ筋は今おはやりのカーモデル　南三
　寄せ木細工に深入りしてる　阿房
花簪ひさかたぶりで腰をあげ　双魚尾
　京（みやこ）なつかし柳の糸よ　鈍

平成二十七年　七月　十六日首
平成二十七年十一月二十一日尾
（仙台・大観楼および文音）

歌仙『都々古の杜』

千葉恵子捌

夏深し都々古の杜に関の声　千葉恵子
　雲の隙間へ翔ける筒鳥　高杉正生
場所取りのカメラ堂々据ゑられて　藤田とよ
　隣の芝生覗くドローン　目黒十一
牛飼ひの牛と浴びたる望の月　中込とし郎
　宅配業社赤い羽根付け　高田春男
ぞくぞくと川上り来る鮭の群　久保田直
　老いも若きもスマホ離さず　田代洋子
再会は天変地異の話題から　田畑剛
　秘めし想ひは皆に知らるる　和知貴寿
保護色をまとひ訪ぬる君の閨　狩野康子
　妻が暴きぬ邪な恋　とし郎
年の夜の月裏木戸のぎいと鳴る　正生
　雪合羽着て出漁の時　直
一瞬の晴れ間逃さぬ介護の手　洋子
　貧乏神は健康の神　剛
国宝の篠笛を聴く花明り　とよ
昭和の日なり酒壜を立て　恵子
畑打つを愉しみにしてなほ生きむ　とし郎
　猫に向ひて与太話など　康子
東堂の五百羅漢のしかめ面　直
　釘隠しなる家紋ゆかしき　正生
ゆつたりと夏帯巻いて文を書く　剛
　蚊帳を抜け出し拭ふ移り香　とよ
意地張つてモンローウォーク遠ざかる　瀬谷節子
　安住求む難民の列　洋子
幼児の短き命抱きしめて　井上優奈
　天使の梯子するすると伸び　根本純子
霊湯に下弦の月と川音と　辺見正則
　籾殻焼きの煙目に沁む　恵子
蕾へし団栗の穴探すリス　貴寿
　蒙古平原駈ける若き等　とし郎
ドラフトの一位指名に挙上げ　とよ
　分相応に生きて今日あり　剛
神々へ歌仙奉納花の雲　恵子
　白狐に扮し舞ふは佐保姫　直

平成二十七年八月二十八日首
平成二十七年十月二十五日尾
（於・白河市中央公民館）

歌仙『風の森』

大橋俊彦捌

みんみんの声に張りある風の森　大橋俊彦
　駆け抜けてゆく甚平の子等　小池　舞
手びねりのいびつの茶碗掌にうけて　西川なほ
　回転加速電波探知機　村松定史
いつの間に更地となりて月明り　岡部瑞穂
　今を盛りと繁る葛の葉　井上成美
ウ茸籠毒と笑ひと詰め合はせ　坂根慶子
　伏見稲荷に願ふあれこれ　成美　舞
竹馬を物置に入れ君を待つ　なほ
　拾ひたる恋落し易くて　成美
両端はしつかりかがる赤き紐　定史
　マッチで家を建てて一服　定史
初漁の三角波の削る月　定史
　父といつしよに弓矢始を　穴澤とこ
ひつそりと上り框に腰かけて　気多驚子
　廊下の隅に待つてゐる罪　なほ
花万朱荷を引きずりて人が来る　驚子
まるくなあれとシャボン玉吹く　慶子
ナオ象二頭連れて旅立つ春嵐　瑞枝
　普賢菩薩の袈裟はボロボロ　成美
湾に沿ひ漫ろ歩きで灯台へ　驚子
　誰も居ないと確かめて抱く　とこ
失神の癖ひんぱんに武器として　なほ
　ふくらはぎにも蟻の行列　定史
日柄よく新酒火入を明日に決め　とこ
　二代目襲名ネコの駅長　なほ
しなやかに骨太の腕網を打ち　定史
　なぜかかなづちなぜかてつぱう　とこ
半月のやがては肥る夢をみる　舞
　見知らぬ人に零余子盗られて　〃
ナウ猪道を死霊の影の追つて来し　瑞枝
　青信号を渡り切れずに　定史
雨受けの盥に落ちる水の音　とこ
　魚氷にのぼるそれがどうした　成美
約束のやうに花また花花花　俊彦
　喜見城へと鳥の凱旋　とこ
　　平成二十七年七月十八日首尾　定史

（於・北とぴあ）

源心『無弦の琴』

身の丈の秋は錦に降り急ぐ　工藤　繭
無弦の琴を鳴らす三五夜　坂根慶子
馬の荷は新酒の樽を振り分けに　進藤土竜
行先決めぬ散歩流行りて　山下宏子
薄明の海龍王寺雪の中　川野蓼艸
柳眉皓歯が寒卵溶く　石山昼妥
朦朧画法忽然響く高笑ひ　西川なほ
衝動的に猫買ふ男　山地春眠子
かにかくに祇園はかなし恋もかなし　〃
駕篭に乗り祖母嫁ぎたる器粟月夜　蓼艸
風鈴ちりと鳴りてしばらく　土竜
0番線ウィンザーノット午後三時　慶子
地球の裏をめざす引鳥　土竜
気がつけば花の空吾を狂はせて　慶子
柱時計が春尽を打つ　村松定史

町なかに鮎子炊く香充ちてをり　蓼艸
薬草園の札はラテン語　昼妥
遙かなる国より津波来るといふ　蓼艸
左手で弾く「超絶技巧」―　なほ
仏跳牆僧垣越えて食らはんと　慶子
冬麗それは神の恩寵　蓼艸
息を止めきりきりとコルセット　なほ
ちつちやな涙流しては海　土竜
駕篭に乗り祖母嫁ぎたる器粟月夜　蓼艸
風鈴ちりと鳴りてしばらく　宏子
0番線ウィンザーノット午後三時　執筆
地球の裏をめざす引鳥　なほ
気がつけば花の空吾を狂はせて　村松定史
柱時計が春尽を打つ　蓼艸

（於・滝野川会館）

平成二十七年九月十九日首尾

歌仙『秋祭り』

秋祭り笛の奏者も老いにけり　石川光男捌

奥の院まで蜩の声　杉野辨一郎

古民家に月の光りの差し込んで　柏原知子

お伽噺を孫に聞かせる　市川美代子

折り紙の折り目折り目を丁寧に　石川光男

鳥へと残す実南天映ゆ　美美

空(ウ)耳か裏木戸叩く寒の風　辨光

安保改定如何に憲法　知光

横車道理は隅に押しやられ　光光

カルピスの味初恋の頃　美美

洗い髪白き襟足月赤し　光光

夾竹桃の木には毒あり　知辨

病室に面会謝絶赤文字で　辨光

富者の驕りを家政婦は見た　光知

築地塀曲がりて僧は食堂(じきどう)へ　知美

池面を揺らし鯉が伸びする　美知

花の川瀞もタッポも舵まかせ　知美

蕗味噌を煮る夜の雨音　美知

春暁(ナオ)の目覚めに淡き遠鴉　知美

噂話も絶えて久しき　笠美

書架にある手垢塗れの和綴本　〃

弦の切れたる琴そのままに　美美

老いの身に生きた幸せ根深汁　辨光

雪を冠りし富士の掛軸　草知

先祖には名だたる武士も有りしとか　光光

渡すバトンが虚仮てコロコロ　知光

手鍋下げ捨てし故郷忍ばれる　光光

恋句巧みに君が寄り来る　草美

二日月虫に預ける草の闇　知美

宅急便に毬栗を入れ　美光

人(ノウ)肌の酒欲しくなるそゞろ寒　草光

鐚(びた)銭(せん)握り駄菓子屋の前　光辨

君車掌僕運転手縄電車　辨美

札所詣りは杖を頼りに　美〃

妖精の宿るが如く花の散る　知

鏡の中を子猫横切る　真下草笠

平成二十七年九月二十四日首
平成二十七年十月二十二日尾
（於・埼玉県大里郡寄居町よりい会館）

歌仙『菊の香や』

菊の香や忘れられゆく明治節　石川光男捌

尾を引きずりて泥に入る亀　真下草笠

芒原月昇らせる風を得て　石川光男

文化財をば町起しにと　市川美代子

声高に城趾案内ボランティア　杉野辨一郎

入道雲が湧き立てる峰　美美

道(ウ)過ぎる青大将に子ら騒ぐ　草草

日課となりしラジオ体操　光光

カーテンを妖しく揺らすシュルエット　美美

老人ホームで初恋の人　辨辨

物言わず黙っていても日は暮れる　知知

箱階段は足袋に冷えあり　美美

月雲に手拍子響く歳の市　草草

ジャンボの簸に膨らます夢　辨辨

縄のれん貧乏揺すり酎(ちゅう)呷る　光光

歌さまざまに昭和平成　草草

靖国の万朶の花を振り仰ぐ　辨辨

春寒の頃消費税上ぐ　美美

退(ナオ)院の目に痛きまで山笑う　知知

無理をしないで総活躍を　草草

句会にも持ち込んでいるタブレット　〃

由緒因縁木漏れ日の里　美美

思うまま気の向くままに時流る　光光

老鶯愛でて杖で息つぐ　美美

奇声あげ女御輿のド迫力　草草

捌く茶杓はまるで別人　光光

音もなく垣を抜け行く黒き影　知知

万能細胞恋に効くのか　辨辨

山寺の石仏拝む昼の月　知知

どんぐり弾け屋根をコロコロ　光光

遠(ナウ)き日の母鬼灯に偲ばれる　美美

生前葬人は様々儀人は様々　辨辨

現し世は本音建前綯い交ぜて　草草

飛び石伝え料亭の庭　知知

花の精在わすか枝の揺れて散る　美美

耕し終えて煙草一服　光光

平成二十七年十一月二十六日首
平成二十七年十二月　十七日尾
（於・埼玉県大里郡寄居町よりい会館）

《東京・外濠連句会》

祝鎌田　俊氏句集「山羊の角」上梓

歌仙『山羊の角』

静　壽美子捌

金風や子の触れてゐる山羊の角　　静　壽美子

タワーサイロにかかる夕月　　鎌田　俊

文化の日何はさておき銭湯に　　静　壽美子

籠の鸚鵡に声をかけられ　　中村光声

桟橋の引き込み線の灯は消えて　　尾沢美久

檸檬スカッシュ泡のはじける　　加藤完司

母(ウ)の着し薩摩上布を仕立て変へ　　小川明宏

ヴィオロンを弾く美しき人　　美声

しのび逢ふ時はきまつて雨が降る　　久美

甘え上手な年下の彼　　声久

香ばしきフランスパンを買ひに行く　　宏司

戸惑ひ多き異文化の風　　司宏

イスラムの砂漠悲しき冬の月　　久俊

避ける地雷に心悴む　　声

又の世は魚と眠る夢の底　　美

一つ目小僧ひよいと現る　　宏

伝説の花守る里の賑はひて　　司

大仏向かひ漕げる鞦韆(ナオ)　　俊

めかり時少年家を捨てやうか　　声

はるか昔の寝台列車　　久

遠征に応援団を引き連れて　　持田由美子

我は酒場で酒に酔ひ痴れ　　司

浴衣着て墨堤ゆける赤い下駄　　宏

人の集まる野外演奏　　美

デモ隊のシュプレヒコール遠く聞く　　久

君の腕の熱き血潮よ　　声

地震にゆれ外した指輪転げ落つ　　司

バストップにメール見つめて　　由

月円か香木の香を聞き分けて　　〃

関守石にちちろ虫鳴く　　宏

絡(ラク)まりて美男葛の垣を成す　　声

ひたすら走る第三京浜　　久

看護士のかける言葉のやはらかき　　由

婆のすすめる木の芽田楽　　司

山辺に花の吹雪のかけ抜ける　　宏

明日を誓ふ春のあけぼの　　声

平成二十七年　十月三十日首
平成二十七年十一月三十日尾

（於・庄　屋）

歌仙『田は青し』

塙　於玉捌

さみだれの車窓流れて田は青し　　久保田田朴
　カメラ構へる麻服の皺　　大久保風子
椀のもの真薯に昆布結ばれて　　今富千辺
　老舗旅館の白木の湯船　　稲葉和平
空と池二つの月が競ひ合ひ　　山縣敬二
　香仄かに蘭か菊花か　　小野酔陶
火山灰今掃き出され送り盆　　風子
　煙ひとすじ君のおもかげ　　田朴
いろじろのぽつちやり顔に弱い俺　　和平
　あれ手が触れてバルンは惑ひ　　千辺
地上絵はナスカの人の夢ならん　　風子
　暖炉囲んで談論風発　　敬二
月煌々薄目開けたるかじけ猫　　酔陶
　株価睨んでカップラーメン　　田朴
わたくしは片付けられない病気かも　　風子
　寺の廊下をわたりゆく風　　於玉
み吉野の谷間の朝を花覆ふ　　和平
巣立ちの鳥は親を倣ひて　　千辺
幻魚棲むかの地の海に蜃気楼　　酔陶
　唐揚げにして酒の肴に　　敬二
漱石の原稿用紙一九字詰　　千辺
　ナイフで削る鉛筆の香　　和平
日盛りの暇な床屋を覗きこみ　　於玉
　碁敵の待つ縁台や良し　　酔陶
楽しみは後へ後へと先延ばし　　敬二
　恋の不死鳥自分史に飛ぶ　　風子
想ひ出は今宵かぎりとむせび泣き　　田朴
　つる草絡むボロ朽ちし部戸　　於玉
夜半の月振りむきざまののつぺらぼう　　千辺
　音なきままに無患子の降る　　和平
北の街路を彩る秋袷　　敬二
　ふくれつ面を映す鏡台　　於玉
ゆるぎなき殷周銅器の強き貌　　酔陶
　博物館に通ふこの頃　　田朴
大社双子を花と幣祓ふ　　風子
　岸の向かうに野遊びの声　　執筆

平成二十七年六月　十二日首
平成二十七年八月二十九日尾
（文音・ウラ4まで大久保風子捌）

歌仙『鶏頭の赤』

半田有杜捌

山中主水　梅雨寒や薪ひと抱へ運び入れ
半田有杜　植田広がる里の静けさ
新田透舟　近頃は車も聡く走るらん
井田瑞亭　海岸道路にパンケーキ店(みせ)
田中安芸　幼子の寝息正しく月の光ヶ
秀島一生　燕の帰国今日か明日か
武井蛙女　鶏頭(ウ)の赤に子規居士何頼めりや
主水　うすき手のひら太陽に向け
有杜　さすらひてあはれ魚は網の中
透舟　ブエノスアイレス狂ほしき刻(とき)
瑞亭　ゆつたりと広げし衿に恋風が
安芸　寒中見舞ひ地酒ぶら下げ
一生　緊張のスタジオ出でて冴ゆる月
蛙女　一本裏に稲荷明神
主水　おばけとも友達になる歳になり
有杜　新しい靴はいて靴ズレ
透舟　かこを待つ吉野の川の花筏
瑞亭　春の行方を何処に尋ねん
安芸　空腹(ナオ)を満たすものなし鐘おぼろ
主水　香薫きしめて往生の旅
蛙女　高山の地を這ふ木々と黒き岩
一生　プリンシプルかフィロソフィーか
安芸　氷柱に溶けないままの宝物
透舟　西瓜切る手にダイヤ輝き
有杜　いつまでも嘘でもいいのこのままで
主水　キッス動画に浮かぶ後悔
瑞亭　教室のすみでつぶやくスマホどち
一生　財布の色は風水で決め
蛙女　石垣に描く陰影月と雲
安芸　浪切不動にすだく虫の音
主水　食(ナウ)ふよりも眺むるが良しザクロの実
有杜　宅配便の届く頃かと
透舟　誇らかに行進続くスタジアム
一生　猫の欠伸に我もつられて
瑞亭　早や日暮る友と語らふ花の宿
蛙女　紋白蝶の窓に憩へる

平成二十七年六月十二日首
平成二十七年八月十一日尾（文音）

歌仙『熊を眠らす』

仲本お池捌

湧水は山の青さを運び来て　小林喜一
　木葉木菟棲む森の鎮もり　仲本お池
人型のロボットにこりと笑うらん　横田思案人
　ボタンで選ぶ紅茶珈琲　青柳祥風
風渡り月は仮寝の雲に寄り　高井辛六
　家路をいそぐ秋寒の頃　谷口螺々子
吾亦紅瞼に浮かぶ母いかに　石田耕庵
　古希の祝いで主役をはれた　喜一
押入れの剥げし茶箱の鎮座して　お池
　染みあまたなる秘めごとの文　思案人
くちびるでピアスを外したがるくせ　祥風
　眼下に広がるシチリアの海　螺々子
闇鍋にいぶりがっこもしょっつるも　耕庵
　熊を眠らす月の明るく　思案人
仁王門千年古都を見守りて　喜一
　時に乱れし制服の列　お池
空耳かいいえ花びら開く音　祥風
　何処におわす殿様蛙　耕庵
初虹に届けとゆらり熱気球　螺々子
　バスケットには夢と魔法と　祥風
ちょっとだけその一杯が怖いのよ　思案人
　お札配りし神官の貌　耕庵
さつき雨登り険しき村遙か　お池
　危うき杭にすがる昼顔　螺々子
シャネルよりシャボンの香る肌が良か　喜一
　嫁入りトラック多き大安　祥風
期待乗せ重き使命の「こうのとり」　思案人
　身にしみわたる幻の酒　螺々子
独り居の屏風の月に事寄せて　耕庵
　メタボ対策色葉散る道　喜一
捨て団扇いつの間にやら骨ばかり　祥風
　俺の縄張り回るのら猫　螺々子
どんよりと閉ざされている北の空　耕庵
　憂うことなく晴れて卒業　喜一
花の下差す手引く手も賑やかに　お池
　カリヨン響く春光の丘　思案人

平成二十七年六月五日首
平成二十七年九月十一日尾（文音）

歌仙『田舎暮らし』

田中安芸捌

湯ノ花の躍る朝や初鏡　山中主水
　正月小袖に番鳥あり　田中安芸
見晴かす水平線は幽かにて　仲本お池
　つもる話の薄暗き宿　久保田田朴
遊び足り寝る子等照らす望の月　新田透舟
　遠く近くに絶えず虫の音　武井蛙女
秋(ウ)うららもぐもぐと行く牛の群れ　小林喜一
　スケッチブックに緩く稜線　安芸
電波塔メール送受は無機的に　主水
　たまの逢瀬は雨に濡れても　田朴
「アパートの鍵貸します」と耳元に　お池
　青黴生えたパンの観察　透舟
修験僧瞑想すれば月涼し　蛙女
　出入りせわしい国境の町　喜一
憎むべし戦いという名の選択肢　主水
　年中無休開店は九時　田朴
花の下今天国を少し酔い　お池
　道路工事は耕しとして　透舟
教室の瓶で産(ナオ)まれた蛙の子　蛙女
　田舎暮らしは山梨県で　喜一
今日もまた正しく動く腹時計　安芸
　森の奥には鬼婆の小屋　主水
テーブルに冷めたコーヒーひとつあり　田朴
　スキー旅行をねだる横顔　お池
抱き寄せる胸のふくらみそのままに　蛙女
　このまま逃げて見知らぬ国へ　透舟
湖(みずうみ)と見まがう川に糸を垂れ　喜一
　はっきり映る魚群探知機　安芸
何処よりこぼるる調べ月今宵　お池
　老いをねぎらう田仕舞いの宴　主水
風(ナウ)さやか障子の影に色にじむ　田朴
　三つの丘に囲まれた古都　蛙女
路地裏に自家焙煎の漂いて　お池
　このひげ剃りは電気がいらぬ　透舟
花吹雪ほころぶ顔にひとひらの　喜一
　逃水を追う夢のはかなさ　執筆

平成二十七年一月　十一日首
平成二十七年三月二十七日尾（文音）

歌仙『男の子なり』

大久保風子捌

男の子なり手筒花火の降りそそぐ　谷口螺々子
　仕度はしかと藍の腹当　田中安芸
学問に少し飽きたる目を窓へ　今富千辺
　人差指に煙くゆらせ　仲本お池
月落ちてプラネタリウム大回転　山中主水
　赤とんばうは竿の先なり　半田有杜
糸瓜（ウ）水美白御殿はロココ風　小林喜一
　嵐の門に君のTシャツ　井田瑞亭
その吐息うけて立ち去る後朝に　大久保風子
　戸棚の奥の苦き青春　お池
冬晴の波上にのぼる望の月　瑞亭
　今日は発つ時差羽群れたり　安芸
サーベルを掲げ衛兵直立す　有杜
　狂つたままのパイプオルガン　螺々子
ひたすらにゴッホゴーギャン描く絵を　安芸
　立派なヒゲも時代遅れに　主水
故郷を薄く染めたる桃の花　喜一
　風船に乗り山の向かうへ　有杜
直（ナオ）会にお神酒なみなみ勧め合ひ　瑞亭
　袂にそつと握りこぶしを　お池
とうとうと自説述べたる裁判所　螺々子
　あの日あの時あの夏薊　安芸
きらめきの稜線遥か箱眼鏡　お池
　スマホかまへる若きカップル　瑞亭
老いらくの恋に溺れて前頭葉　有杜
　冬将軍は固く抱きしめ　安芸
初詣毎年違ふ人と行く　有杜
　店を閉めたる角のしるこや　千辺
関所よけ杣道急ぐ月の舟　風子
　鬼の捨子のちちと鳴きたり　お池
冬（ナウ）隣り耳鼻科通ひに明けくれて　主水
　尿する犬はあたり見まはす　お池
首都圏の電信柱地下に入り　喜一
　家系図からは英国人も　安芸
今生の花よ一期の花の時　螺々子
　またもや隠れまたも逃げ水　執筆

平成二十七年八月一日首
平成二十七年八月二日尾
（於・八ヶ岳さんどりよん）

短歌行　『わき道へ』

今村苗捌

わき道へそれればここも蕎麦の花　　今村　苗
　草雲雀鳴く畠に石塊に予算不足し　　猪飼たかし
月今宵窯焼ピザを六つ切りに　　古谷裕子
　高笑いする客の小話に　　苗
芸人が見事射止めた文学賞　　し
　目立たぬようにサングラスかけ　　裕
ヨットにはちょっといかした女乗せ　　苗
　会話の隙間吹き抜ける風　　し
教会が空を鋭く切り取って　　裕
　老いし乞食犬と世を古る　　苗
花浴びて魑魅魍魎の酒の舞　　し
　春の夢見るアロマセラピー　　裕

山の辺の道を辿れば抱卵期　　苗
　遺跡調査に予算不足し　　し
長靴で自転車に乗る老学者　　裕
　同じフレーズ鼻唄にのせ　　苗
独立か帰属かスコットランド燃え　　し
　飛距離のばしたローリー・マキロイ　　裕
歌留多会果てて明るき月の道　　苗
　初神楽まで誘い誘われ　　し
かりそめの逢瀬となりし甲羅蒸し　　裕
　軒の暖簾は粋な藍染　　し
大甕に活けたる花の横に坐し　　苗
　霞の中に鶯の声　　裕

平成二十七年九月十五日首尾

（於・港区ばるーん）

歌仙　『捨つるべきもの』

鈴木美奈子捌

捨つるべきもの数へつつ年暮るる　鈴木美奈子
しかと確かむ薄きボーナス　松田ぼくる
煮凝は塗箸の間すり抜けて　登坂かりん
訛もよろし交はす挨拶　奈
飛び入りもありて施設の月の宴　る
懸崖の菊手直しの祖父　ん
バロック（ウ）の窓に流るる秋小寒　奈
日曜画家はけふもお出まし　る
いつもより眉の描きかた念入りに　ん
ドヌーヴのやうに高く組む脚　奈
ご存知かＬＧＢＦてふ恋を（＊）　る
イノベーションもリノベーションも　ん
夏の霜繰り言包む小風呂敷　奈
わが行き先をしめす斑猫　る
無駄多きオリンピックの空騒ぎ　ん
バイリンガルの朝寝むさぼる　奈
花の渦光と闇にゆらめいて　る
ふらここの子に笑まう佐保姫（ナオ）　ん
春愁のインテリジェントビル殖えて　奈
暗号はみな８桁で決め　る
気をつけろおれおれ詐欺のその電話　ん
お喋りによく停まるパトカー　奈
師走市ずらりと朱き鷹の爪　る
終相場の手締めでたく　ん
初弁天妬まれぬやう目を伏せて　奈
私のジゴロかけ持ちかもね　る
健さんに似てる男が理想なの　奈
至れり尽くせり女看守（ナウ）が　ん
月沈む陸行水行安心院（あじむ）郷　奈
紅葉山ゆくヒッピー老人　る
青鬼が猿酒呑むところ見た　ん
おもてなしてふ此の国の技　奈
無駄多きオリンピックの空騒ぎ　る
バイリンガルの朝寝むさぼる　ん
花の渦光と闇にゆらめいて　奈
ふらここの子に笑まう佐保姫　る

＊ＬＧＢＦ（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・フリーセックス）

平成二十七年十二月十五日首尾
（於・港区生涯学習センター）

歌仙『名残雪』

生田目常義捌

昨晩は名残雪てふ甲斐の人　生田目常義
　ビジネス街に芽柳の色　功刀太郎
鷲の声そろそろと待ち兼ねて　今村苗
　濃い珈琲を舌にころがす　佐藤澄江
有明の月山際に浮び出る　〃
　漸寒の町急ぐ配達　苗江
亡き父にまづ供へんと新走り　苗太
　古びし門の格高き寺　苗苗
ふたりとも留学先がハーバード　苗江
　意外な女の不意の訪れ　苗義
僅かばかり貢がれたのが腐れ縁　苗苗
　書きたてられてやめる代議士　苗江
木の椅子の二三脚ほど夏の霜　苗太
　葦簀の陰に眠る黒猫　〃
バザールにメソポタミアのコイン売り　苗苗
　男乗り来る錆びた自転車　苗義
岬まで花の並木をくぐり抜け　苗苗
　遍路の笠に墨の香のたち　苗江
嘩(ナオ)りに誘はれたるか試歩の杖　江太
　鬼ごっこの子急に飛び出し　〃
輝きを増して野末に宵の星　義苗
　横綱めざす夢をひそかに　苗太
息白く日本語教師はりきりて　太江
　冬帽の下ほっぺ愛らし　江苗
恋歌をくちずさみつつバラライカ　苗〃
　窓硝子拭き淡き青春　〃江
いっせいに鳩の飛び立つロータリー　江苗
　ピザ焼く匂ひ風に運ばれ　苗太
天狗われ月の盃岩鼻に　太義
　遠くぽんぽん威銃聞く　義〃
林檎剝(ナウ)く母の手つきはまだたしか　〃苗
　メールで届く便り度々　苗太
海峡を抜け行く船にヨーソロー　太苗
　辞書虫眼鏡いつも放さず　苗義
花の山みなに挨拶は和やかに　義苗
　もつれつつ舞ふ二つ蝶々　苗江

ナオ11句目上五「天狗干す」より
平成二十八年三月十五日首尾
（於・東京港区ばるーん）

歌仙　『おどけし羅漢』

古谷裕子捌

道の辺のおどけし羅漢草萌ゆる　裕
　寺領の彼方麦踏の影　奈
雛飾り少女の頃にもどるらむ　希
　ぽろんぽろんと叩く鍵盤　澄
満月は高層ビルの真中にて　江
　忘れ団扇にしゃれた川柳　速藤尹希子
着任（ウ）の上司に新酒提げてくる　古谷裕子
　パイプ咥へて気障には見えず　鈴木美奈子
お局がわざと残業申しつけ　希
　いぢりいぢられはや始発まで　澄
宇宙よりときめきに似た波の音　澄
　また夢つなぐ真直なる眸よ　希
逆転のスクラムトライラガーマン　奈
　月を掠めて寒鴉翔ぶ　澄
甘かった安倍も此の度持ち直し　裕
　きなこあめ買ふ飛騨の高山　奈
からくりの出入りに花の舞ひ散りて　希
川を越えゆく黄蝶白蝶　澄

足元（ナオ）に広がる景の朧なる　裕
　幕末志士の秘めしやさしさ　奈
母よりの文ふところに恋ふ故郷　希
　宅急便で届く甚平　澄
河童の画好きで描きし龍之介　奈
　眠れぬ夜はミステリー読む　裕
そんなこと知りつつ惚れた筈なのに　澄
　なさぬ仲なる彼の子育てて　希
珍しき象の絵葉書インドより　裕
　神の御遣敬ひし民　希
六方を決めて助六月に喝　奈
　秋の蜂酔ふお酢の匂ひに　澄
旅（ナウ）の荷を小さくまとめて送南風　奈
　喜寿の祝ひにラメ入りの杖　裕
エンディングノートコミカルリズミカル　澄
　抹茶一服弾く三味線　希
山際の明るくなりし花の庭　裕
　たんぽぽの絮ふはりふはりと　奈

平成二十七年二月十七日首尾
（於・港区生涯学習センター）

『ショートカット』

半歌仙　功刀太郎捌

銀座裏ショートカットの柳かな　功刀太郎
　ゆっくり路地を抜ける親猫　今村苗
獲ってきた浅蜊蛤選り分けて　中島陽子
　テレビつければちょうど大喜利　太郎
黄ばみたる資料の届く月の窓　苗
　お夜食ですよ二階から声　陽
芸術祭現代アート部屋を占め　太
　尼僧としての勤めおこたり　陽
始まりは寝ても覚めても彼のこと　苗
　酒とタバコの日々は流れて　太
潜望鏡上げてイエローサブマリン　陽
　想い出探す仕事繁盛　苗
夕月に夏やせの身を寄せてみん　太
　妙になつきし藪蚊数匹　陽
百歳の水泳選手新記録　苗
　弁天様の急な石段　太
花道の飛六法に年惜しむ　陽
　手袋とって拍手喝采　苗

平成二十七年四月二十一日首尾
（於・港区生涯学習センター）

歌仙『新橋に』

新橋に三時の汽笛雪晴れて　林　転石捌
　路地に聞こえる寒弾きの節　古谷裕　子
裾模様今の流行りを型染に　鈴木美奈子
　戸をくぐり抜けじゃれかかる猫　林　転石
月光をあつめて青き硝子瓶　裕
　団栗の実は床に転がし　奈
過去(ウ)を捨てゆるりと詠う秋思の賦　石
　手を取り合うて越えし国境　奈
南南西風見の鳥の指す行方　裕
　にじるヒールは細く尖って　裕
にっこりと笑った後に効く嫌味　奈
　けふは呑まんと酒を奨める　石
バスを降り柿の木坂に月涼し　石
　汗の素振りがフォーム固めて　奈
秘伝ゆえもらすべからず師の遺訓　裕
　殴打にひるむ一方の頬　石
野晒しの眼窩に花の降りそそぎ　奈
耕し人が掘りし金印(ナオ)夢十夜　裕
　旧きノートにアンネフランク　石
王制を論じ啜るはヴァン・ホーテン　奈
　自由と孤独背中合わせに　裕
刑期まだ幼なじみは冬の獄　石
　枯蟷螂は鎌を研ぐべし　奈
お連れさまなどと呼ばれてやに下がり　裕
　金も女も俺を助ける　石
スロットル吹かせランボルギーニ行く　奈
　おばあ見つめる普天間の柵　裕
だちびんを抱える浜に月白く　石
　蔦竜胆は絡み縺れる　奈
村芝(ウ)居お嬢の役を取り合って　裕
　郵便局は早じまいする　石
マイナンバーその使い道分からずに　奈
　アナログが好き算盤が好き　裕
天ぬきをたのむ蕎麦屋に花の庭　石
　川渡りくる風のやわらか　執筆

平成二十七年一月二十日首尾
（於・新橋生涯学習センター）

歌仙『霧ごむ雨』

朝よりの霧ごむ雨や冬隣　北原春屏
　元気にはしやぐ淀の初鴨　長尾信子
行く人の影もさやかに月出でて　丸山景子
　山の麓の小さき村里　高岡風蘭
屋根替は結の作業で手際よく　出来千苑
　干鱈たいた匂ひ甘辛　井尻荷葉
職（ウ）を辞し豊かな時間炭をつぐ　風蘭
　暗証番号彼に教へて　春屏
新聞に婚活詐欺の顔写真　荷葉
　般若心経諳んずる声　風蘭
ポリ袋くしやくしやにして猫遊ぶ　信子
　草間彌生の赤き水玉　春屏
お気に入りネクタイ風にひるがへし　品部三酔
　つい過ごしたる薩摩焼酎　上田真而子
旅の宿見上げる滝の上に月　井原弦
　大家の描く天井の龍　千苑
古木咲き花の妖精微笑めり　〃
　眼鏡を換へて散歩うららに　風蘭
井尻荷葉捌
染（ナオ）卵探しあぐねて泣いたつけ　真而子
　流行病の脅威迫りて　千苑
毒盛つて殺して嘘で塗りかため　春屏
　ダム建設で水没の郷　真而子
鐘凍てて茶店の姥は店仕舞ひ　千苑
　狐の親子野原よこぎる　景子
道行に義太夫語り切々と　風蘭
　ベアトリーチェは永遠の女　荷葉
蜜垂るるやうな顔して呼びかくる　春屏
　土産物売る港にぎやか　三酔
満月の石畳さへ顕らかに　千苑
　二百二十日も無事に過ぎゆき　春屏
ゆ（ナウ）つくりとめぐる古町昼の虫　景子
　山盛飯にマヨネーズ掛け　真而子
上京はいづれ富豪を夢にみて　風蘭
　出世魚にもこだはりてをり　千苑
花万朶米寿白寿の酌み交はす　三酔
　子の影はるか草萌ゆる土手　景子

平成二十六年十一月一日首
平成二十七年二月七日尾

（於・京新山）

歌仙『空摑み』

高岡風蘭捌

空摑みひらかんとする辛夷かな　長尾信子
　万物育て降る春時雨　井尻荷葉
初鮒を釣り上げ親爺得意気に　上田真而子
　なみなみと注ぐ地酒かぐはし　丸山景子
明月を胸に抱きて熟睡せん　北原春屏
　籠の鈴虫羽を震はす　品部三酔
わくわくとやや寒の旅切なさも　高岡風蘭
　行きずりの仲あすはいづこに　出来千苑
されば此家の前までストーカー　春屏
　ドアのロックが大惨事呼び　真而子
アルプスの牧場に響く山羊の声　荷葉
　湖畔の宿はいつも静かで　井原弦三
雪煙あげて近づく人の影　酔
　月を肴におでんは大根　荷葉
みそなはすお薬師さまのにこやかに　真而子
　異国ことばを聞き分ける癖　千苑
さまざまに皇居の花を賞づる班　風蘭
濠あざやかに春の夕焼　信子
マネキンのパステルカラーうららけく　弦
　痩せ過ぎモデル雇ふ罰則　千苑
玄関の魚眼レンズに間延び顔　春屏
　動物型のパンの焼きたて　弦
阪急と国鉄の間吹流し　信子
　青田を分けて風のそよそよ　三酔
管弦で舞ふ仏らの浄土界　風蘭
　狩野派展に恋の絵はなく　春屏
若き日の胸に英文ラブレター　信子
　生涯離さず写真ともども　三酔
レモン月亡妻に似て見飽きずに　千苑
　桔梗一輪竹筒に挿し　弦
産土に感謝を込めて今年米　〃
　鈴をりりに巫女のやさしさ　景子
吾を知つてゐるかに鳥が寄つてくる　春屏
　やうやく癒えて明日は床上げ　真而子
花の雲山辺も河岸も包みこみ　荷葉
　亀のお散歩のどかなる午後　千苑

平成二十七年三月七日首
平成二十七年六月六日尾

（於・京新山）

歌仙『原爆忌』

平成二十七年八月六日首
平成二十七年十月十八日尾
（於・ハイライフプラザ板橋）

鵜飼佐知子	捌
朝倉和子	たっぷりと井戸水を汲み原爆忌
安楽明郎	猛暑の続く弓なりの国
鵜飼佐知子	藍染の縞の浴衣を着こなして
三浦康子	やんちゃな子等を追いかける母
〃	月今宵葉蔭をくぐる風のあり
和子	電線ゆらし並ぶ椋鳥
康子	温(ヌ)め酒待つ間も弾む里訛り
〃	かやぶき屋根の宿を抜け出す
佐知子	ヴィーナスは深さの知れぬ藪の先
小田英美子	柔なうなじに歯型くっきり
鈴木壽子	夫の葬人目はばかる男現れ
東海林さくら	あっという間にブログ閉鎖す
壽子	北溟の鯨汐吹く波の果て
さくら	凍つ捨て舟に碧き月光ゲ
〃	老老の介護に夢の宝籤
壽子	味方につけん神も仏も
康子	ドローンの捉える嶺は花盛り
明郎	三段重に入れる草餅
英美子	夏(ナオ)近し竿竹売りの声高く
佐知子	更地ばかりが増える街なか
和子	災害は忘れた頃を見計らう
壽子	腹の虫など宥めすかさん
和子	振り逃げは球児の得意技なれど
明郎	ケニア育ちのイカす韋駄天
英美子	五十年交換日記途切れなく
康子	離婚届は紙飛行機に
壽子	道の駅ちゃぐちゃぐ馬こ後ずさり
〃	東証株価動き激しく
英美子	栗胡桃落ちて裏山暮れなずみ
和子	卒塔婆小町の仰ぐ待宵
明郎	村芝(ナウ)居せりふ忘れて舌をだし
和子	ロボット掃除機ケーブルを噛む
壽子	守り札受け取ったまま抽斗に
英美子	和紙を解いて飾る古雛
佐知子	花の下異次元の門見え隠れ
さくら	蜃楼に浮くのっぽ煙突

歌仙『仁王の眼』

密田妖子捌

仁王の眼避けて軒借る初しぐれ　二羽智子
　枯葉舞い散る長き参道　吉本芳香
留学生住めば都となごやかに　田川利公
　並ぶ和菓子にしばし見とれる　永多澄枝
月の夜のロケット談議きりもなく　谷本綾子
　来る鳥あれば帰る鳥あり　多田史代
二重窓付けて書斎の冬仕度（ウ）　密田妖子
　ひとり娘を嫁ぎゆかせて　高見よ志子
羨望の的です喜寿のフラダンス　瀧澤尚子
　舶来物のルージュ・ペディキュア　北野眞知子
素描帳遊ぶ姿の孫ばかり　宮村千鶴子
　津波予報に尖る神経　藤江紫虹
異次元と紛うがごとき夏の霜　芳香
　辺りいちめん匂う梅干し　智子
観光客貸し自転車を連ね行く　澄枝
　昔のままに残る町並　利公
ブランデーグラス傾け花の下　史代
あっけらかんと忘れるも乙（ナオ）　綾子
　しゃぼん玉この世のことを七色に　よ志子
詐欺師の舌をひっこ抜きたい　妖子
駅弁の御飯にのせる鶏そぼろ　眞知子
　部活帰りにちょっと脇路　尚子
雪吊と友禅流し写メールで　紫虹
　ゆったりと着るモヘアセーター　千鶴子
恋知りし胸探らるる聴診器　智子
　私狂わすしなやかな指　芳香
故郷の山河にいつも癒されて　利公
　テレビ聞きつつ開く新聞　澄枝
お隣も観天望気月を待つ　よ志子
　団扇忘れる四阿の隅　史代
村（ナウ）芝居主役はいつも庄屋さま　妖子
　順風満帆人生の船　眞知子
戦へと傾ぐ政治は大嫌い　尚子
　元気溌剌子らの合唱　千鶴子
爛漫の花へ繰り出す御所車　紫虹
　睦び戯れ双つ蝶々　芳香

平成二十七年　十月二十三日首
平成二十七年十二月　三十日尾（文音）

歌仙『四畳半』

涼新た長編を読む四畳半　恭子
　風もやさしい月の文机　文子
小鳥来る友の便りをたずさえて　七兵衛
　猫好き同士いつか自慢に　暁吉女
ポケットにいつも忍ばすビスケット　文子
　滝を狙ってシャッターを切り　恭子
ッ晴れ渡り鉾巡行の稚児凛々し　七兵衛
　歴史を語る老舗看板　暁吉女
型破り恋に奔った末娘　文子
　同性婚を決意する朝　恭子
払っても貧乏神に魅入られて　暁吉女
　手拭一本ネタは百(もも)あり　七兵衛
月白く屋台の蕎麦と熱燗と　文子
　駅舎の軒にずらり銀竹　恭子
角に丸記念スタンプ隅っこに　七兵衛
　着ぐるみキャラに人の集まる　暁吉女
戦争を知らない子らへ花吹雪　文子
　ひいふうみいと紙風船を　恭子
ナオ命綱信じて潜る海女の意気　文子
　僕には君はアフロディーテよ　七兵衛
幸せも涙もくれた夢の日々　暁吉女
　ガラスの窓を曇らせる雨　文子
腕の良い私立探偵忙しく　恭子
　隠れて食べる氷金時　七兵衛
ちょー怖い汗のコーチの怒鳴る声　暁吉女
　松葉杖には埃うっすら　恭子
代休は太公望を決め込んで　七兵衛
　いたずらっこの妖怪が来て　暁吉女
鐘の月破戒坊主の双面　文子
　五右衛門風呂で威銃聞く　恭子
ナウ冬仕度終えてくつろぐ山の宿　七兵衛
　先端技術知恵の戦い　文子
一幅の濃淡たくみ水墨画　暁吉女
　意外な人が芥川賞　七兵衛
半世紀花豊かなる国に住み　恭子
　城の曲輪を乱舞する蝶　文子

八尾暁吉女捌

平成二十七年八月二十七日首
平成二十七年九月　十四日尾　（文音）

《東京・でこん座》

百韻『えごの花』

えごの花天使は帽を脱ぎ捨てて　木之下みなみ
細道進む下闇の中　今泉良一
終電車へのへのもへじ窓に描き　表ひろ
何もしないで過ごす休日　松澤龍一
メール来る幸せ家族添付され　良
眠いシャム猫膝を欲しがり　み
窓開けて月の雫に濡らす指　龍
昼鳴く虫に箸をとられる　ろ
ゥじいちゃんはよせばいいのに松手入れ　み
地図を広げて空想の旅　良
五輪とやイエローキャブのお目見えに　ろ
長い喇叭がスタンドに鳴る　龍
墨色に外苑浮かぶ薪能　良
もう外したらそのサングラス　み
夕涼み手を握っても良いですか　龍
セシルカットの君の思い出　ろ
英語力発揮して売る電気街　み
メイドカフェーを照らす寒月　良
落葉焚く今ひとときの安らぎに　ろ
命の炎滾る坩堝へ　龍
花あらし手配写真のあの男　良
思い出だけが陽炎いてゆく　み
二オ水切りの石の行方に土匂う　龍
流行り麺麭屋の朝の賑わい　ろ
キッチンの隅に小さな味噌の壺　み
ジャズボーカルに揺れる燭の灯　良
てっぺんで愛を告白観覧車　ろ
他人のふりで抜ける改札　龍
仄暗き人影迫るガード下　良
月も私もいつも逃げ腰　み
がちゃがちゃを掴んで入れる頭陀袋　龍
戯れに寄る夜長のダーツ　ろ
眠れない膝が伸びたり縮んだり　み
プシュッと切れる古いパソコン　良
挨拶をかわし掃除を始めたり　ろ
次から次へ零る山茶花　み
二ウ民宿の風呂場にぬっと熊の首　龍
老舗のカレー古書街で食う　ろ
見渡せばカンパネルラの音響き　良
アニキと慕う美しき少年　龍
わたくしの男嫌いが解せぬとは　み

繰り返し読む前妻の文　ろ
境内のラジオ体操裸の子　龍
草原に寝て夏月を待つ　良
酋長の二胡の調べのもの悲し　み
マイナンバーに不安煽られ　ろ
瞬きの街のネオンに口づけを　ろ
物静かおでこだらけの船の中　良
ダブル不倫をそっとフォーカス　良
海女のバイトはスーパーのレジ　龍
機嫌良き妻の言動あな怖し　龍
水色にみづいろを足し花の笑　良
凍月担ぎ踊る人影　み
野遊びの子に贈るバラード　ろ
箱根の森に昇る白煙　ろ
ぉぶらんこの立ち漕ぎ空へ弾かれる　み
へたへたと住まいにもどる雪の朝　龍
温泉の落款押さるお饅頭　龍
カップ麺でも食べて寝ようか　良
呑むだけ呑んであとは爆睡　良
民宿の家鳴りの続く八畳間　龍
酔い覚めのレノンの歌が遠ざかる　み
鍵の壊れた木造りのドア　龍
レコード針は今も買えるの　ろ
花万朶貝塚遺跡はどこですか　ろ
暖炉燃ゆ三時を告げる鳩時計　み
小鳥笑えば私も笑う　良
月の砂漠を奔る狼　龍
一日に一本のバス姫菫　龍
韋駄天を母に賜りインターハイ　み
早稲田通りをデモの隊列　ろ
至福の言葉待ちにまったり　ろ
煎餅を半分に分け読むニュース　み
なに切ろか鳥のかたちをした鋏　良
シナリオ通りいかぬ人生　龍
じゃんけんぽんはグーで勝たなきゃ　龍
岡惚れをするのはいつも妻子もち　良
朧月サーカス団に連れ去られ　ろ
思わぬ人に思い告げられ　ろ
春の岬に巨船見送る　み
おめでとう可愛い雛が生まれたよ　龍
テレビ電話にうからはらから　龍
積読の山へどこから登ろうか　み

至る所に介護あふれて

雨しとど壁の向こうとこちら側

煙の出ない電子たばこを

新宿の四角い空を鳥渡る

ムーンライトに跳ねる人影

露（ナウ）光るビニールハウスに育つもの

青汁一気腰に手をあて

霊峰に天辺ふたつ目をこする

日本沈没近い将来

セスナ機の車輪しまわず急上昇

春あけぼのの夢でよかった

逝きし人花、花、花の雲に乗り

風船飛ばす香り立つ空

良龍み良ろみ龍ろ良龍み良ろ

平成二十七年五月十一日首

平成二十八年二月十九日尾

（於・吉祥寺駅前カラオケ「ビッグ・エコー」及び文音）

歌仙『角に立つ』

浅野黍穂捌

角に立つ金木犀や道しるべ　光風
　友と盃かわす名月　洋
風に舞う煤にむせつつ秋刀魚焼く　黍穂
　石垣におく川舟の棹　光風
読み耽る推理小説冬籠　洋
　新聞配達霜の踏む音　光風
世の中の変化の速さ追いつけず　黍穂
　誰に似たやらできちゃった婚　黍穂
無視されているキスデューク・カハナモク　光風
　潮のざわめき目を閉じ感ず　洋
盛り上がる怪談尻目に厠行く　黍穂
　芸道厳し夏の狂言　光風
夕立あと仰ぐ高嶺の丸き月　洋
　オープンカーで走るハイウェイ　黍穂
楽しみは目的地より休憩所　黍穂
　天神さまに寝牛四頭　洋
古城址の花の大樹は真っ盛り　光風
春塵烟る西風の街　黍穂
雛の客五色のあられ小さき手に　光風
　ハイファイに凭りフルートを聴く　洋
盗難にマンション理事として呼ばれ　黍穂
　ウリはこれです杭のたしかさ　洋
凍鳥の水辺に三羽身を寄せて　光風
　ショールに覗くかたちよき鼻　黍穂
「おい」と「はい」おもいが通う仲の良さ　黍穂
　新婚旅行再現の旅　光風
背景に置く志賀島豪華船　黍穂
　町工場から世界動かす　洋
月のほるポニーランドの遊園地　黍穂
　黄色鮮やか大輪の菊　光風
秋嶺を描くイーゼル立てており　洋
　寝ても覚めてもゴルフ離れず　光風
肩鞄ゴツンと当てて気がつかず　黍穂
　発車のベルで景色が変る　洋
人数多花のトンネルはてしなく　光風
微かに手帳濡らす春雨　黍穂

平成二十七年十月十八日首
平成二十七年十一月十五日尾
（於・福岡・行動医学研究所）

歌仙『年の瀬や』

年の瀬やショーウインドに若き声　湖
　ポインセチアの並ぶ店先　和
芸人の受賞作品ひもときて　壽
　株多く買ひ上場を待つ　や
山の端を金にかがれる月の出に　和
　籠はづせばゆれる灯　富士登山
ウ地芝居のきりなく励む稽古場の　湖
　宇宙船より無事に戻りぬ　のおと
ことことと豆を煮含め君好み　湖
　おさげの髪のあどけなき顔　パンの
留学の夢はひたすら自立へと　や
　月や星にも祈る短パン　ゆれる胸
片足でポーズ取つてる羽抜鳥　和
　予防注射でべそをかかない　学ぶ逢引
相撲とる怪童たちは楽しげに　壽
　目玉親父も一家言喝　ぞプロポーズ
花筏風やはらかに湖のほとり　や
　ボートレースをやんや応援　の漂ふ
ナオ目へ鼻へ容赦なく入る春埃　湖
　合戦崩れ碁石あちこち　文机
算盤で数を足したり引いたりし　和
　物忘れなく元気ばんざい　なる
冬嵐根性ためす富士登山　壽
　喜びにぬくシャンパンのおと　図
選挙権十八歳のゆれる胸　や
　知恵者の猿に学ぶ逢引　秋草
くちべたも想ひもぞもぞプロポーズ　湖
　碗の中には磯の漂ふ　揃ひて
月代に墨の香匂ふ文机　和
　残る暑さの大広間なる　福あふれ
ナウあでやかに琳派の絵師の秋草図　壽
　お宮参りは両家揃ひて　映画観賞
自然体の人の周りは福あふれ　や
　三次元にみる映画観賞　きぬ花朧
本丸の幻めきぬ花朧　湖
　丘にのぼれば陽炎の街　の街
くのあや捌　和

平成二十七年十二月十六日首
平成二十七年十二月二十八日尾
（於・ホテルルブラ王山）

源心『のびやかに』

のびやかにガラス窓拭く師走かな　長谷川芳子
日差しやはらか蝦蛄葉仙人掌　中森美保子
野良猫の丹精の庭横切りて　波多野茂子
ころりころがす古い謨謨毬　青島ゆみを
有明に仲間つどひて太極拳　保
プロポーズ受け今年酒のむ　芳
抜き襟に心惹かれる霧の中　を
修道院は山の懐　茂
足踏みのオルガン音がすこしずれ　芳
発表会の笑顔はじける　保
突然の問ひにとまどふ親子連れ　保
平和にかけたぼくの生涯　茂
花の下哲学の道いくたびか　を
耳をくすぐる亀の看経　保
楽焼の碗のぬくもり茶事の膳　を
宴のあとは雨がざあざあ　茂
新しいハザードマップ配られて　芳
軍手とマスク非常袋に　保
ほほえみてすれちがひたる長廊下　保
ふつと呟く君が好きだよ　茂
バイロンやハイネの詩集愛誦し　を
颯爽と行くキャリアウーマン　芳
東に夏の月上げわが故郷　を
守宮のまもる剥落の家　保
熨斗袋諭吉一枚しのばせて　保
ノーベル賞へ夢は大きく　芳
MRJ飛び立たんとす花の頃　を
かなたに見ゆるかぎろひの丘　保

平成二十七年十二月　十六日首
平成二十七年十二月二十八日尾
（於・ホテルルブラ王山）

歌仙『煮大根』

宮川佻子捌

つつがなく齢重ねて煮大根　宮川佻子
雪しんしんと積もる山の辺　松尾博雄
仲良しの児らは渾名を呼び合つて　武村利子
校門横に植えし記念樹　中西静子
望の月いそぐ家路にぽつかりと　雄
しだいに近く虫の鳴く声　佻
若衆（ウ）のひと息をつく村芝居　佻
恋の鞘当てイケメンの彼　利
すれちがふ女課長はさりげなく　利
法事の寺に参拝の客　静
救急車右に曲つた何処だらう　雄
エッフェル塔はどこまでも伸び　佻
汗を拭き急ぐガイドの後に蹤き　佻
月の明りに夜店楽しむ　雄
新しく父が選んだ赤い靴　利
ハミングしつつ軽くステップ　静
酒坏にひらり花びら舞ひおりて　佻
流れ豊かにのどかなる川　雄
復活祭（ナオ）奉仕の心分かちあふ　佻
爺の撒き餌に鳩の群来る　静
彫刻のずらり並んだ歩道沿ひ　雄
ゲゲゲの鬼太郎今も生きづく　佻
楷の宿昔話をする主　静
柚子湯どつぷりつかる傷あと　利
原発は再稼働へと動き出し　佻
悩んだ末の婿の決断　雄
相聞歌口説上手についとのり　利
月の世界へかぐや姫去る　静
侘しきは芒が原にすさぶ風　佻
犬も猟師と初猟を待つ　雄
娘（ナウ）からゴルフ用具をプレゼント　静
広告に載る旨い料理屋　利
正面に弁財天の在します　佻
沖は遥かに見ゆる逃水　雄
淡墨の花守となり半世紀　利
ソファーに凭れ夢の永き日　静

平成二十七年十二月　十六日首
平成二十七年十二月二十九日尾
（於・ホテルルブラ王山）

歌仙『武家屋敷』

大山とし子捌

石蕗咲くや生垣長き武家屋敷　大山とし子
　思ひもかけず湧くは綿虫　佐々木リサ
子育ても一段落の気安さに　井上千代子
　ラジオ講座を熱心に聞く　西幾多
銭湯の煙に燻さる望の月　小出民子
　新酒を下げて友はご機嫌　大竹多可志
大黒（ウ）は後の袷を着崩して　早田維紀子
　世の常なれど縁は異なもの　幾多
行きずりのひとと目の合ふエアポート　たみ
　人魚の歌に迷ふ子の刻　多可志
御簾の内夢か現か抱かるる　維紀子
　風さやさやと渡る笹群　幾多
ケータイも届かぬ峡の瑠璃鶲　千代子
　瓜盗人が月にためらふ　とし子
恥多き過去をさらりと自分史に　リサ
　全部捨てても悔いの無い年齢　幾多
花のもと踊り上手が囃されて　たみ
　苗代祭水に影置く　民子
味噌（ナオ）かつに独活和添へて饗すらん　維紀子
　養生訓を壁に貼りつけ　リサ
問ひ直すアベノミクスと選挙法　とし子
　何を言つても聞き流す猿　リサ
虎落笛一集落を過ぎりたる　たみ
　異国暮しに褞袍持参す　千代子
左前そっと直してくるる人　民子
　隠しておけぬ恋の顛末　千代子
元彼と元親友の新所帯　維紀子
　籠のインコがまたも飛び去る　リサ
後の月遠くなりたる思ひ出も　幾多
　子規庵の庭糸瓜ぶらぶら　維紀子
旧（ナウ）仮名で便り書きゐる明治節　とし子
　劇画作家を目指す若きら　たみ
ニューヨーク街に物の怪現はれて　維紀子
　缶酎一（ハイ）に酔へる須佐之男　民子
天空の城を埋めて花吹雪　リサ
　ロケ隊迎へ町のうららか　幾多

平成二十七年十一月二十九日首
平成二十七年十二月二十七日尾

（於・墨堤庵）

歌仙『卒寿の母』

秋うらら卒寿の母の手毬唄　佐々木リサ捌

紅葉彩る散策の径　大竹多可志
月昇りお茶事始まる刻ならん　佐々木リサ
静かな園に動く人影　小出民子
地下道を抜けて高層ビル街へ　西室允恵
冬至南瓜をほつこりと煮て　大山とし子
若き等と声の華やぐかるた会　井上千代子

ここぞとばかり見せる良いとこ　リ
イケメンも今や三児の父となり　た
工夫凝らした愛妻弁当　允
再発のぎつくり腰もなんのその　チ
羽生結弦の意地の復活　と
聖堂に冬満月の皓々と　た
囲炉裏を囲み半歌仙巻く　リ
ひとり酌む銘酒の香り殊の外　チ
仔犬に好かれつひに飼ふ羽目　允
初花に話しかけをる桜守　チ
遠足の列じよじよに延びゆく　と
大空に吸はるるやうにいかのぼり　允
丸いポストの残る五箇山　と
吊橋の補修工事に汚職の手　チ
枝の鴉がカワカワと鳴く　リ
イスラムの処刑の報に肝ひやす　た
お化け屋敷にバイト誘はる　允
夕立に濡れて昂まる恋心　と
白無垢姿親に見せたき　チ
祝福の鐘に送られ船の旅　リ
古きロマンの流行るこの頃　た
名台詞決まる瞬間月も出で　と
吹き抜けてゆく爽やかな風　允
糞虫のゆらりゆらりと昼下り　チ
ちよつと気になる国の成りゆき　リ
どつぷりと浸る平和の有難く　た
駅のホームにふはり初蝶　と
きりもなく先師の句碑に花吹雪　チ
海見はるかす陽炎の丘　允

平成二十七年一月六日首
平成二十七年三月一日尾（文音）

《東京・刀水の宴連句会》

歌仙『マフラー』

岡田夢女捌

時代(とき)暗しせめてマフラーはなやかに　夢女
　足音高く歩む冬晴れ　秋生
静寂(しじま)守る広き海面(うなも)はたいらかに　朝柄
　塵ひとつ無き稽古場の床　秋日
月の夜の影うすうすと流行り歌　眼目
　零余子(むかご)を採りて友をもてなし　太里
ウ古酒ありて手にとってみるミステリー　生方
　ワルツで送る恋のおわりを　孝坊
久し振り明日逢えるねバルセロナ　矢野
　恵みにむせぶ夢の幻　徳三郎
住職の真っ赤な車半夏生　尾形
　月をたよりの蒸し暑き街　弥生
世の愚痴を聞き流しつつウオーキング　吉田
　おお我が母校消えてゆくのみ　けいこ
並木道未来の進路胸に秘め　利根川
　ふらここ揺らす十代のママ　太郎
花の枝若侍に背負わせて　田島
　何処へ行くのか青き風船　呑空
彼(ナオ)のひとへ思いかくして夕餉へと　夢
　私はひと(ヒト)気(ケ)なき盛り場と化し盆の月　柿
漱石を語り心乱れつ　生
　坊ちゃん宮司鳥居前掃き　麦
雪空に知床の野の果てを見し　秋
　水鳥も寄る過疎の湯治場　日
連衆は病(ヤマイ)の話つぎつぎと　里
　真珠の玉を糸でつらねて　空
チンジャラとパチンコの音面白く　夢
　高きとまり木おつまみの味　柿
人気(ひとけ)なき盛り場と化し盆の月　麦
　やさしさの果てすぎしやや寒　日
母(ナウ)植えし残菊の咲くあちらこち　里
　せめてを偲ぶこわき先生　空
雨合羽着せた子犬と美老人　呑
　うららうらと今日を楽しみ　夢
花便り故郷の山目の裏に　柿
　ベンチに坐せば暮遅きかな　麦

平成二十七年十二月十三日首尾
（於・たまプラザ・尾形邸）

《東京・稲門連句会「西北の風」―その一》

歌仙『人気なき』

人気なき魚河岸の午後都鳥　　白石一有
　逆白波に雪の一刷　　佛渕雀羅
少年は新書にNとしたためて　　伊藤哲子
　階段降りる音の軽やか　　鈴木ちかひ
月照らす道場に弓引き絞り　　渡部春水
　里山に咲く大輪の菊　　赤澤水魚
ヴかかしとてブランドものを纏う世に　　安楽明郎
　けんけんぱーで乙女寄り来る　　松澤龍一
恋愛の呪文に彼の目は虚ろ　　水魚
　ビルの谷間にともる易の灯　　松澤あしび
明けくれを労われつつ懐炉貼る　　増田喬子
　修復の成る天井の竜　　春水
鳴かぬなら鳴かせてみよと殿の下知　　高山鄭和
　魔方陣解け月の涼しく　　西川繭
冷酒の二滴零れて文字になり　　野村路子
　座敷わらしのニヤリ微笑む　　水魚
風かよふイーハトーブの花の山　　繭
法華経胸に臨む耕　　高山英子
ナオ四分の五拍子で打つ春太鼓　　松澤遊人
　自分史なんて書かずに死んで　　路子
遠い街知らない街をひとりゆく　　哲子
　友禅流し川面彩り　　一有
窓際はわが文豪の予約席　　松澤鮎並
　絵硝子に笑む聖母子の像　　西川み寿々
あの声はいつもと違う焼署屋　　中村呆信
　ヘイトスピーチ底冷の街　　松澤可不可
鬼のるす缶蹴りして異次元へ　　坂根遊民
　便箋の白口紅の赤　　鄭和
月の名の変る夜ごとの逢瀬さえ　　喬子
　コオロギとまるマネキンの乳　　龍一
ナウ秋物に社運を賭ける百貨店　　春水
　ライオンの見る草原の夢　　み寿々
渋い苦い漢は嫌い戦争も　　哲子
　転校生が蝶に乗りくる　　あしび
花大樹洞にジュラ紀の波の音　　遊人
　本を閉じれば見える初虹　　坂根慶子

平成二十五年　二月　二日首
平成二十七年十二月二十四日尾

この歌仙は機関紙「西北の風」にて『誌上連句』として毎月1句ずつ治定、36か月掛けて首尾したものです。

《東京・稲門連句会「西北の風」―その二》

稲門祭世 笠着俳諧吉

『百万の』

百万の野人のうたや秋闌くる　伊藤哲子
風に稲穂の匂う昼月　佛渕雀羅
新走入荷と壁に大書して　山地春眠子
跡継ぎの娘は理学一途に　高山英子
空真青ニュートリノにもある重さ　安楽明郎
運河の街にビル続々と　鈴木ちかひ
梅雨寒にぷかりぷかりと浮子(うき)の影　小太刀昌雄
こがれて待つは夏の太陽　松原邦博

ウ先輩の学徒出陣まなうらに　野中信男
心やすらぐわがワセダかな　鷲海量民
がたごとと化石の都電石畳　高山鄭和
紅ひき直す記念樹の下　浅岡照夫
遠い人思い出させる雲の色　山口和生
惚れて通えばいつかイエスに　内田遊民
マイ箸を持参の小屋の薬喰　山本紀人
遭難を避け熊穴に寝ん　櫻田野老
春秋の七十年をさわやかに　鈴木宏治
コスモスを手に笑まう釈迦牟尼　白石一有
満月に立つまでの道険しくて　林原亨
馬車の動きを仔猫見ている　松本功
学舎に人溢れいる花の山　小泉宗孝
ロボット歩く春泥の先　山中土筆

五郎丸全てにおいて二重丸（ナオ）　太田資暁

指関節のこきとルーティン　渡辺柚

ああ今朝も悲しく鳴くか油蝉　渡会哲一

祈る乙女に海の騒立ち（さわ）　森田寛

傾城の泡の粒より現われて　西川なほ

外八文字真似てつっかけ　小林聖子

生足の色に群がるおとなたち　諸江昭旦

夕暮の空何かみつけて　中村哲三

新たなる出会いはじまる月あかり　鈴木綾子

案山子にまでもしてる挨拶　中村呆信

ゴールテープ近づいてくる秋の風　主（とうしん）

ロゴスとパトスにじむ言の葉　坂根慶子

生も死も知らず集える古き顔（とこしえ）　守屋孝

寒気輝く昴永遠（とこしえ）太ろう（小4）　鄭和

炬燵（ナウ）にてひとりごちつつ酒を酌む　功

ここ迄響く西北の歌　信井文夫

濡れたまま博士の馬はゆらゆらと　高原孝

ドンキホーテの夢は虹まで　遊民

薄れゆく記憶の彼方雲流る　黒田幸雄

火を噴く山の位置は変わらず　厚地秀人

敷島の大和おみなよ花大樹　青葉ひかる

一休みするかげろうの前　島田雅雄

平成二十七年十月十八日首尾

（於・早稲田大学大隈庭園）

《東京・稲門会「西北の風」―その三》

十二調　『秋日影』

伊藤哲子

父に似し崩れ羅漢や秋日陰

佛渕雀羅

彼岸花折る月のあぜ道

中村哲三

てのひらを広げる庭に小鳥来て

小太刀昌雄

アンサンブルに風の音聴き

櫻田野老

珈琲は浪漫通りの石畳

渡辺　柚

人力車曳く青年の汗

鈴木ちかひ

ラグビーのボール何処へ飛ぶのやら

西川なほ

いも恋食めば時の鐘鳴り

浅岡照夫

縁ありて男やもめに嫁ぎける

高山鄭和

十九の春に解き放つドア

安楽明郎

やわらかに傘かしげ合う花の雨

松原邦博

旅の始めは土匂う頃

平成二十七年九月二十四日首尾

（於・川越市「カフェ・スピカ」）

和漢行歌仙『打ち水』

端正に水を打ちたる旗亭かな　秘宝使人驚○
　坪庭溢素馨○　優優男欲溺
絹扇開けば青き風立ちて　烈烈女情生○
友の句集を拾い読みする　美哉相対死
　陋巷虫音澄　俗塵離月清○
ウ案山子電動ほほえみかける伎芸天像　ナオ聖霊会墨壺手入れ怠らず
セクハラが怖くて部下を口説けるか　時計の振り子いまや止まりて
夫婦別姓押し切られたり　月めざすジャイロコンパス一筋に
　倭国噴火続　紅葉を愛でる宿のくつろぎ
　希臘喧騒轟○　ナウべい独楽の必勝法は教えない
哲学を学ぶキャンパス冬の月　脈搏整長命○
　外套浮雲軽○　古城苑閑静
老棋士の駒の動きは泥臭く　皇居堀亀鳴○
磨きあげたる螺旋階段の　あの角を曲がれば夢の花吹雪
　花門語歴史　春の祭りの幣のおごそか
残鴨囃盛名○

○印は韻　庚

鵜飼佐知子捌

臼杵游児　佐知子
鵜飼佐知子　竹凡
近藤蕉肝　香織
游児　〃
〃　蕉肝
〃　佐知子
蕉肝　游児
蕉肝　賢
游児　〃
蕉肝　佐知子
佐知子　游児
平林香織　賢
游児　竹凡
〃

平成二十七年七月十四日首
平成二十七年八月十一日尾

（於・銀座成城クラブ）

和漢行
半歌仙

『鶴園の里』

赤田玖實子師を偲びて

○印は韻　薬

風わたる鶴園の里春寒し　鵜飼佐知子捌

紅梅香嫋嫋○　臼杵游児

卒業のなき俳諧にいそしみて　櫻田野老

教則本の誤植発見　鵜飼佐知子

氷鏡照旗亭　高橋賢

雪華薫対酌○　竹田竹梵

ウ

市場極殷賑　〃

曲芸嬢の軽ろやかな技　游児

求婚に盗んだ指輪惜しげなく　竹梵

少子対策何か足りない　野老

観音慈悲遍　近藤蕉肝

蓑虫知善悪○　游児

師を偲ぶ美酒に仰げる月今宵　賢

ズカで流行った歌の爽やか　野老

高談説縦横　蕉肝

細論聴能諸○　游児

山上の西行庵に余花訪わん　〃

三尺寝夢楽○　蕉肝

平成二十七年四月十一日首尾

（於・銀座成城クラブ）

第二七回青時雨忌追善正式俳諧興行

歌仙
俳諧連歌

『夏木立』

浅草に師の忌を修す夏木立　和田忠勝
書院涼しく流る声明　小林静司
和紙和食世界遺産に名乗り出で　近藤蕉肝
父の背を追いひたすらに生き　和田ひろ子
まん丸の月見に登る裏の山　浅沼小葦
パラボラアンテナ爽やかに建つ　春日久子
美術展作品搬入続々と　白井暎子
最後に描いた妻の肖像　秋山よう子
始まりは地中海での漁師小屋　小田妙子
シャンパンの泡じっとみつめる　寺嶋倫子
名探偵ゆっくりと解く謎の糸　鈴木善春
ここ掘れワンと吠える愛犬　松田ぼくる
空缶を蹴って師走の月の街　高島幸子
ドップラー現象消防車消ゆ　今村苗
脛長き薩摩隼人のＰＫ戦　種川とみ子
三日も後に痛む足腰　松本華与
花筏睦び寄り添いたゆたいて　鈴木すず
ティンカーベルの遊ぶ弥生野　静寿美子
五線譜に親鳥子鳥書き連ね　古川柴子
読み解き難き神の誓文　布田三保子
マチュピチュはインディオの恋幸わいて　功刀太郎
煙草やるからキスをお呉れよ　二川智南美
旅の果て懐具合優先に　遠藤尹希子
小さい窓と低い天井　紀本直幸
驚くな一箇万円新苺　猪飼たかし
観光客の爆買の汗　中島陽子
不可思議な自衛論議はまだ続く　青木秀樹
電気ブランと聞きて来たりし　川野蓼艸
中天の月をたよりの小さき舟　宮澤次男
きりぎりす戸にさあ水汲みに　伊藤哲子
めづらかな螺鈿の琵琶の身に入みて　服部秋扇
老舗うさぎや届くどらやき　櫻田野老
長刀も日舞もお茶も師匠なり　吉田酔山
伸びよ伸びよと白きあごひげ　清水自朗
植えかえし若木咲き初む花堤　宗匠
春の興とて句をつなぐ衆　執筆

平成二十七年六月二十八日
（於・浅草寺伝法院大書院）

宗匠　抱虚庵忠勝
脇宗匠　松濤軒静司
知司　近藤蕉肝
執筆　鈴木善春
配　和田ひろ子
花司　猪飼たかし
香元　静寿美子
配　和田柚香
配　実桜
硯　和田真流
硯　関口
声明

五十韻　『街　育　ち』

和田忠勝捌

新雪にそっと足置く街育ち　浅沼小　葦
　赤いマフラー巻いてポストへ　今村　苗
電柱に今日も鳴きおる寒烏　和田ひろ子
　飛行機雲の三筋解けゆく　大津博　山
元気よく砂浜を掃くボランティア　和田忠　勝
　珈琲館のドアは開らかれ　葦
人形に物云い聞かす丸い月　苗
早や北国の木の実落つ頃　ろ
ウポスターの健さんと飲む今年酒　山
　焼落鮎の絶妙な味　勝
やや斜にひねった腰の色っぽく　葦
　港の魔窟愛の生贄　苗
三面に相対死の記事踊り　ろ
　風に流されケセラセラ　山
地方選組織委員はグロッキー　勝
　耳ざわりなる南部ふうりん　葦
月暑し草に横たうこってい牛　ろ
　神父荒野に弥撒を捧げて　苗
予約なき宿は成り行き夢枕　山
　ほめてやりたい子等のレポート　勝
花筏豊かな峪をめぐりゆき　苗
茶揉みの唄を爺に教わる　葦

ナオ唇の紅が気になる知恵詣

和菓子屋の娘はちょっと大人び　ろ

交際の段取りにじれ埒あかず　山

モダンジャズ気取り紫煙を輪にふかし　勝

酒場の隅に占象（うらかた）の本　葦

ガリレオの指が器用に謎を解き　苗

二度寝の朝ドローン飛び来る　ろ

恒例の読書の会にペット連れ　山

国境の山残る農鳥　勝

交番に道を尋ねる夏帽子　葦

錆びた音たて止める自転車　苗

下町の工場筋のそば処　ろ

匠の意地はナノの精度ぞ　山

小波の月へ漕ぎ出す宝舟　葦

笑顔やさしき初閻魔さま　勝

ナウひいふうみい屋根の端とぶ白狐

スノーボードの宙に回転　苗

モダンジャズ気取り紫煙を輪にふかし　ろ

ふせた瞼に仕掛け待つ俺　山

投げ遣りな言葉にうずく胸の傷　勝

命の果てに抱かるる夢　葦

アンデスに風鈴草の鳴りやまず　苗

家紋の謂れ夜長繙く　ろ

藩營の真上下弦の淡き月　山

アンドロイドにギャグを言わする　葦

又増える国家予算に肩すくめ　勝

逃げ水の土手立てるイーゼル　苗

花の雲栄華を偲ぶ天守閣　ろ

噴火鎮めよ佐保姫の舞い　山

執筆　勝

平成二十七年一月十七日首
平成二十七年五月十一日尾
（於・港区三田綱町港座）

世吉『元朝や』

鈴木善春捌

元朝や今年こそはと書く日記　鈴木善　春
福笑いにてはしゃぐ子どもら　速藤尹希子
裏山の野兎庭に迷い来て　和田晶子
キャンバスしかとベストポジション　春
流行の青い帽子がよく似合い　尹
パイプの煙どこへ消えゆく　晶
月まどか南の島を目指す船　松田ぼくる
鳥の渡りを探す海峡　尹
ウ五時からはぬくめ酒にて無礼講　春
高度成長ここに始まる　晶
イケメンのゆとり世代の研修医　春
元は追っかけ今は純愛　尹
お得意のテニスあの娘にわざと負け　晶
行列続く街角のカフェ　る
大道芸巴里の広場のあちこちで　尹
青葉若葉に佇つ異邦人　春
祭笛社にかかる月眺め　る
はやぶさ二号どのあたりかな？　晶
いまどきの相談相手iPad　春
次の選挙にかける若者　尹
妖精の舞いたるように花の片　晶
夢に向かいて鮒の巣離れ

黙々（ナオ）と父祖伝来の春田打つ　晶る

灌仏会とて積みし善行　尹春

創生と言えどそうせぬへそ曲がり　晶る

親の選んだ婿は要らない　晶春

晩婚の占い信じはや四十路　尹晶

シニアバレーにデビュー骨折　春尹

鬱憤を晴らす闇汁お裾分け　晶春

雪降り続き野菜高騰　尹晶

電蓄のアダモの声にしびれおり　晶る

政界ゆする株の行く末　春尹

砂漠にて命を賭けたカーレース　晶春

寄生虫の身やっと脱出　尹晶

女子会は月を仰いで露天風呂　晶る

ゴーヤ嫌いのちゅら海育ち　尹春

短冊（ナウ）のかなで入選芸術祭　尹晶

友の手紙に開くアルバム　晶る

「ふるさと」を歌いて終わるクラス会　る尹

三陸鉄道祝開通　尹春

復興はひとりひとりの心より　春る

春の疾風が叩く枝折戸　る晶

花の香に学舎の窓満ちあふれ　晶春

遠き広野を若駒とゆく　春尹

平成二十七年一月十一日首尾

（於・横浜市綱島　抱虚庵和田忠勝居）

歌仙『猫の髭』

東條士郎捌

困にすこし老いたり猫の髭　迷鳥子
　南天の実をこぼつ縁先　東條士郎
客を待つ帯締めきりり強くして　井上久美子
　仲良し組で会社立ち上げ　三輪和
月まどか木遣甚句の伸びやかに　二橋満璃
　のれんめきたる干柿の列　執筆
ハロウィンの衣装始末に困る部屋　士郎
　ＩＴ長者やはり痩身　迷鳥子
禁煙も禁酒もすべて夢のため　和
　思ひの糸は切れぬ宿命　久美子
神は何ぞあづまくだりの寝かてに　迷鳥子
　スカイツリーの裾に交番　満璃
夏旺ん月も届かぬ宇宙船　久美子
　血を吐くほどに杜鵑鳴く　士郎
再稼働べクレルすでに忘れられ　満璃
　ナツメロ流す介護病棟　和
花誘ふ季節はいつも巡り来て　士郎
　海女の潜きの珍しくなし　迷鳥子
きつねだなテロの集団出没す　和
　自転車レース漫るゆくごと　久美子
お姫様抱つこのための猛訓練　迷鳥子
　恋みくじには一押しとのみ　満璃
土耳古石買つてと笑みのコケットリー　久美子
　お鏡も火にやはやはと溶け　士郎
遠山にあるかなきかの初霞　満璃
　はるか主役を凌ぐ脇役　和
哀愁の眉根阿修羅の魅力なる　士郎
　爪の形も父にそつくり　迷鳥子
ロンドンもパリもやつぱり月は月　和
　萩叢揺れる子のかくれんぼ　久美子
定家忌の歌朗詠の漏れ聞こえ　迷鳥子
　およそ小さき標奥つ城　満璃
若人のはじける肌の羨しさに　久美子
　卒業祝ひ赤いポルシェを　士郎
薄雲のリボンを掛けて花の枝　迷鳥子
　蜜蜂君は冒険の旅　和

平成二十七年十一月二十二日首
平成二十七年十二月　十六日尾
（於・渭東コミュニティセンター＆文音）

仙台市立貝森小学校三年・PTA行事・「親子で連句」

ことば遊び・しりとり十二調

五班『一　年』

伊藤敏子捌

年越しそば孫とこたつであたたまる　三浦修市（祖父）
るすばんつらい雪がふる中　三浦葵（三年）
からすなくそろそろうちへかえろうよ　父
よさこいおどる運動会で　山口希歩（三年）
天たかく空にかがやくお月様　陽子（母）
ママ激怒したほくの言葉か　葵（三年）
かた思いがんばり続け恋成就　父
十円玉で恋のうらない　希歩（三年）
いろいろと予定をたてる夏休み　陽子（母）
みんなで行くよディズニーランド　葵（三年）
ともだちとお花見行こう西公園　父
遠足はあす晴れるといいな　希歩（三年）

平成二十七年一月二十六日（二時限～四時限）首尾（於・仙台市立貝森小学校・フリースペイス）

※仙台市立貝森小学校は平成二十七年三月三十一日を以て閉校となり、四月一日、仙台市立国見小学校に統合されました。

歌仙『また同じ蜥蜴』

―式田恭子雅姉哀悼

また同じ蜥蜴に声を挙げにけり　松島アンズ
麦藁帽のリボン水色　鈴木漠
ペーロンの櫂三十のしぶきにて　小林静司
餃子の種類たっぷりとある　鈴木了斎
友どちとこんな月夜は又となない　名古則子
美術展ではともにライヴァル　和田忠勝
若年の菊師の愚痴はひとりごと　式田恭子
恥も一緒に呷る飲み会　東條士郎
ポケットにいつまでもあるあのレター　磯直道
恋の暗号あつけなく解く　アンズ
山彦の謎のひびきに耳澄ませ　漠
越冬燕小屋にとどまる　静司
雪虫の浮ぶ彼方に薄き月　了斎
ゆつくりやれよと父の遺訓にて　則子
王将の挑戦手合近づいて　忠勝
写真はいつも斜めから撮る　恭子
弥次郎兵衛傾きしまま花の雨　士郎
親猫仔猫欠伸大きく　直道
開帳の観音様に人列び　アンズ
宇宙探査機破る結界　漠
実数と虚数で割れば猿回し　静司
いつの間にやらネットアイドル　了斎
藪そばをひつそり啜る店の隅　則子
胃酸過多症親の代から　忠勝
昼顔と呼ばるる君の閨を見る　恭子
乱るる髪を洗ふたそがれ　士郎
ノッカーに産土の札ちよいと掛け　直道
どこでもドアーひよんなところに　アンズ
千枚の棚田あまねく照らす月　漠
木匙の木目掬ふ芋粥　静司
全集を買つてそろそろ炉火欲しき　了斎
めつた甘えぬ児が無心する　則子
妖怪の面は先生入れ知恵し　忠勝
夢の中だけ俺はヒーロー　恭子
西行の愛せし花も咲くならん　直道
さびしからずや暮れかぬる峡　士郎

歌仙『あめんぼう』

あめんぼう都会の底を軽々と　留
　ビルの間に梅雨晴の空　史
ブロンズの少女カモメを呼び寄せて　枝
　授業抜けだし食べる弁当　有
月上るだれが吹くのかハーモニカ　保
　青松毬は鱗形なす　水
秋(ウ)うららシルクロードを訪れる　満
　流行りの靴を買ってスキップ　晴
週末の古書店巡りわくわくと　俊
　天袋からひらり秘め事　保
へそくりと危な絵すべて宝物　枝
　開けてしまったパンドラの箱　有
その後は良きに計らえ神の旅　満
　蒼い月出る梟の森　晴
獣道曲がりくねって通せんぼ　重
　忍びの者が投げる手裏剣　唯
城山の花に魅せられ集う友　留
　叙勲の恩師囲み植林　史
石段にずらり飾って雛あられ　留
　一年生の下校風景　史
お騒がせしますます工事のご挨拶　枝
　公開入札密に談合　有
冷酒を酌み合いあとはそれぞれに　満
　宵宮へいざ月はのぼりぬ　晴
振り仰ぐ胸のときめき山の駅　俊
　覚悟を決めて化粧し直す　保
合コンを重ね重ねて還暦に　水
　船長の眼に魚群探知機　留
ヘリコプター上空からの秋の水　史
　ハック逃げれずトムと豆引く　枝
釈(ナウ)尊へ悟空のあがきそぞろ寒　有
　尻餅ついて照れ笑いする　満
焼き網へ焦げ目つけたるするめ烏賊　晴
　やましさしょって肩は春寒　重
花びらへ託す記憶と忘却と　唯
　風の袂をゆらす江戸雛　佛渕雀羅

付け回し
小林俊子　松澤龍一　木之下みなみ　志田則保　渡部春水　諸藤留美子　高橋宗史　成島静枝　市川唯子　白石一有　青山満子　井上晴俊　松本八重子　みみ　保水

平成二十七年七月　十日首
平成二十七年九月二十四日尾（文音）

歌仙『長梅雨や』

長梅雨や履きなれし靴悲鳴上げ　　渡部春水捌
　源氏蛍も退屈な日々　　春水
故郷の川や野山の変り果て　　木之下みなみ
　温泉街の客の疎らに　　宗史
干されたる魚の目照らす夜半の月　　諸藤留美子
　波音つづく浜のさやけし　　みな
銀杏（ウ）散る遊園地には椅子ひとつ　　留美子
　心弾ませメル友を待ち　　宗史
肩を抱くきっかけとなる犬自慢　　静枝
　期待を持たす黒いインナー　　保則
ブルースのベッドに独り残されて　　静枝
　一気呑みなどよせばよかった　　保則
月凍る声をかぎりに咆える人　　春水
　ニコライ堂でクリスマスイブ　　留美子
肖像の青い横顔飛び出して　　みな
　ビルの上から降りし万札　　静枝
相続の円満に済み花吹雪　　保則
　ひばりの歌う空の真ん中　　宗史
パティシエ（ナオ）を目指しぬパリの春更けて　　春水
　観光船で古城巡りつ　　留美子
役に立つバイリンガルの電子辞書　　保則
　話題の映画誘うチケット　　静枝
思慕の念暑中見舞いに書き込まれ　　宗史
　水着を脱いで少しためらう　　春水
愛らしき笑窪がまさか種痘とは　　みな
　魔法使いの箒意の儘　　留美子
雑草に埋もれし過疎の地蔵尊　　静枝
　杖を頼りに獣道行く　　宗史
拉致家族何時まで待たす雲の月　　則保
　悪夢覚めれば肌の寒々　　春水
林檎（ナウ）剥ぐ朝の木漏れ日手に受けて　　留美子
　風林火山後世に継ぐ　　みな
ロボットに高齢社会託される　　則保
　入園の子はゲーム三昧　　静枝
花の夜はひときわ醤匂う街　　みな
　トランペットに四月躍動　　留美子

六日首
平成二十七年七月
平成二十七年七月三十一日尾
（於・野田市市民会館及び文音）

執筆　みな

歌仙『バスティーユ』

衆議判

バスティーユ二世紀を越え神の留守　白石一　有
　散る山茶花の血の色を踏み　野村路子　路
えいままよ雑兵の群いさぎよく　鈴木美奈子　奈
　草鞋に結ぶ母の組紐　松澤龍一　龍
秋団扇ちょっと気取って月を待つ　有
　パイプ咥へて落鰻捕る　路
五郎丸ポーズで祈る萩の苑　奈
　定期入れには彼をしのばす　有
秘めをきし想ひおのづと匂ひたち　龍
　うなじに残すきぬぎぬの夢　奈
月に遊ぶびいどろの盃酌み交し　路
　髪切虫を弄ふ先生　有
アナキスト黒いTシャツベルボトム　有
　カオスの世界いつコスモスに　路
その昔パチンコ麻雀全博連　龍
　シリア帰りに尾行張りつき　奈
九条の護持はかるやに花の蕊　有
春の行方と国の行方と　路

水切りの石に川面の風光り　龍
　安藤昌益見栄で揃へた　奈
アマゾンで水木しげるが十四円　路
　乳房の無き女勇者に　有
レーニンとローザの運命コミンテルン　奈
　鮫鰊鍋など食はせてみたい　路
猪狩りの銃音響く深き渓　有
　叛乱軍なりしか二・二六　奈
逝きし人残されし人それぞれに　路
　ババを引いたる諜報の末　有
検問所月を欺く自爆テロ　奈
　転がり落ちたレモンを追って　路
囲炉裏欲しお手玉しつつ基次郎　有
　ラ・マルセイエーズ国歌とは何　奈
なけなしの財布はたいて義援金　有
　遍路笠置くバス停の椅子　龍
花守はデラシネの過去封印し　路
　巣立ち鳥飛ぶ夕映えの空　龍

平成二十七年十二月二日首
平成二十八年　二月四日尾
（於・「ルノアール」及び文音）

《東京・俳諧無心―その一》
二〇一四年度・卒業興行

オン座六句　『雪の人』

曳尾庵　璞捌

第一連

冬　ありのまゝなど許されぬ雪の人　宮崎　綾
冬　うはべのコート捲れたる白　浅沼　璞
　天空の長方形へ流れこみ　西原　紫衣花
　たれかのギター市中（まちなか）で聴く　佐藤　四龍
☾　かがんでは月を演じてゐる子ども　泉山　友郁
秋　鼻をくすぐる鶏頭の先　二川　智南美

第二連

　ケンタッキー・フライドチキン残りける　副島　亜樹
♡　あなたのために文をかきます　小沼　理
♡　最愛のトップニュースの三行半（みくだりはん）　加藤　澪
　バス田舎から田舎へ向かふ　川本　桃子
　やじろべゑ襟裳辺りを叉にかけ　みなまだ　けい
夏氷　氷菓食べ頃までフェルマータ　紫衣花

第三連［自由律］

夏　明日は自分に期待して抱く鹿の子　北野　抜け芝
　すべて奉納してやる　堀江　烁
石　和歌にレンガもブロックに細れ石も　璞
R　隙間にジョージ・ハリスン　烁
　第2ボタンが外れつぱなしの管理人　野宮　有姫
新　年酒きら〳〵ゆるゝ　二三川　練

第四連

新　船上は羽子つく音の騒がしく　友郁
♡　畳の縦目撫でて待つ君　椿　屋烏
♡　平成の夢の通ひ路物語　鈴木　日向子
　古典単語を駄洒落で憶ゆ　綾
❀　かたことの英語スピーチ花の冷え　智南美
春　春の海から字幕ののたり　禰覇　楓

平成二十七年一月三十一日首
（於・江古田文芸ラウンジ）
仝年二月二十八日興行（於・旭丘地域集会所）
仝年三月二十九日興行（於・旭丘地域集会所）
仝年五月　三日尾（於・旭丘地域集会所）

［註］第四連「夢の通ひ路物語」＝本年実施のセンター試験「国語」に出題された中世の長編擬古物語。

『六日』

脇起　オン座六句

無心オン座六句、巻六にして「六日」巻、第六連にて満尾。愛でたき「六」尽しぞかし。

浅沼　璞捌

第一連

☾ 秋　文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉庵桃青
露をのせたるサラダ記念日　曳尾庵ハク
ねころべばけん〳〵ぱーの声がして　二三川練
昇進めざす平社員なり　泉山友郁
夏氷　風ぬける改札前の氷菓子　椿屋烏
夏　右手首へとつけた香水　志賀雪野

第二連

♡ 宮崎綾
アルマーニあなたのために着てゐます　二川智南美
♡ すべて名刺は旧姓となり　佐藤四龍
電話帳しまつたはずの棚の奥　西原紫衣花
大仏様にたまふ年輪　堀江烁
石　スコリアのこりつと発泡いとわろし　北野抜け芝
雰囲気よろし雰囲気だけか

第三連［自由律］

R　冨士の下カラフルテント・リスバン・ヘドバン　加藤澪
夏♡　祭のあとに再会　神崎千佳
♡　夢のそら寝ふはり光の中へと彼は　屋烏
冬　コートの肩幅L　みなまだけい
冬　海岸のおほきく曲がる鯨の肋骨　副島亜樹
テトラポッドに笑める　禰覇楓

第四連

血塗られた国歌を奏で歩きだす　篠尾早那
月光の音　第三京浜　榎坂賢吾
☾ 秋　銀色の備へ変はらぬ震災忌　永井一帆
♡　ガラホをひらきデート予約を　城前佑樹
♡　ぬばたまの夜にひとり垣間見もがな　鈴木日向子
無銭飲食するぬらりひよん　楓

第五連

新　をちこちの団体様は笑ひ初め　吉本小雪
新　ぽつぺんにため息つめかへる　川本桃子
ゆつくりと閉ぢれば目から鱗落つ　紫衣花
塞翁が馬　反町が犬　抜け芝
ブラックなディズニーランド行きワゴン　澪
コンゴ共和国の席につく　けい

第六連

冬　提督の帽子を置かば寒からん　友郁
冬　天地左右を降り明かす雪　抜け芝
大気圏すこし毀して無人へリ　澪
肘の写真をアップロードし　智南美
❀　階段のおどり場見あげ花に酔ふ　斉藤聖
春　春の写真をダウンロードす　抜け芝

［註］脇句＝「文月や」二十句（曾良俳諧書留）の脇「露をのせたる桐の一ッ葉／左栗」のサンプリング。
三連ロックの座＝フジロックフェスティバル詠。
平成二十七年七月六日首（於・曳尾庵）
仝年七月二十五日張行（於・旭丘地域集会所）
仝年八月三十日張行（於・桜台地域集会所）
仝年九月八日張行（於・軽井沢研修所）
仝年九月十九日張行（於・桜台地域集会所）
仝年十月三十一日尾（於・小竹地域集会所）

短歌行　『水引草』

大西素之捌

水引草霧の重さにたわみけり　大西素　之
月見団子を飾る縁側　岡田伊勢子
さやけしと言ひつつ父の戻り来て　大月西　女
魚籠を覗けば跳ねる鮴　杉山豚　望
ウデラシネの身となな思ひそ裘　向井由利子
うかと乗りたる朽ちし竹馬　西　由
恋の罠気づきし時は抜け出せず　素　素
酒におぼれて色香いや増す　豚　豚
死に体のギリシャを救う神いずこ　〃
西より吹ける生ぬるき風　伊　豚
人混みを少し離れて花惜しむ
木漏れ日散らす囀の山

ナオ遠足が渡る二の橋三の橋　素
苔むす像はどこの誰やら　西
先王の霊に誓へる舞台劇　名本敦子
吉丁虫のとまるカーテン　伊
妻の座はずつと昔に捨てたはず　西
男手玉に取るが生き甲斐　由
マジシャンは月を鞄に入れて去り　豚
ピーマン切れば中はからつぽ　西
ナウ脳ドックCTスキャンうそ寒く　素
極彩色の夢を見るらん　西
楊貴妃と鬱金の競ふ花堤　素
仔猫じやれつく忘れてんまり　敦

平成二十七年八月二十一日首
平成二十七年九月　四日尾

（於・道後白水亭）

歌仙『菊人形』

子らの問う声賑やかに菊人形　　和
銀杏拾う媼三様　　悦
豊年を祝うがごとく集まりて　　笈
大玉転がし体育の日　　以
お月さま顔を隠して何想う　　以
化粧落して鏡を覗く　　七
麦秋や美人女優の訃報聞く　　七
陽焼けしたノースリーブまぶしく　　恆
氷柱に妖精の舞密閉す　　和
ため息十年窓辺の少年　　恆
老い易く学成り難く停年す　　悦
せめてゆるりと松葉酒酌む　　笈
月皓々暖炉の前はぬくぬくと　　笈
運び込まれる山海珍味　　悦
涅槃西風食餌療法一筋に　　恆
雉子が道を渡って行くよ　　恆
姉妹ふと振り仰ぐ門の花　　悦
受難節には深紅の装い　　笈
緊張高まる南シナ沖　　青柳　朱実
国民を羊や犬にマイナンバー　　柳瀬　亜湖
器物損壊罰金払え　　笈
熊蝉にぐるり囲まれ端座する　　悦
＊童心居でも冷房が効き　　和
ストローで蛙の腹を膨らまそ　　亜
＊壁にぶつけりゃ羽生結弦に　　七
薄墨の衣ほつれて修行僧　　恆
恋に溺れて蛇穴に入る　　悦
月天心鬼龍子吼える奈良の街　　和
丸瓦破れ萩こぼる井戸　　亜
空爆にキャラバンサライ影もなし　　七
おばけ蝶々のドローン現る　　七
うつつ世の夢ばかりなる肘枕　　以
お伊勢参りの土産赤福　　笈
輪廻かな花の下にて蠅生まる　　以
彼岸此岸の境目に立つ　　亜

＊童心居　井の頭公園内にある、もと野口雨情の離れ。
＊壁にぶつけりゃ　グリム童話「蛙の王様」参照。

平成二十七年十一月二十八日首尾
（於・明治大学研究棟第七会議室）

短歌行　『雁渡し』

伊吹嶺の薬草揺らす雁渡し　堀部比呂美
谷の奥まで名月の影　各務恵紅
初猟は明日と準備に余念なく　日比野実紀子
衣桁に掛けるシャツの鈍色　津田公仁枝
内庭の池に大きな鯉ゆらり　奥山ゆい
出汁を取る香の漂つてをり　比呂美
あの日から酒酌み交はしはや十年　大竹恵子
肩に君の手冬枯れの中　ゆい
霰降る寂光院の屋根叩き　実紀子
呟くやうな鳩の鳴き声　ゆい
舞ふ花を浴びて旅人現るる　公仁枝
砂糖控へて作る独活和へ　恵紅
縁側（ニオ）に春の日射しの満ち溢れ　実紀子
テニスボールに対のラケット　ゆい
ティファニーの指輪なかなか贈れずに　恵子
弟すでにできちやつた婚　恵紅
特売のチラシ散らかる四畳半　実紀子
百足蛞蝓火取虫出で　比呂美
夏の月浴びて熱演野外劇　公仁枝
瞬くうちに過ぐる人生　恵紅
誰（ニウ）彼に無病息災あり得なく　ゆい
グラスに透ける群青の空　公仁枝
初花を仰ぎつつゆく通学路　恵子
朗らに聞こゆ春のせせらぎ　ゆい

平成二十七年　十月三日首
平成二十七年十二月五日尾

（於・日本海庄や）

歌仙『星涼し』

西田舟人捌

白砂利や抹茶一服星涼し　阿部愛子
すれちがひ様あら薫衣香　西田秀花
長話いつの間にやら夕映えに　和田澄子
ＶＩＰクラスの夜行バスあり　藤本則子
高階や手に取るごとし月今宵　秀花
秋園散歩頬に朝風　愛子
稲（ウ）びかり犬のとほ吠え雨に消ゆ　則子
イケメンに席ゆづられて照れ　愛子
夢に見る愛しき君や遠かりき　澄子
ふたりの激情むせかへる部屋　則子
惜しみつゝ見送るなかを雪しとど　澄子
わが眼そらすや初鏡にて　秀花
ゲゲゲのゲお化けと共に酌み交はし　愛子
山歩きには湿布薬入れ　〃
好奇心前向き余生プラスなる　則子
おぼろ月夜にさがす人影　澄子
読経の音しづかに流る紅しだれ　則子
春ショール巻き小走りにゆく　愛子
たまゆら（ナオ）は惚けたと思ふあるひと日　秀花
ことば遊びで幻想に酔ひ　澄子
河鹿なく響きにひかれ岩かげへ　〃
クレマチスよりより鉄線好み　秀花
各国のシェフに大モテ和の野菜　則子
三重サミットで海鳥騒ぐ　〃
都々逸ののどを聞きたし俳の衆　西田舟人
よいしょの嘘を指からめつゝ　則子
曼珠沙華恋にもん〳〵今日も暮れ　澄子
もみぢかつ散る脳の片すみ　秀花
蒼穹に細月かゝる伎芸天　澄子
河内源氏はわれらの祖先　秀花
文楽（ナウ）の語りにいとも涙して　舟人
千人針に熱き思ひ出　秀花
ほほべにを縮緬皺にほんのりと　愛子
はゝに似た雛笑みを浮かべて　〃
ぼんぼりの消えたる後の花ふぶき　秀花
目借る蛙に泡の囁く　澄子

平成二十七年　七月五日首
平成二十七年十一月八日尾

（於・大阪狭山市金剛）

歌仙『地球儀を』

地球儀をくるりと回し夏隣　沖津たんぽぽ捌

ベーコンエッグ添へるクレソン　沖津たんぽぽ

耕運機辺りの景も鋤き交ぜて　金井笑子

翁媼の増ゆるふるさと　小林節子

高層の窓より画布へ蒼き月　城倉吉野

いたづら椋鳥に立札をする　林翠哥

堤防の修復済みて初紅葉　節野

かはたれ時の胡弓流るる　翠笑

まんまるな果実のごとき臍を持ち　笑野

猫ひっそりとくぐる袖垣　翠

薄暗きイコンの像に竜涎香　柚

土産物屋で値切る外人　渡辺柚翠

凍月に地殻の震へ針の告げ　柚

歩幅乱れし樏の跡　鈴木圭子

よき友とよき酒のあり草の家　野

鯉と亀とが棲み分くる池　節

朝まだき花の素顔に出会ふ旅　〃

石鹸玉には夢を詰めすぎ　柚

山笑ふ魔女の一撃てふ痛み　ぽ

浸食さるる平和憲法　笑

何鳥ぞ繰返し見る大図鑑　節

チリンチリンと黍団子売り　翠

恐ろしき夜咄聞いて大泣きし　野

屁負比丘尼を包む寒靄　ぽ

ぽっと出の都会の水にみがかれて　柚

秘めごと絡む編のカーテン　笑

潮騒の碑のみの志士の宿　節

舳先揚揚軍艦の旗　柚

カデンツァの月の明りに煌めきぬ　笑

まぼろしを見て立ちあがる鹿　節

陶工の窯跡深きそぞろ寒　柚

バックハンドで進む決勝　笑

CMの新製品に微笑みて　節

東風に乗り来る子等の歓声　翠

とめどなく髪へ肩へと飛花落花　ぽ

藍の木綿の種子袋縫ふ　柚

平成二十七年五月七日首
平成二十七年六月四日尾
（於・神奈川県民サポートセンター）

歌仙『初日に染まる』

衆議判

穂先より初日に染まる槍ヶ岳　桧垣幸雄
紙のコップに屠蘇の乾杯　渡辺柚
草の戸も紅梅の香に浮き立ちて　城倉吉野
翁媼のまもる川蜷　加藤亀女
春の月浮世絵もまた月百姿　小林節子
したり顔なる吾輩の猫　酒井敬子
ウキャプテンのポケットチーフいつも赤　林翠哥
電話の声の少し震へて　彦坂英治
約束の新宿南ターミナル　金子笑子
南無観世音揺るる露天湯　堀尾一夫
ぼうたんのはらりと落つる淡き灯に　沖津たんぽぽ
リハビリの窓月の涼しく　水野禾甫
海原を渡る潮風ひとつかみ　伊地知義子
元素記号の一覧を貼る　水野禾甫
焼き肉のタレにいろいろ隠しあぢ　伊地知義子
女草履で帰る父親　笑
花の門乾門より坂下門　柚翠
おまけに貰ふ紙の風船　一野

百千鳥アルトソプラノ競ひ合ひ　甫
核もてあそぶ北の将軍　英
窯跡に白磁の欠片ちらばりて　節
ゆるりのんびり家鴨飼ふ村　幸
消寒図壁に掛かりて春を待つ　亀
夢窓国師の庭の探梅　伊藤弥生
良く動く視線の先のイヤリング　敬
がらにもないが言ってしまった　ぽ
聞きなれた男と女の物語　義
岸を渡して時の船頭　一
砂の星奥の奥まで月射して　笑
更に味濃く島の苦瓜　甫
ナウ運動会招待席の副市長　柚
ペットボトルの風にころころ　森川淳子
重代を受け継ぐ技の茶懐石　淳
旧街道は聞かぬ馬子唄　弥
花行脚夢まぼろしに咲き満ちて　亀
魚影躍れる清明の渓　野

平成二十八年一月七日首尾

（於・野毛地区センター）

歌仙『昭和の匂ひ』

外套は昭和の匂ひ灯が点る　伊香　渚捌
いつの間にやら雪がちらちら　大竹　多可志
象さんと記念写真に収まりて　伊香　渚
大工見習ひ口笛を吹く　石井　斐子
満月がソーラーパネル照らしだし　高野　敏子
風に靡けるますほの芒　黒澤　都茂黄
今年酒提げて悪友訪ねんと　沢畠　シツ子
壁ドンされて恋に落ちさう　多
マッサンとエリーのやうにハグをして　渚
黒髪乱し今日は別人　鶴岡　育枝
留守電が静かな声で留守を告げ　多
世界遺産の石見銀山　育
名物の葛饅頭に主婦の列　斐
影絵準備に月の涼しき　敏
爆買ひに量販店の賑はひぬ　敏
盲導犬はいつも健気に　斐
花万朶校長先生自転車で　育
浜に干さるる若布どっさり　都
戯（ナオ）れに背負ふものなき啄木忌　斐
雀の為にパンを取り置く　育
薄墨を筆に含ませ絵手紙を　渚
語り継がるる河童伝説　シ
早々と冬構へして湯治宿　多
ポインセチアで窓辺飾りぬ　都
五郎丸選手のやうな彼が好き　敏
募る想ひは寝ても覚めても　シ
廃線の駅舎に傘の忘れ物　斐
ヤッケ姿が釣り糸を垂れ　敏
仰ぎ見るビルのあはひに月の船　育
ぶらりぶらり蓑虫の黙　都
そぞろ寒（ナウ）お地蔵さまは肩を寄せ　斐
スマホのゲーム飽きもせずして　育
何事もメンテナンスが必要と　シ
減塩食でめざす一〇〇歳　育
ほんぼりに浮き立つ花の妖艶に　都
亀が鳴きたるまほろばの里　斐

執筆　シ

平成二十七年　一月十九日首
平成二十七年十一月二十日尾（文音）

歌仙『私小説』

木の葉散る墓碑は男の私小説　松澤龍一
　降るをまかせて片時雨道　佐藤蟻珠
カラオケのひとりに皆唱和して　平岡一九八
　校歌讃えるふるさとの山　龍珠
どんぶりの湯気に浮かんだ月すする　八珠
　港の町は霧に濡れゆく　龍八
本堂(ウ)の地下で鳴いてるくつわ虫　珠龍
　ヒロシヒロシと迫る足音　八珠
人妻とひとつ離れて観る映画　龍八
　外人部隊白い制服　珠龍
銀紙の指輪をそっとくすりゆび　八珠
　隅田の川に屋形船ゆく　龍八
夏の霜獅子が吼えてる叔父の背　珠龍
　ガラスの靴は捨てて行きまひょ　八珠
お土産は開けてびっくり玉手箱　龍八
　ミラボー橋を渡る白蝶　珠龍
ひとり来て花雪洞に袖映す　八珠
陽炎追って消える少年　龍八
この頃のキタロー少し春の風邪(ナオ)　珠龍
　噛むためにある爪とくちびる　八珠
白熱の会議の後は飲み会に　龍八
　竹輪麩と言うはけったいなもの　龍八
大根煮えパパ練りからしお願いね　珠龍
　朝日きらきら氷柱つらつら　八珠
ドレスにはスパンコールを鏤めて　龍八
　デビューできるかトランプにきく　珠龍
夕まぐれ牛車の君に寄り添って　八珠
　ビルとヒラリー予備選の乱　龍八
かくれ咲く濃紫の鳥兜　珠龍
　滑り台から仰ぐ満月　八珠
ユニクロ(ナウ)のシャツを着ている捨案山子　龍八
　楽天的なカラスかあかあ　珠龍
深海魚両目を開けて眠りつく　八珠
　おさげの母が彼岸の夢に　龍八
花の雨面影橋にさしかかり　珠龍
　だれ誘おうか光る逃水　八珠

平成二十七年十一月二十一日首
平成二十八年二月二十六日尾（文音）

短歌行『野馬追や』

成田淑美捌

野馬追や戦国時代の武者来たる　羽田野由紀
　夏空の下あがる歓声　柿沼喜美子
進水の豪華客船ポスターに　成田淑美
　金木犀の香り漂う　小池弥生
抱(ウ)き上げし幼子の指月つかみ　田口清華
　腰の痛みに耐えるやや寒　由紀
情報が遠距離の壁乗り越える　弥生
　エレベーターに二人っきりに　清華
朝食をベッドに運ぶ旦那さま　由紀
　時を忘れたぜんまい時計　清華
無住寺の古りし大樹の花枝垂　喜美子
　淡雪払う山の辺の道　淑美
学生(ナオ)の気ままここまで弥生尽　弥生
　またも遅れる首都圏電車　清華
いつのまに平均寿命通り過ぎ　由紀
　痩せず太らず笑顔絶やさず　弥生
民主化を目前にしたスーチーさん　喜美子
　小春の宴に集う喜び　淑美
秘めやかな逢瀬の宿の冬の月　由紀
　夜明けを待たず知らない町へ　清華
海渡(ナウ)りヨーロッパへと旅続く　弥生
　釣竿ならぶ長き突堤　喜美子
満開の花の舞い込む橋掛かり　淑美
　城趾に佇てば揺れる陽炎　弥生

平成二十七年　八月十八日首
平成二十七年十二月十五日尾
（於・富士見市みずほ台コミュニティーセンター）

雪月花順候式十八韻『秋蛍』

衆議判

起　秋蛍水辺に点すラストラブ　　輝子　仲澤
　　星の契りを偲び書く文　　淑美　成田
　　農継ぐと少年の瞳の輝いて　　春野　大堀
　　玄関を出る新調の靴　　輝子
承　温泉に浮かべて旨き雪見酒　　ゆみ子　中村
　　かさかさ風に枯蘆の鳴り　　淑美
　　エジプトの砂漠に眠るしゃれこうべ　　輝子
　　自動車レース過酷極める　　ゆみ子
　　絵ろうそく人魚は赤く塗りつぶし　　淑美
　　ぽっくり寺へ詣る旅立ち　　輝子
転　稜線をたおやかにして朧月　　春野
　　吊り橋渡り堅香子の里　　輝子
　　集まれば昭和に還るハーモニカ　　淑美
　　手も握らずに灼ける戦地へ　　淑美
　　土採って大村先生名を揚げる　　輝子
　　アンドロイドを受付嬢に　　ゆみ子
結　山海の珍味を供え花相撲　　淑美
　　桜紅葉の白壁に映ゆ　　ゆみ子

平成二十七年九月　三十日首
平成二十七年十月二十九日尾

（於・駒込デニーズ）

《神戸・ひよどり連句会KCC》

歌仙

『ミニクーペ』

衆議捌

ミニクーペ一台秋の無人駅　古川佳永子
音を立てては銀杏の散る　勝野薫
名月を宇宙船より愛づるらん　山下歌子
毛繕ひする真黒な猫　山下昭子
招かるる晩餐会は正装と　佳
父子相伝の蕪漬け込む　薫
どの児にも台詞はひとつ聖夜劇（ウ）　歌
内視鏡には本音しつかり　昭
褄取りて石橋渡る角隠し　薫
夫を操り自作の罠に　佳
名前より大切なものマイナンバー　昭
きしんで開く土蔵の扉　歌
露天湯に掬ふ両手の月涼し　薫
赤穂岬に海ほたる採り　佳
忠敬の地図に労苦の偲ばれて　昭
燕とともに迎ふ田の神　歌
花埃混み合ふ耳鼻科みな無口　薫
まほうの修行霞たなびき　佳

ぶらんこの席の順番じゃんけんで（ナオ）　師岡洋子
七つ道具の小さく畳まれ　長谷川鮎
歌舞伎座の奈落を役者走り抜け　小松美保子
帳場にひびく岡持の声　細野恵久
菜園の夏大根はよく育ち　鮎
てんとうむしが翅割つて飛び　恵
捨てられぬLP盤のビートルズ　洋
嵐が丘の髭の牧童　美
ありつたけ書きし想ひを渡せずに　鮎
ふと魔がさして恋の泥沼　洋
月の道普賢菩薩に導かれ　恵
賞の宴に新酒「福寿」を　美
瓢箪（ナウ）のくびれに自問自答して　洋
のんど休めと飴をころがす　鮎
日もすがらドーンで遊ぶ防波堤　美
かつて絵描きを志せしと　恵
花筵お国の味を持ち寄りて　鮎
吉兆をみる富士の初虹　洋

平成二十七年　十月十五日首
平成二十七年十二月十七日尾
（於・神戸新聞カルチュアーKCC教室）

歌仙　『ポンポンと』

竹下昭子捌

ポンポンと西瓜の返事確かむる　昭子
　月出づるまで目隠しの子ら　喜久子
二代目の猫の駅長さわやかに　純子
　旧街道へ橋の雨だれ　寿子
長生きはしたくないとてジム通ひ　恵美
　網渡りして咲ける鉄線　喜久
夏の海英霊のせて荒れやすし　蓉子
　はるか南に伯父のほほえみ　節子
プロポーズ広告塔で驚かせ　美恵
　残り福なら僕にも脈が　喜久
店先に減塩の本積み上げて　純子
　どこへ行くのもリュック離さず　寿子
雪像の銀河列車へ月あかり　蓉子
　紙漉き場には茹で蒟蒻を　喜久
国会は答なるべく曖昧に　美恵
　ちょっとこいよと小綬鶏の声　節子
短冊の発句くるりん花大樹　喜久
　スカイラインの霞む閑けさ　純子
やどかりは天神崎を常宿と　寿子
　双眼鏡の奥に楽園　喜久
誕生日黒魔術師にひたかくす　美恵
　新型肺炎サーズ広がり　蓉子
かき氷ぐにゃりと曲るアルミ匙　寿子
　逆転一打汗と涙で　昭子
靴下と女が強くなる戦後　美恵
　夢の裂けめに外ならぬ君　蓉子
亜麻色の髪に囚はれ抱擁す　喜久
　世界平和を数学が説き　美恵
ニュートリノ今宵の月の美しく　昭子
　寄りかたまりて眠るうり坊　喜久
産土の木の実にうたれ若返り　〃
　あれよあれよと反則切符　美恵
名前より番号だけで呼ばれもし　昭子
　帽子深目に軽くあしらひ　喜久
姥堂の姥もいでませ花ざかり　蓉子
　願ひを込めて放つ風船　寿子

平成二十七年七月二十三日首
平成二十七年十月　八日尾

（於・毎日連句教室）

非懐紙十六韻
尻取り押韻

『真　顔』

鈴木　漠捌

ディオラマの橋渡りつつ真顔なり　服部恵美子（雑）
鳴り物入りで主役デビューす　鈴木　漠（雑）
薄霞山裾めぐるバス待ちて　松本昌子（春）
馳騁終日長江麗ララバイをジャズに編曲花は散り　宮崎鬼持（春）
地理歴史とふ教科不得手に　漠（花）
弓爾乎波となぞらん雲の峰の態　恵美子（雑）
弟妹連れてかき氷店　鬼持（夏）
天体の観測趣味も二人して　昌子（夏）
私鉄の駅で見初めたること　恵美子（恋）
ことさらに別れの場面紙の月　漠（恋）
撞きし鐘の音露時雨の野　昌子（月）
ノノ点で続く葡萄の豊作に　鬼持（秋）
くにの訛りがつい口を出し　漠（秋）
デシベルを測つてみんせ雪が告ぐ　恵美子（雑）
注ぐ酒の香に冴ゆるオーディオ　永田圭介（冬）
＊尻取り押韻は挙句から発句へ循環回帰。　三木英治（冬）

《富山・風狂連句会》

二村文人先生一周忌（六月十一日）

二十韻『鮎の宿』

差入れの吟醸酒酌む鮎の宿　文人先生
青田の風を通す十畳　瀧沢尚子
駅伝の声援高く弾ませて　奥野美友紀
ヘリコプターでずつと追跡　密田妖子
新（ウ）発売ＤＶＤを手に月夜　北野眞知子
紫苑またの名鬼の醜草　富尾弘美
秋袷ほほけし母のたたずまひ　尚
憲法解釈世論沸騰　弘
焼芋屋はやくしないといつちやうよ　いぬじま正一
石の地蔵がちらり横見て　宮村千鶴子

二人乗る自転車さらに灯も点けず（ナオ）　眞
学校一の美少女に恋　妖
禿頭となるも妻とは友白髪　眞
名残惜しみつ避暑地離れる　正
ぴつたりと守宮張り付く窓に月　眞
刑事の靴の踵片減り　千
豆（ナウ）剣士小手面胴もあざやかに　妖
ひよつとこの舞ふ春の祭礼　美
花の旅思ひも掛けぬ良き出会ひ　正
初虹かけて雨上がる街　尚
妖

平成二十七年六月二十一日首尾

（於・星井町公民館）

歌仙『鼻歌』

品部三酔捌

さわやかや鼻歌背ナにバス走る　品部三酔
花野を分けて故郷の道　小野雅子
月の影じゃれあう犬と散歩して　金沢ひろあき
遠くの店へ水買いにゆく　藤野雅彦
手作りのキルトのバッグお気に入り　谷口久子
形不揃いとれとれトマト　秀嶋登志子
諍いをまあるく治め鰻食う　雅彦
流し目受けてへのへのもへじ　久子
叩くのはちょっと痛いが可愛いの　三酔
置き薬屋の効かぬ赤玉　雅子
風呂敷に着物包んで質屋へと　久子
きれいさっぱり断捨離をする　ひろあき
薄れゆく記憶の奥の開戦日　雅彦
霜枯れの月独り酒酌む　登志子
洋館の窓少し開けノクターン　雅子
黒猫の目の金に輝く　〃
放蕩の果てに眺むる花簀　久子
網を揚げれば諸子とびだす　雅子
歩ナオを速め舗装道路の遍路笠　登志子
雨に濡れゆく俳聖の句碑　久子
母の声思いだしたる子守歌　雅子
昨日のことはほっといてよね　雅彦
ツンデレは入道雲によく似合う　荷葉
幼子三歳腹当てをして　三酔
先行きは野となれ今の人気取り　〃
辺野古の沖の工事再開　雅彦
夕風に大旗小旗いろ褪せて　登志子
徐々に始まる惚けと耄碌　雅彦
名月に芋だ豆だと譲らずに　三酔
負けたじゃんけん蛇穴に入る　久子
地ナウ芝居に流しの食器置いたまま　雅彦
旅の鞄を締めては開けて　久子
淹れたての珈琲を手にページ繰る　雅子
百名山に残るあの峰　荷葉
ゆっくりと疎水は寄せる花筏　〃
病後に優しき鶯の声　登志子

平成二十七年　九月十三日首
平成二十七年十一月　八日尾

歌仙『昨夜の官能』

秋晴れて昨夜（よべ）の官能遠々し　　紫苑
　野猿が醸す酒の味はひ　　和子
月の海底に林のあるさうな　　春山悦子
　童話を読んで子を寝かしつけ　　紫苑
手を添へて眼鏡の奥の目はやさし　　寿典
　スケート場の人気復活　　〃
美（う）しくくるくる舞つて木の葉散る　　尾崎志津女
　外つ国からの絵はがき届き　　〃
狂ひたるエリスの恋の顚末は　　春屏
　想ひ静めてハープの音が　　和子
いつの日か来てもらへるの来迎図　　紫苑
　お土産はなに籠の鸚鵡よ　　和子
繰り返し役所で住所氏名書き　　寿典
　夕立（だち）に休止耐震工事　　〃
舗装路の冷めもやらずに月暑し　　志津女
　トイレで困る紮ぎのズボン　　北原春屏
花枝垂れ翁の句碑も隠れたり　　星野猿
　春蟬かそか里山に鳴き　　赤木和子
北原春屏捌

平成二十七年　九月十三日首
平成二十七年十一月　八日尾

歌仙『火の色で』

狩野康子捌

火の色で闇を宥めるお水取　狩野康子
　日光月光朧げに笑む　谷田部弓子
猫の子へ嬰は一歩を踏み出して　松ノ井洋子
　チャンス狙ってスマホ構える　熊坂昌子
俄雨昨夜の玉兎は何処にぞ　秋田てる子
　芋煮の跡の残る川原　洋子
寄(ウ)せ書きの言葉輪になる冬隣　弓子
　反骨通す漢頼もし　康子
しなやかな指の奏でるラブソング　昌子
　門限などは消えてしまえと　てる子
卵白を角立つほどに泡立てて　洋子
　身じろぎもせず考える鷺　弓子
舞踏家は氷と月をふところに　康子
　村人集う雪の聖堂　昌子
常長を語り伝えるハポン姓　洋子
　生中継にタイムラグあり　弓子
自転車で下る快感花の道　てる子
　忘れ霜とて橋にうっすら　洋子
蝌蚪(ナオ)に足高校野球百年に　洋子
　荏胡麻油の人気沸騰　てる子
あちこちに健康おたく増殖中　昌子
　餓鬼大将が現在の町長　弓子
通夜の席ほうたるひとつ迷い込み　康子
　陶枕の傍染みの絵草子　洋子
恋さまざま願いの糸で縛るらん　弓子
　とろろに黄身を落とす後添い　昌子
月光をソーラーパネル持て余す　洋子
　木葉山女を賭けて竿振る　康子
隣家へ手を上げ止める村のバス　てる子
　装う服に季節感なし　弓子
ほほ笑(ナウ)みの家族写真に淑気満ち　昌子
　欧州宛の初荷出したり　洋子
平成へ繋ぐ富岡製糸場　弓子
　校外学習囲む語り部　てる子
花盛り味を探りて女杜氏　昌子
　嶺に白雲かかる春興　洋子

平成二十七年三月　十日首
平成二十七年四月十四日尾
（於・北仙台コミュニティセンター）

歌仙『みちのくの』

狩野康子捌

みちのくの神悦ばす植田かな　狩野康子
　祭太鼓の響く村里　秋葉芳成
忙中に暑中見舞を認めて　蔦とく子
　独り暮らしも板につきたり　高橋玻斗子
渓流に千々に砕ける今日の月　芳成
　乗っかってみる猿の腰掛　康子
ヴボランティア柿剥く手つきおぼつかな　玻斗子
　人魚のように彼女振舞う　とく子
初産の妻の寝乱れいとおしく　康子
　知れば知るほど難き経済　芳成
雲流れ博物館に魯迅像　とく子
　月の雫に氷柱伸びゆく　玻斗子
紙子着て元禄の世をてくてくと　芳子
　まことしやかに忍者説など　浜田則子
鎮魂の集い一瞬風が止む　川村紀子
　鴎の浜にドローン不時着　とく子
キャッツアイ妖しく光る花の窓　康子
大好物の草餅を買う　玻斗子
ナオ初虹の欠点のなき弧を写す　則子
　哲学者めく伯父の似顔絵　紀子
通販で蕎麦打ち道具取り寄せて　とく子
　間歇泉は町のシンボル　康子
難民の舟の漂う熱帯夜　玻斗子
　半風子飼う夏籠りの僧　則子
イマジンを欠けてる影と聴いている　紀子
　右足首にアンクレット付け　とく子
親子ほど年の差婚の仲の良き　芳成
　呼吸合せて直す藁屋根　則子
月上げてアルハンブラの熟睡する　康子
　秋をゆっくり歩く亡霊　玻斗子
ナウ地芝居に一声高く大向う　紀子
　後生大事に抱(だら)瓶(びん)の酒　芳成
象亀に負けじと長寿競いて　とく子
　掃除当番報せるポストに　紀子
末っ子のいたずら盛り花盛り　則子
　わがものがおに鰆五郎飛ぶ　玻斗子

平成二十七年六月十六日首
平成二十七年七月十六日尾

（於・仙台文学館）

歌仙『九条を』

九条を喪舟に乗すや秋出水　永渕　丹捌
　哀歌流れて揺らす黍の穂　佐々木游子
望降つ卵白かたく泡立てて　佐藤かの子
　量り売りする鄙の漬けもの　丹
広告はインターネット駆使したる　游子
　縞くっきりと鰹ぴちぴちっ　かの子
少ウ年は全身が夏変声期　丹
　木地に彫り込む柔らかき頬　游子
碌山の塑像のおんな永遠に生き　かの子
　情深けどことば少なし　筒井草平
進化するロボットいつかヒト科越え　高山達雄
　寸胴鍋に滾る粕汁　丹
手袋のままに指さす三日月　草平
　困った時は神頼みする　かの子
たまさかに鬢飛んだる先に犬　達雄
　ぐいと曲がって風抜ける路地　丹
花の宿茶汲人形茶をこぼす　かの子
物干し台に黄粉鳥聞く　達雄
山寺の若き和尚の春帽子（ナオ）　草平
　時計を仕舞い半世紀経ち　游子
到来の果実酒の香のえも言えず　丹
　天を仰ぎて鳴呼ソクラテス　かの子
いつの間に料理上手の夫となり　達雄
　額（ぴび）から踵（かかと）まで愛（めん）こい　草平
添寝籠ちょいと訳あるくほみにて　游子
　岬の崖にへばりつく家　丹
復興の魚河岸に声響くらん　かの子
　町内会長赤い長靴　達雄
おつきさまきょうもあしたもてらしてよ　游子
　背の籠に飾る初萩　草平
負ケ（ナウ）癖が主役を張った村芝居　丹
　電車の棚に傘とお位牌　かの子
＊ＩＬＣ北上山地貫けば　達雄
　ぶっこみ釣りの鮠のてんぷら　草平
目を奪う一本桜花の王　游子
　ヴィーナスじゃなくそれは佐保姫　執筆

平成二十七年九月　十八日首
平成二十八年一月二十九日尾
（於・仙台文学館）

＊ＩＬＣ＝インターナショナル　リニア　コライダー
全長31キロメートルから50キロメートルの地下に建設される大規模研究施設

《東京・「窓」連句会》

半歌仙　『沈丁花』

菅野陽子捌

沈丁花生垣多き町に住み　菅野陽子
　卒業式も近き校庭　中井淑子
山笑ふ新幹線のまた延びて　高月三世子
　真打ちどっと十人も増え　淑
志きめし横顔月清か　野口敏子
　米つきばったピンと飛び跳ね　菅野陽子
濁り酒アラゴンの詩を口づさむ　敏
　フェイスブックでパリに送信　世
木枯しが窓揺らすだけ来る来ない　陽
　貢いだ過去を猫は知ってる　世
ほろ苦き生薬なれど欠かさずに　淑
　金魚鉢には青きふちどり　ヤ
月明り閻魔参りの帰り道　鈴木アヤ
　男ふたりの子に恵まれて　ち
性格差腸内菌のしわざとか　敏
　モーツアルトで野菜すくすく　陽
老いといふ未知の冒険花万朶　内田さち子
迷路パズルに永き日の暮れ　陽

平成二十七年三月二十日首
平成二十七年六月十二日尾
（於・東京女子大学同窓会館）

歌仙『良寛忌』

根本美茄子捌

根本美茄子　転寝の夢に遊ばん良寛忌
片野弥恵　ほころび初めし鉢の紅梅
長澤矢麻女　東風の中電動自転車軽やかに
後藤算子　ロッジの様な新居購入
弥恵　三毛猫も仲間に入れて月の宴
美茄子　今年の酒の香りふくいく
算子　魅惑色はなち毒茸目眩まし
矢麻女　年齢不詳美肌やわ肌
美茄子　義理人情秤に掛けて恋を取る
弥恵　雀の群れのかしましきこと
矢麻女　B級のご当地グルメ激戦に
算子　ジョギングシューズ足に馴染んで
美茄子　見慣れたる山はいつしか雪景色
矢麻女　嫦娥迎えて夜話の茶事
算子　古文書の謎は未だに解けぬまま
美茄子　池の隅まで波紋広がる
矢麻女　樹木医に守られ続く花街道
弥恵　子を伴いて知恵詣へと
矢麻女　反戦のプラカード持ち労働祭
算子　大空を行く雲の白さよ
弥恵　憧れの宇宙旅行はあき待ちで
美茄子　TV体操日ごと欠かさず
算子　菜園のすくすく育つ野菜達
矢麻女　やや大人びて髭の帰省子
美茄子　お見合いはストローハットの可愛い娘
算子　ハネムーンには嬰も一緒に
矢麻女　美術館巡り楽しむ巴里の街
美茄子　低く静かに弥撒の鐘の音
算子　檸檬の香月は優しく中天に
弥恵　恩師の歌集読みふける秋
美茄子　牧閉ざし望郷の杯重ねおり
矢麻女　値下がり続く灯油ガソリン
算子　ゆったりと水平線を行くタンカー
美茄子　声よく通る屋根替の人
矢麻女　花陰におはこ一差し舞う翁
弥恵　つかず離れず黄蝶白蝶

平成二十七年一月六日首尾
（於・石神コミュニティセンター）

歌仙『初茜』

追ひつけぬものの麗し初茜　狩野康子捌
　淑気漲る北の峰峰　狩野　康子
復興へ世界会議の開かれて　中村記　康
　同時通訳咽をうるほし　永渕　丹
月の舟コップの中に捉まへむ　佐々木游子
　明日こそはと芙蓉ふくらみ　高山達　雄
若ウきらの小劇場に挑む秋　秋田てる子
　じんわりこくのでる五十代　熊坂昌　子
再会の男の胸のうすきこと　谷田部弓　子
　これが最後と紅を濃くして　松ノ井洋　子
普段着のほほゑみ囲む家族葬　秋葉芳　成
　猫神様のつるつると照り　浜田則　子
手拍子で唄ふ島唄夏の月　高橋玻斗子
　葛饅頭の老舗賑はふ　鹿野恵　子
アフガンに命の水を届けたし　田中裕　子
　憲法九条未来左右す　木田眞智子
現代の花咲爺は聴診器　菊池　宏
　子供ら遊ぶ畦のたんぽぽ　菅沼邦　夫
上ナオり鮎飛沫をあげて広瀬川　渡辺光　子
　スマホ離さず着信を待つ　高橋美代子
新境地開き市場に打って出る　菅原弘　子
　標準時には一秒の誤差　小松幹　子
老いたれば日課の昼寝良いといふ　菅原泰　子
　きんちやつきりの手はふところに　中村孝　史
仲見世で心つかんだ初デート　筒井草　平
　いひ出しかねる宿代のこと　山崎博　司
ミシュランのガイドブックに載らぬ味　清塚丈　九
　路地へと続く高き板塀　阿部堅　市
月明し百度参りの靴の音　笹川圭　子
　母いそいそと分ける新米　山田史　子
美ナウ術展レプリカもありモノクロも　木幡テ　イ
　ファックスわんさ届き戸惑ふ　葛　とく子
やうやくに最終便に間に合ひて　佐々木嘉　宇
　廃校に寄す思ひそれぞれ　川村則　子
青空を舞ひつくすよな花吹雪　鈴木文　男
　ゴルフ芝生も穀雨喜ぶ　荒川由美子
　　伊藤　航

平成二十七年十二月二十五日満尾（文音）

歌仙『牧の風』

大月西女捌

どの声も牧の色なき風に乗る　大月西　女
　牛の背中に秋惜しむ月　山崎美奈子
仕舞屋の屋根にはらはら散紅葉　篠原満　子
　力を込めてプルトップ開け　西　女
渡し船向かひに座る老紳士　満　子
　弧を描きつつ飛んでゆく蟬　美奈子
禅杖（ウ）にはつしと打たれ夏の夢　西　女
　一夜の契り忘れられない　満　子
マダム笑む「ドンペリ抜いていいでせう？」　西　女
　踊り場の灯の消えて又点き　山本栄里
鍵隠す妖怪ひそと棲んでをり　上市靖子
　尖らせてゐる鉛筆の芯　橋本マユミ
黙々と月下に雪を落とす父　栄　里
　焼芋売りの車過ぎゆき　満　子
原発の稼働に知事のゴーサイン　西　女
　アドバルーンが空に傾く　美奈子
花満ちて足も心も軽やかな　西　女
　道訪ふ翁訛のどらか子（ナオ）ら集ひ浮桟橋に釣る眼張　西　女
　　ＧＰＳをいつもチェックし　靖　子
　噴石は神の礫か活火山　マユミ
　　めがね頭に掛けてうろうろ　靖　子
　薔薇抱へ息をはづませ押すチャイム　満　子
　　燃え尽きさうな炎昼のキス　栄　里
　屋久島へ「飛鳥」は波を分けゆきて　満　子
　　よりどころなき難民の群　岡本　眸
　幸せと思へばあれもこれも幸　栄　里
　　衣装明るく同窓会へ　靖　子
　望月夜おとぎの世界広がりて　満　子
　　柘榴弾けて撓む枝先　栄　里
　百号（ナウ）のずらりと並ぶ美術展　眸
　　車椅子押す孫の優しき　マユミ
　日を掴む太極拳のポーズあり　西　女
　　いつも買ふのは粒餡のパン　靖　子
　天心（*）の土まんぢゆうへと落花霏々　眸
　　影も見せずに小灰蝶舞ふ　執　筆

平成二十七年　九月　三十日首
平成二十七年十一月二十四日尾

（於・岡本邸）

＊岡倉天心

歌仙『古都暮るる』

かなかなの一途に鳴いて古都暮るる　静　壽美子捌

造り酒屋に月連れの客　静　壽美子

林檎狩り青年会のバス仕立て　三輪慶子

一眼レフのカメラ活躍　後藤とみ子

意識して海馬刺激の大笑ひ　大杉澄江

金魚の動きじつと追ふ猫　永塚尚代

夏帯（ウ）をきりりとしめて若女将　美と

修行の僧としのび逢ふ恋　慶尚

海を越えやつと二人の新天地　尚美

ガーデニングに憩ふひととき　美江

受賞作読む前に見るネット評　江

おいてけ堀に微かなる声　北畠明子

澄み渡る空にくつきり冬満月　柳田宏子

火鉢を据えて家訓読み解き　慶

鑑定で銘ある太刀と知らされる　慶

橋を渡れば国生みの島　美

歌麿のモデルとなりて花の下　美

毛氈撫づる風のやはらか　と

蚕棚桑食む音のがさごそと（ナオ）　尚

ヨガ教室で直す腰痛　慶

世界中天地異変で落ちつかず　尚

記者会見に勢揃ひして　明

町内は祭支度におほわらは　美

涼しき部屋に眠る老犬　慶

イケメンの検査の医師にたじろいで　宏

言葉いらずの仲に陥る　慶

諍ひも身を寄せ合へば蜜の味　美

時を知らせる教会の鐘　明

スーパームーン兎の餅を拾へさう　江

鵙の塒に産土の森　尚

爽（ナウ）やかにスポーツ省が発足す　明

如才のなさに人の集まり　美

茶道部の友のお点前いただいて　宏

隅田川へと流す紙雛　尚

花吹雪カリヨン響く時計台　明

北の大地に土匂ふ頃　宏

平成二十七年九月七日首
平成二十七年十月五日尾
（於・東京ウイメンズプラザ）

歌仙『昭和の森』

静　壽美子捌

水光る昭和の森の返り花　　静　壽美子
　毛繕ひする小春日の猫　　大杉澄江
美味しいと噂の麺麭を買ひに来て　　北畠明子
　弟子の手元を目す棟梁　　柳田宏子
望の月ジャンボ機動く整備場　　三輪慶子
　歌女鳴く原に渡りゆく風　　美江
時代祭若き主役に盛り上がる　　宏
　フェイスブックで公開告白　　明
夢ならば覚めずにほしい愛の日々　　慶
　記念の曲を五線譜に書く　　美
雅やかノーベル賞の舞踏会　　江
　王女のティアラ光るサファイア　　宏
贈られし甘藷焼酎と月愁ふ　　江
　納涼映画偲ぶ名優　　慶
帽子浮く透明人間やもしれぬ　　明
　トランペットの響く高音　　美
花吹雪受けて園児の列乱れ　　慶
　経を納める和泉式部忌　　宏
何処からか焼蛤のよき匂ひ　　明
　旧街道にこぬか雨降る　　後藤とみ子
認知症予防外来賑やかに　　慶
　物議をかもす過激発言　　永塚尚代
銀盤の羽生結弦は次元越え　　江
　人寄せ付けぬ梟の森　　と
恋文を代筆するうち横恋慕　　江
　離れられない仲の二人に　　美
キャリア捨て土を耕す暮らしぶり　　宏
　技術指導にアフリカの地へ　　宏
月光の砕け飛沫となる岬　　明
　美術の秋を謳ふポスター　　慶
ナウ
べい独楽の名人気取り腕まくる　　尚
　豆大福の好きな御隠居　　江
単線の対向車待つ山の駅　　と
　岩屋探検奥へと奥へ　　江
歌碑巡り花巡りして古都の宵　　尚
　手話を交えて集ひのどらか　　慶

平成二十七年十月二十七日首
平成二十七年十二月　七日尾
（於・東京ウイメンズプラザ）

歌仙『駅正面』

國司正夫捌

花冷や駅正面の喫茶店　國司正夫
穀雨曇りに信号の青　生田目常義
ブログには諸子跳ねしと書き足して　高山鄭和
クロスワードを辞典引き引き　酒匂道代
月今宵皆既月食みな待てる　松田俊夫
電話の鳴りて消える虫の音　篠原まゆみ
延々と続く万灯御命講　白石一有
同窓会はハグに次ぐハグ　松田ぼくる
どさくさに紛れ囁く老いの恋　俊
朝帰りの嘘心昂る　道
はしご酒愉し居酒屋放浪記　る
青葉匂へる哲学の道　義和
水虫の薬少なし買ひに遣る　〃
下駄の鼻緒の格子柄好き　有
羽うちわを天狗かざして里望み　み
児を神童と自慢するママ　筆
米朝を惜しみ朧の月渡る　る
番茶を淹れてつまむ草餅　執

平成二十七年四月四日首
平成二十七年五月二日尾
（於・横浜市栄区民文化センター）

オープン戦出るに出られぬ春炬燵　義
肥満の犬は散歩大好き　道
朝市で賑ふここは夢の巴里　る
右岸で飛ばす赤い風船　有
ちやんちやんこ着て子の手紙孫に読む　夫
窓の雪とは省エネのこと　秋山よう子
過ぎし日を想ひ出し居る満ちし今日　み
いくたびも研ぐ肥後之守殿　義
ライバルを押しのけ彼の愛を得ん　う
酔つたふりしてしがみつく腕　夫
月斜め非常階段急にして　義
木犀の香に心鎮める　み
芸術祭書道展見て絵画展　夫
どこの街にもユニクロがあり　う
財布出し何が欲しいと連れに聞く　み
風ゆるやかに頬を撫で行く　義
最果ての花に会はんと旅支度　う
囀り盛る庭の樹々の間　み

歌仙『鉄路の錆』

本屋良子捌

0番線鉄路の錆や猫じやらし　本屋良子
パンタグラフに十五夜の月　白石一有
初猟の誘ひのはがきポケットに　生田目常義
ひとり暮しの箱膳に粗茶　丹下誓
遠出する時は早目に起き出して　高山鄭和
ラジオ体操葉桜の陰　酒匂道代
サーフィンがオリンピックの競技とふ　和
下駄放り投げ天気占ひ　有
好き嫌ひ好き嫌ひ好き嫌ひ好き　和
選んだつもりが選ばれた恋　代
礫もてトロイのヘレン取り返し　良
一角獣の瞳ひえびえ　誓
悴みの絵筆に月の影さして　義
ジャンジャン横丁カストリを呑む　〃
闇市に戦闘帽の若き頃　義
りんごの唄に明日を夢見る　良
花莚孫とふたりで席取りに　誓
うとうとすれば蝶の訪ひ　代
権禰宜のゆるき沓音めかり時　〃
光遍く大屋根の反り　義
宇宙より衛星の眼に捉へられ　和
見返り求め嘘を重ねて　誓
あつち向いてホイ惚れた女子ほど騙されず　代
妊りて知る妻子ある人　有
水音に嫋々としてゐて袴能　和
座敷童は家の宝よ　義
だうしてもわだばゴッホになると言ふ　〃
夜行列車の隅に着席　義
月うさぎ杵つく様の面白く　誓
青松虫はリードテノール　良
数珠玉で作るお手玉母ゆづり　代
絣の着物割烹着付け　有
こんにちは挨拶軽く回覧板　〃
家出した犬探す堤防　誓
大海へ変幻自在花筏　和
蓬の餅に添へる黒文字　誓

平成二十七年十月三日首尾
（於・横浜市栄区民文化センター）

歌仙『清浄光寺』

源　桃子捌

寂寂と清浄光寺冬来る　源　桃子
　小春日和に弾む足取　生田目常義
跨線橋遠山並みを見渡して　秋山よう子
　老眼鏡を外す駐在　丹下　誓
弓張の屋根を離れて密やかに　高山鄭和
　はらりはらりと桐一葉落つ　国司正夫
旅人を後ずさりさせ鵙高音　白石一有
　単身赴任の妻に陰膳　うう
最近はメールの返事ジュテームと　夫
　時々止まるパリの水道　和和
朗読の子の背ぴんと伸びてをり　義義
　月がさやかと冷酒傾け　誓誓
板を蹴り虚空の中へダイビング　有有
　契約成りし土地の購入　義義
動物園象の人気に支へられ　和和
　世の変遷を見てるおいどん　う
花の瀧浴びて幼ら舞ひ踊る　義
　無何有郷の風のやはらか　誓
ひらひらと庭を紋白紋黄蝶（ナオ）　夫
　ドレスとバッグハナエモリなの　う
功成りて名を遂げてなほ貪欲で　義
　自らたてる八卦卜筮　有
ミシシッピアカミミガメに片時雨　和
　ＴＰＰに農家底冷　う
手をつなぐ同床異夢の君と僕　有
　ディープキッスの下手な宿六　和
病窓を訪ふ雀はけふもまた　誓
　箸で大豆を摘まむ訓練　桃
父の書の表装新た月今宵　夫
　ちちろの声の途切れ途切れに　和
武蔵野（ナウ）の野川渉れば水澄みて　義
　毛鉤自慢の同好の会　誓
作家住むタワーマンション最上階　う
　大学図書館煉瓦造りで　夫
時を超え絶ゆることなく花の笑む　桃
　オールを立てて祝ふレガッタ　有

平成二十七年十一月七日首尾
（於・横浜市栄区民文化センター）

歌仙『古城址は』

古城址は緑保ちて梅雨待てり　磯　直道捌

栄華の残る涼し公園　磯　直道

崖の下潮引く浜をひた走る　笠原悦子

カメラに写す遠き山々　櫻庭康夫

名月に頬豊かなる母思い　佐藤治子

実家の軒に吊す干柿　服部早苗

秋（ウ）の会年忌を兼ねる用意して　新相節子

精進落しお清めの塩　岡村和可

予約せしタクシーすぐにやってきし　安藤君子

車椅子押す年上の妻　磯　直道

山茶花を一緒に持ちていつまでも　笠原悦子

畦道照らす寒の三日月　櫻庭康夫

旅先の駅舎は大正ロマン風　佐藤治子

長生き音頭踊る老人　服部早苗

ふとよぎる俳句宿題気になりて　新相節子

瑠璃色の蝶ひらり舞い翔ち　岡村和可

校門の花は今しも満開に　安藤君子

部員が集うのどかなる部屋　磯　直道

おしゃれな店が河のほとりに　笠原悦子

街行けば小犬尾を振りついてきし　櫻庭康夫

あれが噂のマドンナの君　佐藤治子

どこまでもこの手離さず歩きたい　服部早苗

おねだりしてはパリの夏靴　新相節子

雷鳴を避けて通りしビル谷間　岡村和可

なかなか止まぬ政治論争　安藤君子

神前にお供えをして和を願い　磯　直道

両手で掬う光る白砂（しろずな）　笠原悦子

「お月さま」歌う親子に風吹きて　櫻庭康夫

地芝居果てて帰る宵闇　佐藤治子

首（ナウ）かしげ別れを惜しむ芒の穂　服部早苗

天気を願い重陽の酒　新相節子

売り手よく買い手もよくて世間よし　岡村和可

浅蜊蛤汐の香をもち　安藤君子

垣沿いに花の一ひらこぼれゆき　磯　直道

昔を偲ぶ庭の暖か　笠原悦子

コーヒーにショートケーキを楽しみつ（ナオ）　櫻庭康夫

平成二十八年二月一日首尾

（於・読売文化センター川口）

《仙台・夜の連句会「花李（はなすもも）」》

歌仙『厳冬は』

厳冬はまだ先のことかばねやみ　　あこ
　雪虫は舞ふ遊ぶわらすら　　富貴
大作は五年ばかりを費やして　　小径
　石に刻んだ庶民の群像　　おきよ
月見です猫と私と焼き魚　　木瓜
　窓を飾りし蔦の紅葉　　草雨
ウ秋深し隣の息子は出稼ぎに　　呵々
　ほのかな便り恋に気付かず　　双魚尾
君かへす雨の舗道を見送りぬ　　風信
　成田発十九時五十分　　あこ
海こえて時差ボケつらし摩天楼　　美林
　やりとり楽し老人ホーム　　草雨
出た出たと満面笑みで夏の月　　富貴
　冷奴には茗荷たっぷり　　木瓜
あのそこの赤提灯にてまた一杯　　おきよ
　閉め出し喰つてベンチでごろ寝　　呵々
隅田川吉宗手植ゑの花今も　　双魚尾
　雲雀鳴く野に親子遠足　　富貴

萱場双魚尾捌

石郷岡木瓜　萱場双魚尾　伊藤草雨　伊澤小径　鈴木おきよ　酒井風信　浅沼呵々　新宮美林　氏家富貴　鈴木あこ

おきよ　小径　草雨　木瓜　双魚尾　呵々　風信　美林

ナオすまし顔三人姉妹雛の宵　　あこ
　レッドカーペット歩く夢見て　　富貴
人生は千夜一夜の物語　　小径
　浜の真砂も尽きることなし　　おきよ
くしやみして寒雀皆飛び立たす　　木瓜
　うがひ手洗ひ風邪に用心　　草雨
石橋を叩くも渡らぬ銀行員　　呵々
　今日出会ひて明日プロポーズ　　双魚尾
赤い糸結ばれるのも神まかせ　　風信
　紙ひかうきの屋根に着陸　　あこ
大朝日岳峯から峯へ月渡る　　美林
　大針小針衣縫ふ夜なべ　　草雨
ナウ乳色の牧場の朝の霧の海　　富貴
　太古の空に毒はなかりき　　木瓜
初孫はでんでん太鼓に抱つこヒモ　　おきよ
　おんぶお化けのふるさと訪ね　　呵々
つれ立ちて橋の欄干花かすみ　　双魚尾
　しばし微睡む若草の上　　富貴

（於・エル・パーク仙台・セミナー室・創作アトリエ・文音）
平成二十六年十一月十七日首
平成二十七年　二月十二日尾

《東京・ラピロス連句会》

世吉『名月や』

山口和　生捌
高田明日伽捌

名月や公民館へ猫の路　本屋良子
角の空き地にすだく虫の音　山口和生
秋茄子の漬かり具合を褒めあげて　服部秋扇
吾が掌は土の香に染む　高田明日伽
里人のために作つた温泉場　山中土筆
飛び石連休車渋滞　西原淑
噴水の放物線に見とれをり　高橋賢
組体操に汗を流して　白石一有
ウ野馬追の馬帰りゆく畔づたひ　速藤尹希子
ごはんですよと母の呼び声　小泉桂
カルピスを飲むカップルの別世界　安楽明朗
さりげなく触れはにかんだ指　城田咲
金髪のヴィーナス被ふ秘めどころ　永島董玉
浪漫あふるる古き図書館　賢
今年また文学賞の見送られ　良
思索の糸は毛糸編むごと　扇
寒柝の月の明かりと響きあひ　賢
二番煎じは燗熱うせよ　玉
ニュートリノ夢の続きに重さあり　明
簸の外れて黄ふ風船　生
手品師の種を見破る花の下　桂
雲雀の声が雲の中より　伽

ナオ清明の山明け初めて安曇村

遺跡より出る翡翠勾玉　良

海彦は瞬きの間に恋成して　有

羽衣隠し知らぬ存ぜぬ　扇

蟻地獄落ちし縁の共白髪　玉

小さきキッチン覗く雷　尹

終着の駅に大きな荷を降ろし　咲

地球規模なる傭兵の数　賢

都会には棲めぬと消えた雪兎　桂

脇役ばかり闇汁の具は　生

長命の祖父に丹田法習ふ　咲

忍ぶ想ひを男語らず　扇

唇に微熱の残る十三夜　生

火の粉を被る鞍馬火祭　玉

ナウ豊漁に太刀魚光る船の上　淑

この頃流行るネット販売　筆

復興のツリーハウスを組み立てて　〃

薄茶味はふ昼の静けさ　尹

かるかんと文旦飴と加寿底良　明

前の小川に初蛙鳴く　淑

散る花のひらひらと夕日かな　生

春を惜しみて旅立ちの詩　有

平成二十七年十月九日首尾

（於・京橋区民館）

《豊田・竜神連句会》

『哀しい嘘』

半歌仙

森田美耶子捌

紅梅の哀しい嘘や君といて　合
雨水静かにぬらす硝子戸　板倉　合
到来の畳鰯をあぶるらん　武藤美恵子
バイクの止まる細い裏庭　原田徹　夫
工事場の重機に月は影落とし　近藤とみ子
夢中になってみがく瓢箪　宇井　希
秋彼岸扇忘れし僧侶あり　恵
名うての美人御庫裏に迎え　徹
この町になれ親しめばうわき虫　合
のらりくらりと首相会見　子
イスラムの平和な冬を祈る民　松井文子
ネットで始める株の取引　と
月涼しシングルマザー吾子背負い　文
完熟トマトの汁をとばして　と
レンタルのスーツケースに胃腸薬　文
中馬街道雛を並べる　森田美耶子
今年また隣の花で酒を呑む　田中イスズ
初雲雀啼く高く低くに　塚本益美
　徹
　希

平成二十七年二月十九日首尾

（於・竜神交流館）

歌仙『闇流れ』

狩野康子捌

闇流れ七夕の竹力増す　狩野康子
　残る蛍を見つけ出す子等　田中裕子
里帰り間にあわざりき名月に　中村孝史
　厨の窓辺スプラウト萌え　木田真智子
山好きの山の切手を買いに行く　菅沼邦夫
　高校野球百年の夏　菊池宏
ハンカチ（ウ）のリバーシブルを使い分け　小岩秀子
　日記にしるす口づけのこと　鹿野恵子
睦言に時々混じる怨みごと　裕子
　碁石握れば妻の圧勝　横山浜江
頬杖の傍らに置く電子辞書　真智子
　人影もなし国境の河　康子
売買の隊商宿に月冴ゆる　宏
　鶴の飛び来る僕のふるさと　孝史
忘れ物終日乗せて昇降機　恵子
　これから興す被災福島　邦夫
尼さまの法話の席に花の風　秀子
　蛤の殻模様さまざま　裕子
青い目の粋に着こなす春コート（ナオ）　浜江
　自動改札迷う関取　真智子
順調に見えた株価の乱高下　康子
　ノーベル賞の記事で溢れる　宏
蚊に刺されセロテープ貼る新医術　孝史
　匂い袋を三つ付けたり　恵子
金あれば愛はなくとも共枕　邦夫
　貴方看取って残りたる悔い　秀子
卵から鳥へ宇宙へマグリット　裕子
　国連すでに古希を迎える　浜江
遠き灯に導かれつつ月の道　真智子
　菊師萎れた菊を入れ替え　康子
おんこ（ナウ）の実少年の日々思い出す　宏
　小人ひそかに城を引っぱり　邦夫
祝宴はシャンパンの泡ご一緒に　秀子
　ふんわりケーキ期間限定　恵子
見上げれば被さるように花の山　孝史
　伏目がちなる麒麟のどらか　執筆

平成二十七年九月二十四日首
平成二十七年十一月十二日尾
（於・仙台市太白区市民センター）

半歌仙　『祭　笛』

辻　幸雄捌

駒形や角帯に指す祭笛　　辻　幸雄
　汗にきりりとねじり鉢巻　　馬場英子
夢醒めて苦きコーヒー一息に　　金枝純
　忘れたいこと多いこの頃　　幸
昼月に飛行機雲の消え残る　　英
　つくつくほうし集う林間　　幸
銀杏散る中をマラソン駆け抜けて　　坂田酔彦
　イヴ・モンタンに憧れし頃　　幸
イタリアの古き都に忍ぶ恋　　英
　ひと夜の形見思い出でよと　　純
特攻に赴く朝の茶碗酒　　純
　母艦の友に翼振り逝く　　英
独り佇つ月下の松よ冬の海　　幸
　窓辺の聖樹仮設住宅　　幸
本を閉じ見上げる空に天主堂　　純
　旅の愁いの揚雲雀聴く　　純
竿を刺す流れは速し花筏　　幸
混沌として春は過ぎ行く　　英

平成二十七年七月二十五日首
平成二十七年八月六日尾（文音）

歌仙『芋煮会』

和田忠勝捌

木谷　藍
和田忠勝
秋本忠重
諫武雪谿
内海鉄弥
大駒誠一
岡本貞子
小川里江子
春日久子
門間レイ子
坂井啓児
佐藤玻瑠
高島幸子
玉生うめ子
辻　賢次郎
中井啓輔
中井淑子
野見山フチコ

鈍行の窓から見える芋煮会
　穂草乱るる広き川原
名助演観月の袖地味めにて
　平和も古稀に戦遠のく
恐竜の化石が今に語るもの
　郭公の鳴く里の酒良し
炎帝（ウ）が人知を試すオリンピア
　天空駆ける風も味方に
介護してぎっくり腰に泣けてくる
　あのハイヒール買ったばっかり
汚れてもこつまなんきん胸にほれ
　クラスメートはみな恋敵
神秘とも雲寄せつけぬ凍てし月
　カミオカンデの山は眠れる
仏像の胎内映し顕らかに
　何をするにも眼鏡かけ替え
凛として恩師の遺影花の中
　礁はるかに春の浜暮れ

ふつふつと夢膨らます合格子（ナオ）
　琳派の四季を皆で味わう
行列は二時間待ちの最後尾
　冬虫夏草効き目今いち
セラピーにハープの音色選ばれて
　野良の黒猫拾うアベック
同性婚木の下闇の社にて
　行く先々で汗のめくばせ
夢叶う陰の努力の六連覇
　逆上がり出来得意気な孫
十六夜の土手で影踏み競いつつ
　市民畑に生きる柚子坊
菊（ナウ）の宴ノーベル賞に沸く日本
　万年候補またもおあずけ
草履取り待てば海路の太閤記
　朧の町を急ぎゆく旅
花筏背鰭で分ける沼の主
　炉の名残とて歌人の軸

速藤尹希子
藤井恵美子
松本華与
宮坂和之
宮下瑩子
宮脇昌子
山本恵子
若松歌子
和田晶子
和田容子
和田ひろ子
藍
勝
一
淑
与
郎
ろ

平成二十七年　九月　八日首
平成二十七年十一月十一日尾（文音）

歌仙『無言劇』

物の音の澄みて野外の無言劇　辻　賢次郎捌

月下を走る長距離のバス　辻　賢次郎

濁酒酌む志士の像立つ浜に来て　和田忠勝

和服姿の歴女姦しく　和田ひろ子

古文書に悪戦苦闘まだ五割　中井淑子

拾った猫に貸した籐椅子　大駒誠一

漱石は今も新し夏木陰　松本華与

鉄条網に難民は泣き　辻　賢次郎

恋仲を経ずに一家の大柱　和田忠勝

会えばときめく六十路マドンナ　和田ひろ子

意のままにならぬ手足で神鈴を　中井淑子

パラリンピック今や病みつき　大駒誠一

摩天楼グランドゼロに凍てる月　松本華与

社会鍋にはなにがしか入れ　辻　賢次郎

傭兵は家族の写真胸に下げ　和田忠勝

夢にまで見たメッカ巡礼　和田ひろ子

ダンテの詩歌うがごとく花の散る　中井淑子

からくり時計刻む永日　大駒誠一

勉斗雲駆って悟空の山遊び　松本華与

マウス操り地球裏側　辻　賢次郎

微生物流行病を食い止めて　和田忠勝

信じて逝きし妻の献身　和田ひろ子

五線紙の散らかっている夏館　中井淑子

シャワーにビール暑い幸せ　大駒誠一

スマートフォン当てれば映す体脂肪　松本華与

居住まい正すお見合いの席　辻　賢次郎

手料理は浮気心を封じ込め　和田忠勝

生臭寺のすがし箒目　和田ひろ子

その割にスーパームーンはでかくない　中井淑子

幽界めきし黄落の街　大駒誠一

小休止杖持つ腕に赤とんぼ　松本華与

懸垂ならば十回はでき　辻　賢次郎

日韓の首脳会談ようやくに　和田忠勝

線引き難の消費増税　和田ひろ子

花を追い花に追われし旅気まま　中井淑子

光る瀬のぼる若鮎の群　大駒誠一

平成二十七年九月八日首
平成二十七年十一月七日尾（文音）

歌仙『江戸っ子も』

和田ひろ子捌

江戸っ子も狂うておりぬ阿波踊　和田ひろ子
　実柘榴裂けて呵呵と大笑　速藤尹希子
宵の月峠の道に行き暮れて　秋本忠重
　県境越え渡る吊り橋　宮下瑩子
久々の同窓会に老師見え　春日久子
　皆に乞われて詩吟涼しき　高島幸子
安保法噴火出水も追うごとく　宮脇昌子
　眠そうな目のニュースキャスター　木谷藍
寄せ書きは気になる人にくっつけて　野見山フチコ
　これ見よがしの深いスリット　岡本貞子
病棟の面会時間賑わえる　玉生うめ子
　屋上庭園友と連れ立ち　門間レイ子
昼月の中天にあり酉の市　諫武雪爺
　炉明りで酌むボルドーの赤　重
厚切りのブルーチーズを盛り合わせ　瑩
　主人のソファに凛と黒猫　幸
延年の舞の翁に花吹雪　久
句碑を訪ねる旅の長閑けし　昌

春の空大観覧車みな笑顔　ナオ
　トライ決まりて上がる勝鬨　フ
鳴き鶏の今朝はひときわ早々と　貞
　雛を開く衣の袖　ろ
奪う恋マリア観音伏し拝み　尹
　あれも真実これも真実　瑩
先導の鳳蝶舞う野辺送り　久
　D51過ぎて青葉ざわめき　幸
一眼レフ手入れかかさぬ宝物　レ
　イスラム諸国未だきびしく　藍
平和の世願う民草月祀る　尹
　栗たっぷりのロケの弁当　爺
穭田に児を抱き仰ぐ熱気球　ナウ
　ニュートリノへの夢は果てなき　重
故郷の海は豊に魚群れて　貞
　朧の辻を人曲がりゆく　ろ
花の門咲き初めたる二三輪　フ
　名残の茶事に香る独活和　め
昌

平成二十七年　九月八日首
平成二十七年十二月一日尾（文音）

歌仙『流れ星』

和田忠勝捌

和田忠勝　幾百と見てきたことか流れ星
辻賢次郎　天文台の影映す月
松本華与　走り蕎麦老舗はメニュー書き換えて
山本恵子　スマホを繰って並ぶ外人
内海鉄弥　我も又早き進化を追いつづけ
若松歌子　山路たどれば響く滝音
中井啓輔　蟹（ウ）の子の古武士もどきの睨み合い
和田容子　恐い顔してプロポーズされ
宮坂和之　現地妻日本語巧み連れ帰る
佐藤玻瑠　するり抜け出し次のステップ
小川里江子　念願の赤い新車を磨き上げ
坂井啓児　スキーシーズン用意万端
大駒誠一　窓越しのまあるき月を炬燵から
中井淑子　「しばられ地蔵」読み聞かせつつ
和田晶子　校庭へチャイムと同時猛ダッシュ
藤井恵美子　ＬＯＶＥとみんなで作る人文字
恵　震災の地にも忘れず花は咲き
勝　屋敷稲荷のうらら造替（ナオ）を塞ぎ初の欧州夢の旅
　ピエロの技に投げ銭をして
　買わねばの郵政株を買いそびれ
　チャランポランの老後計画
　ほととぎす初鳴きの空晴れ渡り
　源氏の君が釣殿に立つ
　不義なんて古い言葉と嘯いて
　健康寿命風前の燭
　たどたどし文字の賀状もまた嬉し
　土塀廻らす茶席への道
　手作りの燻製月に酒
　秋の夜長は数独スイスイ
　飾（ナウ）から虫食いさげ弾かれて
　尻尾を止めて臭い嗅ぐ犬
　オフになりファッションに凝るアスリート
　種痘の跡が残る二の腕
　左見右見花の息吹の乾門
　春風運ぶ母の思い出

平成二十七年　九月　八日首
平成二十七年十二月十一日尾（文音）

歌仙『仏頭の眉』

仏頭の眉の伸びらか夏来る　井上せつ
　笹散る露地に唐破風の門　笹川圭子
お宝の茶碗で飲むもらちもなし　安斎厚子
　清元節の粋な裏声　伊藤航
月照らす終着駅に降りたちぬ　笹本美恵子
　早すぎもせず七夕の竹　航
村芝居立て女形いて幕上る　厚
　目玉おやじの風呂加減よし　圭
復帰戦不安払拭零封じ　美
　探訪取材アポ取りが縁　美
赤い糸子連れ同士をなぜ繋ぐ　圭
　放置自転車撤去張り紙　圭
里山も静か月のみ冴ゆる宵　航
　襟掻き合わせ雪しまく町　航
アメリカのヘイトクライム深刻で　美
　マーズドローン侮らぬよう　美
花の根に窒素とカリをひと握り　圭
　洗濯かごで仔猫丸まる　圭
暮れ遅し炊事の前の一人酒　厚
　膝たてそっと剥がす瘡蓋　圭
反抗期もとは単純出るは妙　航
　本卦還りにプラトンを読む　圭
皆揃い粽盛り上げ月もきた　厚
　日焼の腕にボード抱えて　美
運勢は悪くないはずみずがめ座　圭
　手編みマフラー今は昔で　せ
寒やいと跡に唇押しあてて　圭
　右下がりの字癖は直らず　航
新小豆土鍋の中で腹が割れ　圭
　敬老祝いルノワールの絵　せ
ビル街の窓それぞれに月ひとつ　〃
　ラジオ体操眠気ざましに　圭
養われ芥川賞直狙う　航
　因数分解解けるまで解き　せ
強引に誘われきたが花に笑み　厚
　春蝉はるか姿なく鳴く　美

平成二十七年五月二十二日首
平成二十七年九月　十八日尾
（於・仙台市生涯学習支援センター）

山梨県連句協会

会　長　後藤臣彦
副会長　後藤はるよ
事務局　後藤臣彦
〒400-0814 甲府市上阿原町1258
(055-235-1653)

秋田県連句協会

会　長　茂呂雄太
副会長　髙山紀子・武藤拓自
事務局　佐藤康子
〒010-0826 秋田市新藤田中山台54-11
(018-832-5722)

鹿児島県連句協会

会　長　前田　豊
副会長　五郎丸照子
事務局　五郎丸照子
〒897-0009 南さつま市加世田
ハーモニー6-3
(0993-78-3980)

京都府連句協会

会　長　筒井紘一
幹事長　河合臥雲
〒606-8225 京都市左京区田中門前町
103-21随林院
(075-781-5541)

愛知県連句協会

会　長　杉山壽子
副会長　松尾博雄・矢崎　藍
事務局　青島由美男
〒468-0034 名古屋市天白区久方
1-150-27-102
(052-806-0669)

奈良県連句協会

会　長　生駒　聡
副会長　近藤蕉肝(正)・竹山美代子
事務局　もりともこ(森　智子)
〒633-0077 桜井市大西834
(090-7095-0205)

福岡県連句協会

会　長　八木紫暁
副会長　守口　薫
事務局　八木紫暁
〒816-0931 大野城市筒井3-13-12
(092-593-2575)

大分県連句協会

会　長　中森順和
事務局　南雲玉枝
〒874-0902 別府市青山町8-72佐々木方
(0977-24-9407)

連句協会広島県支部

支部長　高橋昭三
事務局　高橋昭三
〒731-0223 広島市安佐北区可部南
4-5-47
(082-815-1914)

宮城県連句協会

会　長　狩野康子
副会長　中村孝史・永渕　丹
事務局　狩野康子
〒981-0924 仙台市青葉区双葉ケ丘
2-5-12
(022-271-0005)

鳥取県連句協会

会　長　音田錠治
副会長　新田幸子・永江重昭
高野重子・山崎君子
事務局　田中史郎
〒682-0402 倉吉市関金町大鳥居
関金町教育委員会内
(0858-45-2111・fax3961)

岡山県連句協会

会　長　米林　眞
副会長　花房八映
事務局　米林　眞
〒700-0904 岡山市柳町2-2-1
(086-222-6176)

山形県連句協会

会　長　内田素舟
副会長　浅沼葛子・三浦和枝
安部英子倍
事務局　内田素舟
〒996-0035 新庄市鉄砲町3-71
(0233-22-1285)

連句協会群馬県支部

会　長　伊藤稜志
事務局　伊藤稜志
〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37
(0272-61-2297)

茨城県連句協会

会　長　堀江信男
副会長　西　幾多・城　依子
事務局　根本美茄子
〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9
(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会　長　諏訪欣二
事務局　中本蒼水
〒746-0025 周南市古市2-3-43
(0834-62-1400)

静岡県連句協会

会　長　宮沢次男
副会長　久保田静男・飯田紫苑
顧　問　石渡蒼水・中根明美
事務局　久保田静男
〒410-0822 沼津市下香貫280-1
(055-931-7219)

徳島県連句協会

会　長　東條士郎
副会長　竹内菊世・梅村光明
事務局　東條士郎
〒770-8051 徳島市沖浜町東畑589-1
(088-622-3745)

地方連句組織

愛媛県連句連盟

会　長　大西素之
副会長　岡本　眸・名本敦子
事務局長　岡田伊勢子
〒791-0113 松山市白水台
2-7-13
(089-932-9663)

連句協会石川県支部

支部長　藤江紫虹
事務局　宮島　茂
〒929-0327 石川県河北郡津幡町字庄
チ65
(076-289-4214)

連句協会三重県支部

支部長　西田青沙
事務局　西田青沙
〒512-0921 四日市市尾平町3768-188
(0593-32-8931)

埼玉県連句協会

会　長　磯　直道
副会長　白根順子・福田たろを
顧　問　金子兜太
事務局　石川光男
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町
寄居535
(048-581-5943)

岐阜県連句協会

会　長　大野鵠士
副会長　瀬尾千草
理事長　清水貴久彦
顧　問　伊藤百雲
事務局　松尾一歩
〒500-8415 岐阜市加納中広江町68
(058-274-9479)

連句協会岩手県支部

支部長　小原啄葉
副支部長　志和正巳・菅原多つを
事務局　沼田和子
〒020-0875 盛岡市清水町1-33
(0197-622-7907)

連句協会千葉県支部

支部長　東浦佳子
副支部長　伊藤貴子
顧　問　上田渓水・下鉢清子
浅野黍穂・斉藤一灯
事務局　伊藤貴子
〒264-0006 千葉市若葉区
小倉台1-12-3
(043-233-3555)

連句協会栃木県支部

支部長　中尾硫苦
副支部長　髙井利夫・田中きみ
田浪富布
事務局　中尾硫苦
〒321-0932 宇都宮市平松本町438-6
(028-633-8488)

富山県連句協会

会　長　山本秀夫
副会長　大西紀夫・藤縄慶昭
事務局　野島清治
〒930-0114 富山市茶屋新町
59-61
(076-436-0677)

香川県連句協会

会　長　中津秀美
副会長　植松晴子・西岡恭平
事務局　中津秀美
〒761-8084 高松市一宮町357-9
(087-889-3141)

(2) 貸借対照表
(3) 損益計算書（正味財産増減計算書）

2 前項により報告され、又は承認を受けた書類のほか、監査報告を主たる事務所に5年間備え置くとともに、定款及び会員名簿を主たる事務所に備え置くものとする。

（剰余金の分配の禁止）

第46条 当法人の剰余金は、これを一切分配してはならない。

（残余財産の帰属）

第47条 当法人が解散（合併又は破産による解散を除く）したときに残存する財産は、総会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第8章 附 則

（最初の事業年度）

第48条 当法人の最初の事業年度は、当法人成立の日から平成26年12月末日までとする。

（入会金）

第49条 当法人の母体である任意団体、連句協会の当法人への権利義務承継の日の前日における会員には、第7条の入会金の支払を求めないものとする。

（設立時の役員等）

第50条 当法人の設立時の役員は、次のとおりである。

設立時理事　臼杵悠治
設立時理事　和田忠勝
設立時理事　高尾秀四郎
設立時代表理事　臼杵悠治

（設立時社員の氏名又は名称及び住所）

第51条 設立時社員の氏名及び住所は、次のとおりである。

設立時社員
1 住所 神奈川県横浜市青葉区みたけ台2番地22
　氏名 臼杵悠治
2 住所 神奈川県横浜市港北区綱島東5丁目22番4号
　氏名 和田忠勝
3 住所 東京都町田市図師町1333番地8
　氏名 高尾秀四郎

（法令の準拠）

第52条 本定款に定めのない事項は、すべて法人法その他の法令に従う。

平成25年12月11日 制定
平成28年3月28日 第7条の年会費額を5千円に改定。

「日本連句協会」顧問・役員名簿

（顧　問）小林しげと・磯　直道・宮下太郎
（役　員）
会　長　臼杵游児
副会長　青木秀樹・狩野康子・品川鈴子
　高尾秀四郎・東條士郎
理事長　和田忠勝
常任理事　井上雨道・今村　苗・大久保風子
　近藤蕉肝・静　寿美子・白根順子・
　松澤龍一
理　事　浅沼　璞・伊藤貴子・梅村光明・
　大山とし・小川廣男・小池正博・
　鈴木了斎・竹下昭子・長嶋顕信・
　名本敦子・林　転石・松尾博雄・
　宮澤次男・守口　薫・吉田酔山・
　渡部春水・渡辺　柚
会　計　高尾秀四郎（兼）
監　事　石川光男・東浦佳子

取引
(3) 当法人がその理事の債務を保証することその他理事以外の者との間における当法人とその理事との利益が相反する取引
(責任の一部免除)
第28条 当法人は、役員の法人法第111条第１項の賠償責任について、法令に定める要件に該当する場合には、理事会の決議によって、賠償責任額から法令に定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として、免除することができる。
(顧問)
第29条 当法人に、顧問を置くことができる。
2 顧問は、会員の中から、理事会の決議を経て会長が委嘱する。
3 顧問は、無報酬とする。ただし、その職務を行うために要する費用の支払をすることができる。顧問は会費を納めることを要しない。
(顧問の職務)
第30条 顧問は、会長の諮問に応え、会長に対し、意見を述べることができる。

第５章 理 事 会

(構成)
第31条 当法人に理事会を置く。
2 理事会は、すべての理事をもって構成する。
(権限)
第32条 理事会は、次の職務を行う。
(1) 当法人の業務執行の決定
(2) 理事の職務の執行の監督
(3) 会長、副会長、理事長及び常任理事の選定及び解職
(招集)
第33条 理事会は、原則として年３回、会長が招集する。
2 会長が欠けたとき又は会長に事故があるときは、副会長が理事会を招集する。
(議長)
第34条 理事会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該理事会において議長を選出する。
(決議)
第35条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
2 前項の規定にかかわらず、法人法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。
(議事録)
第36条 理事会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成する。
2 出席した会長及び監事は、前項の議事録に署名又は記名押印する。
(理事会規則)
第37条 理事会に関する事項は、法令又はこの定款に定めるもののほか、理事会において定める理事会規則による。
(常任理事会)
第38条 常任理事会は、原則として隔月に会長が招集する。常任理事会に関する事項は、理事会において定める常任理事会規則による。

第６章 基 金

(基金の拠出)
第39条 当法人は、会員又は第三者に対し、基金の拠出を求めることができるものとする。
(基金の募集等)
第40条 基金の募集、割当て及び払込み等の手続については、理事会の決議を経て会長が別に定める基金取扱い規程によるものとする。
(基金の拠出者の権利)
第41条 基金の拠出者は、前条の基金取扱い規程に定める日までその返還を請求することができない。
(基金の返還の手続)
第42条 基金の返還は、定時総会の決議に基づき、法人法第141条第２項に定める範囲内で行うものとする。

第７章 計 算

(事業年度)
第43条 当法人の事業年度は、毎年１月１日から12月31日までの年１期とする。
(事業計画及び収支予算)
第44条 当法人の事業計画書及び収支予算書については、毎事業年度開始日の前日までに会長が作成し、理事会の決議を経て総会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。
2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない理由により予算が成立しないときは、会長は、理事会の決議に基づき、予算成立の日まで前年度の予算に準じ収入又は支出することができる。
3 前項の収入支出は、新たに成立した予算の収入支出とみなす。
(事業報告及び決算)
第45条 当法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、定時総会に提出し、第１号の書類についてはその内容を報告し、第２号及び第３号の書類については承認を受けなければならない。
(1) 事業報告

（議決権）
第17条　各会員は、各１個の議決権を有する。
（決議）
第18条　総会の決議は、法令に別段の定めがある場合を除き、総会員の議決権の過半数を有する会員が出席し、出席会員の議決権の過半数をもってこれを行う。
２　前項の規定にかかわらず、次の決議は、総会員の半数以上であって、総会員の議決権の３分の２以上に当たる多数をもって行う。
(1)　監事の解任
(2)　定款の変更
(3)　会員の除名
(4)　解散
(5)　その他法令で定められた事項
３　前２項の規定にかかわらず、法人法第58条の要件を満たしたときは、総会の決議があったものとみなす。
（議事録）
第19条　総会の議事については、法令の定めるところにより議事録を作成し、総会の日から10年間主たる事務所に備え置く。

第４章　役員等

（役員の設置等）
第20条　当法人に、次の役員を置く。
理事　３名以上35名以内
監事　２名以内
２　理事のうち、１名を会長とし、５名以内を副会長、１名を理事長、10名以内を常任理事とすることができる。
３　この法人の会長を法人法上の代表理事とする。
（選任等）
第21条　理事及び監事は、総会の決議によって選任する。
２　会長、副会長、理事長、及び常任理事は、理事会の決議によって理事の中から定める。
３　監事は、当法人又はその子法人の理事若しくは使用人を兼ねることができない。
４　理事のうち、理事のいずれかの１名とその配偶者又は３親等内の親族その他特別の関係にある者の合計数は、理事総数の３分の１を超えてはならない。監事についても、同様とする。
５　他の同一の団体（公益法人を除く。）の理事又は使用人である者その他これに準ずる相互に密接な関係にある者である理事の合計数は、理事の総数の３分の１を超えてはならない。監事についても、同様とする。
（理事の職務権限）
第22条　会長は、当法人を代表し、その業務を執行する。
２　副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。
３　理事長は理事会及び常任理事会を運営する。
４　常任理事は、会長、副会長及び理事長を補佐し理事会の議決に基づき当法人の業務を執行する。
５　前各項に掲げられた理事は、毎事業年度毎に４か月を超える間隔で２回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。
（監事の職務権限）
第23条　監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。
２　監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、当法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。
（任期）
第24条　理事の任期は、選任後２年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。
２　監事の任期は、選任後４年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。
３　補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。
４　役員は、辞任又は任期の満了後において、定員を欠くに至った場合には、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行う権利義務を有する。
（解任）
第25条　役員は、総会の決議によって解任することができる。
（報酬等）
第26条　役員の報酬、賞与その他の職務執行の対価として当法人から受ける財産上の利益は、総会の決議をもって支給することができる。
（取引の制限）
第27条　理事が次に掲げる取引をしようとする場合は、理事会において、その取引について重要な事実を開示し、理事会の承認を得なければならない。
(1)　自己又は第三者のためにする当法人の事業の部類に属する取引
(2)　自己又は第三者のためにする当法人の

『日本連句協会』定　款

第1章　総　　則

（名称）

第１条　当法人は、一般社団法人日本連句協会と称する。

（主たる事務所）

第２条　当法人は、主たる事務所を神奈川県横浜市に置く。

（従たる事務所）

第３条　当法人は、理事会の決議を経て、必要な地に従たる事務所を置くことが出来る。

（目的）

第４条　当法人は、連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の内外における交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とし、その目的に資するため、ユニバーサルデザインの精神に基づき次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催、共催
2. 会報（隔月）の発行
3. 連句年鑑の発行
4. ホームページの運営
5. 国民文化祭への後援
6. 前各号に掲げる事業に附帯又は関連する一切の事業

（公告）

第５条　当法人の公告は、主たる事務所の公衆の見やすい場所に掲示する方法により行う。

第2章　社員及び会員

（入会）

第６条　当法人の目的に賛同し、入会した者を会員とする。

２　会員となるには、当法人所定の様式による申込みをし、会長の承認を得るものとする。

３　当法人の会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下、「法人法」という。）上の社員とする。

（経費等の負担）

第７条　会員は、当法人の目的を達成するため、それに必要な経費を支払う。

２　会員は、入会金２千円及び１月から12月までの年会費として５千円を納入しなければならない。

（会員の資格喪失）

第８条　会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を喪失する。

(1) 退会したとき。
(2) 成年被後見人又は被保佐人になったとき。
(3) 死亡し、若しくは失踪宣告を受け、又は解散したとき。
(4) ２年以上会費を滞納したとき。
(5) 除名されたとき。

（退会）

第９条　会員はいつでも退会することができる。ただし、１か月以上前に当法人に対して退会届を提出するものとする。

（除名）

第10条　当法人の会員が、当法人の名誉を毀損し、当法人の目的に反する行為をし、会員としての義務に違反するなど除名すべき正当な事由があるときは、法人法第49条第２項に定める社員総会の特別決議によりその会員を除名することができる。

（会員名簿）

第11条　当法人は、会員の氏名又は名称及び住所を記載した会員名簿を作成する。

第3章　社員総会

（構成）

第12条　総会は、すべての会員をもって構成する。

（権限）

第13条　総会は、次の事項について決議する。

(1) 理事及び監事の選任又は解任
(2) 理事及び監事の報酬等の額
(3) 事業計画及び収支予算の承認
(4) 事業報告及び収支決算の承認
(5) 定款の変更
(6) 解散
(7) 会員の除名
(8) その他総会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

（開催）

第14条　当法人の総会は、定時総会及び臨時総会とし、定時総会は、毎事業年度の終了後３か月以内に開催し、臨時総会は、必要に応じて開催する。

２　前項の総会をもって法人法上の社員総会とする。

（招集）

第15条　総会の招集は、理事会がこれを決議し、会長が招集する。

２　総会の招集通知は、会日より１週間前までに各会員に対して発する。

（議長）

第16条　総会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該総会において議長を選出する。

一般社団法人

日本連句協会定款

年鑑担当

○編　集

〒330―0053 さいたま市浦和区前地二―九―二二
（電話・ＦＡＸ　〇四八―八八一―二七五六）
大久保風子

○購入申込・発送

〒185―0036 国分寺市高木町三―一四―二二一
（電話・ＦＡＸ　〇四二―五〇五―四一〇六）
近藤　蕉肝

○連句年鑑会計・送金先

〒201―0011 狛江市西和泉二―一四―五〇六
（電話・ＦＡＸ　〇四二―四八九―〇七九〇）
郵便振替　〇〇一八〇―四―七六六八三六
加入者名
林　転石

○日本連句協会会員名簿担当

〒166―0003 杉並区高円寺南五―一五―八
（電話・ＦＡＸ　〇三―六三一三―六七九一）
靜　寿美子

林　転石
静　寿美子

■編集後記■

＊『連句年鑑　平成二十八年版』をお届けいたします。協会の行事・国民文化祭、全国一〇七グループの作品の記録です。

＊巻頭の評論に執筆をお願いした二村博氏を紹介しますと、平成二十五年、伊賀市との共書『鴛鴦俳人　恒丸と素月』（歴史春秋社）が、平成二十五年、伊賀市と地元の芭蕉翁顕彰会が江戸俳諧に関する優れた著書として文部科学大臣賞を受賞し、氏は同年の芭蕉祭でも講演されました。連句年鑑には、一茶とも交流のあった恒丸と、その庇護者である双樹との俳諧について述べて頂きました。

＊エッセイにはＴＶ・新聞でご活躍の俳人長谷川櫂氏に寄稿をお願いいたしました。連句一巻には奥に流れるテーマを立てるという試みを説いておられます。大岡信氏との歌仙を初公開して頂きました。

＊日本連句協会会員の上田真而子氏は『ハイジ』『はてしない物語』『波紋』（いずれも岩波少年文庫）など数々のジュニア文学の翻訳家です。日頃「言葉」について思っていることをまとめて頂きました。

＊作品は一七三巻を掲載いたしました。データ添付での出稿をお願いしています。印刷所とのやり取りが正確且つスムーズに行われ、諸費用節約がその目的です。現在は各グループの様々な保存形式そのままを受信しておりますが、枠付きやノンブル付きは入稿用に直すことにかえって手間どってしまいました。来年からはデータ添付にも基本的な様式をと考えておりますので、ご協力くださいますようお願いいたします。

＊「連句年鑑」の掲載形式は従来、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いが一作品に混用しないように校正しています。断り書きが無い場合は発句の仮名遣いに倣うようにしています。歴史的仮名遣いでありながら「促音だけは小さく」書くグループがいくつかあります。原稿の通りに校正していますが、原則からいえば促音は大きくなります。これを来年からはご出稿の際に確認させて貰おうと企画しております。

（大久保風子）

平成二十八年六月二十五日　印刷
平成二十八年六月　三十日　発行

平成二十八年度　連句年鑑

定価　二、五〇〇円

編集人代表　大久保　風子

発行所　〒223―0052　横浜市港北区綱島東五―二三―四　和田方
一般社団法人　日本連句協会
電　話　〇四五―五三一―七一七四
公式サイトアドレス
https://www.facebook.com/renkukyokai

印刷所　〒336―0021　さいたま市南区別所三―一―一〇
関東図書　株式会社
電　話　〇四八―八六二―二九〇一
ＦＡＸ　〇四八―八六二―二九〇八